
ジ・アナザー

sularis

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジ・アナザー

【Nコード】

N1631W

【作者名】

Sularis

【あらすじ】

脳とコンピュータの電子回路を直結する装置ブレインプロキシ。通称BP。その発達は使用者の運動神経と五感全てを仮想空間に接続するVRMMOを実現させた。そのVRMMOで最大のプレイヤー数を誇るジ・アナザーは、ある日、無数のプレイヤー達を閉じ込める牢獄と化す。直後に現れた魔王は「脱出したくば我を倒せ。さもなくば我が生贄となれ」と告げた。その時折悪しくログインしていたレックとその仲間達は、生き残るための、そしてジ・アナザーからの脱出のための旅に出る。

注)主人公達も最初は雑魚?なので活躍の場は最初は「全く」ありません。というか、どこかのアニメ並みに主人公の影が薄いです。

注2)誤字脱字、表現が気に入らなかつたための修正などを時々やっていますが、話の流れが変わるようなもの以外は、特にお知らせする予定はありません。話の流れが変わるほどの修正があった場合には、各章最後の後書きに載せる予定です。

プロローグ（前書き）

改行少なめ、文章長め。ご注意ください。

筆者はチキンハートのため、誤字脱字、表現の誤用の指摘以外の感想はお手柔らかにお願いします。

プロローグ

その一瞬、確かに世界が軋んだ。
自分の気のせいかと思つたレックは、周りの仲間になんかそれを感じて、
として、

「ちよつと、今のなんだよ？」

しかしその前に、やはり気のせいではなかつたことを知つた。

「あ、そつちも？」

「気のせい、じゃなかつたんだな」

「何だつたんじゃ、一体」

「あたしに訊かないでよ」

一緒に狩りに来ていたパーティーの仲間達が頭を軽く振りながら、
口々に騒ぎ始める。

しかし、

「で、結局何だつたんだ？」

その問いに答えられるメンバーは誰もいなかった。

しかし、今の軋みこそが彼らが知つていた現実の終焉を告げる狼
煙であつたことは、彼らが拠点としていた町に戻つた後に、知るこ
ととなる。

+++++

西暦2037年。

医学と情報技術の発達は、コンピュータを扱う者達にとって究極
の目標とも言えるある発明を成し遂げていた。ブレインプロキシ。
通称BP。脳とコンピュータの電子回路を直結する装置である。

開発当初はラグビー選手顔負けの巨大なヘルメットだつたそれは、

あらゆる組織からの研究への莫大な投資により、5年と経たないうちに手のひらサイズにまで小型化された。それと同時に、電極埋め込み型と電極貼り付け型の2種類が開発されていた。当初は安全性やつけ直しが難しいことを理由に敬遠されていた電極埋め込みがB Pは、すぐにメインストリームとなり、電極貼り付け型B Pを駆逐していった。もつとも、子供に電極を埋め込むと、成長時に電極がずれることがあるため、電極貼り付け型B Pは子供用に特化していたというのが正確なところであるが。

兎に角、B Pの普及は人類の生活を一変……させるとまでは行かなかったものの、大きな影響を与えたことは否めない。

まず、コンピュータの入出力機器がほぼ全滅した。

B Pは人間の表層思考を読み取るだけではなく、運動神経や感覚系にまでアクセスする機能を持つ。そのため、キーボードや旧世代のマウスの代わりに発達していたアクティブセンサーが不要となった。更に、視覚に介入することで、装着者の視覚に直接各種情報を表示することが可能となった。無論、音声案内も直接聴覚に送り込まれる。これにより、ディスプレイもスピーカーも原則不要となった。同様の機能に依存していたテレビなども事実上壊滅したため、影響が小さかった……とはとても言えない。

次に、V R……仮想現実と呼ばれる技術が大いに発展した。仮想世界を構築する……には至らなかったものの、標識や看板が路上から姿を消した。それらの代わりに、通行人のB Pに広告情報を送信するアンテナが目立たぬように設置され、標識や看板はB Pによって通行人の視覚に仮想的ながらも自然な形で表示されるようになった。無論、看板の類は見たくなければ消すことも出来た。

また、V Rを利用したスポーツやゲームも発達した。射撃場などは真っ先にV Rを取り入れ、仮想的を仮想の弾（弾はもともと見えないが）で客に撃たせるようになった。

その流れはとどまることを知らず、すぐに身体を完全にB Pに委ねるゲームが出現した。広大な仮想世界を構築することは出来なく

とも、サーバー上に構築された限られた広さの仮想空間に入り込んで遊ぶのがはやった。実際に現実の身体を動かすわけではないので、身体を作らなくてはいけない成長期の子供が入り浸って運動した気になるのは問題であり、VRにおけるスポーツは全面禁止するべきだ、という過激な意見も噴出した。しかし、VRゲームの急拡大という流れを止めるには至らなかった。

やがて、サーバーとなるコンピュータの処理速度の増大に伴い、徐々に広い仮想空間が用意されるようになり、その収容人数も着実に増えていった。それに伴い仮想空間で提供されるサービスも向上していった。テニスコートからサッカースタジアムへ。小さな公園から大きな植物園へ。

そして、2048年。

小さなアイデアというベンチャー企業が魔法と科学、中世と近代が共存する世界をコンセプトにVRMMO「ジ・アナザー」を発表した。

「ジ・アナザー」は、それまではせいぜい数キロ四方の小さな村を格納するのが限界とされていた仮想空間の常識をぶち破り、地球そのものに匹敵する広さの仮想空間を実現したと発表された。無論、そのことには大いに疑問の声が投げかけられたものの、テストに招待された100名が、テスト後に「ジ・アナザーの広さは想像以上だ。行けども行けども果てが見えない」と証言し、地球ほどではなくともとてつもなく広いのは確からしい……ということを世間も認め、広大な仮想空間での冒険を待ち望んでいたゲーマー達は熱烈に歓迎した。

だが、「ジ・アナザー」にはもう一つ、今までの仮想空間の限界を超えた特徴があった。

時間の流れ方が現実空間よりも早いのである。

仮想空間と言えども、それを認識するのは現実の人間の脳である。従って、仮想空間の時間経過は現実のそれと常に合致していなくて

はならない……というのが、一般常識であった。

しかし、ジ・アナザーはその常識を覆した。

方法は秘密とされたものの、ジ・アナザー内部では現実の二倍の早さで時間が流れていた。つまり、ジ・アナザーで2日過ごしても現実では1日しか経っていないのである。これは単に仮想空間に用意されていた時計の進みを早めただけ……ではなかった。プレイヤー自身の体感時間が加速されるのである。言ってしまうえば、一ヶ月の夏休みもジ・アナザーで過ごせば二ヶ月になる。……食事などのことを考えると、ログインしっぱなしは不可能だったが。

兎に角、このことは、世界中を巻き込んだいくつもの議論を巻き起こした。どうやって実現したのか、とか、それによる脳へのダメージはないのか、とか。

結局、メカニズムは明かされなかったものの、脳へのダメージは存在しないとう調査結果をある科学者グループが発表した。そして、害がないということと世間の関心はその利用へと一気に傾いた。

受験勉強に使用えば人の二倍の勉強が出来る。事務仕事も同様だった。それを後押しするかのように、ジ・アナザーに現実のデータを持ち込む手段も用意されており、まずはデータ漏洩を気にしなくもいい受験生が流れ込んでいった。まもなく、各自のBPによって持ち込んだデータがジ・アナザーのサーバーに送られることはないことと確認され、世界中の多くのビジネスマンもジ・アナザーへとなだれ込んでいった。

そして、仮想空間とはいえ多くの人間が活動する場所には、その他の社会活動も自ずと発生する。そうして、ジ・アナザーはその名の通り、もう1つの世界として世間に受け入れられ、着実にその人口を増やしていった。

日常（前書き）

第一章

連投。途中で入る説明文が長いです。なんでだろう……？

日常

「じゃ、また明日な！」

高校からの帰り道、家まであとちょっとというところで、張田恭平は手を振って、リアル友人である同級生の工藤泰介と別れた。

今日は定期試験の最終日。

手応えとしては割と良かった……ので、試験の結果を気にすることもなく、ここしばらく続いていた試験勉強から解放され、久しぶりにジ・アナザーにログインできると、恭平はうきうきしていた。正確に言えば、勉強もジ・アナザーの中でやっていたので、ジ・アナザーには毎日のようにログインしていたのだけれども。

兎にも角にも、定期試験の最終日だったということ、学校は午前中で終わり。学校を出たあとは、仲のいいグループで集まって、ファーストフードの店で軽く食べた後、CDショップで新しいCDを漁ったり、ゲーセンに寄ったりと、遊び倒した。

ジ・アナザーがない時代なら、全員でそのまま暗くなるまで遊んでいたのだろう。しかし、1〜2時間も遊ぶと、誰とも無くそろそろ帰ろうか、と言い出すのが常だった。

ジ・アナザーにログインするために。

「さて、みんなもう来てるかな？」

恭平は自分の部屋に戻ると、僅かな手荷物を棚に放り込んだ。

学生の手荷物は情報技術の発達によって、劇的に減っていた。教科書も資料も全てデジタル化され、いつでも仮想ディスプレイで閲覧できるようになっていたし、ノートをとるのも仮想ディスプレイ上で文字や図形を書けば済む話なので、物質としてのノートは既に存在していない。

部屋着に着替えた後、念のため、用も足しておく。ジ・アナザー

にログインした後に、トイレに行きたくなつたからといっていちいち席を外すのはあまり好ましくなかった。

準備が終わるとリクライニングシートに横たわり、BPからジ・アナザークライアントを呼び出す。仮想空間に入るときは、リアル運動神経も五感もほぼ全て遮断される。例外は空腹とか尿意とか痛覚とか。ユーザーの肉体の異常を知らせる感覚だけだ。平衡感覚などは完全に遮断されると言っている。なので、予めリクライニングシートやベッドに身体を横たえておく必要がある。BPの普及に伴って姿を消したテレビやらオーディオ機器の代わりに普及した、現代の必須品だ。

ジ・アナザーにログインした恭平は、何も無い白い空間に放り出されたが、すぐに目の前に2つのアバターが出現する。

フォーマル・アバターとパーソナル・アバターだ。

ジ・アナザーのサービス開始直後は、全てのプレイヤーは1つしかアバターを所有することが認められていなかった。しかし、仕事で学校で……とジ・アナザーが利用される場面が増えるにつれ、(イデア社曰く本来の目的である)ゲーム目的でのアバター利用が困難になるケースが多発した。というのも、ジ・アナザーが広すぎるのが原因である。

ゲーム目的でジ・アナザーにログインしているプレイヤーは、冒険だの何だのの目的でジ・アナザー内を自由に移動しているが、仕事や勉強目的で利用できる場所はジ・アナザーでも限られている。いくら何でも洞窟の中で勉強したり、火山の真上で事務書類をまとめたり。なんて訳にはいかない。モンスターもうるついでるし。

かといって、勉強や仕事の都度、街に戻ろうとしても、ジ・アナザーには瞬間移動のような強力な移動手段は用意されていなかった。そのため、勉強や仕事のためにジ・アナザーを利用することが広まり始めると、街に縛り付けられるプレイヤーが続出し、このままではゲームとしてジ・アナザーを楽しめない!という意見が、イデア

社に大量に寄せられた。

そこで、イデア社は従来のアバターの名称をパーソナル・アバターに変え、全ユーザーに対して新しくフォーマル・アバターを追加した。

この新しく追加されたフォーマル・アバターは、あくまでも現実の社会活動の延長を行うためだけのサブアバターとしての扱いであり、多くの機能制限がかけられていた。

その最たるものが行動範囲と実名登録である。

ジ・アナザーには仮想空間への入り口となるメトロポリス・ゲート、キングダム・ゲート、カントリー・ゲートの3つのゲートと、それを核とした3つのエリアが設定されている。フォーマル・アバターはそのうちの1つ、近代都市メトロポリス内しか活動できないように設定されていた。

また、フォーマルアバターは仕事や勉強で使われるため、ジ・アナザー内で人と会うときの事を考慮し、プレイヤーの実名をもったアバターしか作れないという制限もかけられている。

一方で、旧来のパーソナル・アバターには一切の制限が設けられなかった。当然、パーソナル・アバターをフォーマル・アバターの代わりに使うことも出来たが、多くのプレイヤーはイデア社の意図したとおり、勉強や仕事にはフォーマル・アバターを利用していた。

黒髪のパーソナル・アバターを選んでジ・アナザーに入った恭平は、すぐに所属ギルド「蒼い月」の仲間達との待ち合わせ場所を目指した。

ジ・アナザーでは最初の5回のログインを除けば、原則として前にログアウトした場所から再開される。

定期試験前のプレイで、予め今回の待ち合わせ場所とした中世風の街エラクリットの路上でログアウトしていた恭平は、システム時刻を確認し、

「ちよつと遅れたかな」

と呟きながら、待ち合わせ場所としていた噴水広場に入った。

「お、来た来た」

恭平のアバターを見つけた敵つい如何にも粗野な山賊といった感じの大柄なアバターのフランスが大きく手を振った。本人は騎士になるつもりらしいが、それっぽい鎧を手に入れて装備するまでは、ぼさぼさのくすんだ赤い髪とポリウムたっぷりの立派な髭もあって、山賊の親分にしか見えないだろう。武器がでっかい斧なので余計に山賊っぽい。

その隣では、

「あ、ほんとだ。レック、ひっさしっぶり」

と、軽装の小柄な少女リリーが軽く上げた手をひらひらさせている。こちらは、神官志望なのだけど、回復魔法はまともに使えず、鍵開けが得意で、周りからは盗賊だろうと言われている。ただ、人目を引くきれいな金髪碧眼なので、隠密行動には向きそうにもない。ちなみに、レックというのが恭平のアバターの名前である。

「5分の遅刻じゃな」

とレックを睨んだのは、首から下を趣味の悪い紫のマントで覆い隠した魔女っぽい女性。仲間内では、銀髪と濃紺の瞳のアバターが美形だけに残念なファッションセンスとされているディアナだ。ちなみに、魔女っぽく杖を持ってはいるものの……リリーと同じで戦闘では魔法はまともに使えない。

リリーとディアナ曰く、「ジ・アナザーの魔法は難しすぎる」とのこと。実際、ジ・アナザーに魔法が存在することは確認されているものの、使えるプレイヤーは限られている。

「ごめんごめん」

と仲間達の元に着いたレックは頭を下げた。

ちなみにレック自身は肩からはマントを垂らし、腰に一振りの剣をぶら下げている。いわゆる剣士スタイルだ。防具は今知り合いの職人に修理で預けている。

先に来ていた仲間達に頭を下げたレックはすぐに妙に人数が少な

いことに気がついた。

「あれ？他の連中は？」

「マージンとクライストは仕事で来れないってさ。ミネアはかなり遅れるから、後から合流するとか言っていた」

と、顎に手をやりながらフランス。

「まーまー、全員集まれるのって元々あんなないし、気にしちゃうメだよ」

リリーの言葉にレックもそんなものと頷いた。

ちなみに、レックとリアルで会ったことがあるメンバーはこの中にはいない。今いないマージン・クライスト・ミネアも同様だ。

他のネットゲームと同じで、ジ・アナザーでは住んでいる地域とは無関係に知り合いを作ることが出来る。さすがに自動翻訳機能が実装されなかったため、他の国のプレイヤーと仲良くなるケースは少ないが。実際、レック達のギルドも今いないマージンを除いて全員が日本人だし、イギリス人だというマージンも一緒に行動できているのは、日本語を自在に操れるのが大きい。兎に角、公式には1億を超えるとも言われるユーザーがいるジ・アナザーで、リアルの友人以外の知り合いが出来ない方が珍しい。

というより、リアルの友人よりジ・アナザーの友人との付き合いの方が長い。というのが、二十歳以下の常識だ。その理由は簡単で、ジ・アナザーを始めるのは大抵小学校に入る前。で、ジ・アナザーで出来た友人は引越しかで縁が切れることもないので、長続きする。一方、リアルの友人は引越しや進学の際に新しくできるので、一部の幼なじみを除けばジ・アナザーの友人よりも付き合いが短くなってしまう。

「じゃ、試験が無事に終わったお祝いに早速どっか行こっか」

と、短剣をくるくる回しながらリリー。それを止めて、

「いや、その前にさ。何か変わったこととかあった？」

とレックは訊いてみた。

「いや、この辺では何も無いのう」

「他の連中からも特に何も聞いてないな」

と、ディアナとグランズ。

「まー、何かあった方が楽しいけど、しょっちゅう何かあったら、腰を据えて冒険できないよ？」

軽そうな見た目とは裏腹に、意外と正論をのたまうリリー。

「そっか」

元々、ジ・アナザーでは運営によるイベントなど無いに等しいので、プレイヤーによるイベントや発見以外では大きな事は普通起きない。なので、レックもあまり期待はしていなかった。

「で、ギスタダンジョンに行こうか、という予定だったんだが……」
グランズが今日の予定を確認すると、

「マージンは兎に角、クライストが抜けたのは予定外だったのう」

「ダンジョンは諦めて、森にでも行ってみる？」

「それなら、ミネア待たないと、合流難しくないか？」

「うむ、待った方が良いじゃろうな」

「じゃあ、その間に修理に出しておいた装備の受け取って、ついでにポーション買ってくるよ」

ということ、遅れてくるというミネアを待つ間に、レックは装備の受け取りとポーションの購入をすることになった。

ジ・アナザーでは各種アイテムの作成にはそれに見合った時間がかかる。修理も同様なので、ログアウト前に装備品を修理に出しておくのがプレイヤーの常識となっていた。ポーションの類は消耗品ということで大抵店に在庫が並んでいるので、その日の予定に合わせてレックは購入していた。

さて、レックが戻ってくるまでにグランズがミネアに確認を取ったところ、合流できるのは早くてもジ・アナザーの時間で2時間後だとのこと。さすがに何もせず待つには長い時間だったので、結

局、定期試験明けで久しぶりに狩りをすることになるレックの肩慣らしを兼ねて、エラクリットの北の森で黒オオカミだの何だのの雑魚を狩ることになった。

「しっ！」

食いしばった歯の間から出した気合いの声と共に、大木を背にしたレックは、飛びかかってきた黒オオカミを下から切り上げた。

一撃で仕留めるには至らなかつたものの、前足を両方切り落とされ地面の上でのたうち回っていた黒オオカミに、ディアナが杖という名の棍棒でトドメを刺す。

ただ、一見残酷なシーンではあるが、凄惨さを抑えるためとして血が飛び散ることはない。胴体を輪切りにしても内臓がどろりとはみ出してくることもない。そのくせ、断面はかなり精緻に作り込まれている。まじまじと見たがるプレイヤーはほとんどいないが。

「次、後ろから来るよ！」

木の上から投げられたリリーの声に反応して、木を挟んでレックの反対側を守っていたグランスが斧を振り下ろし、低い体勢から飛びかかるうとしていた黒オオカミを叩き潰す。

「まさか、こんなでかい群れに遭うとはな」

黒オオカミは体長2メートル近い文字通り黒い毛皮をまとったオオカミである。オオカミというだけあって、普段から群れを作っており、その連携故に個体の強さ以上にやっかいな敵となっている。また、その群れの大きさには小さいときの数頭程度から大きな時の数十頭程度とかなりのバラツキがある。今日、レック達が遭遇したのはまさしく最大級の群れだった。

「これもきつとレックの試験祝いだよ」

地上戦ではあまり役に立たないからと、囲まれる前にさっさと一人だけ木の上に避難したりリーが呑気なことをたまいながら、パチンコでレックやグランスの死角から飛びかかるうとしていた黒オ

オカミに小石をぶつけ、牽制する。

そこにすかさず杖を振りかぶったディアナが詰め寄り、黒オオカミの頭を殴り、気絶させた。

「こんな祝いは嬉しくない……」

とため息をつきながら、レックは剣を振って、ディアナに噛みつかうとしていた一頭を追い払った。

「まあ、面倒なだけじゃしな」

念のため、気絶させた黒オオカミをもう一発殴ってから、ディアナはリリーが上っている木の下に戻ってきた。

連携が手強いと言われている黒オオカミだが、実際には5年以上プレイしている中級者にとっては大した敵ではない。レックやリリーでも5年以上、それより長くジ・アナザーをプレイしているグランスやディアナはもうプレイ歴が10年近い。

ということもあり、レック達は囲まれている割にはさほど緊張もせずに黒オオカミの群れに対峙していた。というか、退治していた。既に、足下には黒オオカミの死体が10頭以上も転がっており、徐々にオオカミの群れの士気が下がっているのが感じられる。さっきの攻撃が退けられ、警戒感も増したのか、遠巻きに構えているだけで一匹たりとも襲ってくる気配がない。

「後一押しだな」

というグランスの言葉に、

「じゃ、火薬玉でも使おうか」

と言って、リリーは懐から出した黒い玉をパチンコにセットし、

一匹の黒オオカミに適当に狙いを定め……撃ち込んだ。

ツパアアーン！

狙われた黒オオカミにとっては幸いなことに、リリーが放った火薬玉は僅かに狙いを逸れ、黒オオカミの斜め後ろにあった木にぶつかって、大きな音を立てた。

その大きな炸裂音に黒オオカミたちはビクツと身体を震わせ、そのまま向きを変えて森の奥へと走り去っていった。

それを見て、やれやれとため息をつきながら、レック達は各々の武器を収めた。

「残念、はずしちゃった」

木から飛び降りてきたリリーは、そう言いながらも対して残念そうではない。

「別に当てる気無かったんだろ」

「てへっ」

心にもないことを言うなど言わんばかりに突っ込んだレックに、リリーは可愛らしく舌を出して見せた。最初の頃はその仕草にどきつとしていたレックも、今ではすっかり慣れた。

「で、毛皮はどうするのじゃ？」

杖の頭に付いていた黒オオカミの血を拭き取ったディアナが訊ねると、

「いらんだろ。それより、思ったより時間くつたし、そろそろミネアを迎えに行かないとな」

と、懐から個人端末を取り出して、グランズが答えた。

ジ・アナザーは妙なところがいろいろと他のMMOと異なる。妙にリアリティに拘っているというのが、プレイヤー一般の見解である。

個人端末もその1つで、普通のVRMMOなら空中にそのプレイヤーにしか見えない仮想画面が表示されるところを、そんなの現実的ではないという理由で、わざわざ小さな携帯機器の形で実装されている。ディスプレイ部はさすがに実体を持たないホログラムだったりするので、中世風という世界観にはやっぱりあってないのだが。ただ、この個人端末は非常に高機能で、自分の現在のステータスの表示からプレイヤー同士のメッセージのやりとり、ジ・アナザーでの銀行の入出金処理などなど、様々な場面でお世話になる。なにより、リアルでも同様の機能を持つ個人端末が普及していることもあり、プレイヤーには割と素直に受け入れられていた。

「あ。もう、ミネア来てるじゃん」

エラクリットのに戻ってきたレック達は、エラクリットの北門で佇んでいた青い髪の少女を見つけた。背中の弓と頭の帽子が如何にも狩人っぽい。しかし、

「あー、でも、やっぱりナンパされてるな」

というグランスの言葉通り、ミネアの前には3人の男性アバターが立っていて、ミネアに熱心に話しかけていた。

ジ・アナザーの現実主義（と一部のプレイヤーは呼んでいる）はアバターにも反映されている。

容姿や体型は割と自由に決められるのだが、性別と身長だけは基本的にリアルなプレイヤーのそれを設定することを求められるのだ。これには一心理由があつて、イデア社の発表によれば、「現実と仮想空間で性別などの大きなずれがあると、無意識のうちにプレイヤーの精神に大きなストレスを与えるため」となっている。

ジ・アナザーでは、最初に性別も身長も自由に選ぶ機会があつて、そこで異性を選んでアバターを作成するプレイヤーも少なくない。しかし、実際には異性でプレイしたほとんどのプレイヤーが、開始直後に設けられている一ヶ月間のアバターリメイク期間に、リアル本来の性別に戻してしまうとされる。仮想空間・仮想現実と分かっていてもあまりにリアルなため、大半のプレイヤーにとって、リアルと違う性別でプレイするのはかなりのストレスになるのである。

ということ、ジ・アナザーでのアバターの性別は概ねプレイヤーのリアルな性別と一致しており、そのため、美人キャラがナンパされている光景というのは珍しいものではない。もつとも、アバターが美人・美少女だからといってリアルなプレイヤーがそうであるとは限らないことはナンパする側もよく心得ており、ナンパが軽いコミュニケーションの域から外れることは、ほぼない。

3人の男にナンパされていたミネアだったが、どうやらリリーとグランスの声が聞こえていたらしく、何回か男達に頭を下げたりレック達を指さしたりしてから、ぱたぱたとレック達の方へと走ってきた。

「はあっ、はあっ……」

思ったより距離があつたのか、息を切らせながら（ジ・アナザーではこういうところも妙にリアリティを大事にされている）走ってきたミネアに、

「今日もナンパされてたね」

「ま、ミネアは可愛いからのう」

と、リリーとディアナが声をかけ、ミネアを赤面させた。

「そういうリリーもちよくちよくナンパされてるのを見かけるんだけど？」

「からかうようにレックが言うと、

「可愛いってことだからいいの！」

と、わざとリリーはふくれて見せた。その横では、

「む、では全然ナンパされたことのない私は、可愛くないということかのう？」

とディアナがわざとらしく悩んだ振りをする。

その場にいた全員が心の中で、「いや、ファクションセンスが残念だから」と突っ込んだが、さすがに口には出さなかった。

「あれ？クライストさんはいないんですか？」

ミネアは何か息を整えると、メンバーの顔を一通り見て、首をかしげた。

「ああ、急用だそうだ。来たら来ると聞いているが、多分無理だろうな」

と、グランスは肩をすくめて見せた。その横では、

「クライスト、最近忙しいのかな？」

「じゃあうな。それでもマージンほどではなからうよ」

「マージンの忙しさは異常だろ」

「あー、マージン最後に見たのいつだっけ？」

と、レック達。

「確か先月だな。何でも、イデア社から受けた仕事がどうとか」

「イデア社？ジ・アナザー絡みでしようか？」

「フランスとミネアも会話に入ってくる。」

「さあな。さすがにその辺は守秘義務とかで聞いてない」

「でも、それなら近いうちに何かアップデートあるかもね」

「いや、アップデート以前に、まだまだ未踏の地が沢山あるのじゃが」

「とゆうか、ジ・アナザー、広すぎ。全部見て回るだけで、あたし、しわしわになっちゃいそー」

「まだ若いおぬしがそれでは、私はどうなるんじゃ？」

「……棺桶？」

と、同じ女という性別の割に、えぐい返しをしたリリーの脳天に、
ディアナは容赦ない突っ込みを入れた。

「ったあゝ。ちよつとは手加減してよゝ」

半分涙目になったリリーをディアナは無視して、

「まあ、未だにプレイヤーが誰一人として踏み込んだことのない地域も半分以上残っておるらしいの。そういった点ではまだまだ冒険者心をくすぐられるの」

「となると、そろそろ新しい町に拠点を移すことを考えてもいいかもな」

というフランスに、

「そうだね。この辺も慣れてきたし、移動してもいいかもしれない」

「あ、あたしもそれ賛成」

と、真っ先にレックとリリーが賛成した。

「わたしも賛成します。最近、ちよつと人が増えてきて……そのあの……」

何故か途中から微妙に尻すぼみになったミネアだったが、

「ああ、ナンパされることが増えたから人が少ないところに行きたいということじゃな」

と、ディアナに補足されて、またしても赤面することとなった。

「じゃ、その件はマージン達にも俺から伝えておく。良さそうな行き先については、各自で情報集めておいてくれ。行きたい場所の候補でもいい」

と、何となくリーダーっぽいフランスが話をまとめた。そうと決めた訳じゃないので、リーダーと呼ぶとフランスは顔を引きつらせるので誰もリーダーとは呼ばないが。

「では、予定よりちょっと遅れたが、ギスタダンジョンに向かうとするか」

「おー!」

東の町へ

「しかし、メトロポリスにパーソナルおいてる連中って何考えてるんだろうな」

酒場を兼ねた食堂で、そんなことを突然言い出した男がいた。

ちなみに、パーソナルとはパーソナル・アバターの事である。発音するには長いので、フォーマル・アバターもフォーマルとしか呼ばないのが一般的になっていた。

「さあな。お前はどー思ってた？」

その連れが聞いただと、

「いや、無駄だろ。あっちで出来ることって、リアルと大して変わんないじゃんか」

「あー……確かになあ」

狩りの前の腹ごしらえにと寄った食堂で、レック達はそんな話を耳に挟んでいた。

「時々出るよな、あの手の話」

とは、今日はログインできたクライストだ。白いローブの長身の金髪ハンサムで、お前はどこかの神官か！とレックは常日頃思っているのだが、いつだったか似たようなことを聞いたリリーに、「金髪なのはリアルがそうだから。白い服は白が好きだから。」と、答えていた。特に神職をイメージしてのことではないらしい。確かに、服の下に銃を隠してる神職者などいて欲しくない。

「映画とか音楽とかため込んだのを一気に消費するときは便利じゃない」

「でも、それ、フォーマルでもいいじゃん？わざわざパーソナル使う必要あるのかな？」

一応、用途を挙げてみるディアナだったが、リリーがそれをあっさり否定した。

「リアルでは着れない服を着るというのもあるな」

というグランスの言葉に、

「あー、ありそう」

「フォーマルだと実名そのままでもんな。趣味に走るなら、実名じゃなくていいパーソナルしかないとってヤツもいそうだな」

と、レックとクライストが頷く。

「ま、あたしはパーソナルはこっちのほうがいいけどね。せっかくのジ・アナザーなんだし、リアルじゃ出来ない経験した方がいい気がするし」

「変態趣味を実行するのモリアルじゃ壁が高いという点では似ておるのう」

「いや、それは一緒にしないで……お願い……」

ディアナにかかわれるリリーを微笑ましく見守る一同。リリーのギルドでの立ち位置は可愛い小動物系マスコット……というのが共通見解かも知れない。

「でも、こっちに来てる人達って、結局はリリーと同じだと思います」

「……まーね」「」

ミネアの言葉に全員が頷いたところで、わざとらしくグランスが咳払いをした。

「さて、話を戻すぞ」

それで、レック達は自分たちが何を話していたのか、やっと思い出した。

「なかなか人数が集まる機会がなかったから、結局、メールで意見を集める羽目になったわけだが、さすがに決めるのばかりは全員が揃ってる時じゃないと難しいからな」

「マージンは？」

「来れなくて済まないと言っていたが、みんなの決定に従うそうだな」

そこで言葉を一度切って、他の質問がないかと言わんばかりにグランスは全員の顔を見た。

ぐ形で地続きになっている。

北半球と南半球の大陸にはそれぞれジ・アナザーの入り口となるエントランス・ゲートが1つずつ設けられ、それらのゲートを中心にして、3つのゲートと同じ名前の都市が定義されていた（余談になるが、大陸の名前もゲートと同じになっていて紛らわしいと不評だった）。

北半球の大陸にあるのは、東の大陸に現代の大都市を模倣したメトロポリスと、西の大陸に中世の都市を模倣したキングダム。南半球の大陸にあるのは、都市というより小さな村といった感じのカントリー。

通称、中央大陸と呼ばれる赤道にある大陸にはエントランス・ゲートがない。また、造船技術が未発達（リアルでの造船技術は金属や樹脂が主体の上、機械を使つての製造のため、ジ・アナザーでは全く役に立たなかった）の上、かろうじて製造された大型船も海に棲息している巨大な海獣や魔獣達に沈められたため、未だ、大海原を渡る手段がない。そのため、ジ・アナザーのサービス開始から20年以上が経過した今ですら、中央大陸はプレイヤー未踏の大陸のままであった。

エントランスゲートを持つ三都市の中で人口が最も多いのは、フオーマル・アバターが唯一活動でき、リアルに近い街並みと経済が発達しているメトロポリスだった。しかし、ジ・アナザーをゲームとして楽しんでいるプレイヤー達にはキングダムの方が人気があった。カントリーは田舎過ぎてかえって敬遠されている……のが実情である。

ちなみに、メトロポリス内部を除けばこれといった交通手段があるわけでもないため、ジ・アナザー内で各都市間の交流はほとんど無い。未だに主要な移動手段が徒歩か馬という状態なので、プレイヤーは最初に入ったエントランス・ゲートのある大陸から出ることはほとんどない。ただ、最初の5回までのログイン時には、ログインするエントランス・ゲートを選択できるので、6回目までに好き

な都市を選んで、以降のジ・アナザーでの冒険(?)を楽しむことは出来るようになってる。

3つしかないエントランス・ゲートと限られた移動手段によって、プレイヤーの活動圏は、円形とはほど遠いながらも、3つのエントランス・ゲートを中心にして広がる形となっている。活動圏内には、プレイヤーが作った幾つもの町や村と、それらを結ぶ街道が整備され、プレイヤーの活動圏内にありながらも、未だプレイヤーの手が届いていない地域やダンジョン、遺跡への冒険の基盤となっている。

一方で、プレイヤーの活動圏の端っこも未だ確かに存在し、それがリリーが言った通称「フロンティア」である。そこでは新しい地域への進出をもくろむプレイヤー達が、連日新しい地域へと冒険に出かけ、プレイヤーが作成している地図に新しい情報を付け加え続けている。キングダム大陸ではエントランス・ゲートが西側にあつたこともあり、西から東へとフロンティアは移動し続けていた。

しかし、プレイヤーの活動圏の端っこだけあって、フロンティアでは物流が貧弱で、消耗品が補給しづらいという問題が常に生じている。なので、フロンティアまで出張ることが出来るのは、消耗品の補給ルートを確保できるプレイヤー達に限られる。

「フロンティアの方が面白いつちゃ面白いけどな。遠征っぽくなるから、いちいち戻らないといけないのがなあ」

クライストの言葉が、フロンティアに行きづらい事情を説明していた。

「でも、最近は前人未踏の場所なんか行ってないし、たまには楽しそうだ」

「それなら、フロンティアに近い町がよいかのう」

「でも、それじゃ、ナスカスよりもっと進まない」と

というレックとディアナの言葉にクライストとリリーも、

「そうだな、もっとうってみるのもありか？」

「補給が出来るならそれもアリよね」

と、もう少し先まで行ってみようと言い出した。

「グランズはどう思う？」

「俺も久しぶりにフロンティアまで行ってみたいな。ただ、それにはかなり本気の準備が必要になる。」

「とりあえず、補給が安定して出来るところまで行ってみて、もう一度考えてみる……という手もあるな」

「ふむ、悪くない方法じゃのう」

「何か、しばらく根無し草になりそうですね」

「さらにミネアが何か言ったが、冒険者として活動するなら、安定した拠点がある方がおかしとも言える。そのことに気づいたりリーが、

「いいんじゃないの？冒険者ってほんとはそんなもんでしょ？」

と指摘すると、

「それもそうですね」

「だな」

と、特に反発はされなかった。

ただ、しばらくエラクリットに居座っていたせいか、拠点がある生活に慣れてしまったことをレック達は妙に自覚した。

「しばし妙に沈黙してしまった仲間達の空気を吹き飛ばそうと、グランズが、

「では、とりあえずナスカスに移動。その後は、安定した補給が期待できる限り、東の町へと移動。これでいいか？」

と、確認を取った。

「私はそれでよいぞ」

「ああ、俺も構わない」

「あたしも賛成」

「わたしも賛成です」

「それで僕もいいよ」

と、賛成が相次いだものの、

「あ、でも、マージンはどうする？」

ここにいない約一名をどうするかが問題として残っていた。

「一人旅って訳にもいかないしな」

クライストの言葉に、グランスが、

「出来れば全員で移動したいところだが、そう都合良くは行かないだろう。2つのグループに分けて移動することになるな」

「それじゃ、今日はまだ移動しないってこと？」

リリーの言葉にグランスは頷いた。

「全員の予定を聞いた上で、スケジュールを決めたいと思う。

ただ、折角その気になったんだし、どうせなら早めに移動してしまいたいところだからな。みんな、準備だけは整えておいてくれ」

その後、いつも通りグランスが全員のスケジュールを確認した上で、移動スケジュールとグループ分けを決めることになった。

そして、数日後。

レック達は今日は珍しく馬に乗っていた。正確には、レック達があまり馬に乗らないのではなく、冒険者として活動しているプレイヤーは普通馬に乗らないだけなのだ。

確かに馬に乗れば目的地まで早く着くことが出来る。しかし、ダンジョンなどに入るときには、馬は怯えてしまったりダンジョン自体が狭かったりで中まで連れて行くことは出来ない。かといって外に繋いでおこうものなら、いとも簡単に肉食獣や魔獣の餌食になってしまう。見張りを残しておこうにも、馬を守りながら戦えるだけの戦力を、馬の見張りに使うのも勿体ない……ということ、町から町へ移動するときくらいしか、冒険者達が馬を利用することはないのであった。

ギルド「蒼い月」のナスカスを目指しての移動は、予定通り2つ

のグループに分かれて行うこととなっていた。グランズの調整の結果、先に出発する第一グループのメンバーは、レック、クライスト、リリー、ディアナの4人となった。残りのグランズ、ミネア、マジンはレック達の四日後にエラクリットを発つ予定だ。思ったより早くマジンの予定が空いたものの、今度はクライストの方に予定が入ってしまったため、結局2つのグループに分かれることになってしまったのが残念だとはグランズの言。

「んー、久しぶりに旅って感じ〜」

「ただっ広い草原の真ん中を突っ切る街道……と言っても、そこだけ土がむき出しになっているだけだが……を、のんびり馬に揺られながらリリーが大きく身体を伸ばした。

「おいおい、手綱から手を放したら危ないぞ」

とクライストが注意したが、リリーの身軽さを知っていることもあって、実際には誰もほとんど心配していない。

「しかし、ここのところエラクリットから大きく離れることすらなかったからのう。リリーの気持ちもよく分かるの」

そう微笑みながらも、ディアナは周囲への警戒を怠ってはいなかった。いや、それは他の3人も同様である。

プレイヤーの活動範囲が広がったとはいえ、プレイヤーの活動圏内からエネミーと呼ばれる野獣や魔獣の類が一扫されたわけではない。というか、町の周りを除けば全く減っていないというのが正しい。

従って、町からある程度離れてしまうと、例え街道沿いといえども、いつ何時エネミーに襲われるかは分からない。これこそがプレイヤーの一人旅があまり推奨されない理由であり、また、警戒が欠かせない理由でもある。

「にしても、人とすれ違わないね」

エラクリットを発ってから既に1時間。

遠くに見える森を除けば、何の代わり映えもしない草原の風景をひたすら眺めながら馬に揺られているだけだと、さすがにちょっと飽きてくる。

せめて、他のプレイヤーとすれ違うことがあれば、休憩がてらちよつと雑談……と気分転換も出来るのだが、レック達は他のプレイヤーとまだ一度もすれ違っていないかった。

「やっぱ、あれじゃない？」

こないだ、メトロポリスへの道がついに開通したから、みんなそつち見に行ってるんじゃない？」

「ああ、一応地続きだったもんな。ただ、20年もかかるってどういう事だと言いたい」

と、クライストがため息をついた。

ちなみに、キングダム大陸の西とメトロポリス大陸の東が地続きとなっている。このため、世界地図が些か見辛いことになっているのは、ジ・アナザーに対するプレイヤーの不満の1つである。

「仕方ないじゃろう。ドラゴンが道を塞いでいたのじゃからな。正直、よくあれを倒せたものじゃと思うぞ」

「ドラゴンか。どうせなら、討伐隊に参加したかったなあ」

ディアナの言葉に、レックは一度だけ見に行ったそのドラゴンの姿を思い出していた。

「いやいや。上級プレイヤーが200人くらいでかかって、やっとだったらしいからな。俺たちじゃ足手まといになるだけだった」

無理無理と軽く手を振るクライストに、リリーも相づちを打ちながら、

「でも、討伐隊ほとんど全滅したよね。ほんと、ドラゴンだけ強いんだって話」

「ま、ドラゴンだしな。弱かったら話になんねーな」

そんなクライストの言葉に、それもそうだとレックは頷いた。

「上級ダンジョンにもときどきおると聞くんが……そっちは倒せたと
いう話は未だに聞かんのか」

「ダンジョンだと狭いもんね。出会い頭にブレス一発とか食らった
ら全滅とかありそうだよな」

「いや、それ無理ゲーだろ。つか、倒せない敵なんか作るなって話
だ」

レックの言葉に、クライストが頭を振った。
するとリリーが、

「でも、簡単に倒せる敵ばかりだと、つまらないよね」

「ああ、それ分かるわ。キャラ鍛えて簡単に倒せる敵ばかりになる
と、一気に冷めるしな。そっから新ボスとか追加されても、大抵ラ
イフが高いだけとかそんなだしな」

いくつかのVRMMOをプレイした経験のあるクライストがリリ
ーの言葉にしみじみと贅意を示す。

「ジ・アナザーはその辺はいいよね。マップがバカみたいに広いか
ら観光するだけでも楽しいし」

楽しげなリリーの言葉に、しかしディアナは、

「マップが広すぎるのもどうかと思うがのう。一番手っ取り早い移
動手段が馬ではのう……移動するだけで一週間とかかかるのはどう
かと思うがの」

「あー……」

ディアナの言ったとおり、ジ・アナザーのマップの広さは開始直
後こそ驚きを持って歓迎されたが、すぐにはた迷惑扱いされ始めた。
広すぎるのである。

そのくせ、馬以上に早い移動手段はほとんど無い。

一応、2点間を一瞬で移動できるサークル・ゲートと呼ばれる遺
跡がいくつか見つかっている。しかし、対になったサークル・ゲー
トが設置されている2地点を結ぶだけの設備である上に、周囲に凶

獣や魔獣の類が無数に彷徨っていたり、単純に街や街道から遠かったりというアクセスの便の悪さに加え、不定期にちよつとだけ起動するのを除けばほとんど稼働していないため、冒険目的以外ではほとんど利用されていない。

それとは別に、一部のプレイヤーが空の王と呼ばれている巨大な猛禽を従えるのに成功し、それに乗って移動するのがジ・アナザー最速の移動手段と言われている。もっとも、それでも大陸の間を歩き来することは無理なのだが。

「まあ、あまりに簡単な移動手段が用意されていると、密林の奥の遺跡も火山の火口に隠されたダンジョンも、身近になりすぎてつまらんしの」

「そーなんだよな」

それも経験済みらしく、しみじみと頷くクライストとリリー。

「新しい上級ダンジョンが見つかったもさ、あつという間に初心者から上級者までが群れをなして押し寄せてくるのは、かなり萎えるぜ」

ぶつぶつとぼやき始めるクライストとリリー。

「その点、こっちはマシよね。むしろ、ダンジョンの中で他のプレイヤーに遭遇しても、それも楽しめるし」

「ああ、どこのライブ会場だってくらいに混み合ったダンジョンなんて最低だ」

「そんなに酷いの？」

他のVRMMOを知らないレックが訊ねると、

「酷いなんてもんじゃない！」

と、リリーとクライストの二人がハモった。

「まあ、酷いときには敵が瞬殺されるか、身動きできずにプレイヤーが一方的に虐殺されるかじゃからの。楽しいとは口が裂けてもいえんのう……」

ディアナもそういう経験があるらしく、どこか遠い目でしみじみ

と呟いた。

と、その時。急にディアナの目が鋭くなった。

「ん？……あ！」

その視線の先を追って、レック達も草原の彼方にそれを見つけた。草原に広く分布している大型の牛、スチームバイソンである。

まだ距離はかなりあるものの、既にレック達に気づいているらしく、明らかにレック達に向かって突撃してきている。その速さは家畜の牛など比べものにならないほど速い。

スチームバイソンという名前の由来になっている鼻から吹き出す蒸気はまだまだ見える距離ではないが、一斉にレック達は戦闘準備に入った。

「暇をもてあますよりはマシか!？」

「ちよつと面倒な相手だけだね！」

そう言いながら、スチームバイソンを迎撃するために馬から降りてレックは前に出た。

クライストとリリーも馬から下りると、援護のために左右に展開する。ディアナも馬から下りると全員の馬の手綱を受け取って、地面に打ち込んだ杭に素早く巻き付ける。

ディアナの攻撃は杖による打撃がメインなので、身体の大きな相手にはあまり役に立たない。役に立たないメンバーは後衛に回ってメンバーに注意を飛ばしたり、他の敵が来ないか警戒したり、あるいは単純に馬を守ったりするのが、レック達の間では常識になっている。

そうこうしている間にスチームバイソンは距離を大きく縮め、もう、あと100メートルほどにまで迫っていた。

ツッパァン!

スチームバイソンを射程に収めたクライストが、両手に一丁ずつ持った銃を撃つ。しかし、2発とも命中したにも関わらず、スチームバイソンのスピードは全く落ちない。落ちないまま、クライストへと突撃の向きを変えた。

「こつちだよ、つと！」

スチームバイソンの注意を引くべく、今度はリリーが炸裂弾をパチンコで撃ち込む。既に彼我の距離は10メートルを割り込んでいたこともあって、弾は命中し、スチームバイソンの脇腹で小さいとは言えない爆発が起きた。

その爆発でスチームバイソンが一瞬バランスを崩したかと思うと、足を絡ませてドーンと地面に倒れ込んだ。

そこに距離を詰めていたレックが、大きく振りかぶったロングソードをスチームバイソンの前足めがけて振り下ろす。

「グオオオオオオ！！」

左の前足の根本を大きく切り裂かれ、とても牛の仲間とは思えない声でスチームバイソンが叫んだ。

その間にレックはさっさと後退する。

前足を一本使えなくしたからと言って、到底油断できる相手ではない。間違えて頭の角にでも引っかけられたら、ポーションを飲むまもなく即死しかねない。

案の定、頭を激しく振り回しながら、スチームバイソンは意外に早く起き上がった。

それを待っていたかのように、左右からクライストとリリーが、今度はスチームバイソンの目を狙って攻撃を仕掛ける。

レックに向かって突撃を始めようとしていたスチームバイソンの勢いはそれで削がれた。頭を激しく振り回しながら、クライストやリリーに突撃しようとするが、二人ともスチームバイソンの周りを回りながら攻撃を仕掛けているので、なかなか狙いが定まらない。

さっきの攻撃も、目には当たらなかったものの、左目には炸裂団の破片でも入り込んだらしく左目は閉ざされていた。

ただ、スチームバイソンの5メートルを超える巨体には、クライストの銃弾もリリーの炸裂弾も大きなダメージを与えることが出来ていない。

そのことは二人もよく分かっている、ダメージを与えるためでは

なく、レックから注意を逸らすための攻撃をしている。

レックは、次の狙いをスチームバイソンの後ろ足に定めていた。そして、スチームバイソンが完全に自分と逆を向いた隙を突いて距離を縮め、右の後ろ足の腱を一気に切り裂いた。

さすがにこれにはスチームバイソンも耐えきれなかった。残り二本の足では立つことも出来ず、巨体が地面に再び崩れ落ちる。

無論、この程度でスチームバイソンの闘志が萎えるわけでもない。血が流れ込んでいない左目には激しい闘志を宿したまま、いつそう激しく頭を振り回し、レック達を串刺しにしようとして試みている。

しかし、既に満身に身体の向きも変えられなくなっていた。

角が届かない脇腹や背中を中心に、レックは何度も斬りつけていく。そのたびに、着実にスチームバイソンのライフは削られていき……身動きしなくなるまで、それほど時間はかからなかった。

スチームバイソンを仕留めたレック達は、そのまま解体作業に入った。

ジ・アナザーでは、必要があれば獣や魔獣の死体を解体し、角や爪、肉や皮といった資源を得ることが出来る。ただし、かなり生々しいため、近くに15歳未満のプレイヤーがいないときに限られる。切り出したスチームバイソンの角と肉は、レックとクライストがそれぞれのアイテムボックスに放り込んだ。

重量に関わらず一定体積まで何でも詰め込め、更に詰め込んだアイテムの重さをプレイヤーが感じることはないという亜空間がアイテムボックスである。

だが、アイテムボックスの実装は、ジ・アナザー設計時にアイデア社でもどうするかかなり議論があったとされる。というのも、あまりに非現実的だからだ。何しろ、縦横高さ0.5メートルずつとは言え、亜空間を個人で所有する……というのはさすがに現実ではあり得ない。その辺が、ジ・アナザーの現実主義に反するだの何だの

と揉めたという話が一般プレイヤーの間で噂されている。

で、妥協点として、プレイヤーが各自、魔法でアイテムボックスを作り出す 敵密には、アバターに最初から付属している鞆の身を拡張する という仕様となった。そして、そのためのチュートリアルもわざわざ用意された。プレイヤーはチュートリアルの中で、如何にも怪しげなローブ姿のNPCからアイテムボックスの魔法を習うのだ。そして、アイテムボックスを作ること的成功して初めて、同じNPCから個人端末を受け取り、ジ・アナザーの世界へと旅立つことが出来る。

「お疲れ様、かのう」

馬の手綱を杭からほどいてやってきたディアナに、

「いい暇つぶしにはなつたよ」

ロングソードを拭きながらレックが答える。

単独行動を取る獣の類は行動が単調というか読みやすいため、余程高い肉体スペックを誇っていない限り、何人かで連携を取って当たれば、倒すのに苦労はしない。

「むしろ、今夜の食事がステーキになったから、ありがたいな」

これは使った分の弾を銃に込めているクライスト。

「あたしは、炸裂弾でちょっと赤字気味かも」

「角売ったくらいじゃ足りないか？」

「どーだろ？」

クライストの言葉に首をひねるリリー。

「どっちにしても、人数少ないとあれこれ無理が出てくるからの。もうちょっと急ぐかの？」

「ああ、その方が良さそうだね」

レックはそう答えると、ディアナが連れてきた馬に跨った。ディアナとリリーも続いて馬に跨り、銃に弾を込め終わったクライストもそれに続いた。

「じゃ、もう少し急ぐかの。急げば暗くなる前にナスカスに入れる

はずじゃ
「

ディアナの言葉にみんな頷き、馬に先を急がせた。

魂の牢獄

8月。世間一般で言うところの夏休みが始まった。

今年は猛暑だと天気予報が言っていたとおり、連日、うだるような暑さが続いていた。まだ涼しいはずの午前9時にはもう気温が30を超え、正午過ぎには36とか37とかも珍しくも何ともない。

リアルがそんな猛暑のせい、ジ・アナザーはいつもより人が多かった。

仮想世界にログインしていれば、リアルの暑さ寒さは感じない。ログイン中に熱中症にならない程度に（ガンガンに冷房を効かせているとむしる風邪を引く）空調を効かせた部屋からジ・アナザーにログインしていれば、リアルの暑さにおさらばできるのは仮想世界の魅力の一つだというのは、プレイヤーにとつての共通認識だった。もっとも、今日のこの混雑っぷりはそれだけが原因でないことはレック達もよく知っていた。

「うっわ、すっごい人……」

「思った以上に人がいたのう」

「俺もサーカスにこんなにいるとは思わなかったな」

ログインしてきてすぐに蒼い月のギルドハウス（かなりボロい借家である）の窓から通りを見たりリーの言葉に、ディアナとグランズが同意する。

ちなみに、サーカスというのはナスカスよりも更に東のこぢんまりとした町である。先月にナスカスに移動した後、もう少し東まで行けそうだということで、そのままサーカスにまで移動してきた。物資の面では潤沢とまでは行かないものの、最低限の補給は出来そうだったので、レック達は新しい拠点とすることにきめ、貧相ながら借家も確保していた。

今日、蒼い月のメンバーでログインできたのはさっきの3人に加え、レック、ミネア、クライストの6人だった。全員同時にログインしたわけではないものの、皆、ログイン直後の最初の台詞は似たようなものだった。

「マージン、来れなかったのは残念だったな」

「ほんと、勿体ないよね」

「でも、フォーマルではログインしておくって言っていました」

「いや、メトロポリスじゃこんな雰囲気わえないっしょ」

さほど広くもないサーカスの中央通りを埋め尽くす無数のアバタ。リリーが数えようとして100人くらいですぐ断念していたものの、グランズ曰く、通りだけで1000人はいるなどのこと。レック達と同様に建物の中にいるプレイヤーも入れたら2000人くらいいてもおかしくなかった。

ただ、プレイヤー活動圏の端に近いサーカスは普段はそれほど人が多くない。

「これは、フロンティアの開拓組もこっちに来ておるのかの」

というディアナの言葉の通り、最前線で新しいダンジョンや資源、マップの探索を行っているプレイヤーも、今日はサーカスまで戻ってきていた。その理由は、

「ジ・アナザー初の大型アップデートか、何が来るのか楽しみだな」というクライストの言葉の通りである。

ジ・アナザーはその広大なマップ故に、マップの拡張や新しいダンジョンの追加といったMMOでは頻繁に見られるアップデートは今まで一度も行われていない。

小規模アップデートも、使い勝手の悪かった仕様の修正やバグ潰しが主な内容であり、サービス開始から20年もの間、大型アップデートを一切してこなかっただけに、告知があった瞬間からプレイヤーの期待は否応にも高まり続けていた。

「でも、ここでこうしてる意味ってあるのかな？」
ふと、レックは気になった。

ジ・アナザーは世界中で展開されている上に、ゲームとしてだけではないその性質上、一瞬たりとも止めることが出来ない。しかし本来、MMOのアップデートはサーバーからプレイヤーを全員追い出して、サービスを一度止めてから行うものである。

それが出来ないため、イデア社はアップデートの適用を6時間ほどかけて徐々に行くと発表していた。

「それ言っちゃおしまいでしょ」

窓に張り付いていたリリーが疲れたのか、部屋の中に戻ってきた。「そうそう。何しろ初めての大型アップデートだ。気になってログインするのが人情ってものだろ」

壁により掛かって、自分の言葉に自分で頷くクライスト。
「ま、ね」

レックは苦笑いするしかなかった。そうだったからだ。

「でも、アップデートの適用はもう始まってるはずですけど、終了予定時刻は当分先ですから……こうしていても暇になるだけじゃないかと思えます」

部屋の中央におかれた大きなテーブルの周りに並べられた椅子の1つに座り、紅茶をすすっているミネアがそう言った。

その横に座っているグラスも、

「確かにな。アップデートが終わるまでは暇になりそうだと紅茶をすする。」

ちなみに、紅茶を入れたのはディアナだ。

空腹まで再現されているジ・アナザーではリアル顔負けの多様な食材を使った料理を楽しむことが出来る。ただ、基本的な調理の動作はスキルのシステムサポートを受けることで誰にでも出来るが、

それだけだといまいちな料理しかできない。そこから踏み込んで独自の工夫を凝らせるかどうか、腕の見せ所だとレックはディアナから聞いていた。

余談になるが、ジ・アナザーにも他のMMO同様にスキルは存在する。スキルはNPCとの会話やクエストの報酬などで手に入れることが出来る。だが、使い方が他のMMOと大きく異なる。

スキルを覚えた直後はコマンドからスキルを実行しシステムサポートによってアバターを動かすものの、スキルの行動をプレイヤーが覚えた後はスキルと同じようにプレイヤーが直接アバターを操作し、コマンドは使用しなくなるのである。

その理由は簡単で、システムサポートによるスキル使用といっても、アバターを型どおりに動かしているだけで、ステータスポーナなどが付くことはないからだ。ならば、動きさえ覚えてしまえば、杓子定規のシステムサポートよりも、自分で直接動いた方がよりよい結果を出せる。そのことに気づいたプレイヤー達は、スキルを覚えた最初だけはコマンドから使うものの、すぐに自分で直接アバターを動かすようになった。

「こうして紅茶を味わっているのも悪くはないがの。さすがに丸一日というのは、御免被るかのう……」

ミネアの正面では、ディアナがクッキーをポリポリ嚙っていた。

もちろん、クッキーもディアナお手製である。外見に似合わず、ディアナの料理の腕前は確かで、時々蒼い月のメンバーはその恩恵にあずかっていた。

「ま、アップデート開始時に何もなかったんだ。次に何かあるとしたら完了時だろうぜ。それまで狩りでもしてるってのは悪くない」

壁から離れたクライストはそう言いながら、テーブルの中央におかれていた籠からクッキーを2つほどつまんだ。

「リリーはどう？」

「あたし？……ん、確かに町の中で待ってるだけってのはつまん

ないかも」

レックに訊かれ、リリーはそう答えた。

「ふむ。ここでこうしていても暇を持て余すだけ、というのは皆が同意するところのようじゃの。どうする、グランスよ？」

「何かイベントがあるとしても、アップデート終了時刻までに戻ってくればいいわけだしな。」

半日ではダンジョンは厳しいが、谷くらいはいけるだろう。それでいいか？」

そのグランスの言葉にメンバーが賛意を示し、レック達は北東にある霧の谷に行くことになった。

「ごめん！一匹抜けられた！！」

レックに言われるまでもなく、予め弓につがえていた矢を狙いを定めてミネアは放った。

「ギイイイイ！！！」

片目を潰され、突撃を止めて暴れ出すロックリザード。

ディアナがその脳天に杖を思いっきり振り下ろし、トドメを刺す。その様子を確認する間も惜しんで矢をつがえなおしたミネアに、

「ミネア！上だ！」

グランスから指示が飛び、右の岩の上から飛びかかってこようとしていたロックリザードの腹に矢を放つ。

「ギヤアア！！！」

背中と違って柔らかい腹部に深々と矢が突き刺さった。そのまま着地に失敗し、頭から地面に突っ込んだロックリザードはトドメを刺すまでもなく動かなくなる。

霧の谷はその名の通り、常に濃い霧に覆われた大きな谷だ。途中で幾つにも枝分かれしながら山頂へと続いている。谷というだけあって、左右を険しい崖で挟まれているが、その底を川が流れているようなことはなく、雨が降った直後にのみ、それに見合った程度の

水が流れる。ただ、その水が土を流してしまつたため、底には石や岩がごろごろしていて、足場としては決して良くなかつた。

そんな霧の谷に入つてしばらくは何にも襲われなかつたレック達だつたが、すぐに周囲を取り囲む気配に気づき……そのまま気配の主であつたロックリザードたちとの戦闘に突入していた。

幸い後ろからは襲つてこなかつたので、前衛にグランズとレック。後衛にミネアとディアナ。その二人の護衛としてクライストとリリーが配置された。ただ、今のところ、リリーが攻撃に参加する必要はなく、リリーはロックリザードの腹を切り裂いて、腹の中に隠されていることもある宝石を回収している。

「また来てるなつと」

左右の岩の上から襲つてくるロックリザードがだいぶ減つたものの、油断するとまだ時々飛び降りるように襲つてくる。クライストは主にそれを狙い撃ちにしていた。さっきのように、ミネアが弓で撃ち落とすのは、クライストが弾を込め直している間だけである。

「グランズ、そっちはあとどのくらいじゃ？」

魔法使い志望のはずなのに、主に杖による打撃で戦っているディアナが前衛に声を飛ばす。

「あとちよつとだ。暇なら何匹かそつちに通すぞ？」

「それは何か間違えてます……！」

グランズの好意？をミネアがきつぱり断つた。

「あー！」

「今度は何だ！」

クライストが訊くと、

「剣が刃こぼれした！」

ロックリザードの固い鱗を斬り続けていたのが原因だろう。初心者なら刃こぼれどころか、刃物である鱗にまともな傷をつけることすら難しいことを考えれば、十匹以上も切り倒したレックの腕は決して悪くはない。

「レックは一度後退して新しい剣に変えろ！」

後衛！そつちに行く分が増えるから注意！」

「了解！」

グランズの指示に従い、すぐにレックが後退する。

それを追おうとしたロックリザードが一匹、グランズの戦斧に首を叩き落とされたが、その隙を突いて二匹、グランズの横を抜けた。すかさずミネアとクライストがその二匹を迎撃し、仕留める。

その間に列記は刃こぼれしたロングソードをアイテムボックスに放り込み、予備のロングソードを取り出していた。

「オーケー！前に戻るよ！」

「ちよつと待て！」

前衛に戻ろうとしたレックをグランズが止めた。

「あれは……！！！」

何か見つけたらしい。

グランズの視線を追ったレック達もすぐにそれに気づいた。

「バジリスク！！」

体長10メートルにもなるつかという巨大なトカゲ。ただし胴体はへびに近い。が前方の岩陰からのっそりと姿を現していた。

その巨体だけでも十分脅威であるが、有名な特殊能力。爪や牙で傷を負わせた相手を石化する能力は厄介極まりない。上級プレイヤーのパーティなら近づかず安全に倒すことも出来るが、レック達には厳しい相手だった。

「やむを得ない！撤退するぞ！」

クライスト、銃弾は！？

「まだ詰め直す必要はない！」

「なら、牽制頼む！」

リリーとディアナから撤退しろ！

ミネアはクライストの援護！

俺とレックはロックリザードの迎撃だ！」

グランズのときぱきとした指示で、レック達は速やかに後退を始めた。

幸いなことにバジリスクの動きは鈍い。その上、レック達よりもより近くにいたロツクリザードの方に興味を持ったらしく、クライストとミネアは、バジリスクそのものよりも、バジリスクに追われ
て逃げてきたロツクリザードの足を止める羽目となっていた。

「いやー、まさかバジリスクが出てくるなんてなー」

レック達は霧の谷の入り口から1kmほど離れた森の端でやっと一息ついた。全力で……とは言わないまでも、走って逃げてきたので全員ばててだった。

「ほんと、ちよつと焦ったよね」

たまたまあつた岩に腰を下ろしたクライストの台詞に、両足を投げ出すように地面に座ったりリリーがうんうんと頷く。

「でも、いつかはバジリスクも倒してみたいものじゃのう。あれの牙や爪は結構いい値段で取引されておるしの」

「それにはまず、遠隔攻撃の手段が欲しいよね。ミネアの弓とクライストの銃だけじゃ足りてないし……僕も弓やってみようかな」

「いや、私が魔法を使えるようになればよいのじゃ」
ぐつたりと地面に座り込んだレックとディアナがそう話す。

「わたしも……もつと強い弓が使えればいいんですけど……」

「もつと強い弓となると、エンチャント付きの類か」

「でも、あれつてめっちゃ高いよね？買えるの？」

「いえ、どう考えても……無理かと」

一人だけ平然と立っている（ように見える）グランズとリリーの発言で凹みかけたミネアに、ディアナが、

「弓ではなく、矢の方で工夫する手もあるのう。リリーの炸裂弾みたいに、当たると爆発する矢とかはダメなのかな？」

と、助け船を兼ねた提案を試みるが、

「そついう特殊な矢つて、あんまり売ってないんですよね……」
と、あまり効果はなかった。

「さて、そろそろ戻るか？」

しばしの休憩の後で、端末を確認したランス。しばらくは警戒のためか一人だけ立っていたが、特に襲ってくるような敵はいなかったため、今は腰を下ろしていた。

「え？もーそんな時間なの？」

というリリーの声に釣られて、全員が各々の端末で時間を確認した。

「あと、大体4時間じゃな。ということは、リアルだと2時間ほどということかの」

「思ったより、時間かかったもんだな。……今からでも間に合うかね？」

「サーカスに戻るのに2時間くらいかかるから、アップデートが予定より早く終わらなければ多分」

いつの間にか木の根っこの上に座り直していたクライストに、地面に座ったままだったレックが答える。

「どっちにしても、さっさと帰るに越したことはないか……よつとクライストのその言葉で、思い思いの格好で座っていた仲間達も次々と立ち上がる。」

「よし、戻るとしようか。何か記念イベントが起きるなら、見逃したくはないからな」

そう言っただけでニツと笑ったランスも他の仲間達も、その期待されていたイベントがまさかあんな形で起きるとは、誰一人として想像していなかった。

「……ついに、その時が来たのか」

レック達がサーカスへの帰途についたその頃。

たった一本のロウソクが灯されただけの暗い空間に集まっていたいくつかのローブをまとった人影が感慨深げに呟く。

「やっとなのだな」

「ついに長年の労が実るときが来たのだな」

しかし、一人がそんな仲間達を諷めるように、

「しかし、まだ始まったに過ぎない。全てはまだこれからよ」

その言葉に応じる声はなかった。

「結局、あんまり宝石取れなかったんだ？」

「そそ。ケッチよね」

サーカスへの帰途についた当初は、アップデートの内容についてあーでもないこーでもないと予想が盛り上がっていたレック達であったが、さすがに同じ話題で延々と話が続くわけでもなく。

いつの間にか、さつき狩っていたロツクリザードから取れた宝石の話に移っていた。で、どれくらい取れたかレックが訊いてみたところ、さっぱりだったと回収役だったリリーが答えた。

「まあ、当たり前が大きいのう」

さも分かった風にディアナが一人うんうんと頷く。

「あ、でも2つくらい良さそうなのは出たよ？ サファイアとルビーだけ」

「へえ？ でかかったのか？」

「ま、こんな感じ？」

クライストの質問に、実際にアイテムボックスから宝石を出してみせるリリー。それを受け取ったクライストは、

「ふむ。サイズはなかなかだな。ミネアはどう思う？」

と、2つともミネアに渡した。

ミネアは受け取った宝石を、しばし、何度も向きを変えながら見つめて、

「ええと、サファイアの方は質があんまり良くないみたいです。ル

ビーは質もそれなり、でしょうか」

「そっか。ちよつと残念」

そう言いながら、ミネアから宝石を受け取ったりリリーは、再びアイテムボックスに放り込んだ。ミネアの宝飾品関係の鑑定は、それなりに信用できるので、ミネアの鑑定結果については誰も突っ込むことはない。

「ホント、数も10個いかなかったし、今日のは外れかな？」

「ま、暇つぶしの狩りだったしいーんじゃねーの？消耗品の元は十分取れただろ？」

「そーだけどね。やっぱり、狩りに来たならちゃんと稼ぎたいじゃん？稼げるときに稼いどかないと、思い切った冒険に出づらくなるんだよ？」

クライストのフォローにも、微妙にリリーは不満げだったが、

「思い切った冒険って言えば、そろそろ一度東に遠征してみない？」

というレックの言葉を聞くと、急にニコニコして、

「そだよねー？そのためにこんな辺鄙なサーカスまで来たんだもんね！行かなきゃソンだ！」

一人で「おー！」などと右手を握りしめて空へと突きだした。

「ま、アップデート次第では、そっちの方にかかりきりになるかもしれないんがの」

そんなディアナの台詞で、再び、アップデート談義が始まるうとしたちよつどその時だった。

その一瞬、確かに世界が軋んだ。

自分の気のせいかと思ったレックは、周りの仲間になんか訊こうとして、

「ちよつと、今のなんだよ？」

しかしその前に、やはり気のせいではなかったことを知った。

「あ、そっちも？」

「気のせい、じゃなかったんだな」

「何だったんじゃ、一体」

「あたしに訊かないでよ」

一緒に狩りに来ていたパーティの仲間達が頭を軽く振りながら、口々に騒ぎ始める。

しかし、

「で、結局何だったんだ？」

その問いに答えられるメンバーは誰もいなかった。しかし、

「アップデートの終了予定時刻はあと2時間ほど後だが……」

「いや、予定より早く終わることもあるじゃろう」

「じゃ、今のはひよっとしてイベントが始まる合図だったのか？」

というディアナ、クライストの予想に、

「えー！そんなんやダ！絶対見たーい！」

と、リリーが騒ぐ　　というか駄々をこね、

「でも、合図にしては、変というか……イヤな予感がしませんか？」
ミネアの言葉で、全員が感じつつも敢えて知らない振りをしていたことを考える羽目になった。

そして落ちる沈黙。

その場の重たい空気のせいで誰もが気づいていないが、いつの間にか、フィールドからは鳥の鳴き声も、風に揺れる草のざわめきも、いや、風そのものも静まりかえっていた。太陽が陰り、急速に辺りが暗くなっていく。

そんな中、静寂に耐えきれなくなった誰かが、その異様な静寂を破ろうとする前に、

天からの声が静寂を破った。

『我が魂の牢獄に囚われし儂き者どもよ……』

そのあまりにも低く禍々しい声にレック達が空を見上げると、

『我は魔王。魔王ディヴァズカード』

自らを魔王と名乗る巨大な影が空をほぼ全て覆っていた。

『汝らは全て我に捧げられし生け贄なれば……』

その影には確かに顔があると分かるのに、

『いずれ我が前に来ることになるう』

目も鼻も口も見えない。

『我が僕共に刈り取られたささやかなる前菜としてか……』

見ようとすればするほど、顔があるのかどうか分からない。

『あるいは自ら我が前に辿り着いた主菜としてか……』

それでも、確かに禍々しい顔があると分かる。感じる。

『……1つ、良いことを教えてやるう』

声は一度言葉を切って、

『我が牢獄より出ることを望むならば』

希望という名の罫を提示する。

『我を見事討ち果たしてみせるが良い』

手が届くかどうか分からない。

『さすれば、牢獄の扉は開け放たれよう』

それを最後に影も声も消え去った。

いつの間にか風に揺られる草のざわめきや鳥たちの鳴き声が帰ってきていた。

そんな中で、呆然と突っ立っていたのも束の間、

「すっごーい!!」

と、興奮を隠しきれずにリリーが飛び跳ねた。それをきっかけに、

驚愕といくらかの恐怖で固まっていた仲間達も動き出した。

「すげえな。今のがアップデートなのか？」

「魔王が来るとはこのう……MMOでありなのかのう？」

口々に興奮を口に出す。

「あれ倒したら、ちよーゆーめーじんだよね、あたし達っ！」

「まあ、倒せたらな」

そう言いながらも、普段は冷静なランスも、興奮を隠し切れて

いない。

「魔王が出たって事は、魔王軍みたいなのも実装されたのかな？」

「うむ。ありそうな話じゃな」

「じゃ、じゃ、四天王！みたいなのもいるのかな！」

「四魔将、みたいな名前かもしれないのう」

「あー、そんなんに襲われたら俺ら、一発昇天しそつだな」

「え〜。せめて、一撃くらいは入れてみたい〜」

と、話は終わりそうになかったが、グランズが軽く手を叩いて、「話は歩きながらでも出来る。とりあえずギルドハウスに戻って、他の連中にも話を聞いてみよう」

そつ、話を打ち切らせた。

それから間もなくサーカスの門に着いたレック達を待つていたのは、異様な雰囲気だった。その雰囲気に飲まれ、レック達は町の中へ入ることを躊躇していた。

「何これ？何でみんな暗いの？」

リリーが眉をひそめて言ったように、町にいるプレイヤー達の表情は一樣に暗い。地面に座り込んでいるプレイヤーもかなり多かった。仲間を思いきプレイヤーを慰めているようなプレイヤーもいたりしたが、慰めている側の表情もやはり明るいとは言い難かった。

「アップデートを喜んでるって雰囲気じゃありませんね……？」

「そつだな」

ミネアの言葉にグランズは頷くと、クライストに視線をやって、「クライスト。イヤな予感がする。ちょっと、誰かに話を聞いてきてくれるか？」

「ああ、分かつた」

頷いたクライストが門をくぐっていったのを確認すると、グランズは後ろに着いてきていた残りの仲間達の方へと向き直り、「念のため、ここで待機しよう。周囲への警戒は怠るな」

と、指示を出した。

町の異様な雰囲気にも飲まれていたレック達は、それでやっと自分を取り戻したかのように動き出した。

「グランズ、何があつたんだと思う？」

「分からん。だが、タイミングから見てアップデート絡みの可能性が高いと思う」

横にやってきたレックにそう答えると、グランズは頭を左右に振った。

「私もそう思うのう。ただ、それでもこれは異常じゃな。魔王という新しい目標が出来たにしては……」

ディアナはそこで言葉を切って、町の中で呆然としているプレイヤー達に目をやった。

「皆、暗すぎるのう。私にはショックを受けて我を忘れていように見えるが、さて、どうなのじゃろうな」

「ふむ。まあ、クライストがすぐに戻ってくるだろう。その報告を聞いてからでもいいか」

さすがのグランズも、何が起きたのか、事態が把握できないままでは動きようがなかった。

ただ、幸いと言って良いのか、クライストは思った上に早く戻ってきた。ただし、それを見ただけで、レック達全員の表情まで硬くなるような表情を浮かべて。

「クソ！一体何なんだよ、これは！」

窓際でギルドハウスの床を思いっきり蹴りつけるクライスト。

しかしこれは元気がある方で、ミネアやリリーは魂が抜けたかのように椅子に座り込んでいる。もっとも、グランズがレックに、床にへたり込みかけた二人を椅子に座らせるように指示を出さなければ、今頃床に座っていたのだが。

「まさか、ログアウト出来なくなつてたとはな……」

仲間達の様子が悪かったためか、椅子に腰を下ろしたグランスは、本人も落ち込みながらもかろうじて冷静さを保っているように見えた。無論、内心は言うまでもない。

戻ってきたクライストから「ログアウトできなくなってる」という話を聞いたレック達は、まさかと思いつながらも、個人端末を取り出し、ログアウトコマンドを確認してみた。

結果は言うまでもない。コマンド一覧の目立つところにあるはずの「ログアウト」は、誰の端末からもきれいさっぱり無くなっていた。

一瞬、全員の頭が真っ白になった後、その場で誰も暴れ出したりへたり込んだりしなかったのは、グランスの放った「ギルドハウスに戻るぞ」という冷静な声のおかげだろう。

「ディアナ、どう思う?」

グランスに問われ、

「そうじゃのう。アップデートに伴う設定ミス……ならよいのじやが」

グランスの右隣の椅子に腰掛けていたディアナのその口調は、自らの言葉が楽観的すぎると思っているかのようだった。

無論、ディアナも前例のない上にも重大な事態に混乱しなかったわけではない。ただ、突如として襲ってきた非日常にどこか胸躍らせていたためか、クライストやミネア、リリーほどに取り乱さなかっただけだった。

「曲がりなりにも20年、大きな問題も起こさずにここまで運営してきた以上、今更そんな初歩的なミスは考えにくい……か」

ディアナが口にしなかった言葉を、グランスは正確に理解していた。

「つまりは、意図的って事?」

「そうなるかのう」

グランスを挟んでディアナの反対側に座っていたレックの質問に、ディアナは頷き、

「何を考えて、このような暴挙に出たかは知らんがの」と、付け加えた。

「ふむ」

そのディアナの台詞を聞いて、何か思うところでもあったのか、グランスは徐に個人端末を取り出すと、何かを確認するかのよう操作し始めた。

「グランス、何か思いついたのかの？」

「いや、念の……」

念のためだ、と言おうとしたグランスの口が止まり、その顔が歪んだ。

「ディアナ、レック。お前達も端末でコマンドを全部確認してみてくれ」

「ふむ？」

「うん？分かった」

疑問符を交えながらも、二人とも端末を取り出し、コマンドを順に確認していく。しかし、

「む」

「何、これ……」

すぐにその手は止まった。そして、グランスにはその様子だけで十分だった。

「やはり、意図的な改変か」

小さく呟き、端末に何か打ち込んだ。

「む？」

端末を操作していたディアナはちょっとだけ首をかしげ、

「ふむ。ギルドメツセージは使えるのじゃな」

グランスが試しに送ってみたメツセージを確認して、頷いた。

ギルドメツセージは、同じギルドに所属しているプレイヤー同士

で連絡を取るための機能だった。ギルドに所属することで得られる唯一のメリットでもある。

「フレンドメッセージは使えないがな。これでは他の町の様子を知りたくても、分からんな」

「設定コマンドも無くなってるけど……」

「ああ、他にもパーティコマンドとかいくつか無くなってる」

端末を懐に戻し、グランスは椅子の背もたれに身体を預けた。

「アップデートの失敗という線は、ほぼ消えたと見て良さそうじゃの」

「ああ。全く、何のためにこんな事をしたんだろうな」

ディアナの確認に、さっぱり分からん、と頭を振るグランス。

「そう言えば、BPの強制停止命令はどうじゃ？」

ディアナの提案を聞いて一瞬希望の光が見えたような気がしたレック達だったが、

「無理だぜ。それも使えねえ」

窓際から返ってきた言葉に、すぐに沈むことになった。

しばしの沈黙を破ったのはレックだった。

「グランス。それで、この後僕たちはどうしたらいいと思う？」

その言葉に、会話に参加していなかった二人の身体が一瞬ビクツとなった。

その様子を視界の端に収めながら、グランスは、

「そうだな。今のままってのは精神的にも良くないか」

と自分の言葉に頷くと、

「とりあえず、クライストも座ってくれ」

その言葉に従って、窓際からテーブルに戻ってきたクライストが渋々と座った。

それを確認して、グランスはもう一度、何のためにか頷くと、

「現在の状況からまとめる。分かっていることはこうだ。

端末のログアウトを含む相当数のコマンドが抹消され、使えなく

なっている。BPの強制停止も使えない。つまり、ジ・アナザー内部にいるプレイヤーが自力で脱出する手段はない。

そして、これはイデア社が計画的に行ったことだと思われる」

ディアナとレックは、グランズとその話をしていたので異論は無いし、クライスト・ミネア・リリーの三人は異見を唱える気力もなさそうだった。

「なので、この後何が起こるのか予測し、どうするか決めなくてはならない」

そこでクライストが何か言葉を挟もうとしたのを視線で制し、グランズは自分の言葉を続ける。

「一番いいのは、リアルでの第三者が我々のBPを強制停止してくれることだ。」

家族がいるプレイヤーもジ・アナザーにはいるからな。閉じ込められたプレイヤーの家族が異常に気づけば、そこからリアルに話が伝わって、遅くとも数日中にはほぼ全てのプレイヤーが救出される可能性が高い」

「そっか、そーだよね……！」

「それも……そうですね」

ふさぎ込んでいたリリーとミネアの表情が、目に見えて明るくなった。

だが、グランズとディアナの表情が晴れていないことにレックは気づいた。クライストもまだ納得できていないような顔をしている。「喜こんでいるところに水を差して悪いのじゃがな……話は終わつとらんぞ」

そう言ったディアナを、ミネアとリリーが不思議そうに見た。

「すまんがその通りだ」

続けてグランズを見たミネアとリリーは、その言葉に再び不安げな表情を見せた。

「今言ったのは可能性の1つに過ぎない。無論、最も高い可能性であることには変わりがない。だが……」

「運営がこんなことをやらかした理由が分からねえからな」

「グランスの言葉を遮って、クライストが発言した。」

「そうだろ？」

「こんな事をして何の得がある？ 数日もしないうちにここに閉じ込められたプレイヤー全員が救出されて、会社は不祥事をしでかしたって事で間違いなく潰れる。」

「なのに何でこんな事をする？ 結果が見えてない訳じゃないだろう？」

「クライストは、窓際でじっとしていた間に考えていたことを、言いしれぬ不安をはき出すかのように一気に口にした。」

「その様子を呆気にとられて見ていた仲間達だったが、」

「そうじゃな」

「というディアナの言葉で気を取り直した。」

「問題はそこじゃ。」

「どう考えても、今回のことはイデア社にとってマイナスでしかないのじゃ」

「既に、イデア社が確信を持って今回の事件を引き起こしているという説に、誰も異論を唱えようとはしなかった。」

「イデア社が破滅願望の持ち主であった……という可能性もあるのじゃがな。幹部の大半が破滅願望の持ち主でもない限り、組織が自らを破滅させるような行動を積極に取ることはあり得んからの」

「そこで、ディアナはグランスに視線をやって、軽く頷いた。そして、ディアナの後を受けて、グランスがもう1つの可能性を提示した。」

「最悪、我々は救助されない可能性がある。」

「運営が何らかの方法でこの事態をリアルに伝わるのを防ぐか、伝わっても打つ手が無い場合、我々は救助されない」

「誰にとっても、あまりに信じたくない話だった。それを口にしたグランスでさえも。」

「そして、空気をいっそう重くするような言葉を、ディアナが付け

加えた。

「まさしく、『魂の牢獄』というわけじゃない」

蒼い月、ギルドハウスにて

「兎に角、俺個人としては、最悪を想定した行動を取っておいた方がいいと思う」

ディアナの発言で一気に重たくなった空気を何とかしようとしたわけでもないだろうが、グランスが何とか口を開いた。その直前、ディアナを睨み付けるのも忘れない。

「助けが来るなら、何をしていても助かる。だが、最悪のケースだったとき、動いていなかったら状況はもつと悪くなるからな」

理由を述べ、グランスは再び口を閉じた。

正直、今の状況で他の仲間達に助けとはとても言えない。最悪、一人だけでも動く覚悟は出来つつあった。が、

「私はグラン스에賛成じゃな。グランスの理由ももつともじゃし…」

…」
ディアナはそこでちらりとミネアとリリーを見て、

「なにより、気が紛れる。何もせずにおると、不安に押しつぶされてしまうかもしれんしの」

そう言われても、なかなか割り切れないのが人間というものだろうか。残る4人はなかなか口も開かず、時々お互いを見ては、口を開きかけ、また閉じていた。

しかしやがて、

「俺も動くぜ。確かにここに俺たちを閉じ込めやがった運営を許す気はねえ。」

でも、人形みたいにじっとしてるなんて冗談じゃねえ！

なんとしてでもここを出てやる！やつらの思惑通りになってたまるかよ！」

クライストはそう言って、テーブルをバンツと叩いた。

それで吹っ切れたのか、

「僕も動くよ。クライストの言うとおりだ。それにじっとしてても

何も始まらない」

とレックが続き、

「そうだね……あたしも……うん、頑張るよ」

まだ元気はないものの、リリーも頷いた。

そして、ミネアも、

「わたしも……あの……よろしく願います」

と、初めて一緒に行動した時みたいな挨拶をしたのだった。

助けが来るか来ないかはおいておいて、とりあえず、動いてみる
ことで全員が同意した後、

「で、グランス。とりあえず、どう動くんだ？」

と、クライストがいつもの調子でグランスに訊いた。

「ん。それだな……」

しかし、グランスは歯切れ悪く言葉を切ると、ディアナとリリー
に視線をやって、何か考え込んだ。

「む？どうしたのじゃ？」

ディアナに訊かれ、

「やむを得んか」

と呟くと、

「リリー、ディアナの胸に触ってみてくれ」

と爆弾発言を投下した。

「……ええええええ……！？」

ちよつと前の空気が吹き飛ぶ勢いで叫ぶ一同。

レックやクライストは思わず立ち上がってしまったって、その勢いで
椅子を吹っ飛ばしている。ミネアは叫びこそしなかったが、顔が真
っ赤になって硬直しているし、ディアナですら一瞬固まっていた。

「ちょ、グランス！どーゆーこと！？」

パンツと机をぶっ叩いて真っ赤になったリリーが問い詰めると、
グランスも己の失言に気づいたのか、慌てたように、

「あ、いや、違うんだ！」

と両手を振って否定する。

「何が違うのよ!!」

「いや、そういうスケベな意味ではなくてな……」

「スケベじゃなかったら、何のためじゃ?」

限りなく冷たい視線を送るディアナ。もつとも、本人以外の全員が氷のような視線でグランズを見ていたのだが。

それに気づいたのか気づいてないのか、あるいは慌てる必要はないと思っただのか、グランズは咳払いをして冷静さを取り戻すと、

「端末のコマンドから設定が消えているのは知ってるな?」

「それが何よ?」

まだ、皆の視線は冷たい。

「その中に、セキュリティがあつた。そして、セキュリティの内容は……」

そこまでグランズが言ったところで、仲間達もグランズが言いたいことを理解したらしい。

「ブラックリストやプレイヤーキルの許認可、そしてセクハラ設定があつた」

「つまり、それらのシステムによる保護が消えたのではないかというところかの?」

グランズの台詞を先取りしたディアナに、グランズは頷いた。

「確かに、それは確認しとかなきゃまずいな」

「ですね」

事態を把握した仲間達も頷く。

「にしてもよ?いきなりあたしにディアナの胸を触れって……グランスってば意外に変態だったんだ……」

リリーがじと目でグランズを睨むと、

「すまん。説明を先にするべきだった」

グランズは素直に頭を下げた。こういう時は男は弱いというのを、彼はよく知っている。

「ま、仕方ないか」

リリーは席を立ってディアナの隣に移動した。

「む、しかし、心の準備というものがじゃな……」

初々しい少女のように頬を染めるディアナだったが、

「いや、そこまでやられると、わざとらしすぎる」

というクライストの突っ込みで、

「つまらんのう。もうちょっと、ドキドキしてみても罰が当たったりはすまいよ」

と、あっさり開き直った。

「ま、やってみるがよい」

そう立ち上がって、ローブに隠れて普段は分からないものの、どちらかというときめきの胸を張った。

「じゃ……」

ゴクリとつばを飲み込んで、何故か両手を伸ばすリリー。

片手だけでいいんじゃないかという突っ込みは、微妙にエロティックな光景（主にリリーの表情が）を前にして、フランスですらも忘れていた。

ふにっ

と、リリーの両手がディアナの胸に食い込む。

「む……」

さすがのディアナも今度は本当にちょっと恥ずかしそうだ。

ふにふにむにむに……

そして、揉む。何故か揉む。

「んっ……」

微妙にディアナが顔を逸らし……

「リリーさん、そこまでです」

真っ赤になったミネアが、いつの間にかリリーの背後に移動して、ぐいっつとリリーをディアナから引きはがした。

「っ……ほっつ……」

ため息が漏れる一同。

「ごほんっ」

咳払いがした方に視線をやると、やはり赤くなったグランズが、

「あー、やっぱりハラスメント保護消えているな」

ディアナとリリーの方を見ないようにしながら、そう言った。

「と言うことは、PK保護プレイヤーキルなども消えておるのかのう？」

「ああ、多分な……ってディアナ、何をしてる？」

ディアナの方に一瞬視線をやったグランズは、自らが見た光景に、思わず椅子ごと後ずさった。

「なに。PK保護が消えているかどうか試すだけじゃ」

ディアナはにっこり微笑むと、グランズの脳天に大きく振り上げていた杖を思いっきり振り下ろした。

残る男性陣 レックとクライストが思わず目を背けた直後、

ボゴンツ

視線を戻したレック達が見たものは、テーブルに突っ伏したグランズだった。

「兎に角、システム保護が消えている以上、ディアナ、ミネア、リリーは個人行動は控えた方がいいな。というか、女性陣だけの行動自体を控えてくれ」

さすがに仲間内で一番頑丈だと目されているだけあって、ディアナの一撃からすぐに復活して早々、グランズはそう言いだした。

「えっと、どーゆーこと？」

すぐには理解できなかったのか、リリーが問い返す。

「今は他のプレイヤーはショックで大人しくしているが、今後は混乱が起きるかもしれないからな。システム保護が消えているから、その混乱に乗じて、性的ないたずら目的でちょっかいを出してくる奴らがいてもおかしくない」

「あ………」

そのグランズの説明でやっと理解したのか、リリーは両腕で自らの身体を抱え込みながら、頷いた。

「そういうことだから、各自、気をつけてくれ。クライストとレック

クも、女性陣だけで出歩かせないように注意してくれ」

「分かった」

グランスの言葉に、レックとクライストも頷いた。

「それから、この後の行動だが、まずは情報収集から始めたい。あの時、この町で何が起きたのかとか、他のプレイヤーがどうするつもりなのかとか、いろいろ知っておくべき事がある」

その手のややこしそうなことは大体グランスに任せておけばいいと思っっている仲間達は、グランスの提案にも特に異見を差し挟まない。

「かといって女性だけでここの留守番を頼むのも何だしな。レックに女性陣の護衛を任せて、英語も出来る俺とクライストで町の連中から話を聞いてこようと思うんだが、クライスト頼めるか？」

「ああ、いいぜ。気晴らしにはならないだろうけどな」

気乗りしない感じで、クライストは頷いた。

ちなみに、公式にはジ・アナザーにおける公用語というのは決められていない。公用語を決めしまうと、それを話せない人にはプレイ資格がないような印象が出来てしまったためだとイデア社は説明している。

しかし、実際には英語が事実上の公用語として利用されていた。

英語を話せないプレイヤーも決して少なくはないのだが、使えるプレイヤーがもつとも多い言語が自然と公用語の地位を確保した形である。

グランスとクライストが町にいるプレイヤー達から話を聞きに出かけた後、蒼い月のギルドハウスに残されたレック達4人は手持ち無沙汰になっていた。その象徴が、

「うっ、暇だよ」

と、テーブルに突っ伏して足をジタバタさせているリリーだった。

それを見かねたわけでもないだろうが、ミネアはあることをふと思いついた。

「そう言えば、マージンさんはどうしてるのでしょうか？」

「出かける前に、グランスが連絡を取ろうとしておったようじゃがのう。連絡が付かないと言っておったから、ジ・アナザーにログインしておらぬのではないか？」

グランス達が出かける前に、使える連絡手段の確認を試みたが、フレンドメッセージの他、全ネットワーク共通のメールサービスも使えなくなっていた。平たく言えば、同一ギルドメンバー同士のギルドメッセージ以外の連絡手段は全て絶たれていた。つまりは、ジ・アナザーにログインしているプレイヤーであっても、ギルドメンバー以外とは連絡が取れない。ましてや、ジ・アナザーにログインすらしていないプレイヤーとは、である。

「ちょっと寂しいですけど、閉じ込められずに済んだ知り合いがいるってのは、喜ぶべき事でしょうか？」

しみじみとミネアが呟く。

「マージンは良かれ悪かれ、騒がしかったからね」
レックが頷くと、

「ああ、あまり噂話はせんほうが良からうよ。噂をすれば何とやらと言っじゃらう？」

と言いつつ、ディアナもマージンが騒がしかった点については否定しなかった。

「じゃ、噂をガンガンすればマージンも来るって事よね！」

「いや、被害者を増やしてどうするのじゃ……」

確かに仲間が多い方が心強いのは分かるが、とディアナは心の中で付け加える。

「でも、ログインできるんでしょうか？」

ふと、思いついたようにミネアが言った言葉だったが、

「そう言えば……そうじゃな」

その可能性を誰も考えていなかったことに、レック達は気づいた。「確かにログアウトはできん。じゃが、ログインは別かもしれん」

「ってことは、今からログインしてくる被害者が増えるかもしれない、ってこと？」

「ログインが出来たらそうなる可能性は高いのう。もっとも、私たちにそれを防ぐことはできんがの」

外部と連絡が付かない以上、ログアウトできなくなるからログインするな！という警告を発信することは出来ない。この非日常を心はどこかで楽しんでるディアナも、被害者が増えればいいとまでは思っていなかったが、どうしようもなかった。

「まあ、誰かログインして来ちゃったら、リアルでの状況を聞けるのじゃが……」

「こんなことになってる所に、呑気にログインしてくるようじゃ、何にも知らないんじゃないかな？」

というレックの言葉に、皆、ため息をついた。せめて、新たな犠牲者がログインしてこないことを祈るばかりである。

レック達が何となく視線をやった先には、部屋の一画に確保されたログイン用のスペースがあった。

ジ・アナザーに限らず、MMOがVRMMOになったときに問題になったのが、ログインである。

VR 仮想現実 である以上、プレイヤーは原則としてそこにあるもの全てに触れることができる。これはつまり、アイテムやら他のプレイヤーやらがある空間に、他のアイテムやプレイヤーが重複して存在することは出来てはならないということである。

その制限がもっとも問題になったのが、プレイヤーのログインである。何しろ、ポンツとアバターが出現する。そこに何かあったりすると、ログインしたプレイヤーかそこにあったものかのいずれか

が強制的にずらされる。周辺がアイテムやプレイヤーで混み合っていると、その際に玉突き事故が起こる可能性が高い。それを避けるために、室内などでは何も置かないログインスペースを確保することが推奨されていた。

「つて、光ってない？」

レックが言うまでもなく、仲間達は既にそれに気づいていた。

たまたま見ていたそのタイミングで、ログインスペースの床に光る魔方陣が現れたのだ。この魔方陣は誰かがそこにログインしてくる直前に現れるものなので、

「や、みんな、元気しとった？」

と、よく知った顔が呑気に挨拶してきたときには、レック達は既に如何にも「あーあ、やつちゃった」という顔になっていた。

新たにログインしてきたプレイヤーも、すぐにそれに気づいたのか、

「あれ？みんな、どうかしたん？」

と首をかしげた。

背中に背負った巨大なツーハンドソード。青いジャケットにやはり青いジーンズ。そして、焦げ茶色の髪と黒い瞳のアバター。蒼い月の最後の一人、マージンである。蒼い月のメンバーのほとんどが日本人である中、唯一のアメリカ人でもあった。最も、流暢に微妙な関西弁を操るため、そうと認識されることはほとんどない。

「いや、ホントに来ちゃったなっつてね」

驚きだか呆れだかを振り払おうと、頭を振りながらレックが答える。

「ん？なんか、来ちゃまずかったんか？」

マージンは背中の中を剣を下ろして近くの椅子に立てかけると、その椅子にさっさと腰を下ろした。

「まー……」

誰が説明したものかと、素早く視線を交わし合うレック達4人。

「なんやなんや？つてゆーか、アップデートはどないなったん？旦那とクライストがおらんけどどうしたんや？」

事情が飲み込めずに、それでもアップデートについて訊こうとするあたり、アップデートへの関心は高かったらしい。

「そのことについて何だけど……」

結局、説明役になったレックが、重たい口を開き、それでも出来る限り明るい口調で、

「ログアウトできなくなっちゃった」

リリーあたりなら、最後に「てへっ」と言っ舌を出してみせるのもありかもしれないと思いつつ、レックにはさすがにそこまでは出来なかった。

「……ログアウトできなくなった？」

何のことか理解できてない様子のマージンに、

「端末でコマンド確認したらいいよ」

と、促す。

まだ混乱気味ながらも、マージンは言われたとおりに端末を取り出し、コマンドを表示させ、

「なんじゃこりゃあああああああ……！」

と叫びながら、

「マジか！マジなんか……！」

と、ぐりぐりと端末を操作する。

「無い。マジで無い。ログアウトコマンドがどこにもあらへん……！」

凹むより先に、やかましく騒ぎ出したマージンに、いつも通りだな、と仲間達は生暖かい視線を送った。まあ、今更くらい空気を再現されてもイヤではあったが。

「どーなってるのや、これ……！」

「ずずずいつと詰め寄ってきたマージンを、」

「何でこっちに詰め寄るのじゃ」

と、ディアナが押し返す。

「どうせ近づくなら女の子の方がええやんか」

そう返したマージンの様子に、「ショックを受けても全然変わらなかったな」と仲間達の視線はよりいっそう生暖かくなった。

それに気づいたのかどうか知らないが、マージンは元通り椅子に座ると、

「で、どうしてこうなったんか、分かる限りでえーから、説明してもらえんか？」

と改めて説明を求めた。

「ははあ〜ん。運営の仕様ゆ〜んは見当ついとるけど、なんでこんなことをしかしたかゆ〜んは、まだ分かつたらんのやな」

レックの説明を聞いて、マージンはうんうん頷いた。

「じゃ、その何たらゆ〜ん魔王をしばき倒したらログアウトできるんちやうんか？」

「それが出来るようなら誰も苦労せんじやろっ」

「それもそやなあ。強さどころか、どこにいるかも分からんしな」
そこで少し黙ったかと思うと、マージンはすぐに口を開いた。

「で、これからどうするって旦那はゆ〜てはった？」

「とりあえず、他のプレイヤーの話聞いてから、決めるって言うてたっけ？」

「まあ、そうするしかないやろなあ。っていうか、旦那とクライストの二人だけでそれやっとするんか？なして全員でやらのや？」

マージンの疑問に、そう言えば説明し忘れていたなとレックが口を開く前に、

「ハラスメント防止やプレイヤーキル防止のシステム保護が消えておるのじゃ。それで女性は無闇に彷徨かぬ方がよいとフランスが言っておった」

と、ディアナが説明した。

「なるほどなあ。一理あるわな。ま、そういうことなら、わいも旦那達の帰りを待たせて貰うわ」

そう言って、少し動きを止めたかと思うと、

「うっは！離席コマンドも無くなつとるやんか！」

当たり前と言えば当たり前前に、今更気づいて騒ぎ出す。

「離席と言えば、アバターを残して事実上リアルに戻るということじゃからな」

「あー、それもそうやな。全く、面倒やなあ」

そう頭を振ったマージンに、ディアナは訊きたいことがあったことを思い出した。

「話は変わるのじゃがな。マージンよ」

その口調に、真剣な臭いでもかき取ったのか、

「なんや？」

と聞き返したマージンの背筋はピンと伸びていた。

「2つほど訊きたいことがあるのじゃが、よいか？」

「答えられることなら構わんで？」

レックが説明をしている間は、窓から外を覗いていたリリーとミネアも、ディアナが訊こうとしていることが大事な話だと思ったのか、いつの間にか戻ってきて聞き耳を立てていた。

「そうか。1つめじゃがな。ぬしがここにログインする前、掲示板などで変わった話など出ておらんかったか？」

「あー、なんかあったわ」

マージンの返事に、色めき立つレック達。

「アップデート終了予定時刻間に、仰山プレイヤーが接続を切られたとかゆうてな。掲示板が片っ端からお祭り騒ぎになつとったわ
そうマージンが言ったところで、

「その話、俺たちも聞かせて貰いたいんだが」

いつの間にか帰ってきていたランスがそう言った。

「というか、マージンも来ちまったのかよ」

と、クライストも帰ってきており、ランスの後ろで頭をかいていた。

「よ、旦那。クライスト。なーんか、大変なことになつとるやんか」
巻き込まれた自覚がいまいち無いのか、軽い挨拶を送るマージン。

「おかえりー」

「ああ、今帰った」

挨拶をしながら、疲れた様子で部屋に入ってくると、グランスマもクライストも空いていた椅子に適当に腰を下ろした。

「しかし、お前まで来てしまつとはな」

グランスマは椅子に座つて一息つく間もなく、マージンに視線をやつた。

「しゃーないやん。まさか、こないな事になつとるなんて、思いもせなんだんやし」

両手を軽く挙げて、「まいった」のポーズを取るマージン。

「そうだな」

グランスマは軽く頷くと、

「俺たちもいくつか新しい話を聞いてきたんだが、こつちでは何を話していたんだ？」

と、ディアナに訊いた。

「状況をマージンに説明しておつたの。で、それが終わつてマージンに1つ2つ質問をしようとしておつたところじゃ」

「その話の途中に俺たちが帰ってきたわけか」

「うむ。とりあえず、ログイン前のリアルの様子を聞き始めたところじゃつたのう」

ディアナの言葉を聞いて、グランスマはマージンに視線を戻した。

「では、マージン。先にそちらの話をしてくれ。その後はこちらの話をしたほうが、分かり易い気がするからな」

「そやな。話の腰を折られたまんまっちゅーのも、なんや、落ち着かんしな」

とマージンは頷き、説明を始めた。

「ほんまなら、わいもな、アップデート終了前にログインするはずやつてんけどな。ちよつと仮眠とつてから思たら寝過ぎてしもつてなあ。

で、起きて時間見て慌ててログインしようとしたんやけど、その

前に掲示板も覗いところか思うてな。覗いたらびびったわ。

どこもかしこも大荒れに荒れとるやんか。

で、目を通して見たらビックリや。アップデート終了直前に接続切られたゆうプレイヤーが仰山おるんやわ」

「ちよつと待て。さつきも言っていたが、接続を切られただと？」

口を挟んできたグランスに、マージンは「そうや」と頷いた。

「嘘はゆうとらんで？」

と言うマージンに、少し何か考える風を見せたグランスだったが、すぐに「続けてくれ」と再開を促した。

「そんなやから、イデア社に苦情殺到……したとは思っけど、どうなったかは知らん。」

とにかく、てつきりジ・アナザーが落ちたんかと思うたんやけどな。掲示板には自分だけ落とされて、ダチはまだログインしてるってな書き込みも結構あつたんや。

ま、それでわいも試しにログインしてみようか思ったわけやな。

ログインできへんいう書き込みも仰山あつたけどな。物は試しっちゅーやつや。

ログインしたら、出られへんようになつたけどな」

説明を終えて、「わっはっは」とマージンはやけくそ気味に笑った（ように見えた）。

「他に変わったことはなかったのう？」

マージンの話を頭の中で整理していたのか、話が終わってからワテンポ遅れて、ディアナが質問を飛ばす。

「いんや。特に無かつた気がするで」

すると、次はグランスが、

「フォーマル・アバターも追い出されたのか？」

「フォーマルかどうかは分からんけどな。ざつと見た感じ、仕事中に追い出された連中も仰山おつたようやな」

「ふむ……」

と、考え込んだグランスに、

「何か思い当たることでもあるのかの？」

ディアナが訊いた。

「そうだな。今の話と関係がありそうだし、これだけは先に教えておこうか」

クライストと頷きあってから、グランズはそう言った。

「魔王が出てくる前に、何というか、世界が歪んだというか軋んだというか、あったらどう？」

そこで何人かが頷くのを待ってから、

「それと同時に、相当数のプレイヤーが消えたらしい。半分くらいは消えたんじゃないかと聞いたな」

「それは俺も聞いた。保証するぜ」

「それがつまり、接続を切られたプレイヤーではないかという訳じゃない？」

「ああ。魔王とやらに攫われたことにでもなっているのかと思っていたが、マージンの話を聞く限り、強制切断されただけのようだな」
「となると、ここに閉じ込められるか追い出されるか……その判断基準が気になってくるのう」

「そうだな。ところで、ディアナの質問とやらはもう終わりか？」

逸れかけていた話をグランズに引き戻され、

「おお、そうじゃったな」

ディアナは手をぼんと打つと、マージンの方に向き直り、

「おぬし、イデア社から受けた仕事をしておるそうじゃな？」

それで、グランズを除く全員がハツとなる。

イデア社のアップデートが今回の元凶であることは、ここにいる誰もが疑っていない。そこに、イデア社の仕事をしていたという人間がいるわけだから、事情を知っているのではないかと疑うのは当然のことだった。

無論、マージンもそれには気づいたらしい。

「あー、残念やけどそっちの役には立てそうにもないわ」

周りの視線が陰呑な物になるのにも構わず先にそう断ると、誰か

が口を挟もうとする前に言葉を続ける。

「確かにアイデア社からプログラムを作る仕事、受けとるけどな。なんちゅーか、こう、すっごい断片的でな。正直、何作らされとるのか、さっぱり分からんのか」

「プログラムって中身そのものでしょ？じゃ、分かるんじゃないの？」

リリーの質問に苦笑しながら、マージンは説明を付け加える。

「プログラムゆーてもな、わいが作ってたんは、そのほんの一部に過ぎん。言っなれば、でっかい機械の歯車を1つだけ作ってたみたいなものや。」

組み立てれば何するもんなんか分かる。そやけど、一部品だけから全体像を掴むんは、無理なんや。

ま、あそこの会社、ごっつい秘密主義やさかいな。仕事ゆうてもいつつもそんなんやで」

「はあ……」

残念ながら、リリーはすぐには理解しきれなかったらしい。

「要するに、下請けにも今回のアップデート内容が分かるような情報は教えていないということだな」

グラスが要約して、やっと全員が頷いた。雰囲気柔らかくなつたのを確認して、

「では、今度は俺たちの番だな」と口を開く。

「まず単なる確認だが、やはり魔王が現れてからは、ログアウトで来たプレイヤーはいないらしいな」

これは既に分かっていたことなので、特に誰も反応しない。

「それから、マージンの話の途中にも言ったが、魔王が現れる前の世界が一瞬軋んだ……やはりこの表現が一番しっくり来るな。まあ、世界が軋んだ時に、相当数のプレイヤーが消えている。サーカスに限らず、あちこちの町でそうなってるらしいな。ただ、これはマージンの話から考えて、強制的にログアウトさせられたと思っいいい

だろう。

で、この強制ログアウトに基準があるんじゃないかとディアナも言っていたが、1つ、それに関係していそうな話がある」

全員の目に興味が浮かんだが、グランスの話を聞く方を優先して、誰も口は開かなかった。

「残ったプレイヤーの日本人の割合がかなり高い。少なくとも半分以上、俺が見てきたプレイヤーに限れば、9割以上が日本人だった」

「それは……興味深いもの」

と好奇心を示すディアナ。

「じゃ、何？日本人だけ選んで閉じ込められたって事？」

リリーは憤懣やるかたないといった感じだ。

「落ち着け、リリー。日本人以外のプレイヤーも何人か確認できている。だから、『日本人を閉じ込めた』訳じゃない。俺は、単に日本人がクリアしやすい条件で閉じ込めるプレイヤーを決めたんじゃないかと思ってる」

「一応、俺もグラン스에賛成だぜ」

と、クライストが軽く手を挙げた。

「ってゆうか、わいも日本人ちゃうしな」

ぼそつとマージンが突っ込み、「ああ、そういえば」とリリーも納得した。

「まあ、基準がそんなんじゃないかというのは根拠は無いに等しい。今のところ有力な仮説というだけだ。気にしすぎないでくれ」

「うん、分かったわ」

グランスの言葉に、リリーもとりあえず大人しくなった。

「それから、フォレスト・ツリーが動き始めている」

「フォレスト・ツリーが？」

レックの言葉にグランスは頷いた。

フォレスト・ツリーとはサーカスを含むいくつかの町を興し、管理している中規模ギルドである。町の管理はまとまった人数が必要

になるため、ジ・アナザーの町は原則、1つあるいは複数のギルドが集まって管理をしていた。

「確かに、あそこは日本人のメンバーが多かったが、もう動き出しておるのか？」

「あれだけ人数が多ければ、動き出すのがいてもおかしくないということだろう。ちょっと立ち寄って話を聞いてきたが、メンバーが落ち着けば今夜にでも今後の方針について話し合いをするらしい。

今後、行動を共にするつもりで、それに参加しないかと、誘われた」「それは、魅力的な話じゃな」

「ああ。正直、俺たちだけでは出来ないことも多いからな。彼らと行動を共に出来るなら、助かることも多いはずだ」

「じゃ、フォレスト・ツリーと一緒に動くの？」

「いや、それは今からみんなで話し合おうと思っっている。実際、誘われたときも返事は保留させて貰った。後でもう一度顔を出す約束はしてきたがな」

グランスはリリーにそう答え、

「とりあえず、俺とクライストが聞いてきた話はここまでだ。特に質問がないなら、今後の方針について話し合いたいが、どうだ？」

「んー、特にないな」

「わたしもありません」

「閉じ込められた基準はちょっと気になるがの。まだ情報が少なすぎるからの中」

質問がないことを確認し、グランスは再び口を開いた。

「じゃあ、これからどうするべきかな。それに関わる話を先に少ししておく。」

まず食料だが、サーカスには大した備蓄がない。強制ログアウトさせられたプレイヤーが相当数いたとはいえ、この町の場合が場所だからな。フォレスト・ツリーが把握してる限りでは、持って二週間というところだそう。これは俺の考えだが、今後、この町まで

食料が届く保証はどこにもない。つまり、ジ・アナザーから出られないことを想定して動くならば、食料がちゃんと確保できる町まで移動しなくてはならんだろう」

そこまでグランズが説明したところで、レックが手を挙げた。

「ちよつと質問いいかな？」

「何だ？」

「ここつて所詮仮想空間だよね？食べなくても別に死なないと思うけど？」

という至極真つ当な質問に、

「ああ。死ぬぞ？」

と、グランズはあっさり返した。「へ？」と呆気にとられる何人かの顔を見ながら、

「同じようなことを言って、実際に試したヤツがいたんだがな。しつかり餓死していたな。意識朦朧つてのは無かったが、空腹のあまり力が出ないってのまでしつかり再現されていたな」

「そう言えば、そもそも今死んだらどうなるのじやろうな？いつもなら、神殿に幽霊で飛んで蘇生して貰うか、仲間が死体を運んで神殿で蘇生して貰うかじやが」

ディアナの台詞に、全員がかなり真剣に考え込んだ。

確かに、普段なら死んでも蘇生できる。しかし、ここまで異常な状況となると……死んでも蘇生できない可能性を無視することは出来なかった。

「あ、でも、死んだらログアウトできるかも？」

「じゃ、死んでみるかの？」

思いつきを口に出したリリーは、あっさりディアナに撃沈させられた。

とてもじゃないが、死というのが怖くて試せない。死んでも蘇生できる、あるいはログアウトできるならいい。しかし、今はどこにもそんな保証はなかった。その事実に気がつき、この間までのアバターの死がどれだけ気楽な物だったか、レック達は今更ながら思い

知らされていた。

「兎に角、死ぬのは絶対避けるくらいのもりの方が良さそうだな」
グランスのその言葉に、全員が大きく頷いた。

「それから次の話だが、ここから移動するとなると、馬は使えない
と思っておいた方がいい」

「なんで？」

訊いてきたレックを見ながら、

「馬の絶対数が少なすぎるからだ。かなりのプレイヤーが落とされ
たと言っても、この町だけでも2〜300人程度は残ってるみたい
だしな。それに対して馬は30頭ほどしかない。下手に手を出す
と、他のプレイヤーと揉めることになるだろうな」

と、グランスは説明した。

「となると、クラックスまで徒歩になるのかの。徒歩だと丸二日ほ
どかかると思うのじゃが、どうじゃ？」

「大体そんなもんじゃねーの？」

「人数次第ではもっとかかりそうじゃのう……」

うんざりしたディアナを見ながら、グランスは話を戻した。

「あと、魔王の『我が僕共に刈り取られたささやかなる前菜』とい
う言葉も気になる。大体何を意味するか見当はつくんだが……」

とグランスが顔を顰めると、ディアナも、

「如何にも襲撃がありそうな台詞じゃからな」

と渋い顔をした。それを聞いて、残るメンバーも全員顔を顰める

羽目になった。

「まあ、しておくべき話はそのくらいだ。次は俺たちがどうするべ
きかという話だ」

皆の顔が真剣になったのを見ながら、

「平たく言えば、フォレスト・ツリーと一緒に行動するか、俺たち
だけで行動するか、だな」

グランスは考えられる2つの選択肢を示し、一度口を閉ざした。

仲間達が考える時間が必要だ。

「フォレスト・ツリーと一緒に行動したらどうなるのかな？」

「安全とか？」

「食糧の確保も楽になるんじゃないか？」

「でも、人が多いのは……苦手です」

レックの言葉を皮切りに、仲間達はぼつぼつと思ったことを口に出し始めた。

「自由に動けなくなる気はするのう」

「どうして？」

「集団に属して何らかの役割を負えば、そうなるじゃろう？」

「でも、どーせ、俺たちだけじゃ手が回んねえ事も多いしな」

そんな感じで、どちらかというフォレスト・ツリーと一緒に行動する方向で最初から話し合いは進んだ。デメリットもいくつか挙げられはしたものの、それは予め納得し、覚悟しておくためのものだった。

「では、俺たちはフォレスト・ツリーと行動を共にするということ
で、返事をしてくる」

フォレスト・ツリーへの合流が決まった後、グランズは仲間達に
そう告げると、クライストを連れて出かけていった。

フォレスト・ツリー

ジ・アナザーに閉じ込められてからの初めての夜。

レック達はギルド「フォレスト・ツリー」のサーカス支部　つ

まりは、サーカスの町役場にやってきていた。勿論、今後のことを話し合うためである。

まだほとんどの人間がショックから立ち直ってはおらず、それはフォレスト・ツリーでも同様ではあった。しかし、サーカスの管理を任されている幹部達はそうも行かなかった。ただ、皮肉なことにやるべき事があることで、他のプレイヤー達よりも早く立ち直ろうとしていた。

ちなみに、話し合い自体は紛糾するかと思われたものの、割とすんなりと進んだ。

外部から救出が来ると主張する者達も、このまま閉じ込められるのだと主張する者達も、何かをしていた方が気が紛れるということには異論がなかった。プレイヤーの人数が減ってしまったことも事実として受け止められた。万が一への備えをしても、助けが来たときに無駄になるだけで、損することはないのである。

魔王が攻めてくる可能性については多少異論が出たものの、あれを見た後では「考慮しなくていい」とは誰も言い出せず、対策を考えることになった。

ただ、状況を整理し、今後どうするかということについては、フォレスト・ツリーの本部と連絡を取りながらになってしまったため、なかなか話が進行せず、話し合いが終わったのは夜も更けてからのことだった。

そして決まったのは、

1. 治安維持を最優先とする

- 2 ・様子を見ながら一週間後を目処にサーカスを放棄する
- 3 ・移動先はフォレスト・ツリーの本部があるナスカスとする
- 4 ・その時のための準備を着々と行う
- 5 ・外部からの襲撃に備え、警戒を怠らない

という5つの項目であった。

治安維持に関しては、グランズからシステム保護が機能していない事実を教えられたフォレスト・ツリーが（本部を含めて）だいぶ慌てた後に、最優先事項として合意が為された。具体的には女性だけで行動しないと、二人一組で見回りを行うとかの対策付きである。

その他の事も詳細が詰められたが、グランズとディアナを除いた蒼い月のメンバーはほとんど聞き役に徹していた。

「いや、思った以上に大事おおいです」

話し合いが終わった後、蒼い月のメンバーの所に、フォレスト・ツリーのステイヴンと名乗ったメンバーがやってきていた。名前の通り、金髪の白人をモデルにしたアバターだ。瞳は黒かったが。「サーカスにいる全プレイヤーを別の町に移動……というより避難っばいですけど、させるわけですからね。正直、人手はいくらあっても足りません」

愚痴でも言いに来たのだろうかとレック達が思っていると、

「そんなんですからね。蒼い月の力を借りることが出来て、大助かりですよ。ほんと、ありがとうございます」

と、頭を下げられた。さすがにプレイヤータウンをまとめているギルドのメンバーだけあって、人当たりがいい性格らしい。

「いや、こちらとしてもフォレスト・ツリーと行動を共に出来るなら、助かることの方が多い。礼を言われるほどのことでもない」

代表して答えるグランズ。それに、ステイヴンは笑顔で、「それでも助かるのは事実です。」

にしても、うちですらまだ混乱が続いているのに、全メンバーが既に落ち着きを取り戻してるといふのはすごいですね。うらやましい限りです」

そこで一度言葉を切り、話題を変えてきた。

「にしても、確かに強制的に落とされたのは、日本人以外が多いようですね」

グランズからの報告の後、フォレスト・ツリーのメンバーがサーカスに残っているプレイヤーの国籍を確認して回っていた。同時にフォレスト・ツリーが管理しているサーカス以外の町でも確認が行われていた。

ステイヴンの今の言葉は、その結果を受けてのものである。

「何故、日本人ばかりが閉じ込められたのか……そのことについて、何かお心当たりはありますか？」

「いや。こちらでも少し話し合ってみたが、全く見当もつかないな。正直、フォレスト・ツリーの情報に期待していたんだが」

「そうですね。お役に立てなくて残念です。まあ、日本人ばかり閉じ込められた理由は兎に角、そのおかげで幸か不幸か、我々のギルドは機能不全に陥らずに済んだわけですが」

と、ステイヴンはグランズに苦笑して見せた。しかし、

「日本人ギルド以外は、機能不全に陥っているのだろうな」

グランズは苦しい表情になった。ステイヴンも苦笑いを止め、

「そうですね。その影響がどう出てくるか。プレイヤータウンの大半は、日本人ギルド以外が管理していますからね」

プレイヤータウンとは、ジ・アナザーでは一般的な町である。というか、プレイヤータウンではない町はほとんど無い。

プレイヤータウンは、プレイヤーが土地を開墾し、建物を建て、町としてのルールの整備とサービスの提供までも行っている。銀行などのサービスや町の管理にはアイデア社から提供されたアイテムが利用されているが、事実上、ほぼ全ての活動がプレイヤーの手に委

ねられている。

しかしながら、新しい町を作り、管理・運営していくためには巨額の資金と多くの人手が必要となる。また、責任と良識が求められるため、プレイヤータウンの管理主体は、それなりの規模を誇り、かつ、イデア社に公認されたギルドに限られていた。

ステイヴン達フォレスト・ツリーのメンバーの懸念は、公認ギルドの機能不全、あるいは消滅によって、機能しなくなるプレイヤータウンが続出するのではないか、ということだった。

「最悪、我々フォレスト・ツリーで他の町の管理も担当できればいいのですが、我々の規模ではそれほど多くの町を支えていくことは不可能ですし……」

そこで、ステイヴンは話し合いも終わったのに、深刻な話で客を足止めしていたことに気づいたらしい。

「ああ、すいません。つい、余計な時間を頂いてしまいました。では、今夜はゆっくりお休みください。明日からは忙しくなりますからね」

そう挨拶すると、ステイブンは部屋から出て行った。

それを見送った後、レック達もギルドハウスに戻ることにした。ベッドもソファも無く、まともな寝具は野宿用の毛布くらいしかない状況で、ちゃんと寝れるかどうかは別として。

明かりが消え、起きていたプレイヤー達も寝静まった町役場。

ジ・アナザーで寝るということを想定していなかったのは、フォレスト・ツリーも同じであった。眠くなったらログアウトして、リアルで睡眠を取る。それが普通だったからだ。ただ、クッションやらソファやらは幾つもあったので、蒼い月のメンバーのように固い床の上で雑魚寝をするだけは避けられた。

そんな中、寢床の確保が遅れてしまったステイヴンは、ソファ

は諦め、何とか確保した2つのクッションの上に寝そべっていた。

(今日は本当に大変だった……)

明日からのことを思うと、不安で押しつぶされそうな気もする。しかし、幸いなことに、見かけだけでも立ち直っている仲間も何人かいて、彼らとこの後のことを話すことで、だいぶ気は紛れた。

(そう言えば、蒼い月の人達、ずいぶん落ち着いていたな)

ふと、さっきまで話をしていた彼らのことを思い出した。ギルド代表のグランズを始め、全員が表情に不安を浮かべることもなく、フォレスト・ツリーが中心となつての話し合いに参加していた。

(うらやましいな……)

蒼い月も、それなりに混乱しかけたことまでは、思いは至らない。眠気に襲われつつあるためか、しばし思考が停止する。

ステイーヴンが寢床に選んだ部屋には、他にも何人かのメンバーが雑魚寝をしていた。窓から差し込んだ月明かりが彼らの影を暗い室内に浮かび上がらせている。

その様子を見ながら、いつしか、ステイーヴンは今日起きた出来事を追想し始めていた。

その時、ステイーヴンはいつも通りに、役場で仲間達と談笑していた。

正直、ジ・アナザーに来てまで事務仕事……というのはあんまり喜ばしいことではない。ましてや、主に受付係として拘束されている時間は長くても、やるべき事がほとんど無いというのは、かなりいただけない。

幸い、フォレスト・ツリーは幾つもの町を管理しているだけあつて、大抵のギルドメンバーが抱えるその不満にはそれなりに対処していた。

つまりは、やたらサイクルが短いシフト制である。フォレスト・ツリーには、大規模ギルドほどではなくとも、かなりの数のメンバ

ーが所属していたため、二日に一度、一時間ほど役場に拘束されるだけで済んでいる。実際には、拘束されている（誰も仕事と言わない）メンバーの話し相手になったりするので、それ以上の時間を役場で過ごすことが多いのだが。

ステイヴンは少し前に自分の担当時間が終了し、次の担当や他の仲間達も交えて、アップデートについて楽しく話していたのだ。

そして、世界が軋んだ。

夕方でもないのに急速に辺りが暗くなり、フォレスト・ツリーのメンバー達も「アップデートのイベントか！」と急いで外に飛び出した。見ると、周囲の建物からも次々とプレイヤーが飛び出してくる。

そして、通りがいつもと違う喧噪に包まれる中、

「空だ！」

誰かの声で空を見上げると、太陽を隠していた雲だったはずの何かは巨大な顔になっていた。

皆が固唾を呑んで見上げる中、それは口を開いた。

『我が魂の牢獄に囚われし儂き者どもよ………』

そのあまりにも低く禍々しい声に皆の背筋に寒気が走った。

『我は魔王。魔王デイヴアズクード』

空をほぼ全て覆いつくすその影は自らを魔王と名乗り、

『汝らは全て我に捧げられし生け贄なれば………』

プレイヤーを生贄と呼んだ。

『いずれ我が前に来ることになるう』

誰も言葉を発さない。

『我が僕共に刈り取られたささやかなる前菜としてか………』

皆が魔王に吞まれ、威圧されていた。

『あるいは自ら我が前に辿り着いた主菜としてか………』

魔王の言葉は続く。

『……1つ、良いことを教えてやるう』

それはイベントのヒントなのか、

『我が牢獄より出ることを望むならば』

誰もが聞き逃すまいと耳を澄まし、

『我を見事討ち果たしてみせるが良い』

しかし魔王はセオリー通りの台詞を残し

『さすれば、牢獄の扉は開け放たれよう』

それを最後に影も声も消え去った。

傍目に見ていれば、ありきたりの演出とも言えたのかも知れない。だが、ジ・アナザー始まって以来の大きなイベントに、魔王の影が消えた後もしばらくの間、その場に居合わせたプレイヤー達は興奮が冷めない……そのはずだった。

スティーヴンが最初に気づいた異変の兆候は、

「あいつら、どこいった？」

という、仲間を、友達を捜す声。

「そういや、魔王が出る前に何か姿が消えてたな」

「あつちのテーブルにいた連中、まとめて消えてたぜ」

消えたプレイヤーが沢山いるらしい。ただ、その時点ではアップデートに伴う不具合でも起きたのだらうと、それ自体は大して問題視されなかった。

しかし、事態は速やかに悪化した。

致命的なことに気づいたのは、イベント見物に来ていたプレイヤー。見物が終わり、とりあえずログアウトしようとして、

「あれ？ログアウトできない」

そんなバカなとその友達と思いきプレイヤー達が何人か、端末を
取り出し、

「嘘!？」

「マジか!？」

その騒ぎに気づいたプレイヤー達も次々と自分の端末を確認し、一気に騒ぎは拡大した。

ステイヴン達フォレスト・ツリーのメンバーも例外ではなかった。

端末からログアウトコマンドが消えていることを確認した彼らは、騒ぎに巻き込まれる前に、急いで役場の建物の中に戻った。そして、焦る気持ちを抑えつけながら、冷静に何が起きているのか把握しようとして試みた。

しかし、実際にはそんな暇はなかった。

プレイヤータウンを管理する町役場といっても、所詮プレイヤーの手によるものであり、公認ギルドといってもイデア社との関係は管理に必要なアイテムとそれを使用する権限を付与されているだけである。しかし、混乱を起こしたプレイヤー達が、「公認ギルド」なんだし、とりあえず何か事情を知っているに違いないと殺到してきた。

普段はガラガラ、誰もいない役場の受付は事情説明を求めるプレイヤー達でごった返し、怒号と罵声が溢れた。役場にいたフォレスト・ツリーのメンバー総出でプレイヤー達を宥め、自分たちも運営側ではなくユーザ側でしかないことを必死に説明した。暴動に発展しなかったのが不思議なくらいの混乱だった。まあ、さすがに石ころが幾つか飛んできたが。

ただ、混乱が収束したのは、ステイヴン達の努力のおかげではなかった。端末からログアウト以外のコマンドも幾つか消えていること、特に外部との連絡手段が失われていることが確認され、イデア社により計画的に引き起こされた事態であると認識された、つまりどうにもならないというあきらめが広がったためである。

そこからは、混乱の質が変わっていった。興奮から不安や絶望に。イベントを心待ちにしていたプレイヤー達は、建物の床に、通りの地面に、その辺中に力なくへたり込み、座り込んでいた。

一部のプレイヤー達は仲間達と、どうなってるんだ、助けは来るのか、と不安におののく顔ではそばそと話し合っていた。無論、誰も答えを持っていないので、結論が出るはずもなく、それはただ、気を紛らわせるための会話でしかなかった。

ステイヴン達も役場の応接室でソファに腰掛け、ああでもないこうでもない話し合っていた。ギルドメッセージは機能していたので、本部とも連絡を取ってみたが、あっちでも同じような状況に陥っているらしかった。とりあえず夜まで待って、メンバーが落ち着きを取り戻したら、ギルドメッセージを使って話し合いをするということになった。

そんな折、来客を告げるベルが鳴った。

一瞬、また混乱したプレイヤーがやってきたのかと身構えたステイヴン達だったが、来客は意外なことに既に落ち着きを取り戻しているらしい。ベルが礼儀正しく鳴るのみで、誰かが乗り込んでくる気配もない。

「ちょっと見てくる」

一人が立ち上がり、受付へと歩いて行った。そして間もなく何か話し合う声が聞こえてきた。

興味を引かれた仲間達が覗きに行くと、最近この町に移ってきた確か蒼い月というギルドのメンバーの男が、受付に来ていた。

ただ、ちょうど話が終わったところだったらしい。仲間を待たせているからとすぐに帰って行ってしまった。

しかし、

「夜の話し合いに来ないか、と声をかけてみたけど、前向きな反応だったな」

と、応対した仲間が言っていた通りに、彼らはフォレスト・ツリーの夜の話し合いに参加し、そしてしばらくは一緒に行動してくれることになった。

それが今日の出来事。

(明日からどうなるのだろうか)

そんな不安と共に、ステーキヴンの意識は闇に飲まれていった。

避難当日の朝

世界が軋み、プレイヤーがジ・アナザーに閉じ込められてから間もなく一週間が過ぎようとしていた。

サーカスの町においては、大きな町への避難準備が着々と進められ、閉じ込められ呆然としていたプレイヤー達も、その仕事に巻き込まれていくうちに、何とか元気を取り戻しつつあった。ただ、町を管理しているフォレスト・ツリーの指示とはいえ、強制切断されたプレイヤーの家や商店の荷物を漁るのは、多くのプレイヤーにとって少なからぬ抵抗があったようだったが。

そして、この一週間の間に、閉じ込められたプレイヤー達は様々な事実を知ることとなっていた。

身近とは言い難いところでは、無数のギルドの崩壊。それに伴う混乱である。一週間前の話し合いの後、ステイヴンがレック達に話した懸念が現実となりつつあった。幸い、フォレスト・ツリーが管理していた町ではそのような事態に陥ることは無かったが、メンバーが各地にいるような中、大規模ギルドのギルドメッセージを通じて、各地の混乱の様子は伝わってきていた。

特に、公認管理ギルドの機能不全によって、各町の銀行サービスが停止していることと、治安が悪化し始めていることは無視できなかった。サーカスのような小さな町を放棄するのは、それによってプレイヤータウンの管理・運営資格とそのノウハウを持つフォレスト・ツリーの余力を確保し、より大きな町の管理のサポートに振り分けるためでもあった。

また、ジ・アナザーに閉じ込められたプレイヤーの大半 目下 8割程度と見られている が日本人プレイヤーであることも確定

した事実となりつつあった。その理由については未だ分からないままであったものの、残された日本人以外のプレイヤーは少数派となり、圧倒的多数派である日本人プレイヤーと円滑なコミュニケーションを行うために、急遽日本語を学ぶ必要に駆られていた。英語が事実上の公用語として使われていたとはいえ、日本人コミュニケーションはそれなりの規模を持っていたため、英語を話せなくても困らない。つまり、英語を話せない日本人プレイヤーが大多数を占めていたためである。

そのため、クライストやマージン、ディアナのように英語と日本語の両方が扱えるプレイヤーが臨時教師となり、残された外人プレイヤーに最低限の日本語を教える教室が、フォレスト・ツリーの主催で連日開かれていた。

そして身近なところでは……

「はあ……まさか、これを使うことになるなんて思ってもなかったなあ……」

と、朝っぱらから、レックは今出てきたばかりの小さな部屋中央に白い陶器が設置されているいわゆるトイレ　を振り返って、しみじみとため息をついた。

「全くだ」

順番を待っていたクライストが、しみじみと同意しながらトイレに入っていた。

ちなみに女性陣は、こんなことならトイレが2つあるところをギルドハウスとして借りれば良かった、と時々ぼやいているらしい。

プレイヤー達が知った身近な事実の1つめ。それは、普通に排泄の必要があるということだ。リアルでは食べたものは当然排泄されるべきであるが、ゲームの中では必要ないはずの行為であった。

ちなみに、最初に便意を感じたというマージンは、何も疑うこともなくトイレにすたすたと入っていき、スッキリした顔で出てきた。

その様子があまりに自然だったので、トイレが必要になったという驚愕すべき事実に着い月のメンバーが気づいたのは、世界が軋んだ翌日の、それも夕方になってからである。

「今日もパンか」

習慣として手を洗ったレックは、鼻をひくつかせた。香ばしいパンの焼ける匂いが廊下にまで漂ってきている。

もっとも、食事の前に寝床を片付けなくてはならない。

睡眠が必要なこともプレイヤー達を些か驚かせた。正確には、アナザーの中で寝ることで、眠気が取れたことに対する驚きだったのかも知れない。加えて、ジ・アナザーでの睡眠はリアルで8時間ではなく、ジ・アナザーで8時間寝れば足りるということもプレイヤーを驚かせた。

リアルの脳も休めていたとしてもジ・アナザーでは半分の時間しか休めていないはずなのに、ディアナは首をかしげていたが、理屈など分かるはずもないので蒼い月の他のメンバーはスルーすることに決めた。寝たら眠気と疲れが取れる。それでいい。

寝床といっても、未だに野宿用の毛布を広げただけの物しかなかったので、片付けるのはすぐに終わった。ついでに、他のメンバーが寝ていた毛布も片付けてから、レックは食堂代わりの部屋へと向かった。

「おはよう」

「おはよ〜」

「おはようございます」

食堂に入ると、既に来ていたメンバーと挨拶を交わす。

元々ジ・アナザーでの食事はお腹が空いたときに食べるものであり、ログアウトしているときには空腹が進行することもなかった。

なので、閉じ込められる前までは仲間同士といえ集まって食事をすることはなかったのだが、僅か数日で、メンバー全員で集まって食事をする習慣が付いていた。

「今日はいつ頃出る予定？」

「馬車に積み込んだ荷物の確認した後、そのまま出発だな」

レックの質問にコーヒーをすすりながらグランズが答えた。

「そっか。とうとうここ、離れるのね」

リリーのパンを嚙りながらの台詞に、みんな、少しばかり感慨を隠せない。

「拠点を移すのは今までもありましたけど、この感じは変わりませんよね。はい、レックさんもどうぞ」

「あ、ありがとう」

空いていた席に座ったレックは、ミネアからパンと一緒に受け取ったコーヒーを一口飲んで、頭をしゃっきりさせる。

「とは言え、馬車の護衛をしながらってのは初めてだからな。気は抜くなよ」

「そっちなー。守りながら戦うってのは、ちと緊張するな」

テーブルの上に突っ伏していたマージンがぼやく。ちなみに、デアナは朝に弱かったらしく、もそもそパンを嚙っているだけで、目はまだ覚めきっていないようだった。

「にしても、いつまで経っても助けが来ないね」

「そっちな」

「そっちな」

「そっちな」

リリーが呟き、仲間達が相づちを打つのも日課となりつつあった。もつとも、この日課はどういう意味であれ長続きしないだろうと、デアナは言っていた。

既に諦めムードも漂いつつあるが、閉じ込められた直後に期待さ

れていたリアルでの第三者による救出は、ジ・アナザーで一週間、すなわちリアルで三日以上が過ぎた今でも、その気配すらなかった。サーカスに滞在しているプレイヤー達はもちろんのこと、他の町でも救出されて姿が消えたプレイヤーは一人も確認できていない。だからこそ、みんな、より真面目に、ジ・アナザーで生活していくことに向き合おうとしていたのかも知れない。

ただ、多くのプレイヤーが、考えておかねばならないはずの、ある事実を目を瞑ってはいた。

「ん〜」

テーブルに突っ伏したままのマージンがなにやら呻き始めた。

「まあた、何呻いてんだ？」

食堂に入ってきたクライストが、ミネアからパンとコーヒーを受け取って、空いていた最後の席に座る。

「いや〜……そろそろ真面目に向き合っておいたほうがええ事実があるんよね」

もっそりと身体を起こし、そんなことを言い出すマージン。

「向き合っておいた方がいい事実？」

「そや。多分、気づいてる人も多い思うけど、今更言い出せないってヤツや。ま、知らへんなら知らへんままでも問題は無いと思うんやけどねえ……」

その口調から、出来れば言いたくない、そんな気持ち伝わってくる。しかし、その口調で却って周りには気になったただだった。

「どんな事実？」

と、聞いてくるメンバーに、

「あー、多分リスクはないと思うんやけどね」

とマージンは予防線を張るかのような前置きをした。

「ただ、ほぼ確実に余計な混乱は招くと思うんや。だから話したないんやけどね」

なにやら非常に言葉の切れが悪い。

「やけど、いつかは誰かが気づくことやしな。それが最低のタイミングだったりすると、また面倒なことになるしな」

はああ、とため息をつき、更にもう一回ため息をついて、

「リアルわいら、食事しとらへんと思うんや」

誰も考えていなかった、しかし言われてみればそうなることとは間違いない事実。

「普通ならそれって、餓死するんやけどな」

リアルの肉体の死。その可能性に、その場にいた全員の頭が一瞬動きを止める。そのことを考えていたグランスも、そうでなかった他のメンバーも。ただ、ディアナだけはやっと目が覚めてきたところで頭が回っていなかったらしく、話しについて来ていない様子だった。

「まあ、餓死しない可能性もあるけどな」

マージンの次の台詞でやっと何人かが息をつく。

「例えば？」

「助けが来んのは誰にもBPが停止できへんだけで、身体の方は病院に運び込まれて栄養点滴受けとるとかな」

クライストの問いに、マージンはそう答えた。

未だにジ・アナザーから助け出されないリアルが放置されている、という先入観を、いつの間にか持っていたレック達には新鮮な考え方だった。

「確かに、それならつじつまは合うな」

と、腕を組んでグランス。そこに何か思いついたようにリリーが手を挙げて、

「病院ならBPの抽出とかできるんじゃない？」

その言葉に、レックとミネアが顔を輝かせたが、

「理論的には不可能ではないが。現実的ではない」

とグランスが答えた。

「なんで？」

「BPの回路は脳の神経回路網に直接接続されている。神経を傷つけずに、それを外科的な手法で外すのは不可能に近い。通常ならBPに管理コマンドを送れば、BP自身が回路を回収するんだが、今の状態ではそれも期待できない」

なにやら妙に詳しく説明するグランズ。

「旦那、どこでそんな知識を手に入れたんや」

呆れ返るマージンに、

「雑学だ」

グランズは短く返した。

それにマージンは苦笑する。また凹みかけて他のメンバーも、それで何となく笑い出す。

しかし、誰も気づかなかった。マージンが気づきながらも隠していたもう一つの可能性には。

グランズが説明したように、BPの抽出はBPが正常に機能していない限り、極めて困難である。しかし、仮想世界からプレイヤーを解放するだけならば、実のところ、手がないわけでもない。

BPの制御ボックスを手術により外部に露出させ、物理的に解体する。そうすればBPは否が応にも機能停止し、ジ・アナザーに閉じ込められたプレイヤーはとりあえず現実世界に復帰できるのである。

つまり、ジ・アナザーからプレイヤーを救出することは可能であり、実際に試されていてもおかしくないにも関わらず、未だに救出されたプレイヤーがいるという話はないのであった。

そこから考えられる可能性。それに触れる必要がなかったことにマージンが安堵していたことには、誰も気づかなかった。

サーカスからの撤退

サーカスの立派とは言い難い中央通り。その役場前には既に出発準備が整った18台の馬車と、それを取り囲むようにして400人を越える、サーカスにいたほぼ全てのプレイヤーが集まっていた。

世界が軋んだ日。通称、『魔王降臨』から一週間が経ち、直後は300人に満たない人数しかサーカスにいなかったプレイヤーは、フロンティア方面からの撤退組を吸収することで、その人数を大きく増やしていた。

また、『魔王降臨』直後は呆けていたプレイヤー達も、フォレスト・ツリーの「サーカスを放棄し大きな町に合流する」という宣言の前には動かざるを得ず（誰だって少人数で放置されたくない）、結果として、多くのプレイヤーが元通り……とまでは行かなくとも、それなりに元気を取り戻していた。

他の町では混乱の中で、自暴自棄から自殺に走ったプレイヤーもいたようだが、サーカスではフォレスト・ツリーが速やかに方針を決定し、発表したことで、自棄になるプレイヤーが少なかったのも大きかった。

その彼らが、妙にざわついている。緊張している。

その理由は、彼らの注意が向いている役場にあった。

彼らの視線の先にいるフォレスト・ツリーのメンバーの表情が硬いのである。加えてメンバーの何人かが、集まっていたプレイヤー達の中から十名ほどを慌てて役場の中に連れて行ったつきり、出てきていない。

予期せぬ何かが起きたのではないか、そう推測するには十分な状況だった。

レック達、蒼い月のメンバーからも一人、グランズがフォレスト・ツリーのメンバーに呼ばれ、役場の会議室にいた。同じように呼ば

れたプレイヤー達は、いずれも避難準備に積極的に関わっていたが、フロンティアから引き上げてきたギルドの代表格のプレイヤーばかりだった。

「エラクリットが襲撃を受けた」

会議室に集まったメンバーに、フォレスト・ツリー、サーカス支部長 通称、町長 コンラッドがそう告げた。髪の色と同じ紺色の瞳からはかなりの疲労と苦悩が見て取れる。

予め話を聞いていたフォレスト・ツリーのメンバー以外は、すぐにはその言葉を飲み込めなかった。やがて、コンラッドの言葉をやつの事で理解したプレイヤーが問いかける。

「襲撃って、誰にだ？」

その質問の正解は、会議室に集められた半分以上のプレイヤーの頭の中にすぐに浮かんだ。そして、それを肯定するかのように、

「凶獣、魔獣の類の大群だ。ただし、魔物に率いられた、な」

苦々しくコンラッドが告げる。

「被害状況は？」

何とか冷静さを保ちながら訊ねるグランス。

「残念ながら不明だ。あそこは我々フォレスト・ツリーの管理している町ではないからな。管理ギルドが機能不全に陥っているせいで、一般プレイヤーからの断片的な情報しか入ってこないんだ。ただ……死者も出ているらしい」

死者が出ている……その言葉に、誰かがゴクリとつばを飲み込む音が、妙に大きく会議室に響いた。

『魔王降臨』

世界が軋み、プレイヤーがジ・アナザーに閉じ込められた日は、いつの間にかそう呼ばれるようになっていた

の前は、ジ・アナザーにおける死は大した物ではなかった。所詮ゲームなので、ペナルティはあるものの、いくらでも蘇生可能であったのだ。

しかし、『魔王降臨』の後、死者の蘇生は確認されていない。正確には、死亡した直後なら宝具によって蘇生させることが可能であることは確認されていた。だが、それ以外のケースでは、死んだプレイヤーのアバターは数時間ほどで消滅し、ジ・アナザーの世界から消滅する。

リアルに戻ったのだという意見もあるが、リアルの状態が分からず、助けも来ない状態では、何の確認もない。

ただ、死への、そして死んだ後の未知への恐怖だけが、確かにあった。

「撃退は出来たのか？」

「ああ。ただ、あそこを管理している公認ギルドの機能不全に加え、魔物の襲撃だ。相当に混乱しているようだし、状況が把握できているプレイヤーなどいないのだろうな」

コンラッドの誰かへの答えに、その場にいた皆が「それはそうだろう」と思った。それだけ、公認ギルドの役割は大きいのだ。

「兎に角だ。状況が変わった。このままナスカスまで避難するべきなのかどうか。改めて検討しなくてはならない」

コンラッドの言葉に皆が無言のうちに頷いた。

「要するに、ここにいた方が安全か、大きな町に合流した方が安全かってことだな」

「そうだ」

誰かの言葉にコンラッドが頷いたのを合図に、皆が自分の意見を述べ始める。

「こんな小さな町じゃ、モンスターの大量に襲われたらひとたまりもないぜ」

「でかい町の方が、魔物のターゲットになりやすいんじゃないのか？」

「大きい町の方が戦力も充実してるはずだ」

「町の規模に合わせて、襲ってくる魔物の数も増えるって事はない

のか？」

「やっぱり、魔王が降臨したからか？魔王の指示なのか？」

「タイミング的に、それしか考えられない」

「小さい町の方が襲われる危険が低いのか？」

「目立つのは大きい町だろう」

喧々諤々の意見噴出だったが、いつこうにまとまる気配はない。

情報が少なすぎるのだから、当然と言えば当然だった。

しかし、

「ちよつと待て」

と、サーカスに元からいたプレイヤー達の不毛な論争は、フロンティア組の一人、ギルド「辺境の槍」のマスターのユージによって遮られた。黒い髪を後ろになでつけ、軽装鎧をまとったアバターのプレイヤーである。勿論、背中にはギルドの名前通りに槍を背負っていた。

「物資の流通について忘れてないか？」

「物資？」

一瞬、何のことか分からなかったプレイヤーもいたようだが、その後のユージの説明で、全員が理解した。

「知つての通り、俺たちはフロンティアからの撤退組だ。確かにフロンティアでもプレイヤーが大量に消えた。だが、それが撤退してきた理由じゃない。撤退してきたのは、武器や防具、食料やポーションといったアイテムが補給できなくなったからだ。」

この町でもそれが起こる可能性はどうなんだ？」

ユージに訊かれ、コンラッドは、

「生産系や流通系のギルドも過半数が機能不全に陥っている。つまり、この町まで必要物資が届かなくなっている可能性は高い。事実、この一週間は食料すら届いていない」

と、静かに答えた。そして、それはこの場での議論の結論をもたらす言葉でもあった。

食糧が尽きれば餓死するしかない。武器が無くなれば、魔物が襲

つてきても戦えない。つまり、物資が輸送されてこない町ではプレイヤーは生き残れない。

「結論は出たな」

静かになったプレイヤー達を見て、ユージが言った。

その言葉に頷くと、コンラッドは宣言した。

「では、予定通り、サーカスは放棄。トルーズを経由してナスカスまで避難する。皆さん、そのつもりで今しばらく、我々に協力して頂きたい」

この言葉には、会議室に集められた全員が力強く頷いた。

とは言え、プレイヤー達がサーカスを離れたのは昼を過ぎてからだった。

さすがに魔物の襲撃という事実を隠しておく訳にはいかないというところで、出発前にコンラッドが説明をしたところ、案の定、小さくはない混乱が起き、そのの收拾に時間を取られてしまったのだ。日本語が理解できないプレイヤー達の説明もしなくてはならなかったのも大きい。

「んー、こういうのって新鮮！」

サーカスを離れて間もなく、リリーは大きく伸びをした。

「今までもキャラバンとかはあったがのう。ここまで大規模なのは後にも先にもそうそうないじゃろうな」

「キャラバンってより、遠足って感じもしないでもないけどな」

ディアナに軽口で返すクライスト。

「ふむ。確かに馬車が18台に護衛が400人のキャラバンはさすがにないのう……」

クライストとディアナ、二人の言葉通り、400メートル近くに伸びたサーカスからの避難隊の列は、ほとんどがプレイヤーで占め

られていた。ただ、キャラバンと違い、荷馬車が少ししかないため、遠足という感じも否めない。唯一ディアナの言葉で正確ではないところがあったとすれば、プレイヤーの集団は生産者や商人といった非戦闘系プレイヤーを含んでいるため、護衛として戦えるプレイヤーの実数は300人程度だという所だろうか。

『魔王降臨』以降、フロンティアからの撤退組を除くほとんどのプレイヤーが町を出るのは初めてだった。

街道の周辺は、左手に草原が、右手には山の麓から続く森が広がっている。幸い、好天に恵まれたこともあって、街道の風景や草原を渡る風の匂いは、鬱々としていたプレイヤー達の気持ちを明るくさせてくれた。

そのためか、仲間同士のたわいもない雑談があちこちで散見された。ただ、知り合いの大半が消え、ジ・アナザーで少数派となってしまった日本人以外のプレイヤー達はそうもいかない。

ギルドに所属している外国人プレイヤーも多かったのだが、そのギルドのメンバーがほとんど消えてしまったのでは、ギルドが無くなったも同じ。事実上のソロプレイヤーになってしまっていた。

準備期間中に臨時日本語教室が開催されていたものの、まだまだ日本語で会話できるには至ってはいなかった。で、集団の中では浮くことになるくらいならと、彼らは移動中も日本語の勉強を行うことになっていった。ただし、これには万が一魔物の襲撃があった場合の対策という意味も含まれている。

魔物の襲撃があった場合は、フォレスト・ツリーが組み上げた臨時の指揮系統の下で冒険者達が迎撃に当たることになっていったが、指揮系統で使用される言語は、使用者の多い日本語と決められていた。しかしそれでは、日本語を理解できない外国人プレイヤーがばらばらに集団の中に混じっていると、役に立たないどころか足手まといになる。そこで、いざという時には日本語で出された指示を英

語で彼らに伝え、戦力として機能させるためにも、日本語と英語、両方が扱えるプレイヤーによる日本語教室という形で、外国人プレイヤーを一カ所に集めておくことになったのである。

というわけで、避難隊の隊列の末尾では……

「警戒態勢！……Be on alert！」

「『ケイカイタイセイ！Be on alert！』」

「One more！」

「『ケイカイタイセイ！Be on alert！』」

蒼い月から教師役として引っ張り出されたマージンが、日本語とその意味を英語で叫ぶと、周りの外国人プレイヤーがそれを復唱する。

「2時の方角！……The direction at 2 o'clock！」

「『ニジノハウガク！The direction at 2

o'clock！』」

「One more！」

「『ニジノハウガク！The direction at 2 o'clock！』」

臨時の生徒達を教えながら、マージンはげんがりしていた。予め分かっていたこととはいえ、町の外でまで日本語を教えるというのは楽しい……とは言いがたい。

しかも、今日の日本語教室は、教師役がかなり少なかった。というのも、英語も日本語も出来るプレイヤーは、ギルドマスターなどまとめ役的な立場の人間が多い。襲撃を警戒しながら移動している今は、彼らは自分のギルドの仲間達と行動を共にしていた。

（せめて、女子がもっとおればやる気もでるんやけどなあ）

心の中でぼやいてみるが、実際の彼の生徒はほとんどが男性だっ

た。

(何が悲しゅうて、男の世話なんぞせなあかんねん)

その点、蒼い月には女の子もちゃんとして、彼女たち(約一名除く)のきやつきゃした声を聞きながら、風景を楽しみ、どうでもいい雑談を楽しんでいれば良かった。

(あゝ、せめてクライストも引きずってくるべきやったわ)

蒼い月の戦力を減らすわけにはいかないと、あっちに残ることになったクライストの顔を思い出すと余計にテンションが下がる。

「馬車を守れ!…… Save the wagons!」

「バシヤヲモレ! Save the wagons!」

「One more!」

「バシヤヲモレ! Save the wagons!」

戦闘時に必要になりそうな言葉を選んで、生徒達に繰り返させながら、マージンのテンションはますます下がっていった。

隊列の中央付近にある馬車隊先頭の馬車の御者台では、コンラッドがやっと一息ついていた。サーカスを出発するまで、まともに休めなかったのである。一応睡眠は取っていたが、避難計画やら今後の不安やらでまともに寝れていたとは言い難い。

「コンラッド、大丈夫?」

そう言いながら、左から冷たいお茶を差し出したのは自称秘書のユツコだった。肩まで伸ばしたストレートの明るい茶色の髪。濃い茶色の瞳には心配そうな色が揺れている。

「ありがとう。魔物の襲撃とかでもない限り、トルーズに着くまではやることもないし、ゆっくり休めそうだし」

ユツコから受けとったお茶をすすり、ほーっと息を吐く。

(ほんと、こここのところ忙しかったからな)

サーカスだけではなく、他の町の状況の把握に始まり、避難計画の主導、その際に持って行く物資の選定などなど、事務仕事だけで

死ねそうなほど忙しかった。

その成果の1つの隊列を見ながら、もう一口お茶をすすする。

避難隊の隊列の構成は、戦闘系ギルドのメンバーの意見も取り入れながらまとめたものだ。

隊列が長くなると、襲撃の際の戦線も伸びてしまい、何かしら守りきれなくなる恐れがある。なので、どれだけ隊列を短くするかが最大の問題だった。しかし、サーカスから最も近い町トルーズへの街道は、幅5メートルもない。可能ならば馬車を二列縦隊にしたかったのだが、諦めざるを得なかった。結果、それだけで隊列が100メートルほど伸びてしまったのは残念極まりない。

更に、避難隊の隊列は馬車隊を中心として非戦闘員を配置し、その前後に冒険者達を配置した。特に、前方にはフロンティアからの撤退組を配置し、街道付近の脅威の排除を頼んである。他の冒険者達は、襲撃があった場合、馬車隊を守るために左右に移動してくれる手はずだ。

連絡をスムーズに行うためには、フォレスト・ツリーのメンバーを前後の冒険者グループの中の有力集団　つまりは人数の多いギルド　に張り付かせてある。最も、緊急時には笛を鳴らすことで、隊列の全プレイヤーに、幾つかの合図は伝えられるようにしてあった。

(多少の凶獣・魔獣の類は戦闘系ギルドだけで問題ないだろうしな)
コンラッドとしては、少人数で対応できる事態ならば事後報告さえ貰えればいい。元々が少人数の寄せ集めで、大規模集団戦に慣れていないプレイヤーばかりなのだ。下手に集団として動かすよりは、各自の判断で動いて貰った方がいいはずだ。

どちらにしても、今、コンラッドに出来ること、するべき事は全く無いように思われた。

(よし)

状況は特に問題がなさそうだと確信し、

「しばらく寝る。何かあったら起こしてくれ」

と、持っていた手綱をユッコに預け、コンラッドは夢の世界へと旅立った。もつとも、貯まりに貯まった疲労のせいで、夢など見ないかも知れないが。

「しばらく、うちのコンラッドは寝るそうです」

ギルドメツセージを受けとったステイーヴンは、申し訳なさそうに隣で馬に揺られていたユージにそう伝えた。

「そうか。まあ、疲れているだろうしな」

ステイーヴンに何か文句を言おうとしたらしいギルドメンバーを片手で制し、ステイーヴンにそう答えながら、ユージはサーカスに入ったときのコンラッドを思い出した。

ユージ達フロンティア撤退組がサーカスに入ったのは、『魔王降臨』から四日後のことだった。

フロンティアキャンプでも多くのプレイヤーが消え、閉じ込められたプレイヤー達は呆然としたものの、不定期に襲ってくる凶獣・魔獣への対処もあり、ほとんどのプレイヤーの立ち直りはむしろ早かった。そして、立ち直るとすぐに、キャンプというあまりに不安定な拠点から撤退することを無言のうちに決定し、半ば強行軍の形でサーカスにまで戻ってきたのだった。

彼らが着いたときには、サーカスでも既に撤退準備が始まっており、とるものもとりにあえず、ユージ達フロンティア撤退組のリーダー格数名でコンラッドに挨拶をしに行った。そこで見たのは、撤退計画の指揮やら外部の情報収集やらフォレスト・ツリー幹部としての話し合いやらで忙殺されかけている一人のプレイヤーの姿だった。

確かにギルドマスターとしてユージ自身もかなり忙しかったが、

あれを知っている身としては、後は俺たちに任せて休んでくれと素直に言える。

「最初から俺たちだけで何とかなる状況なら、勝手に動いていいことになってるしな。そんなに恐縮しなくていいさ。撤退準備でまとも眠れていない町長さんにはよろしく言っておいてくれ」

と、隣で小さくなっているステイヴンに言った。周りのメンバーが事情を飲み込めるように、さりげなく説明も入れてみた。

晴れ渡った天気のおかげか空気も澄んでいて、馬の上からなら草原の中を走っている街道のかなり先まで見通せる。右手が森になっているとはいえ、100メートルから200メートルほどは離れているし、少なくとも、不意打ちにも近い形で襲撃される心配は無さそうだった。

ちなみに、ユージ達辺境の槍のメンバーだけは、馬を割り当てられている。

元々、馬車を引く18頭を除いて11頭の馬が余っていた。遊ばせておくのも勿体ないが、一部のプレイヤーだけ馬で移動させても本隊が徒歩である以上、避難隊の移動速度の面では何のメリットもない。

そこで、騎乗戦闘もこなせる強力なプレイヤーに馬を割り当て、有事には防衛上の穴を機動力で塞いで貰うことになった。その役目が、辺境の槍に回ってきた、それだけのことである。

「ま、馬に乗るのが役得だけで済めばそれに越したことはないけどな」

ユージの軽口に、周囲からは「確かに」「そりゃそうだ」と同意する声が続々に上がる。

そんな仲間達の様子を見ながらも、ユージは完全に気を緩めることはしなかった。草原の中をのんびり……ではないが、歩いている隊列ほど目立つ物はないのだから。

「マージンはちゃんと臨時教師やってるのかな？」

「一人だけ別行動のメンバーがいるのは、ちょっと気になりますね」
「あいつは結構しぶといからな。何かあっても心配はいらないだろう」

レックとミネアの心配？を気にもかけないグランスの言葉に、

「それもそうか」

「そうですね」

レックもミネアも気にはしていたが、大きな集団の中にあることもあって、実のところは大した心配はしていなかった。どちらかというと、黙々と歩いているのに飽きてきたので、会話のネタにしただけだったりもする。

「でも、日本語教室ですか。楽しそうですね」

マージンが聞いたら代わってくれと言い出しそんな台詞を吐くミネアに、

「いや、あれはあれで大変だった」

と、準備期間中、暇を見つけては臨時教師として顔を出す羽目になつていたグランスが答える。

「生徒も熱心なんだがな。覚えるのが早いヤツと遅いヤツがごちゃ混ぜになつてるからな」

どういふ苦勞をしたのか、苦虫を噛み潰したような顔になるグランス。

「そういうものですか？」

「そういうものだ」

そして再び会話が途切れる。

蒼い月姦し4人組は一人は日本語教室にすっぱ抜かれていたものの、残り3人でも十分わいわい姦しく、レック達の後ろでしゃべり続けている。どちらかというと大人しい部類に入るレックやミネアは、彼らのおしゃべりに付いていくのを早々に諦め、最近はリーダ

ーと呼ばれるのも諦めつつあるフランスと一緒に歩いてきた。

ただ、いくら大人しいとは言え、無言が好きなわけでもない。

「明日の夕方にはトルーズに入れるんだっけ？」

「順調にいけばそうなるな。余程の遅れでもない限り、明日は強行軍でトルーズまで行く予定だがな」

レックの質問に、フォレスト・ツリーを中心とした避難計画の話し合いに参加していたフランスが答える。

サーカスとトルーズの間の距離は直線距離にして60kmちょっと。街道沿いに歩いたときの距離はもう少し長くなるが、今日明日9時間くらいずつ歩けば、問題なく到着できる距離だった。

「トルーズで一泊した後、問題がないようならそのままナスカスマで移動する。この避難隊はそこで一度解散することになってるな」

「そっか」

エラクリットからサーカスに来る前に通過しただけの町の様子を思い出しながら、レックは答えた。

はつきり言つて、大した規模の町ではなかった。ただし、サーカスや今目指しているトルーズと違い、小さいながらも町の周囲には防壁が築かれ、防衛面ではサーカスやトルーズよりも遙かにしっかりしていたと記憶している。

そこまで考え、ふと思いついたことをフランスに訊いてみる。

「そう言えば、エラクリットはどうなってるの？」

出発の間にエラクリットが襲われたという話は聞いたものの、その後はやいのやいのと大騒ぎになって、細かい説明は結局聞いていない気がした。ミネアも思い出したのか、

「気になりますね」

「俺も詳しくは知らないが、大きな被害は出たらしいな。負傷者だけじゃなくて、死人まで出たらしい」

死人が出たという言葉で、レックとミネアの顔が強ばった。

「幸い、撃退には成功したらしいが、公認ギルドが機能していないこともあって、徐々に治安が悪くなってるらしい。フォレスト・ツリーとしては、可能ならばエラクリットにまで乗り込んで、何とかするつもりらしいな」

「何とか出来るのでしょうか？」

不安そうなミネアの頭をぽんぽんと叩いて、

「そのための戦力をナスカスで編成して、送り込むつもりらしい。辺境の槍の連中は、それに協力すると明言していたな」

「僕たちは？」

「俺個人としては、混乱が早く収まるに越したことはないと思ってるからな。俺たちが協力することで、早く状況が落ち着くなら協力する選択肢もあり得るな」

「じゃ、ナスカスに着いた後はエラクリットって訳だな」

いつの間にか、後ろにいた3人もこっちの話に耳を澄ましていたらしく、クライストが割り込んできた。

「ああ、懐かしのエラクリット。という訳じゃな」

「だねー。こないだまでいたってゆーのに、もう、懐かしいよ」

続けてディアナとリリーも割り込んでくる。

「まだエラクリットに行くとは決まってるぞ？状況があまりにも悪くて危険だと判断したら、俺としては止めざるを得ない」

真剣な顔で話すグランスに、

「その程度でびびってたら、ダメだろ」

口調は軽かったが、その一瞬だけ、クライストの表情も真剣なものだった。すぐにいつも通りに戻ったため、レック以外の誰もが気づくことはなかったが。

(何だろう、今の顔……)

そう思ったレックが、クライストに訊こうかなと思った瞬間だった。

ピイイイイイー！！！！

コンラッド達がいるはずの馬車の方から、鋭い笛の音が聞こえてきた。

瞬く間に周囲に緊張が走り、隊列全体が前進を停止する。

予め決められていた符号では、笛の音1つは「敵発見、戦闘準備に入れ」だ。

続けてすぐに、避難隊の隊列の各所に配置されていたフォレスト・ツリーの連絡員が、

「敵集団はゴブリン10体以下。右前方の森の中から出現。ギルド『サザビーズ』が対応する」

と、ギルドメッセージを受けとって、大声で叫ぶ。

それを聞いて、レック達も、その周囲のプレイヤー達も力を抜いた。どうやら、通常のエンカウントらしい。ならば、ほとんどの冒険者達の出番はない。

ゴブリンは人型の亜人種だ。極めて好戦的で、人間を見るとすぐさま襲いかかってくる。ただ、力こそ人間よりやや強いものの、動きはそれほど早くない。武装はしていないか、していても大抵は大きなものではないので、初心者でもない限り、まず負けることはない。敢えて言うなら、集団で行動しているので数に注意といったところだが、連携を取りながら攻撃をしてくるわけでもないの、パーティーを組んだ冒険者にとっては脅威ではない。

フロンティアからの撤退組の1つであるサザビーズにとって、ゴブリンは勿論雑魚である。戦闘自体には何の不安もない。なので、『魔王降臨』後の初戦闘としては悪くない。

こちらへ駆けてくるゴブリンの集団を見ながら、サザビーズのマスター、ニコラウスはそんなことを考えていた。

何しろ、死んだらそれで終わりなのである。

戦闘が死の恐怖と隣り合わせになった以上、死の恐怖に慣れていかなければならない。かといって、すぐに今まで通りに動けるとは思えないので、十分格下の相手と戦って、少しずつ慣れていくべきだと考えていた。

「みんな、覚悟はいいか！」

ゴブリン相手ならまず死人は出ないだろう。それでも、念のため、仲間達の気合いを入れ直す。

「……おー！」「……」

仲間達の声に満足し、

「隊列に近づけすぎると、俺たちを迂回するのが出てくるかも知れないからな。少し離れたところで迎え撃つぞ！」

そのニコラウスの指示に従って、14名のサザビーズメンバーが前進を開始した。

別に軍隊というわけでもないので装備はばらばらだが、既にいつもの戦闘隊形になっている。といっても、特に奇をてらった物ではなく、戦士や剣士、騎士が前衛を務め、弓師が後衛から援護する、冒険の際の基本隊形だ。隊形の中央には虎の子のヒーラーがいて、怪我をした仲間についても回復魔法をかけられるように待機している。

「左右に少し広がった方がいいんじゃないのか？」

仲間からの提案に、ニコラウスはゴブリン達との距離を測りながら、

「そうだな、少し広がるう」

と、許可を出す。

それと共に隊列の前衛が少しばかり左右に広がった。

「このあたりでいいか」

隊列から100メートル近く離れたところで、ニコラウスは仲間達に停止を指示した。

駆けてくるゴブリン達との距離はあと100メートルもない。指示を出すまでもなく、サザビーズのメンバーは全員が自分の武器を

構え、衝突を待つ。

幸い、ゴブリン達はサザビーズを脅威として回避するようなこともなく、まっすぐ突っ込んできた。しかしその動きはあまりに単調すぎた。弓の射程に入るとすぐ、矢に射貫かれ、2体のゴブリンが集団から脱落した。即死はしなかったようだが、すぐに後続のゴブリンに踏みつけられ、結局は戦闘不能になっていた。

それでも7体のゴブリンは前進を続け、そして、サザビーズと接触、戦闘が始まった。とは言っても、あまりにも力量差がありすぎた。

最初に接触したサザビーズのメンバーは、ゴブリンが振り下ろした棍棒を左の盾で易々と受け止め、右手の剣でゴブリンの喉を突き、一撃で絶命させた。

盾を持っていないメンバーも、何も考えてないかのように振り回される棍棒を避け、ゴブリンの首や脇腹を切り裂いていく。

ただ……

「うわっ！なんだこれ！！」

「マジかよ！」

ゴブリンを倒したメンバー達は、予想外の事態に慌てふためいた。返り血である。

流血はあまりにもゲームが生々しくなるため、実装されていないはずだった。つまり、敵を切り倒そうが何をしようが、ジ・アナザーでは戦闘行為によって血を見ることはない。

そのため、斬り殺したゴブリンからの大量の返り血を浴びたサザビーズのメンバー達は生理的な嫌悪感と混乱に襲われたのである。ただ、それは本来致命的とも言える隙だったのだが、相手を一撃で行動不能に出来ていたため、今回は事なきを得た。

少し遅れてゴブリンを倒したメンバーは、多少の動揺を抱えたまま戦うことになったが、幸い大きな傷を負った者はいなかった。

ただ、大量の返り血を浴びたメンバーの精神状態は、お世辞にも
平静とは言えなかった。

「なんだよこれ……」

瞬く間に戦闘事態は終わったものの呆然とする仲間を見ながら、
ニコラウス自身も啞然としていた。一体、何が起きたのか。見れば
分かる。だが、感情が理解を拒否しようとしていた。

「落ち着け！」

そんなニコラウス達サザビーズメンバーに、大きな声が投げかけ
られた。

ハッと振り返った彼らの目に写ったのは、馬に乗った辺境の槍の
ユージだった。

無論、ユージも全く動揺していなかったわけではない。しかし、
戦闘の当事者でなかったため、いきなり間近で出血を見ずに済んだ
分だけ、ニコラウス達よりは冷静さを保っていた。

「まず、返り血を浴びた装備を外せ！アイテムボックスから水を取
り出して、洗うんだ！」

本来ならギルドが違うユージの命令に、サザビーズのメンバーが
従う理由はなかった。しかし、軽い錯乱状態にあって何をすればい
いか見失いかけていた彼らは、その命令を簡単に受け入れていた。
もたもたと装備を外し、血を洗い流し始めた彼らを見守っていた
ユージは、後ろから近づく足音に振り返った。

「これは……一体なんですか？」

血の気が引いたステイヴンに、自分も似たような顔色なのだろ
うなと思いつながらユージは、

「見たとおりだろう。敵を切ったら血が出た。それだけだ」

その言葉に少し考え込む様子を見せた後、

「仕様変更の一つ、ですか？」

「だろうな」

ステイヴンが出した結論に、ユージも頷く。

「はた迷惑な仕様変更だ。これは慣れるまでは刺激が強すぎるぞ」

「つまり？」

「今まで通りの実力を発揮できなくなるってことさ。とにかく、一度話し合う必要があるな。町長を呼んでくれ」

ユッコに起こされたコンラッドは、寝ぼけていたのもあって些か機嫌が悪かった。彼女から報告を聞いても、実体験として経験していない彼には、いまいちピンと来なかった。

しかし、ユージの指示で辺境の槍のメンバーに連れられ、戦闘現場に立って、眠気も機嫌の悪さも全部吹き飛んだ。

かろうじて血を洗い流し、落ち着きも取り戻したサザビーズのメンバーは兎に角、ゴブリン達の死体は、未だ彼ら自身の血の海に浮かんでいたのだから。

「確かにこれはまずいな」

ユージから説明を受けたコンラッドの第一声がそれであった。

いくら強いプレイヤーであっても、返り血を浴びたりして錯乱すれば、敵にあっさり殺されかねない。すぐさま対策を考える必要があるというユージの意見はもっともな物だった。

「あの死体はいつ消える？」

「仕様変更がなければ、10分つてところか。……見せる気か？」

質問の意図を察したユージに、コンラッドは、

「慣れるためにはアリだと思うが……どうだ？」

「見て気分のいい物じゃないがな。何人かしばらく使えなくなるかも知れないぞ」

「戦闘中に役立たずになるよりはマシだと思うが」

「……一理あるな」

ユージの同意を得て、コンラッドはギルドメッセージで、冒険者を順番に、こちらに寄越すように指示を飛ばした。

最初にやってきたのは隊列前衛のフロンティア組からだった。す

ぐにやってきた彼らは、既に何が起きたのかを分かっているようだった。

怖い物見たさの野次馬がおっかなびつくりやって来た……そんな様子の彼らを笑う余裕は、コンラッドにもユージにもなかった。

「気分が悪くなりすぎない程度にしっかり見る。そして慣れる。これが仕様変更だ」

フォレスト・ツリーの指示で入れ替わり立ち替わりやってくる冒険者達に、ユージはそれだけを言い続けた。

吐いたり、ふらふらと倒れてしまった冒険者もいた。その様子を見ながら、

（思ったよりダメな連中が多そうだな……人ごとじゃないがな）

ユージはこれからの戦闘の厄介さを思い、一人嘆息した。

ただ、誰にとっても幸いなことに、翌日にトルーズに入るまで、大きな被害が出るような大規模戦闘はなかった。小規模な遭遇戦は何回もあったが、それは避難隊の冒険者達に、流血表現に慣れさせるいい機会となっただけであった。

プレイヤーも怪我をすると出血する……のが判明したのは余談である。

エラクリット

トルーズに着いたサーカス避難隊は、トルーズで一泊した後、翌朝にはナスカスへ向けて出発した。そして、ナスカスに着いた時点で避難隊は解散となった。

ナスカスは元々5000人近いプレイヤーを収容する能力があり、1000人規模のサーカスやトルーズよりも遙かに大きい町である。しかも、『魔王降臨』直前に大量に強制切断されたプレイヤー達の利用していた建物や部屋がそのまま空いていた。そのため、一時的であっても定住を希望するプレイヤーがいれば、全て受け入れるというのが、ナスカスを管理しているフォレスト・ツリーの意向であった。

一方、サーカスから引き上げてきたフォレスト・ツリーのサーカス支部のメンバーはナスカスに到着後、予めナスカスのフォレスト・ツリー本部との打ち合わせていたとおりに、エラクリット制圧部隊を立ち上げた。既に治安が悪化しているため、武力による制圧、最低でも威圧が必要だとフォレスト・ツリーは考えており、それに賛同した多くのプレイヤーが制圧部隊に参加を表明した。

そして、サーカスからの避難隊がナスカスに入った僅か二日後、エラクリット制圧部隊はナスカスを発ち、街道上で一夜を明かした後、エラクリットの東門を望める場所にまで到達していた。

そのエラクリット制圧部隊の中に、レック達、蒼い月の面々も混ざっていた。

「思ったたより、壊れてないと思うんだけど？」

遠くに見えるエラクリット東門を見ながらそう言ったレックに、

「うんうん。全然壊れてないっばいね〜」

リリーが頷く。

「魔物の襲撃は北門からあったらしいからな。その他の門は無事ら

しい。街の中も、侵入される前に何とか撃退したとかで、魔物による被害は出てないと聞いている」

昨夜、制圧部隊に参加したメンバーの主立った者達を集めて行われたブリーフィングに出ていたグランスが説明する。

「もつとも、治安の方はあまり良くないらしい。ナスカスに避難してきたプレイヤーの話では、略奪や暴力沙汰は既に起きてるらしい」と、苦い顔で現状説明を行う。

「そこにわいらが乗り込んでいって、バシーンと治安を取り戻すっちゅーわけやな」

「何か、警察みたいだな」

ノリノリのマージンとクライストにも、

「残念ながら、戦闘行為は起きないと思うぞ。悪さをしてる連中は別にエラクリットの支配とか目論んでるわけでもないしな。システム保護も取り締まりも無くなって、調子に乗ってるだけだろうしな。これだけの戦力で乗り込めば、手を出してくることはないはずだ」

ブリーフィングでフォレスト・ツリーが示したその見解には、多少の異論が出たものの、制圧部隊が大規模な戦闘に巻き込まれ被害を出す可能性が低い点には誰も異論は無かった。

仮に攻撃してくる勢力があったとしても、強制切断と魔物の襲撃で戦力をまともに維持できているギルドは無いだろうし、この短い期間では犯罪行為に走ったプレイヤー同士が手を組むのも難しい。制圧部隊の規模が思ったより大きくなったこともあり、エラクリットの治安回復に大きな問題は無いだろうと予測されていた。

「では、このままエラクリットに入るわけじゃな」

「ああ、そうなるな。エラクリットの役場を確保した後は、治安の回復が確認され次第、制圧部隊は一度解散。エラクリットの防衛部隊を再度募集するそうだ」

ディアナにグランスがそう説明している後ろでは、既に興味を無

くしたりリリーが、

「前のギルドハウス、空いてるといいね〜」

「そうですね。折角戻ってきたんですから、慣れたギルドハウスの方が落ち着けます」

と、ミネアと話していた。

そこに、

ピッピッピー

と、笛の音が聞こえてきた。前進の合図である。

「では、行こうか」

合図を受けたグランスの言葉に、蒼い月の面々もエラクリットへ向けて歩き始めた。

その一時間後。

大した抵抗もなくエラクリットに入った制圧部隊は、残っていたプレイヤー達の歓迎を受けながら（一部のプレイヤーからは疎ましがね視線を受けながら）、予定通りにエラクリットを管理していた公認ギルドのギルドハウス 通称はやっぱり役場 に入っていた。

エラクリットの役場は、装飾のない簡素な石造りの四階建て。面積も縦横100メートル近くとかなり広かった。これと比べると、コンラッドにはナスカスにあるフォレスト・ツリー本部がみすばらしく思えた。

フォレスト・ツリーおよびその護衛達は、役場の一階で最も広い受付の部屋に集合していた。ここの広さだけでも、小さな家ならまるまる入りそうな広さがある。

「フォレスト・ツリーは全員揃っているな？」

コンラッドの声に、「揃ってるぞ」と誰かが返した。護衛が全員揃っているかどうかは気にしない。非戦闘員であるフォレスト・ツ

リーのメンバーを不意の出来事から守れるだけの人数がいればいい。コンラッドも自分の目でいるべきプレイヤーが全員揃っていることを確認すると、

「では、全員で管理証を探すぞ。」

フォレスト・ツリーのメンバーは護衛と一緒に、各部屋を徹底捜索。担当する部屋は適当に決めてくれて構わない。多分、目立つところに飾られているだろうから、すぐに見つかるはずだ。

俺はこの受付で探すから、見つけたらこの受付まで持ってきてくれ」

その指示の下、予め決めていたとおり、一人につき二人の護衛を伴ったフォレスト・ツリーのメンバー達が次々と役場の奥へと吸い込まれていった。

その様子を見ていたコンラッドの護衛役、辺境の槍のユージはふと気になったことを訊いてみることにした。

「その管理証つてのが、街の管理に必要なアイテムなんだろ？泥棒の類に見つかって盗られないように、隠してあるんじゃないのか？」

その言葉に振り向いたコンラッドは、にやりと笑うと、

「管理証はシステムアイテムだからな。公認ギルドの正規メンバー以外には触ることは出来ないのさ」

「しかし、プレイヤーに対するシステム保護は全部無くなってるとどう？管理証とやらの保護も無くなってるんじゃないのか？」

「いや、ちゃんと残ってる。フォレスト・ツリーの保有している管理証で試してみた。公認ギルドのメンバー以外は触ろうとすると拒絶される」

自信満々に答えるコンラッドに、ユージはもう一つの質問をぶつけた。

「その街を担当していない公認ギルドのメンバーでも、触ったり使ったりはできるのか？」

「ああ。その辺は運営もいい加減だったんだな。まあ、公認されるようなギルドに人様の管理してる街の管理証をどうこうしようとい

うやつはいないから、問題にはならなかったんだろうな」
その答えに、ユージはなるほどと納得した。

管理証。それは公認ギルドが街を運営する上で必要な、イデア社からの配布アイテムである。

自らが管理・運営している町に対する公認ギルドの権限は強大で、町の全ての建築物の管理は、管理ギルドが一手に担っている。この管理の内容が公認ギルドの権限の強さの根拠と言ってもいい。

まず、町の全ての建築物は管理している公認ギルドのものであって、一般プレイヤーが自前の建物を保有することは出来ない（当然、一般のプレイヤーは管理ギルドから町の建物をレンタルすることになる）。また、町にある全ての施設への立ち入り許可も管理ギルドが行うため、管理ギルドから拒否されたプレイヤーは該当する施設に入ることが出来なくなる。

さらには、建築するのも修理するのも全て管理ギルドであり、仮に一般プレイヤーが勝手に建築や修理を試みた場合、勝手に建築された建物は必ず半日と持たずに倒壊するし、修理した場所もまた壊れる。

はつきり言って、銀行サービスの拒否権など、建築物管理に比べれば、微々たるものでしかない。

そして、それら全ての権限を公認ギルドに与えるのが管理証（という魔導具）であった。イデア社から発表された設定では、町全体を覆っている不可侵の領域魔法の媒体だとされている。

「さて、部下にはかり任せてないで、俺もちゃんと探すか」
コンラッドの言葉に、

「どこをだ？」

とユージは思わず訊いてしまって、後悔した。

「どっつて……… 来客が入れないカウンターのの中だろう」

と、予想通りの答えが返ってくる。

ちなみに、コンラッドとユージは、受付にある木製のカウンターの外にいた。

「普通はさすがに、来客の目につくところには堂々と置いておかないけどな」

「そう言いながら、コンラッドはカウンターのの中に入り込み、外から見えないような場所を素早く見て回る。

「さすがに、そう簡単には見つからないか」

「そう言いながら、カウンターの奥の柱の裏側を一本ずつ見て回り、やっぱり無いな」

と、次はカウンターの裏を探しにかかる。

「手伝おうか？」

思ったより時間がかかりそうだと、ユージが手伝いを申し出たが、「いや、どんなのか知らないだろ？それに数分もあれば見つかるはずだから、不心得者が入ってきたりしないように見張っていてくれ」と、断られてしまった。

もっとも、ユージの手伝いはホントに必要ななかったかも知れない。コンラッドはカウンターの裏を探し始めてすぐに、ギルドメッセージを受けとることになった。

カウンターの裏から出てきたコンラッドは、個人端末を操作してメッセージを確認すると、

「あー、見つかったそうだ。……二階にあったのか」

と、ユージに見つかった旨を伝える。

「すぐに持ってくるそうだ。ついでだから、どんなのか見せてやるよ」

と言って、カウンターから出てくると、手近なソファに身体を埋め、今後の予定について考え始めた。

ナスカスの本部にいる間に聞いた話だが、現時点では機能している公認ギルドは、フォレスト・ツリーを含めても5つほどしか確認できていない。しかも、その5つの公認ギルドも、『魔王降臨』の

際にログインしていた、あるいは直後にログインしてきたプレイヤーをかき集めても、人員が元の半分にもならないとフォレスト・ツリーの首脳陣は考えていた。となると、今後多くの町が無人になるということを考えて入れても、公認ギルドの手が回らず、管理を受けられない町が相当できてしまう。

そのため、一刻も早く残された公認ギルド同士で連絡を取り合い、重要な町の管理だけでも行う必要があるというのが、フォレスト・ツリーに所属するコンラッド達の総意だった。

ただ、いつになったら他の公認ギルドとの連絡が取れるか分からない。そのため、とりあえず今後のフォレスト・ツリーの活動のし易さから、エラクリットに本部を移すことになっている。

というコンラッドの思考は、階段から現れたフォレスト・ツリーのメンバー、ライカが持ってきた金色のメダルを見て中断された。

「コンラッド、やっぱり堂々と飾ってあったよ」

緑色の目を輝かせながら、ライカはコンラッドに金色のメダルを渡した。何かにつけてよく弾む緑のショートがよく似合っている活発そうな少女だ。

「ああ、ありがとう」

そう言っただけでコンラッドがライカから受けとったメダルを見て、

「それがそうなのか？」

意外に小さいなと思いつつユージが確認する。

「ああ、これが管理証だ」

と答え、コンラッドは何かいたずらを思いついたような、意地の悪そうな笑みを浮かべ、

「試しに触ってみるか？」

とユージに訊いた。

「いいのか？」

「構わんさ。どうせ無理だし」

そう言っただけでコンラッドが差し出した管理証に、ユージはおそるお

その手を伸ばし……

パチッ

火花が散り、慌てて手を引っ込めた。

「ま、そういうことだ。直接間接を問わず、公認ギルドに属していないプレイヤーが触ろうとすると、電撃で拒絶されるってわけだ。今のはちよつと触ってみようとしたただだからいいが、持とうとしたりしたら、もっと強い電撃が走るぞ。ま、それを何とかしても、動かせないんだけどな」

にやにやしながら解説するコンラッドを睨みながら、

「動かせないってどういう事だ？」

「さあな。その辺はよく分からん。そういう仕様だとしか言えないな」

それ以上は訊かれてもお手上げだ、と言わんばかりのコンラッドの様子に、ユージはこの件でのそれ以上の質問は止めた。

そうこうしてるうちに、上階の探索を行っていたフォレスト・ツリーのメンバーもそろそろと戻ってきた。

それを見たコンラッドはユージとの会話を打ち切り、秘書として同行してきていたユツコを連れ、受付カウンターの奥の部屋へと姿を消した。

「何しに行つたんだ？」

「管理証が使えるかどうかじゃないかな？さすがにその辺は部外秘だから、人がいない部屋に行つたんだよ」

ライカの答えを聞いて、ユージはなるほどと頷いた。

「ま、すぐに出てくるよ……ってほら、もう出てきた」

ライカが言ったとおり、姿が見えなくなって一分と経たないうちに、コンラッド達は戻ってきた。

「どーだった？」

「ああ、問題ないな」

ライカの確認に、にやりと答えたコンラッドは、ユージを見て、「じゃ、予定通りエラクリットの掌握に取りかかるう」

「ああ、それじゃ、半数にはもう一度この建物の中の確認を行わせる。残りはお前達と広場に行けばいいんだな？」

予定を口に出して確認したユージは、コンラッドの返事も待たずに同行していた辺境の槍のメンバーやその他の冒険者達に指示を飛ばした。

「よし、それじゃ行くとしようか」

そう言うのと、コンラッドはユージ達を引き連れて、広場へと向かった。

コンラッド達が役場に入った頃、蒼い月のメンバーは他の冒険者達と一緒に石畳が敷かれたエラクリットの中央広場に到着していた。別行動の目的は、この後予定されているフォレスト・ツリーによるエラクリットの管理を宣言の下準備である。

といっても、ナスカスから制圧部隊が到着した時点で、悪化していたとされるエラクリットの治安状況は劇的に改善していた。そのため、せいぜい広場に落ちていいる邪魔なゴミを片付けるくらいしかやることはなかったのだが。

治安が悪化していた最大の原因は、プレイヤーの間に蔓延していた不安であり、「管理する能力」を持ったフォレスト・ツリーと「町を守る戦力」になりうる制圧部隊の到着により、その不安が大きく払拭された。その結果として、自己保身やストレスから暴力的、犯罪的な行為に及んでいたプレイヤーが冷静さを取り戻したのである。

「ま、思ったより荒んでなくて、一安心つてとこだな」

町に残っていたプレイヤー達の協力もあって、ゴミ掃除もあっさり終わり、暇になった制圧部隊の冒険者達も、エラクリットのプレイヤー達に混じって、そこかしこで雑談に花を咲かせ始めていた。

蒼い月のメンバーも同様で、今の台詞はここに来るまでのエラクリットの様子を見たクライストの感想である。

「治安が悪化しているというから、もっと酷いかと思っておったがのう。ちよつと拍子抜けじゃの」

「酷くないに越した事はないけどね」

「本当に酷くなっていたら、治安を回復するのも一苦労だからな」
クライストの言葉に、レック達も次々と感想を口にする。

「本当に酷くなっていたらって、どのくらいを想像してたんだ？」

「最低でも、プレイヤー同士の殺し合いまで発展してるケースだな。さすがにそこまで悪化していると、治安を回復させても後始末が大変だ。」

本気で最悪なのは、犯罪系のギルドが町を支配してしまっている場合だな。その場合は、町をどうにかしようとするなら、戦争でもするしかないだろうが……。そこまで戦力が揃えられないようなら、町ごと見捨てるしかない可能性も出てくるな」

ブリーフィングでも、エラクリットの状況はそこまで悪化していないが、と前置きした上で、フォレスト・ツリーが他の町で起きうる可能性として挙げていた。

「そうになると、犯罪者の町のできあがり、という訳じゃな」

「うわ、それ、さいてー……」

ディアナの言葉に、リリーが半眼になってげんなりする。

「まあ、エラクリットはもう大丈夫だろう。ただ、治安の悪化以外でも単純に人が減りすぎて維持できなくなる町が沢山出てくるだろうな」

「ってことは、行きづらくなる場所も増えるって事か」

「ああ。当面は状況の変化を注視するしかないな」

「じゃ、しばらくはまたここを拠点に？」

レックの言葉に、グランズは即答を避け、

「……俺としてはそれがいいと思うが、みんなはどう思う？」

というグランズの提案は、

「僕はそれでもいい」

「俺も構わないぜ」

「わたしもいいと思います」

「あたしもいーよ」

「マージンは知らんが、私もよいぞ」

と、ここにいない一名を除く全員の賛成が得られた。

「そう言えばマージンさん、夜には合流できるのでしょうか？」

「馬を借りたと言っておったから、問題なかるう」

心配そうなミネアに、ディアナがそう声をかけた。

何故マージンがいないかというところ、本人は避難隊がナスカスに到着した後、臨時日本語教師の役目から逃げ出して、すぐにレック達に合流するつもりだったらしい。しかし、外国人プレイヤーの家の世話やら何やらで通訳が出来る人材を一人でも多く求めていたフォレスト・ツリーが逃すわけもなく、逃げ損ねたマージンはさんざんにこき使われ、解放されたのが昨日夜のこと。

そして今朝、報酬代わりに馬を借りて、こちらに合流するべくナスカスを発つたらしい。一人旅というのはあまり良くない感じもするが、馬を使っているの、空を飛べる魔獣を除けば大抵のエネミー（凶獣、魔獣、亜人種などプレイヤーに敵対する存在をまとめて呼ぶ場合には、こう呼ばれる）とは遭遇しても十分振り切ることが出来るはずであった。

「まあ、こつちに来たら来たで、また通訳としてこき使われるかも知れないけどな」

「あー……確かに」

クライストの不吉な推測に、仲間達は同意せざるを得なかった。

元々、英語が堪能な日本人プレイヤーはあまりいない。正確には結構な人数がいるのだが、そのほとんどは仕事柄フォーマル・アバ

ターでメトロポリスにいたプレイヤーである。キングダムで冒険をしているようなプレイヤーにも英語を話せるプレイヤーは少ないが、そのほとんどが最低限かそれよりちょっとマシな意思疎通が出来る程度。フランスやクライスト、ディアナもその部類に入る。日本語も英語も堪能なマージンのようなプレイヤーは、貴重な人材なのであった。

レック達がそんなことを話していると、周囲が急にざわつき始めた。

「何か起きた？」

きよるきよるするレックに、

「ああ、フォレスト・ツリーの連中が来たみたいだな」

広場から役場方面へと続く道へと目をやったフランスが答える。

「つてゆーか、すつごい人……」

「そうですね」

リリーとミネアは、むしろいつの間にか広場を埋め尽くすほどに集まっていたプレイヤーの数に驚いていた。

「みんな、安心したいのじゃろう」

訳知り顔でディアナが解説する。

「ま、この二週間はろくな事がなかっただろうからな。つてか、俺たちこんな端っこでいいのか？演説だかなんだか知らねーけど、こつからじゃよく見えねえんじゃねえのか？」

クライストが移動を提案したが、

「とつくにいい場所なんて空いてなかるうよ。それに、フォレスト・ツリーの話が一番聞きたいのは、私たちじゃなかるう」

「そうだな。ディアナの言うとおりだ」

と、ディアナ、フランスに却下された。

その間にも、边境の槍、サザビーズ、レッドハットのフロンティアから戻ってきた3つのギルドに護衛されたコンラッド達フォレス

ト・ツリーが広場へと隊列を組んで入ってきていた。

「はぁー、ずいぶん物々しいな」

感心したようにクライストが声を上げると、

「マジ？」

背丈が低く、人混みの中では何も見えないリリーに、グランズが、

「肩車でもしてやろうか？」

「う、それは恥ずかしいからいい……」

微笑ましいとも言えるやりとりで、レック達は笑みを浮かべた。

普段ならからかうクライストも、さすがに今は自重したらしい。

そうこうしているうちに、演説台の周囲を辺境の槍、サザビーズ、レッドハットのメンバー達が取り囲んだ。フォレスト・ツリーのメンバー達は演説台の横に控えている。その中を、左右に辺境の槍のギルドマスターのユージとサザビーズのギルドマスターのニコラウスを従えたコンラッドが、広場の片隅にある演説台にゆっくりと上がっていった。

それを見て、ざわめいていたプレイヤー達が急激に静かになる。彼らの視線を一心に受け、緊張したわけでもないだろうが、コンラッドは一度左右のユージとニコラウスと顔を見合わせ、再び広場を埋め尽くしているプレイヤー達の方へと向き直ると、「こほん」と一つ咳をした。

その挙動を見守り、息を呑む群衆。

「あー、俺の声がちゃんと聞こえているか!？」

コンラッドの第一声はそれだった。期待されていた台詞とはずいぶん違う言葉だった。

それでも、広場に集まったプレイヤー達は文句一つ言わない。ただ、聞こえていた証拠として、皆、無言で大きく頷いた。

それを見て安心したのだろう。コンラッドも軽く頷くと、

「俺はコンラッド。町の管理・運営資格を持つ公認ギルド、フォレ

スト・ツリーのメンバーだ」

既に彼の正体を予想していたプレイヤーも少なくなかったはずだが、それでも改めて直接聞いたためか、一部の聴衆から微かなどよめきがあった。

それが収まるのを待って、コンラッドは言葉を続ける。

「知つての通り、『魔王降臨』の際にこの町を管理していた公認ギルド、ネスト・オブ・ウイングにはこの町を管理し続ける能力がなくなってしまった。本来ならばその時点でこの町を放棄せざるを得ない。だが、町の管理は実ほどの公認ギルドであつても可能だ」

コンラッドはそこで一度言葉を切った。

その間にも、彼の次の言葉への期待が、聴衆の中で膨らんでいく。そして、彼らの期待していた言葉がついに、

「よって今日この時より、我々フォレスト・ツリーがここエラクリットの管理を引き継ぐ！以上だ！」

コンラッドの口から出てきた直後、広場に集まっていたエラクリットのプレイヤー達の間で、歓喜の声が爆発した。

管理ギルドの不在は、この町の行く末にとつてもない不安をもたらしていた。加えて、魔物の襲撃とそれによる多数の死傷者は、エラクリットのプレイヤー達に絶望に近いものをもたらしていた。

フォレスト・ツリーと彼らが連れてきた冒険者達の登場は、ジ・アナザーから脱出できない事実には変わりがないということを差し引いても、エラクリットのプレイヤー達に大きな安心をもたらしたのである。

コンラッドの宣言が終わってすぐだというのに、広場の真ん中の方はプレイヤー同士が抱きついたり、泣き出したり、肩を抱き合つて笑いあつたりと、いい意味で大混乱となつていた。そして、広場の中程に陣取つていた制圧部隊の冒険者達もそれに巻き込まれて、笑顔ながらも揉みくちやにされていた。

演説台に近いプレイヤー達は演説台へと突撃しようとして、護衛に当たっていたギルドのメンバー達に宥められ、押しとどめられている。

「うっわー……もー、しっちゃんかめっちゃんかだね」

あまりの混乱に微妙に引いているリリィ。

「ええ、広場の端で良かったと思います……」

本気で安堵しているミネア。

「それは俺への当てつけか!？」

とガツクリする（振りの）クライスト。無論、ミネアはそんなことをしないと分かっているの所行である。しかし、

「あ、いえ、わたしはそんなつもりじゃ……」

と慌てて両手を振って否定し始めたミネアをかばうかのように、

「か弱き女子をいじめるとは……恥を知れ!」

と、ディアナに思いつきり脳天を殴られていた。

そんな悪ふざけが出るあたり、レック達も多少、広場の陽気に当てられていたのだろう。

そんな中、いつも冷静なグランズが、

「ああ、フォレスト・ツリーの連中がしっかり戻っていくな」

すかさずそのことに気づいて、

「役場に行くぞ」

と仲間達に声をかけた。

「え？なんで？」

その理由を理解できないレックだったが、

「前と同じ建物をさっさと借りてしまいたいからな。出遅れると面倒だ」

その説明に納得した蒼い月のメンバーは、当分お祭り騒ぎが終わりそうにない広場を離れ、役場へと向かった。

「あー、久しぶりだわ、ここ」

「そうじゃな。ここを離れてから二月と経っておらんが、もう懐かしいのう」

夕方、日が暮れる前に、レック達は口々に久しぶりだの、懐かしいだの言いながら、前にギルドハウスとして使っていた建物の鍵を開けてなだれ込んだ。

サーカスに移る前の数ヶ月、拠点として利用していたエラクリットのことを、レック達は裏道までしっかり把握していた。その裏道を使って広場から役場に行ったレック達が、前にギルドハウスとして使っていた建物を借りられるかどうか、フォレスト・ツリーに問い合わせたところ、幸いなことにまだ空いていたので、その場ですぐに賃貸契約を結び、当面の拠点としたのであった。

ちなみに、フォレスト・ツリーは役場の整理や町の状態把握で相当ばたばたしていたが、サーカスから一緒にここまで来た誼もあって、イヤな顔一つせずにレック達の要望に応えてくれた。

……ただし、マージンがエラクリットに到着したら、フォレスト・ツリーの仕事を手伝うという条件付きで。

「このところ大変でしたし、やっぱり慣れた場所だと落ち着きますね」

「だね」

ミネアの言ったとおりなのか、レック達はだいぶリラックスできていると感じていた。

ただ……

「家具が足らんのか……」
「だな」

帰ってきたここには、今必要とされる家財道具がいろいろと足りなかった。

前に借りていたときに使っていた家具をそのまま置いていったので、人数分の椅子とテーブルはある。台所の棚などもある。

しかし、小さな物はサーカスに持って行ってしまったため、何も
ない。

「とりあえず、アイテムボックスに入れて持ってきた分くらいは出
しておこうか」

というグランスの言葉で、仲間達は各々のアイテムボックスから
皿やら箸やらスプーン、フォークやらを次々と取り出し、台所の食
器棚へと詰め込んでいった。

しかし、まだ足りない。

「クツシヨンは？」

「持ってきてねえよ！」

「鍋や包丁は？」

「ないな」

「ソファやベッドは？」

「それは最初からないじゃろう」

という具合に、ナイナイ尽くしである。

「まあ、フォレスト・ツリーが入ってここの治安も回復するだろう
から、明日からは開いている店を探して、誰か必要な物を買ってき
てくれ」

その言葉にレックが、

「グランスは？」

「情報集めを兼ねて、フォレスト・ツリーの手伝いでもしてくるさ。
あっちもこの状況把握で人手がいくらでも欲しいはずだ。場合に
よると、何人かに手伝って貰うことになるかも知れないが……ま、
ついでに給料でも貰って来れたら最高だな」

そう、グランスにはやりと笑って見せた。

ちなみに……

完全に日が落ちてからギルドハウスに到着したマージン。自分が
知らない間に、ギルドハウスのレンタルと引き替えに売られたこと

をミネアから聞かされ、

「なんでやあああああ!!！」

と叫んでいたのは些か同情の余地があるうか。

旅立ち前夜……より少し前

フォレスト・ツリーと共に蒼い月のメンバーがエラクリットに入ってから、一ヶ月が過ぎようとしていた。

エラクリットは完全に落ち着きを取り戻し、周辺の農地からの農作物の収穫や少し離れた鉱山からの鉱石の採取、各種アイテムの製作といった生産活動や、それらの取引という経済活動も『魔王降臨』の前と同じように活発に行われつつあった。フォレスト・ツリーの主要メンバーも二週間ほど前に入っており、エラクリットは名実共にこの地域における主要都市として、機能しつつあった。

一方で、ジ・アナザー全体としては、必ずしも状況が好転したとは言いが難かった。

各地にメンバーが散開していた流通系・商業系の大手ギルドがそのギルドメッセージを利用して連絡役となることで、大陸規模の情報網が構築されていたが、そこから入ってくる情報は芳しくないものが多かった。

まず、プレイヤー人口の激減に伴い数百もの町が放棄され、無人の廃墟と化した。その中には地域と地域を繋ぐ交通の要所となっていた町も幾つも含まれたため、孤立した地域や町が多数生じてしまっていた。

次に、世界規模での公認ギルドの機能不全。多くのプレイヤーが強制切断されたため、ほとんどの公認ギルドが大半のメンバーを失って事実上消滅していた。日本人主体の公認ギルドでは、少なくとも数のメンバーが残されたこともあり、各々の町の管理が継続され、治安も保たれていたが、ギルドマスターの（本人にとっては大変不本意だろうが）無事が確認されているのはフォレスト・ツリーのみであった。

さらには治安の悪化である。放棄されなかったプレイヤータウンでも、その多くで公認ギルドが機能せず、程度の差はあれ確実に治安が悪化していた。治安悪化を懸念したギルドやプレイヤー有志によって、秩序を取り戻した町も少なくなかったが、暴力・犯罪・独裁をモットーにしたようなギルドが町を支配してしまうケースも少数ながら後を絶たなかった。

そしてトドメとなるのが、魔物の襲撃である。エラクリットへの襲撃は、『魔王降臨』から間もないあの一回だけだったが、キングダム大陸全体では連日どこかの町が襲撃を受けていることが、分かっていた。治安が維持され防衛がしっかりしている町ですら多少の被害が出るそれは、まとめ役がない町では甚大とも言える被害を出していた。

それらの状況を放置しておく訳にはいかない、というのが多くのプレイヤーの共通認識であった。そこでフォレスト・ツリーが本拠地をエラクリットに移した翌日、連絡網を築き上げていた幾つかの流通系・商業系の大手ギルドの連名による呼びかけによって、キングダム大陸における主要ギルドによる遠距離会合が開かれた。

連絡員を介した会合になってしまったため、議事の進行はやたら遅かったものの、暫定的な事だけは何とか合意が為された。

まずは、「各町の治安強化」が速やかに決定された。これには一部の町を支配しているギルドによる他のプレイヤーへの暴力・犯罪的行為の禁止も含まれる。が、公認ギルドがない町では実効性に疑問符が残った点は否めない。

続いて、「孤立地域の回復」が決定された。孤立した小規模コミュニティは、自らを維持できずに破滅してしまう可能性があり、それを見過ごすわけには行かなかった。

次に、「大陸会議の設置」と「その中心にフォレスト・ツリーを据える」ことが決定された。フォレスト・ツリーの規模は、会合に

参加したギルドの中では決して大きい方ではない。しかし、「唯一ギルドマスターが健在の公認ギルド」という点が重視された。

公認ギルドの管理が放棄された町では、建物の新築はおろか、修理すら出来ないことも既に確認されていた。そのため、各地のプレイヤータウンを維持していく上で、残された公認ギルドの保護と拡大が最重要課題となったわけだが、「ギルドメンバーの参加を承認できるギルドマスター」がいなくなってしまうた公認ギルドの拡大は不可能である。結果、フォレスト・ツリーのギルドマスターはジ・アナザーに残されたプレイヤーの中で一躍最重要人物となったわけである。

最後に、キングダム大陸全体での連絡を受け持つギルドの設立である。この会合の時点では、複数のギルドが連携して大陸全体の連絡網を構築していたが、1つのギルドにまとめた方が効率がよいだろうということ、新しいギルドを設立することが決定された。

この際、メトロポリス大陸やカントリー大陸との連絡も試みられたが、メトロポリスの混乱はキングダムの比ではなく、無理に組み込もうものなら人口規模の大きいあちらの混乱に巻き込まれる恐れがあったため、断念された。カントリー大陸は単純に全く連絡手段がないため、どうにもならなかった。

おまけとしては、ジ・アナザーからの脱出についても話し合いがもたれたが、そもそも魔王を倒してもリアルに戻ることが出来るという確証がない。そのため、これについては二週間後に開催される「第一回大陸会議」に先送りにされてしまっていた。

以上の決定事項は、会合に参加したギルドが管理していた全ての町で公表され、残されたプレイヤー達に、運営に代わる新しい管理体制の登場を実感させることとなった。小規模ギルドやソロプレイヤーの意見が反映されないことを問題視する向きもあったが、決定内容は無難な物であったため、大きな反発は生まれなかった。

そして、今日。

第一回大陸会議が予定通り開催され、エラクリットの広場では夕方その内容が発表されることになっていた。

一ヶ月前にコンラッドが上った演説台の周辺には、あれからフォレスト・ツリーやエラクリットの護衛を買って出ている辺境の槍、サザビーズ、レッドハットといった戦闘系、冒険者系ギルドのメンバーが既に配置につき、広場を埋めつくさんとするプレイヤーから演説台を守っていた。

「今日もすつごい人出よね」

「一ヶ月前より増えておらんか？」

「周辺の町からも人が流れ込んでくるからな。当然だろう」

ディアナの疑問にグランスが分かりきったことだと言わんばかりに答える。

ちなみに、この一ヶ月の間、蒼い月のメンバーが何をしていたかというと、

グランスはレック、クライスト、ディアナの3人と一緒にフォレスト・ツリーの手伝いをしていた。最初の一週間は空き家になってしまった家の確認であり、その後はディアナを外した3人で警備の仕事に回されていた。グランスだけは、頻繁に会議などに呼ばれ、意見を聞かれたりもしていたようだったが。

マージンもフォレスト・ツリーにこき使われていたが、午前は日本語教室の講師、午後は外国人部隊の指揮か、役場の窓口での外国人プレイヤーへの対応となっていた。

一応、彼らにはフォレスト・ツリーから心ばかりの給料が支払われていたので、リリーとミネアはそれを使って、蒼い月の食生活およびギルドハウスの掃除、必要な生活物資の調達に追われていた。そのおかげで二人の家事の腕前は急激に伸び、その成果は「あかし

たち、もう、いつでもお嫁に行けるわ……」と疲れ果てた様子でぼやいたリリーの台詞の通りである。

今日は大陸会議が決定した内容を確実に聞き取るために、レック達は広場の中でも演説台に割と近い場所に陣取っていた。

ただし、例によってマージンはフォレスト・ツリーに捕まり、演説内容を英語に直して発表することになっている。ので、実は後からマージンに聞けば良いのだが、

「毎回お祭り騒ぎをスルーするのも勿体ない」

というクライストの台詞で、全員でぞろぞろやってきた次第である。お祭り騒ぎになるとは限らないのだが。

「今日の大陸会議って、やっぱり魔物とか魔王関連なのかな？」

「一応、それをメインにするんじゃないか？ほっとく訳にもいかなだろーし」

確認するように言ったレックに、そうだろうと肯定するクライスト。

「しかし、どんな方針になるんだろうな。グランスは何か知ってるか？」

「一応、断片的な話くらいは耳にしているが、折角の楽しみを奪うのは野暮だろう？」

そう、ニヤリとしながら解答を拒否したグランス。

「マージンも当然知っておるのじゃろな」

「多分な。同時通訳だと変な訳をすることもあり得るから、もう一通り目を通してはるはずだな」

「そなんだ？じゃ、ギルドメッセージでちょっと訊いてみよ」

そう言っって個人端末を取り出そうとしたリリーを、

「守秘義務とかで拒否されると思いますよ」

とミネアがたしなめる。

「まあ、そろそろフォレスト・ツリーの連中も来る頃だ。それまで

待つんだな」

個人端末で時刻を確認したグランスも、そうリリーを宥めた。

それからしばし、レック達が天気だの今夜の食事のメニューだの話題で時間を潰していると、広場に集まったプレイヤー達のざわめきの質が変わってきた。

「来たみたいだぜ」

背伸びして確認したクライストがざわめきの原因を口にする。

その言葉通り、少しすると演説台の上にコンラッドが上がってきた。

フォレスト・ツリーのギルドマスターら幹部達がエラクリットに移ってきた後も、彼らは他の用事が忙しく、エラクリットの町長職はコンラッドが未だにやっていた。プレイヤー達への重大案件の説明なども彼の役目である。

その横にはマージンの姿もあった。蒼い月のメンバーのはずなのだが、最近はフォレスト・ツリーのメンバーなんじゃないかと思うほどに、そちらでこき使われている。

「うわ、もうやつれてる……」

リリーの驚きに、マージンの姿を確認した仲間達もつんつんと頷いた。

連日、夜中に疲れ果てた様子でギルドハウスに帰ってくるマージンだったが、この調子だと昼前にはぐったりしてるのかも知れない。

台上に上ったコンラッドは広場に集まった群衆をいつも通り見渡すと、徐に口を開いた。

「エラクリットのプレイヤー諸君。本日ここに集まっているのは、当然、第一回大陸会議の結果を知るためだろうな。実際、俺もそれを発表するためにここに立っている」

コンラッドが一度言葉を切ると、横に立っていたマージンが英語で同じ内容を繰り返す。

日本語での日常会話で事欠くような外国人プレイヤーはほぼいなくなつたものの、一方的な発表、それも普段は使わないような言葉が出てくる場面では、まだまだ万全とは言い難いプレイヤーがいるためである。

マージンの通訳が終わると、コンラッドが再び口を開いた。

「今日の会議の議題は1つだけだった。つまり、魔王討伐だ！」

予想通りの言葉に、今度は広場全体がざわめいた。

「俺たちがジ・アナザーから脱出する方法は、今のところ、魔王自身と言つたとおり、魔王を倒してみるしかない！だが、この一月はジ・アナザーで生き延びることで精一杯だった！違うか!？」

「おー！」

「その通りだ！」

今度は群衆が口々にそう叫び、しばし、コンラッドの演説は中断する羽目になつた。マージンの通訳も後回しである。

マージンの通訳が終わると、今度は外国人が叫び出す………という事はなかつた。どうやら、叫ばないように一言注意を入れていたらしい。

「結論から言おう。魔王討伐のために、大陸会議は2つの案を採用した。1つは冒険者達による小規模パーティでの活動だ。RPGの魔王討伐物を想像してくれればいい。個々に活動して貰い、強くなつて魔王と戦つて貰う。そのため支援策も決定された」

その言葉に、群衆の一部がどよめいた。

「もう1つの案は、強力な軍を組織し、それによる討伐を試みるというものだ。」

ただ、正直、どちらの方法が有効なのかは分からない。大陸会議の方でもその点は大いに揉め、結局両方採用することになつた」

これには聴衆からも、「だよなあ」「軍だと小回りが……」「数人だけだと囲まれたら……」とか、様々な声が聞こえてきた。

今度もコンラッドは、その声が自然に止むのを待っていたようだが、いつまで経っても静まらないので、

「あー、静かにしてくれ。まだ話の続きがあるんだ」と、声を張り上げることになった。

「大陸会議の計画では、個人あるいは小規模ギルドの冒険者に様々な支援を行う冒険者ギルドを立ち上げ、各地で起きている解決して欲しい問題や、調査して欲しいことをクエストという形で提示する。クエストの達成時には当然、報酬も出す。

それとは別に、軍への参加希望者を募り、徹底的な訓練を施す。軍は大陸会議からの命令によってのみ動いて貰うが、任務には治安が悪化しすぎた町を武力制圧するというものも含まれるだろう。

最終的には、冒険者達が集めた情報を集約して、魔王の居場所や能力が判明した後に、軍を動かす予定だ」

そこでコンラッドは一度言葉を切り、マージンが英語で通訳し終わるのを待った。

広場のプレイヤー達は、その間にも仲間同士でざわざわとなにやら話し合っていたが、再びコンラッドが口を開くとまた静かになった。

「詳細は後日、改めて発表する。何しろ、冒険者ギルド 呼び名はいいな も、軍も準備はこれからだ。組織や施設の準備に最短でも一週間程度かかる。一週間後に町の各所に掲示させるから、まずはそれを見てくれ。以上だ」

そう言っただけでコンラッドが演説台から降りて去っていった。広場のざわめきはなかなか消えなかった。

その夜。

レック達は蒼い月のギルドハウスで今後どうするかについて、話し合っていた。

勿論この手の言い出しっぺはグランズ……のはずだったが、今回はマージンが言い出したことだった。仲間達はその理由を「いい加

滅フォレスト・ツリーから逃げたいんだろう」と確信していたが、マージンが言い出さなくとも、そろそろどうするかを決めるべきだと全員が何となくは思っていたので、誰もマージンを追求したりはしなかった。

「要するにやな、このまんまエラクリットに住み着くか、それとも魔王を倒すための旅に出るかってことや！」

余程、フォレスト・ツリーから逃げ出したいのか、全力全開で力説するマージン。

「わいとしてはやな！わいらを閉じ込めくさったアイデア社にバシーンゆうたるためにもやな！魔王をしばき倒して外に出るべきやと思っんや！」

「まあ、魔王を倒すのは誰でもいいと思うのじゃがな」

ボソツと突っ込んだディアナの台詞は敢えてスルーするつもりなのか、マージンの演説は続く。

「魔王を倒してリアルに復帰するっちゅーのは、アイデア社の思うとおりに踊っとる気がするねんけどな！でも、リアルに戻らんことには始まらんや！」

「貯まつてたんだね……」

「ですね……」

何がとは言わず、同情の眼差しを送るリリーとミネア。

クライストは見せ物でも見るかのように楽しんでおり、止めるつもりはないらしい。

レックとグランスも、この際、貯めてる物を全部吐きだして貰おうと、しばし放置する事に決めていた。

「どーせな、魔王なんてな、中央大陸にいるに決まっとるねん！スタートから一番遠くにラスボスがあるんは、RPGの定番や！」

日頃のストレスという薪はなかなか燃え尽きないらしく、油を注ぐまでもなく一人でヒートアップしていく……と仲間達が思っている。

「でもな、中央大陸に渡る方法がな……あらへんねんな……」
と、とても大事な事実気づいて、空気が抜けたゴムボールのよう瞬く間に萎んでしまった。

その様子を見て、悪いと思いつながらも、これで話が出るなとや
つとグランスが口を開いた。

「まあ、エラクリットに住み着いて一住人として、来るかどうかも
分からない魔王が倒されるその時を待つか、自分たちから戦いに行
くかだな」

「わたし達に倒せるんでしょうか？」

不安そうなミネアに、

「必ずしも私達が倒す必要はなからう。私達が動くことで、魔王が
倒されるときが少しでも早くなるなら、それで意味があるのではな
いのかのう？」

「それなら町にいて、戦いに出かけるプレイヤーの支援に回るのも
ありつてことじゃない？」

「いや、それはつまんねーよ」

クライストに言われ、レックもそれもそうかと思ひ直す。

「でも、戦うって事は、死ぬかも知れないってことよね？」

「そうじゃな」

リリーの言葉をディアアナが肯定する。

「確かに死にたくはねえな」

死ぬかも知れない。その一点は、とても重い。

特に、まだ仮想現実にいるという自覚は残っていても、感覚とし
てはこのジ・アナザーこそが現実であると感じつつある今は。

その重さを皆が感じたのか、しばし、沈黙が落ちる。

この場にいる全員が、死ぬことについて考えていた。

そして、グランスが口を開く。

「俺は戦いたい。戦ってリアルへ戻れる可能性を勝ち取りたい。リ
アルには親や弟もいるんだ。家族に心配させたまま、こんな所に閉

じ込められてはいたくない。

確かに、戦えば死ぬリスクを負うことになる。でも、今こうして
いる俺は、リアルな家族にとっては死んでいるも同然、いやそれよ
り酷い状態なのかも知れない。

だから、俺は戦って、リアルに帰りたい」

その言葉は、レック達にリアルにいる家族達のことを思い出させ
た。あるいは仲の良かった友達のことを思い出させた。

「そうじゃのう。私達はここに慣れてしまえば、平和に生きていけ
るかも知れんが、リアルな家族や恋人はそうもいかんからのう」

「俺も彼女を泣かせっぱなしってのは御免被るな」

「わたしも、父と母がいます。たぶん、わたしが目が覚めるのをず
っと待つていてくれると思うんです」

「あたしも、妹がいるんだよね。このくらいのちっこいのが。すっ
ごく可愛いんだよ？それにパパとママも。泣いてるのかな……泣き
ながらあたしが起きるのを待つていてくれるのかな」

皆が次々とリアルな家族を、恋人を思い出す中で、レックも家族
や友人を思い出していた。

「僕も、みんなと同じだよ。このままじゃ行けない。だから、待つ
てるだけなんて、絶対イヤだ……！」

それがレック達の気持ちだった。

「それじゃ、決まりだな。俺たちは魔王と戦う。そして、全員で生
きてリアルに戻る」

それにみんなが頷いて……そこで約一名、さっきから何もしゃべ
ってない仲間がいることを思い出した。

「そう言えば、マージン。おぬしはどうするのじゃ？」

燃え尽きたのか、単にばてたのか、テーブルに突っ伏していたマ
ージンをつんつんと突きながら、ディアナが問いかけると、

「あ……。リアルじゃ、わい、天涯孤独やねん。やから、個人的
にはリアルに戻る必要は必ずしもあらへんねんなあ」

地雷だった。

思わず顔を見合わせる仲間達。

「それは……済まんことを訊いたのう……」

申し訳なさそうに、頭を下げるディアナ。もともと、突っ伏したままのマージンにそれが見えるわけもないのだが、地雷を踏んだ自覚がそうさせた。

「ええて。今更気にするようなことでもあらへんしな」

そう言いながら、マージンはよっこらせと身体を起こし、

「ま、今はここがわいの居場所で、蒼い月のみんなが大事な仲間や。リアルに戻るために魔王を倒すゆんなら、わいも力を貸すで」
そう笑って見せた。

「で、魔王を倒すゆーても、軍に入るんと冒険者として旅に出るんと2つの選択があるわけやけど、どうするんや？」

また通訳としてこき使われそうだから軍は避けたい、という言葉
を飲み込んで、マージンは仲間達に訊いた。

「生存率は高そうだけどな、規律で縛られた集団っつイメージはイヤだよな」

クライストが言うまでもなく、蒼い月のメンバー全員がそう思っていた。

「大きすぎる集団の中で、うまく溶け込めるかどうかという問題もあるしな」

「あう、すいません……」

フランスの言葉にミネアが小さくなり、

「こら！ミネアいじめたらだめでしょ！」

「いや、リリーも集団戦には向いてないと思うけど」

「うぐ……」

フランスを叱ろうとしたリリーも、レックに突っ込まれ、撃沈した。

そういうやりとりはさておき、

「選択の余地はないという事じゃな」

蒼い月は軍には参加しないことはすぐに決まった。

「となると、今後の方針だが、さすがにいきなり旅に出るのはまずいな。準備も必要だし、当面の目標も決めないとな」

グランスの提案に、

「魔王を倒すのは目標じゃないの？」

「それはゴールやる。そのゴールまでの道のりが見えてへんかったら、迷子になるやん」

リリーにマージンが説明する。

「準備というと、やっぱり、武器防具にポーションだよな」

「それ以前に、一月も戦闘せんとうをしておらんのじゃ。鍛え直す必要もあるっ」

どこかワクワクしているクライストと、いつも通り落ち着いているディアナが必要な準備を指折り数える。

それを見ていたレックはふと思ったことを言ってみる。

「鍛冶や裁縫系のスキル習得しようかな」

「あー、生産系スキルか……」

「武器や防具の修理くらいは出来た方がいいかもしれませんね」

「町から遠く離れた冒険をするなら、多少出来た方がいいかもしれん、というか必須かもしれんっ」

蒼い月のメンバーは今まで生産系スキルに手を出したことの無いものの、その有用性に疑う余地はなかった。

「それ以前にさ、習得アイテム、まだ買えるの？」

「スキルを覚えているプレイヤーから習えばいいのではないかの」
リリーの疑問にはディアナが答えた。

ちなみに、ジ・アナザーのスキル習得は大きく分けて2つの方法がある。

1つめはスキルについて書かれた本を読むことで、これによって個人端末のスキル一覧に該当するスキルが追加される。もう1つは

NPCがそのスキルに熟練した保管プレイヤーから習うという方法である。

ただ、ジ・アナザーにおけるスキルとは、アバターをシステムのサポートによってパターン通りに動かすためのものである。そのため、一切のシステムサポートを受けなくていいのなら、見よう見まねでスキルを扱うことも出来た。ただし、当然ながらこの場合、個人端末にコマンドとしては登録されない。コマンドからスキルを使った場合は、システムにアバターの制御を任せてしまえばどんな厄介なものでも簡単に作れるのであるが、それも出来なくなるので本格的に何かしたいときにはお勧めできなかった。

唯一これらの方法に該当しないのが、魔法系のスキルである。こればかりは凶悪なエネミーが無数に彷徨くダンジョンやら山やら森やら……兎に角、行くのも大変なところにある祭壇で祈りを捧げ、手に入れるしかないとされている。加えて、魔法の希少価値もあって、発見した祭壇を仲間以外に教えることは無かったため、普通は祭壇の場所自体知られていない。そのため、ライティング（明かり）のようにジ・アナザーのプレイ開始直後に習得できるごく一部の魔法を除けば、使えるプレイヤーはほとんどいないのであった。

「となると、いくつかの生産スキルの習得も準備に含めておいた方がいいな。訓練期間については、また考えればいいだろう」

「いつの間にか取り出したメモ用紙に、グラランスが準備として必要だと思われることを、次々と書き留めていく。」

「で、必要だと思われる生産スキルはなんだ？」

「とりあえず鍛冶に裁縫、ポーション作成かの？」

「鉱石製錬もあった方がよくないか？」

「細工師も欲しいね」

「………とりあえず、全部だな」

訊いては見たものの、キリがなかったので途中で書くのを止め、代わりに「全部」とメモに書き込むグラランス。

そのメモを横から覗き込みながら、

「あー、この辺は一通りできるので」

マージンが爆弾を投下した。

「「「出来るのか!?!?!」」」

「「「つてゆーか、いつの間に!?!?!」」」

一斉に驚く仲間達。

「この間まで、生産スキルなんて1つも覚えてなかっただろ!?!?!」

そのはずだった。が、マージンは自慢げに……ではなく、どちらかというトイヤそうに、

「日本語教えてやってた連中に教えてもろたんや。連中はいいやつらやねんけどな、フォレスト・ツリーにこき使われて覚えたゆうんがな……」

「それか。……熟練度は?」

納得したグランズに同情の眼差しで訊かれ、

「さすがに覚えとるってだけやな。時間作って練習せな、役にはたたんし、教えることもでけんな」

さすがに、訓練する暇は無かつたらしい。

「その辺はエラクリットを離れてからでもいいじゃろうな」

「ここにいる間は練習できないんが前提かい」

「ここにおる間はフォレスト・ツリーにこき使われるじゃろうからな」

「がふっ……」

反撃の余地無くディアナに撃沈され、再びマージンはテーブルに突っ伏した。

そんなマージンを無視して、残りのメンバーは旅に出るための計画の話が続け……

二週間後にエラクリットのギルドハウスを解約し、旅に出ることを決めた。

旅立ち

蒼い月がエラクリットを発つその朝は、残念ながら晴天とはほど遠く、雨が降ってないだけマシ。そんな朝だった。

「ここ、もう戻ってこないのかな？」

エラクリット西門で、ふと漏らしたレックの呟きに、

「通ることくらいはあるかもな。でも、住むことはもう無いんじゃないか？」

クライストが静かに答える。

これからの生活は、魔王について調べながら、自分たちを鍛え続けることになる。町でのんびりした生活に戻ることはない。

そう、レック達は決めていた。

大陸会議によって一週間前に立ち上げられた冒険者ギルド（これに伴い、従来の仲間同士のギルドはクランと呼称を変更された）と軍は既に活動を開始していた。いずれもまだ準備期間中ということもあり、大した活動はしていないのだが、冒険者ギルドではいくつかの魔法の祭壇の場所の情報が公開されていた。魔王討伐のため、祭壇を発見したプレイヤーが公開に同意したのだそうだ。

蒼い月のメンバーも冒険者として冒険者ギルドに登録を済ませ、祭壇の情報もしっかり貰ってきていた。

「最初は、雨の森だけ？なんか、ずぶ濡れになりそうな名前だよ
ね」

「目的地はそうじゃが、すぐには行けんじゃろうな」

「まー、死にたくはないもんね」

リリーの言ったように、レック達はまず雨の森を最初の目標に決めていた。ギルドが公開した魔法の祭壇の1つが、雨の森の奥にあ

るのだ。

そこで覚えられる魔法は「治癒」。名前の通り、怪我やダメージを癒す魔法である。これからの冒険で、メンバーの生存率を少しでも高めるためには絶対欠かせない魔法であった。

ただ、例によって、周囲には強力なエネミーが沢山棲息しており、そこまで行くのは大変だと思われた。実際、情報が公開されたとき、多くの冒険者がため息をついたくらいである。

「ぶつちやけ、どつかの強いギル……じゃなくてクランやな。強いクランに付いていって、一緒に覚えさせてもらうんが楽やねんけどなあ」

マージンが言った方法もメンバーの間で検討はされたのだが、実現できそうにもなかった。

というのも、戦力が揃っているクランは大陸会議の要請の下、各地の治安維持に派遣されているためである。実際、冒険者ギルドの方でも、治癒魔法などのいくつかの魔法を習得するためのツアーを組もうとしていたが、断念せざるを得なかった。

「とりあえず、雨の森に一番近いエントータだな。そこで雨の森の情報を集めないとな」

懐からキングダム大陸地図を取り出し、グランズ。

「幸い、大陸の南西部の町は、大体治安状況も落ち着いているという話だしな。幾つか魔物の襲撃を受けたところもあるが、壊滅するほどの被害でもないらしい。エントータまでは問題なく行けるだろう」

「その後、すぐに森に行けるといいけどな」

「そればかりは行ってみないと……。今のわたし達の手に負えないほど強いエネミーがいるようなら、対策を考えないといけませんし」
「場合によると、しばらくは雨の森入り口で戦闘訓練……になるか」

もしれんな」

「それでもええんとちゃうか？雑魚相手にしてるよりは、早く強くなれるやる」

ジ・アナザーでのキャラ育成はレベル制ではないとされているが、自分のステータスすら見ることができないため、開発したイデア社以外は誰も正確なことは知らなかった。ただ、日常の運動や訓練だけでもある程度は筋力が上がることや、弱い敵よりは強い敵と戦い続けた方が、早く強くなれるとは言われていた。

「ま、悩むより産むが易しや。行ってみて考えたらえーねん。こんな世界やし、死なな何とかなるって」

気楽に言い放ったマージンに、グランスは苦笑しながらも、

「そうだな」

と賛意を示し、

「じゃ、行こうか」

と仲間達を促した。

そして、およそ20分後。

草原とはいえ、起伏のある地形を走っている街道の上でレック達は一度立ち止まり、後ろを振り向いた。

「今まで幾つもの町を離れてきたけど、今回だけはちょっと違うね」「うまく言えないけれど、レックが感じていたことを仲間達も感じていたのだろうか。」

丘の向こうに見えなくなろうとしていたエラクリットの街並みを目に焼き付け、蒼い月のメンバーは西へと歩き出した。

旅立ち（後書き）

これにて第一章は終わりです。

で、今後は章の最初の話の前書きと、章の最後の話の後書きしか書かないつもり（PDFの時、その方が読みやすい気がする）なので、今までの各話の前書きと後書きも整理しました。

せつかくなので、第一章の分はここに移動させておきます。

・日常

11/8/27 主人公の所属ギルドの名前を入れました。

修正前：ギルドの仲間達との待ち合わせ場所

修正後：所属ギルド「蒼い月」の仲間達との待ち合わせ場所

・東の町へ

だらだらと長くなる予感。

・魂の牢獄

やっとちよつと話が進んだかも。

・フォレスト・ツリー

書きためていた在庫が尽きましたので、更新ペース落ちます。しかし、登場人物増えてきた……設定もますます増えてきた……

フィールドの広さが登場人物だけでなく、作者にも疎まれつつある今日この頃。

・避難当日の朝

台風がすごいです。暴風圏直撃つばいです。

・サーカスからの撤退

台風で家に閉じ込められていたので、連投。

途中に出てくる英語はかなり怪しいです。ハイ。

しかし、いつになったら、主人公達だけで旅に出られるんだろう……あと2〜3話のうちに旅に出る予定ではあるので、そうになったら、章立てを編集……するかもしれません。

・エラクリット

そろそろ旅に出て欲しいので、書くペースが上がってます。後日、修正が入る可能性も高くなってます。

というか、いい加減、フォレスト・ツリーから離れてくれと……

・旅立ち前夜……より少し前

9/14 スキルについての説明が不足していたので、追記・修正しました。ストーリーには変更無し。

以下、追加文章です。探す手間をかける必要もないと思うので。

「ただ、ジ・アナザーにおけるスキルとは、アバターをシステムの

サポートによってパターン通りに動かすためのものである。そのため、一切のシステムサポートを受けなくていいのなら、見よう見まねでスキルを扱うことも出来た。ただし、当然ながらこの場合、個人端末にコマンドとしては登録されない。コマンドからスキルを使った場合は、システムにアバターの制御を任せてしまえばどんな厄介なものでも簡単に作れるのであるが、それも出来なくなるので本格的に何かしたいときにはお勧めできなかった。」

・旅立ち

なんだかんだで、ユニーク300越えました。お気に入り登録も含まれありがとうございます。

さて、やっと、蒼い月のメンバーが旅に出ました。

しかし、主人公のつもりだったレック君、影が薄いです。

どっかのアニメのお団子ヘアーの主人公みたいです。

もうちょっと、濃い性格にすれば良かった……手遅れだけど。

エントータの食堂にて（前書き）

第二章

やっと旅に出た主人公たち一行。でも、彼らが活躍するのはまだまだ先。今は力や知識を蓄える雌伏の時。

エントータの食堂にて

「全然見つからないね……」

夕食を食べながら、ため息をついたのはリリーだった。

「簡単にいくとは思っていませんでしたけど……思っていた以上に大変ですね」

箸を止めてミネアも同意する。

雨の森にあるという魔法の祭壇を目指して、エントータに着いてから早2週間（エラクリットからエントータまでは約10日）。

蒼い月のメンバーは行き詰まっていた。

理由は簡単で、雨の森という条件と、そこに棲むエネミーである。雨の森のエネミー自体は確かに強いものの、蒼い月のフルメンバーで挑めば、何とかならないこともなかった。なので、雨の森の入り口付近で雨の森のエネミーとの戦闘に慣れながら、訓練を積んだのは最初の一週間だけだった。が、そこからが大変だった。

雨の森はその名の通り、年がら年中雨が降っている。当然、地面は水浸し……なんてものではなく、その辺中に川が出来ていて、川に当たるたびに迂回しなければ進めない。おまけにうっすらと常に漂っている霧のせいで視界も悪い。そんな中をエネミーを警戒しながら進まなくてはならないので、探索がさっぱり進まないのである。場所さえ分かれれば……とは思うものの、冒険者ギルドで公開された情報にも、詳しい位置は不明……などと書いてあった。

「ま、これだけの連中が毎日探しに行ってるんだ。俺たちじゃなくてもそのうち誰かが見つけるさ」

箸をくるくる回しながら言ったクライストを、

「行儀が悪いぞ」

と、ディアナがたしなめた。

ちなみに、エントータには今、かなりの数のプレイヤーが集まっている。理由は蒼い月のメンバーと同じで、「今後の冒険に治癒魔法は欠かせない」と考えているからだ。

当然、大陸会議でもこのことは予想はしていて、公認ギルドメンバー不在により管理不能に陥っていたエントータに、「町作り協議会」のメンバー数名が護衛を連れて入り、雨の森を目指す冒険者プレイヤー達の支援を行っていた。

その支援の最たるものが宿代の大幅割引であり、蒼い月メンバーが利用しているような安宿なら、事実上タダで泊まることが出来た。また、魔法の祭壇の搜索も主導しており、闇雲に探すのではなく、「祭壇が見つからなかったエリア」の情報を共有することで、消去法で祭壇がある場所を特定しようとしていた。まだ、雨の森全体の10%も探索が終わっていないが、今も各地から冒険者を目指すプレイヤーが少しずつ流れ込んできており、遅くてもあと3ヶ月以内には発見できる見込みだとされていた。

なお、探索情報はギルドの方で買い取って貰えるため、見つかるまでエントータで時間を潰そう　と考えるプレイヤーは少数派で、探索を出来るだけの力量があるプレイヤーは皆、どこそのエリアには祭壇はなかった　という情報を連日のように持ち帰ってきては、ギルドに売り、毎朝ギルドが更新するその情報をチェックしては再び雨の森に入っていくという毎日を過ごしていた。

蒼い月も言わずもがなである。

「グランスはあとどのくらいで祭壇が見つかると思う?」

「最大三ヶ月かかるというなら、期待値としてはあと二ヶ月って所だろうな」

レックの質問に、頭の中で簡単な計算を行って答えたグランス。

「ただ、未探查領域にはもっと強いエネミーや厄介な地形が潜んでいるかも知れん。期待しない方がいいだろうな」

釘を刺すのも忘れない。

「じゃ、どの辺にあると思う？」

この質問にはここにいたメンバー全員が耳を傾けた。

この質問には即答しづらかったらしく、グランスは口をもごもごさせ、何か言い淀んだ挙げ句、諦めて、

「普通なら可能性が高いのは一番奥だろうな」

分かりきった事実を仲間に告げた。

雨の森は2つの山脈に挟まれた三角形の形をした地域に広がる森である。南西のエントータから入る以外は、北と東を囲む山から入るか、北東の谷から降りてくるのだが、いずれのルートも険しい山とそこに棲む魔獣達によって妨げられていた。

その雨の森の一番奥とは、北東の谷へ抜ける付近ということだ。

だが……

「普通ならってどういう事じゃ？」

グランスの言葉に引っかかりを覚えたディアナが首をかしげる。

「ああ、多分そこにはない」

「何で、そう言いきれるんだ？」

「そんな分かり易いところにあつたら、雨の森のどこにあるか分からないなんてことにならないだろうが」

もつともな説明に、「あー」と納得する一同に、グランスは補足を付け加える。

「まあ、祭壇とか言うくらいだ。多少特殊な地形とか大きな遺跡は期待してもいいんじゃないか？」

それで一度会話が途切れ、

「あー、今日もよー働いたわー」

しばらくすると、マージンが帰ってきた。

いつも通り、一人だけ別行動である。正確には午前中の雨の森の探索にはつきあうが、午後からのエントータ警備の仕事には参加し

ていない。

エントータでも魔物の襲撃に備え、雨の森を探索している冒険者に給料を支払う代わりに、時間を切ってエントータの警備について貰っている。

蒼い月もそれに参加しているのだが、マージンだけはその時間帯、鍛冶場に顔を出して鍛冶の訓練をしたり、冒険者達の武器や防具の修理（簡単なもの限定）を手伝ったりしていた。

「おかえり〜。今日はどうだった？」

「ぼちぼちやな。ちょっとしたナイフや短剣くらいなら作れるけど、出来はまだまだ微妙やわ」

そう言いながら、マージンは空いていた席に座り、仲間達が注文しておいてくれた料理に早速手を伸ばす。

「修理の方はどうなんだ？」

聞いてきたクライストにちらりと目をやり、

「刃物を研ぎ直すんはもう問題ないわ。ちょっとくらい曲がったゆ

ーんも直せるで。割れとつたら無理やけどな」

「まだまだ素人に毛が生えた程度ってことか」

「そんならいやなー」

「そう言えば、生産スキルってコマンドどんな感じ？」

「ふがふが……」

リリーの質問に食べ物を入れたまま答えようとして、

「……やめい」

「ん。確かに声がでんかった」

白い目で睨むディアナに、マージンは真面目に返すと、リリーに視線を戻し、

「作れるアイテムは図面を見たら端末にコマンドが登録されよるねん。後は図面に書かれてる材料と道具を揃えて、コマンド実行したらとりあえずそのアイテムが完成するっちゅーわけや」

自慢げに解説するマージン。だが、

「まだ、小物しか作れんのじゃろうが」

ディアナの厳しい指摘に、「うぐ……」と言葉に詰まった。

「じゃ、作れないアイテムは図面を見てもさっぱり？」

「少なくとも端末にコマンドとしては出てこーへんな。まあ、見よう見まねで作ってみることは出来るやろうけど、間違いなく失敗作になるやろうな」

マージンの返事には、質問したりりー以外の仲間達も興味津々で聞いている。生産なんてやったこと無いし、やろうと調べてみたこともないので、全く知らなかったのである。

「まあ、祭壇に行くまでに、まともな武器や防具を作れるようになっておいて貰えると助かるが、どのくらいかかりそうだ？」

「そやなー……今のペースならあと一週間くらいで、ロングソードやブロードソードなんかは何とかなるんちゃうか？盾も何とかなると思うけど、それ以外の防具はまだまだ無理っぽいわ」

フランスの質問に、鍛冶場で周囲のプレイヤーから聞いた話を思い出しながら、マージンは答えた。

「防具の方が難しいんですか？」

「ああ、人間の身体にフィットする形にせなあかんからな。構造が複雑な分面倒なんや。その点、剣や斧なんかは構造単純やからな。大物やないかぎり、すぐ覚えられるらしいわ」

既に食べ物の無くなった皿の底をフォークでつつつきながら、ミネアに答えるマージン。

「他の生産スキルはどうなってんだ？」

「剣の柄やら何やら武器防具を完成させるのに必要な細工はちょっとやっとなるけどな。ポーション作成は時間がたりんわ」

「ポーション作成はまだ出来ないと言ったことか」

「全くでけへんわけちゃうで？ただ、作れる種類と品質に問題があるだけや」

「それ、役に立たないのと同じだと思っけどな」

クライストの言葉にぐうの音も出ないマージン。

「裁縫はどうなんですか？」

「さっぱりやな」

「じゃ、新しい服は……」

「買うしかあらへんな」

「そこは結局いつも通りのままなんですね……」

残念そうにミネアは呟いた。

ジ・アナザーでは、もともと服はいつか破れるものである。なので、『魔王降臨』の前から普通にプレイヤーによる衣料品店もあったし、『魔王降臨』から2ヶ月以上経った今では、残されたプレイヤー達が生活の糧を得るために再び店を開いているので、買うのは困らなかった。

「まあ、破れたところや解れたところを直すくらいなら、裁縫スキルいらんしな」

「それくらいなら私達にもできるしのう」

「そや。そんで、わいにはデザイン力が些か足らん。今でも縫え言われたら縫うことくらいはできるけどな。まあ、服だけは、買った方がええと思うで」

「あー、それはあるかも」

ダサイ服は着たくないよと、リリーが頷く。

「でも、それって鎧も微妙って事じゃありませんか？」

「んー……そやな」

ミネアの指摘に渋々同意するマージン。

「まあ、作る時にはデザイン描いてもらうつてから作るようにするわ」

「それだったら、服もできるんじゃない？」

「かもしれへんなー。ま、裁縫は後回しにするけどなー」

結局、マージンは服を作る気はないらしい。

「まあ、服談義はそれくらいにしてだ。明日からの予定だがな」

放っておくと、そのまま服のデザインがどうのこうなので、終わりそうにないと感じたグランスが、話を無理矢理変えた。

「そろそろ、昼までに町に帰ってくるような探索だと、雨の森の奥までいけないからな。来週ぐらいから丸一日使った探索に切り替えていこうかと思うんだが、どうだ？」

「そうだね。もう、森の縁に近いところはほとんど探索終わってるし」

レックの言ったとおり、森の入り口付近は既に探索され尽くしつつあった。グランスの提案もそのためだった。

「要するに、もっと奥まで行こうという訳じゃな」

「ああ、その通りだ。俺たちが一番乗りする必要はないが、誰かが何とかしてくれるのを待つのは、止めておきたい」

「誰かが何とかしてくれるのを待つくらいなら、魔王討伐に一步でも近づこうとかしねーからな」

クライストの言葉に、仲間達は一斉に頷いた。

「じゃ、警備の方はどうすんだ？」

「基本、止めることにした方がいいと思うが、分からんな。森に行かない日くらいは、警備に回ってもいいが」

「一日おきとかは格好つかねえか」

「丸一日籠もった時、どのくらい疲れるか、だろうな。体力が回復しきらないまま、毎日森に行っても危ないだけだろう」

「ああ、それもそうか。じゃ、とりあえず、一度丸一日籠もってみつか？」

「そうだな。ただ、明日が一週間分の警備のローテーションを決める日だ。決めるならまとめて一週間分の予定を立てておきたいんだが」

「あれ、一週間単位なんだ？」

初めて知ったのか、レックがちょっと驚いたようだ。そう言えば教えてなかったなと、グランスが仲間を見回すと、驚いたというほ

どではないものの、「ほほー」といった感じの顔をしている仲間もいた。

「その手のことは任せっきりじゃったからのう……」

『魔王降臨』以降、対外折衝の類は全部グランスの仕事になっていた。そのことを思い出し、意外と知らないことも多いものだといアナは思い当たったらしい。

「まあ、大変だったらゆうてくれ。多少は手伝えるはずじゃからの」「ああ、その時は頼む」

まあ、サーカスからエラクリットの時の忙しさを考えれば、もう大丈夫だろうとグランスは思っていたのだが。

「で、明日からどうするんだ？」

「俺たちの体力が持つかどうか様子見ということで、一週間は一日おきにした方がいいだろうな。その間に警備の仕事を入れていこうと思う」

クライストの確認に、グランスがそう答え、それがそのまま明日からの蒼い月の行動スケジュールとなった。

雨の森

朝から夕方まで雨の森攻略、の二日目。その昼前。
蒼い月のメンバーは黙々と森の中を進んでいた。

数メートルおきに白地図に現在地と周囲の地形を書き込み、近くの木に目印をつける。地図は後でギルドに売るし、木につける目印は迷子にならないため、でもあったのだが、おかげでなかなか前に進まない。

おまけに、うつそうと茂った木々と雨雲のせいで太陽が見えないのである。方位時計があるからまっすぐ進むことは出来ているが、万が一、木につけてきた目印を見失おうものなら、いつ迷子になってもおかしくなかった。

「うー、ジメジメするよ……」

湿気を吸って重くまとわりつく服に辟易しているのはリリーだけではなかった。

「我慢するのじゃ」

そう言うディアナも服がまとわりつくのには参っていた。

一番簡単な解決策は、出来る限り薄着になることなのだが、ヤブ蚊や毒虫の類がほとんどいないとは言え、むき出しの肌は転んだりしたときに擦り剥いてしまい易いので、そうそう薄着にはなれない。

何より……

「いや、わいは目の保養が出来て嬉しいけどな」

とほざいて女性陣に殺されかけたメンバーがいることでわかるように、異性の目を気にする必要もあった。

「なかなか慣れないな」

一見平然としたグラスに、

「涼しいだけマシじゃねえか？暑かったら最悪だぜ」
開き直って袖を外してしまったクライストが答える。

クライストが答えたように、雨の森は降り続ける雨のせいで湿度は高いが、気温は低い。ただ……

「てゆうか、暑さ寒さに湿度まで再現されるようになってると思わなかった……VRMMOでここまでやる？」

というレックの言葉通り、普通はいくらVRMMOでも暑さ寒さは再現されない。再現されている場合でも、快適と呼べる範囲に収まるのが普通だ。

ちなみに、ジ・アナザーでも暑い寒い湿気てるは再現されていはいはずだったのだが、『魔王降臨』以降はばつちり再現されていた。そのおかげで、大陸北方は寒すぎてプレイヤーが撤退し、大陸南方では自棄になったプレイヤー達が海水浴を満喫していた。

「そのうち、汗をかいたからお風呂に入りたい……なんて事もあるんじゃないだろうな？」

「汗かかなくても、じゅーぶんお風呂入りたい……」

リリーのその言葉に、クライストとマージンが視線を交わし、

「おぬしら、今、何を考えたのかのう？」

「「い、いやなんにも！」」

ディアナに問いただされていた。その横では、

「今、どのくらい来た？」

「フキロくらいかな？」

グランスの問いかけに、地図係になっていたリリーが答えていた。

「やはり、印をつけながらだと、さっぱり進まないな」

「だね〜」

雨の森の探索済み領域では、レック達がやってきたように、一定の距離ごとに印がつけられている。最初の5キロくらいはその印を辿って奥まで来たので割と早かったのだが、そこから遅かった。僅か2キロ進むのに2時間以上もかかっていた。

もつとも、これには途中で何回も雨の森に棲むエネミーと戦っていたからという理由もあるのだが。

「ちょっと地図、見せてくれないか？」

リリーから地図を受けとったグランスの周りに、仲間達が集まった。

「どうかしたのか？」

「いや、単に進路を確認しただけだ」

クライストに訊かれ、意味はないと答えるグランスはリリーに地図を返し、

「それより、そろそろ一度休憩して飯でも食うか」

「そうじゃな。幸いすぐに何か襲ってくることは無さそうじゃな。周囲を見回しながらミネアが答えた。

「よし、ではディアナ、リリー、マージンが先に食事をとってくれ。残り3名は俺と一緒に警戒に立つ」

グランスのその言葉で、指名された3人はアイテムボックスからおにぎりを取り出した。

「いやあ。サンドイッチもええけど、おにぎりも捨てがたいわ。日本人万歳やな」

「いや、おぬし、日本人じゃなかるうに……」

おにぎりに嬉々としてかぶりついたマージンに、呆れながらディアナが突っ込む。

「でも、アメリカ人とは思えないけどね」

警戒役ということでもまだ食事は摂れないものの、レックが会話に混じってきた。

「確かにね」。マージンがアメリカ人って事意識したことって全然

ないね」

リリーが言うまでもなく、蒼い月のメンバーは普段、マージンがアメリカ人であることを基本的に意識していない。『魔王降臨』直後は通訳だの日本語教室だので意識していたが。

「つてか、何で日本人プレイしてるんだ」

「そりゃ、わい、日本好きやからな」

クライストに訊かれ、早くも4つめのおにぎりを囓り始めていたマージンが答えた。

「で、覚えたのが関西弁と。そこもよく分からんわ……」

「ま、その辺はしゃーないな。わいも最初はこれが標準的な日本語や思ってたしな」

「あー、だまされた口か」

納得したようにクライストは頷いた。

「さ、次はわいが警戒に立つわ」

と、早くもおにぎり7つを平らげ、マージンは立ち上がった。それを見たグランスが、

「じゃあ、レック、ミネア。先に食べてくれ」

と指示を出し、

「俺たち最後かよ、つかマージン食うの早えよ」

と言いつつ、クライストは警戒を続けた。

「しっかし、ヘビとカエルと蜘蛛とトカゲばっかやな、ここ」

背中に背負っていたツーハンドソードを軽く振りながらのマージンの台詞に、

「一応、リザードマンも時々いるらしいけど」

とレックが答えた。

「どっちにしても、グロいのばっかだよな。あんまし出てこないで欲しいよ」

リリーの言葉にミネアが熱心に頷いていた。

「巨大なヒルに襲われた連中もいるらしいな」

「うえ、マジ!?!」

「知りたくない情報じゃったな……」

「想像してしまいました……」

ボソツと言ったグランスは、女性陣から思いつきり睨まれた。グランスはその視線に気がつかなかった振りをしたようだが、微妙に顔が引きつりかけているのがレックには見えた。

その援護というわけではないが、

「そう言えばさ、何でこのエネミーって名前がついてないの？」

「ん？そう言えばそうやな。なんでやろ？」

レックの疑問に、マージンも首をかしげる。

「私達が知らないだけではないのかのう？」

「確かにそれはありそうだけど」

首をかしげていた仲間達は、グランスなら知ってそうと視線をやったが、

「いや、俺も知らんな」

とのこと。

ただ、答えを知っている人物が一人いた。

「ほんとに名前がついてないそうですよ」

一斉に仲間達の注目を集め、一瞬ビクツとなったミネアだったが、言葉を続ける。まあ、仲間内じゃなければ逃げていたかも知れないが。

「噂で聞いただけなんですけど……」

広くしたついでに、エネミーの種類も大量に用意したまでは良かったらしいです。ただ、イデア社では名前を用意しきれなかったみたいで、名前を先に決めてデザインしたエネミー以外は、ほとんど名前がないらしいです」

「なにそれ」

リリーの言葉が仲間全員の呆れっぷりをよく表していた。

「微妙にお粗末というか、なんというか……」

クライストもやれやれと首を振る。

「でも、道理でエンタータでもこのエネミーの名前がいまいち統

「されてなかったわけだね」

「やな」

レックの言葉にマージンが頷いた。

そうこう話しながら、やがて全員がおにぎりを食べ終わった。

「じゃ、出発するか」

そして、グランスの言葉でレック達は探索を再開した。

朝から夕方まで雨の森攻略、の六日目。昼過ぎ。

雨の森は奥行き20キロ程度とされる。そして、グランスの推測が正しければ、祭壇は一番奥にはない。その仮定に基づき、蒼い月は森の中央付近を探し続けていた。

入り口付近の探索が終了したこともあり、既に何組もの冒険者達が森の中央付近まで探索の手を伸ばし、ギルドに集められた情報では、虫に食われた葉っぱのように探索が進みつつあった。

そして、今。

「あれ、でかすぎない?」

「でかいな」

「大きいですね」

「目の錯覚じゃと嬉しいんじゃないがのう……」

森の中の少し開けたその一帯は、浅いながらもちよつとした池になっており、その中央には島があった。

その池を覗ける茂みの中から、蒼い月メンバーはその島の上でどんつと居座っている、20メートルほど先のそれを見て、足を止めていた。

「要するに、守護者ってことか?」

その些か大きな 体長5メートル、体高4メートル弱を些かと言えらるなら カエルの後ろに、石で出来た遺跡が見えることから、

クライストが言ったことも間違いではないのかも知れない。

「でも、あんなのいるっていうなら、ギルドの情報にあってもよかつたんじゃない？」

「確かにな」

かなり引き気味のリリーの言葉に、さすがに引き気味のグランスが答える。

まあ、アマガエルあたりなら良かったかも知れないが、事もあるうにイボガエルでは……仕方ないのかも知れない。

そのせいか、あの石の遺跡を確認したいが、誰もそのための方法を提案しようとはしなかった。

一名を除き。

「でも、倒すんやる？」

その一人は巨大イボガエルにも特に何も感じてないのか、考えたくもないことをあつさり口にする。

「まあ、そうなるよな……」

「だよな……」

「じゃのう……」

テンシヨンはただ下がりがながらも、何とか答える仲間達。

「あれが祭壇なら、避けては通れないしな。そうでなくても、確認はせざるを得まい」

微妙にイヤそうに話すグランズ。

仕方ないので早速、作戦会議に移る。幸い、耳は良くないのか、ここでこそ話していても、巨大カエルは気づいた様子はない。

ただ、カエルは動くものに反応する……ということ、数メートルほど後退し、カエルから見えづらい位置で作戦を立て始めた。

「で、どう倒す？」

このクライストの言葉に、

「……触らなくて済む方法で……」

小声ながらも女性陣がハモる。

「となると、ミネアの弓とクライストの銃、リリーのパチンコくら

いしか残らないが……」

「パチンコだと炸裂弾とか爆発系になるけど、あれ、火薬が湿って爆発しないとかありそ……ってゆーか、パチンコでも狙いたくない!!」

狙いたくないというリリーの我が儘は兎に角、確かに爆発しないのでは意味がなかった。

「わたしの弓だと、毒を塗ってでしようか？」

「じゃな。まあ、生き物のはずじゃし、効くとは思うが……」

「あのサイズやと、かなり時間かかりそうやなあ」

「一番きつい毒をたつぶり塗って、出来る限り射まくるしかないな」
ミネアの毒矢は採用。

「銃はどうする？毒なんて塗れねえぜ？」

「目を潰すとか？」

「あー、それならいけるかもな」

こうして、ミネアとクライストの役割は決まったものの、
「しかし、それだけだと決定打にはならないな」

というグランスの言葉通り、あの巨体相手にどこまで通じるか……
…というのは大いに疑問であった。

「あのサイズだと、レックの武器もあまり効果はないだろうしな。
俺かマージンがやるしかないか」

「わいは構わへんで」

こうして、役割分担が決まっていく。

「じゃ、僕とリリー、ディアナはクライストとミネアの護衛かな？」

「護衛は三人も要らないと思うが、とりあえずそれで行くか。ちょっと慎重なくらいがちょうどいいはずだ」

グランスの言葉に全員が頷き、大雑把な役割分担が決まった。

「攻撃順はまずはクライストが目潰してくれ。片目だけでも潰れれば遠近感もなくなるし、何より死角が増えて攻めやすくなる」

「ああ、任せとけ」

「その後はミネア、毒矢をありったけ頼む。ただ、誤射には注意し

「てくれ」

「分かりました」

「で、俺とマージンは前衛だが、あの巨体と真っ正面からやり合っ
のは避けたい」

「やな」

「なので、クライストとミネアは左右に散って、ヤツの注意を逸ら
し続けてくれ」

「ああ」

「はい」

「他三名は基本的に二人の護衛だが、可能なら敵の注意を引きつけ
てくれ」

「了解」

「了解じゃ」

「はい」

「こうして分担が決まり、
最後に。」

見たところ、ここまで倒してきたカエルがでかくなっただけの
ようだが、油断はするな。撤退は考えたくないが、合図を出したら
撤退だ。クライスト、ミネア、リリーの3人はその時は援護を頼む
じゃ、やるぞ」

グランスのその言葉で、全員が準備を始め、すぐにさっきカエル
を覗いていた茂みに戻った。

銃でカエルの目玉を狙うクライスト。

その左に同じくミネアが弓を構え、すぐにも動けるようにして
いる。20メートルではさすがに当てづらいので、必要なら前進す
ることになるだろう。

更に二人を挟んで左右にグランスとマージンが突撃の準備をして
いる。左右からカエルを挟撃するつもりだ。

その後ろに、レック、ディアナ、リリーが待機していた。

全員の準備が整ったのを確認すると、グランスはクライストに合

図を送った。

それを確認し、銃の狙いを慎重に定めるクライスト。

ゆっくりと近づくと戦闘開始に、全員の緊張が徐々に増していく。

そして、

パアアアアア……………ン……………

クライストが撃った銃弾は、少しずれかけたものの、巨大力エルの左目を確かに潰した。

突然のことに声もなく暴れ始めるカエル。

そこに、立ち上がって距離を詰めたミネアが、次々と矢を射かけた。そのうちの何本かは外れたものの、かなりの数がカエルの背中や脇腹に次々と突き刺さった。

「行くぞ！」

グランスが合図をするまでもなく、マージンも立ち上がり、ミネアに反応してこちらへ向き直ろうとしていたカエルに水を撥ね飛ばしながら一気に詰め寄った。

が、

「ちょ！」

あと7メートルに迫ったところで、巨大な口をガパリと開けて飛びかかってきたカエルから、マージンは慌てて逃げ出した。

「あんなん、一発昇天やん！！！」

まあ、牙や爪はないので、シヨック死だろうが。

しかし、マージンに跳びかかったカエルは当然グランスに背中を向けることになる。

無論、グランスがその隙を逃すわけもなく、

「つらああああああ！！！」

巨大な戦斧をカエルに振り下ろす。

後ろ足を狙ったそれは、カエルの背中を大きく傷つけ、どろりと赤い血が流れ出し、池の水を赤く染める。

距離が縮んだので、ミネアが必死になって次々と撃つ矢はことごとく、背中 of 痛みに暴れるカエルの頭部に突き刺さっていった。

その間にもマージンはカエルから距離をとりつつ、潰れた左目の死角へと回り込んでいた。そして、ツーハンドソードでカエルの左前足へと斬りつける。

レック達護衛組は、カエルが近すぎると判断したのか、ミネアとクライストをカエルから引き離そうとしていた。何しろ巨体なので、少し暴れただけでも数メートルくらい簡単に移動してしまうのだ。あまり近いとあっさり巻き込まれる恐れがあった。

ミネアにはディアナとリリーが。クライストにはレックがついて、当初の予定通り左右に散開する。

その間、完全に毒矢が止み、誤射に気をつけなくて良くなった。ランスとマージンが交互にカエルに斬りつけていった。

「あぶなっ!?!」

闇雲に暴れるカエルが今度はのしかかるように跳んできて、池の中を転がりながらマージンがかるうじて避ける。

「おおおおおおお!」

その後ろでは、伸びきった後ろ足にランスが戦斧を叩き付け、左後ろ足に大きな怪我を負わせていた。切断とまでは行かないものの、骨に達するその傷では最早ともに跳ねることは出来そうにもない。

「一気に攻めるぞ!」

ランスの声に合わせて、マージンもすぐ横に来ていたカエルの右脇腹を斬り上げながら起き上がる。

「僕も行くよ!」

既にクライストとミネアは出番がないと見て合流していて、その二人をディアナとリリーに任せて、レックもカエルへの攻撃に参加した。

ただ、いくら斬っても、内臓が既にはみ出しているも、なかなかカエルは動きを止めなかった。

レックが左脇腹を深く切り裂き、ランスが背中に戦斧を打ち込み、マージンが右の後ろ足も切り落とし、それでもまだ動き続ける。

もつとも、さすがにその動きは最早脅威とは呼べず、放っておいても間もなく絶命するのは間違いなかった。

だが、それでも動いている間は油断できない。

「これで……トドメだ！」

レックが残る右目を潰し、マージンが下あごを池の底に縫い付け動きを止めたカエルの脳天に、グランスは戦斧を思いっきり振り下ろした。

鈍い音共に巨大カエルの頭蓋骨が割れ、傷口から大量の血と脳漿が飛び散った。

グランスとマージンはそれをもろに浴び、真っ赤に染まった。レックは一步下がっていたのでそれを浴びずには済んだが、下半身はカエルの血で赤く染まった池の水を撥ね飛ばしながら戦っていたので、3人揃ってどろどろになってしまっていた。

「はあっ……はあっ……」

「ぜえっ……ぜえっ……」

息も切れ切れにへたり込みかける3人だったが、さすがに血に染まった池の中にへたり込むわけにも行かない。

池の真ん中にあるカエルがいた遺跡の島に上がり込んで、そこでやっと座ることが出来た。

「大丈夫ですか？」

対岸から聞いてくるミネア達に頷いて答える。

それを見て安心したミネア達は、どうやって池を渡ろうかと相談を始めた。

ただの水ならまだいいかもしれないが、何しろ今はカエルの血まみれ内臓まみれである。さほど汚れてもいない4人にとって、この池に踏む込むのは思い切りが必要だった……のだが、

「あー、反対側に飛び石が見えたで。そっちからなら濡れずに渡ってこれるんちゃうか？」

というマージンの言葉で、そっちから渡ってくるようになった。

数分後。

息を整え、血まみれになった装備を大雑把に池で洗ったグランス、レック、マージンと、飛び石を渡ってきたクライスト、ディアナ、リリー、ミネア達は無事に　　といっても特に危険もなかったが合流し、遺跡を調べ始めていた。

上陸してみると、池の中にある割に島は意外と広く、池全体の大半を占めていた。

「池の中に島があるんじゃないやなくて、島の周りを川が流れてるみたいだな」

というクライストの言葉が正しい表現だった。実際、一目では分からないほどゆっくりと水が流れており、戦闘から数分経った今では、カエルの血で赤く染まっていた水は元通り透明に戻っていた。

島の周辺部の遺跡は大きく崩れ、4人が渡ってきた飛び石も、元々は石橋だったのが崩れ落ちて飛び石のようになっていただけのようだ。一方、中心部にある遺跡はほとんど壊れていなかった。

「なんか、ここにいと落ち着きますね」

というミネアの言葉通り、エネミーが彷徨く危険な森の中だというのに、いつの間にかレック達はすっかりリラックスしていた。

そして、思ったより広がったとはいえ、島の周囲は100メートルあるかどうかである。すぐに調べ終わったレック達は、島の中央にある石の台の周りに集まっていた。

石の台は高さ1メートルで、直径は50センチほどの円筒状……というには、途中で大きくくびれていた。表面にはよく分からない文字や文様がびっしりと彫り込まれ、神秘的な雰囲気醸し出していた。

「きれいな模様ですね……」

「そうじゃのう」

ミネアとディアナの二人の感想は、大体のメンバーに共通した感

想だった。ただ、いつまでも眺めているわけにもいかない。

「一応、こいつが祭壇みたいだな。ギルドの情報にそっくりだ」
アイテムボックスから取り出した祭壇のスケッチと見比べて、グランスがそう判断する。

「じゃ、当たりを引いたって事だな」

「で、どうやったら魔法を覚えられるのかな？」

嬉しそうに言うクライストとレック。

「ちょっと待て。それも情報にあっただはらずだ」

グランスは再びアイテムボックスを漁って、別の紙を取り出した。すかさず、リリーとクライストが横から覗き込む。

「祭壇に片手を載せ、目を閉じて瞑想する……だそうだ」

紙に書かれていたのは、具体的なんだか、曖昧なんだかよく分からない内容だった。

「瞑想？」

「具体的には？」

仲間から訊かれて、グランスも困った。

「瞑想としか書いてないな」

紙を裏返して確認してみたが、瞑想についてはそれ以上は書かれていなかった。

グランス達がどうしたものかと、悩んでいると、

「まー、とりあえず、手を載せて目え閉じて、頭空っぽにしてみたらええんとちゃう？」

と、気楽にマージンが言った。

「それもそうじゃな。分かんのであれば、やってみてもよからうよ」

ディアナの言葉に、仲間達も「そうだな」とその気になった。が、一度に全員でやっても大丈夫なのかな？」

レックが首を捻ったが、これは、

「大丈夫だと書いてある」

というグランスの一言ですぐに解決した。

「じゃ、やってみよっか」

興味津々のリリーの言葉に頷くと、全員で祭壇を囲むように立ち、片手を祭壇の上に静かに載せる。

「では……」

グラスのその声を合図に、仲間達は目を閉じ……
待つことしばし。

変化が現れたのはレックからだった。

白い光がレックの周りにぼんやりと浮き上がった。それと同時にレックは何か暖かいものに包まれたように感じていた。

(なんだろう、これ……なんだか暖かい……)

そのレックの周りを白い光はしばらくの間、ゆったりと漂っていた。その光は無数の光る文字と文様の集合体だったが、目を閉じているレックは知る由もない。勿論、仲間達も全員目を閉じていたため、それを見る者は誰もいなかった。

その光がレックの周りを漂っていたのは時間にして僅か数秒。やがて、すっとレックの身体へと吸い込まれていった。その瞬間、レックは全身を走る強い力を感じ、それと同時に幾つもの、まさしく呪文のような言葉が頭の中に浮かび上がり、思わず目を開けてしまった。

周りを見ると、他のメンバーはまだ目を閉じており、レックの様子に気づいた者はいなかった。

(今の感覚は……何だったんだろう?)

仲間達の邪魔をするつもりはなかったたので、声には出さない。ただ、何となく今の魔法じゃないかと、手を突き抜けてそこでも複雑な動きをしていた魔力の感覚に、手を握ったり開いたりしながらレックが考えていると、

(!?)

レック自身は知らなかったが、レック自身に起きたのと同じ現象がマジジンにも発生した。レックと同様、光が浮き上がり、しばらく

くの間マージンの周囲を漂った後、やがてマージンに吸い込まれていった。その感覚のせいかな、マージンも目を開け、そしてまじまじと今の現象を見ていたレックと目があった。

マージンはすぐにレックから目を離し、首をかしげると、祭壇から少し離れた。そして、ちよいちよいつと指を動かしてレックを呼び寄せる。

「今、何か感じへんかった？」

祭壇の仲間達の邪魔にならないよう、小声で話しかけてきたマージンにレックも小声で答える。

「マージンも？」

「とゆうことは、レックもやな？」

「うん。今のはなんだったんだらう」

「多分、魔法の使い方、ちやうかな？」

「使い方？」

スキルは個人端末のコマンドから使うのではないのか？と、首をかしげるレックに、

「ジ・アナザーのスキルは最終的にはコマンドやない。身体で覚えて使うやろ？それと同じやないか思うんや」

「そうだけど、それだったら別に祭壇で体験させなくてもいいと思うんだけど？」

「あー、それもそうやな……」

マージンは言葉を切って、少し考えた後、個人端末を取り出した。「スキルに魔法コマンドがあるかどうか、見てみるわ」

しかし、

「ん、あらへんなあ……」

「ない、ね」

二人の個人端末には、魔法コマンドは追加されておらず、当然治療魔法などどこにも見つからなかった。

そうこうしている間に、光が現れることもないままに残りのメンバーが目を開け始めた。

「これで治癒魔法覚えられたわけ？」

首をかしげながらのリリーの言葉に、

「どうもそんな気はしねえな……」

クライストも首をかしげる。

「やり方が違うのかも知れんのう……」

残念そうに言ったディアナは、周りを見回し、

「して、あの二人は何故あそこにおるのじゃ？」

少し離れたところにいたレックとマージンを見つけてそう言った。

仲間達が目を開けて祭壇から手を放したのを見た二人は、声をかけられるまでもなく、すぐに戻ってきた。

「みんなはどうだった？」

レックが訊くと、

「ダメっぽいのが」

「わたしもです」

「なーんにも起きなかったよね」

「ダメダメだな」

と、何かを考え込む様子のグランスを除いた全員から、出来なかつたと返事が返ってきた。

「そういうレックはどうだったの？」

リリーに訊かれ、レックはマージンと視線を交わした後、

「何というか、こつ、身体の中を何かが動く感じとか、頭の中に呪文っぽい何かが浮かんただけ……」

「マジ!？」

「それ、何!？」

「なんで、レックだけ!？」

何も起きなかった仲間達に詰め寄られ、たじたじになったレックは、

「いや、僕だけじゃなくてマージンも……」

その言葉にギン!と仲間達から視線で射られ、

「怖っ！みんなの視線が怖っ！！」

思わずマージンは後ずさった。

それを思わず追いかけてようした仲間達の耳に、パンパンと手を叩く音がした。

「まあ、落ち着け」

グランズはそう言うと、レックとマージンに交互に視線をやり、「とりあえず、スキルなら使えるはずだ。やってみてくれるか？」

その言葉に、レックとマージンは再び顔を見合わせて、困ったような表情を浮かべた。

「どうかしたのか？」

「んーと、端末にはコマンド登録されてないんだよね」

グランズに訊かれ、自信なさげにレックが答える。グランズが視線をマージンに移すと、マージンも、

「そつやねん。あらへんのや」

それを聞いて、仲間達は 特にリリーとかクライストとかがガツクリと肩を落とした。

「外れか」

その様子を見ていたグランズは、「そう言えば」と、

「魔法は端末にコマンド登録されないらしいな」

その今更ながらの台詞に、仲間達 特にリリーとかクライストとかディアナとかがグランズを思いっきり睨み付けた。しかし、

「何で、そう言う情報を予め言っとかねえんだ」

「忘れていただけだ。すまん」

グランズはあっさりを受け流し、再びレックとマージンに視線を戻した。

「ということだから、端末からは使えない。さっきの感覚とやらで何とかしてみてくださいないか？」

「まあ、そういうことなら……」

自信なさげにレックは答えると、さっきの体内を力が流れる感覚と呪文を思い出す。

あまりに強烈だったそれらは、まだレックの中に確たる存在感を持って残っており、再現するのにそれほどの苦労は必要なかった。

「……………」
そしてそこで固まった。

「……………」
「どうした？」

様子がおかしいことに気づいたグランズに訊かれ、

「『治癒』魔法だからかな。対象が必要みたいんだけど……………」
体内を流していくべき力の行き先……………それがないと機能しそうにない。レックにはそんな気がした。

「ああ、そういうことか」
それでグランズも納得したらしい。そして、被験者(?)を決めようと振り返ると、

「じゃ、私が受けてみようかのう」

「いや、俺が受ける！」

「あたしも！」
希望者が殺到していた。

ミネアも口には出さないだけで、興味津々といった様子だった。
さっきの巨大力エル戦で怪我した仲間はいなかった というか、あれは即死級だったので怪我できなかった のだが、その前からの戦闘で全員何かしらの切り傷や擦り傷は負っていた。

なので、被験者は誰でも良かったのだが、選ぶのが面倒になった
グランズは、

「じゃ、俺で試してくれ」

「……………ええええ……!?」「……………」

恨みがましい4人の視線を黙殺して、蜘蛛の足でやられた右腕の刺し傷をレックに示した。

「じゃあ……………行くよ」

グランズの後ろの仲間達に何か言われないうちにと、レックはグランズの怪我の上に両手をかざした。

それを見て、不満そうだったディアナ達4人も、今から起きる事への好奇心で静かになった。

そして、レックは目を閉じると、身体の中で力 魔力の流れを生み出し、自らの意思でそれを制御しながら、ゆっくりと呪文を口にする。

「生命の息吹、神秘なる水、内に秘められし陰陽よ

汝、我が前に汝があるべき姿を示せ」

呪文の途中、グランスの怪我の具合が頭の中に浮かんできた。そして、元々はどうなっていたのかも。

そして、怪我のイメージを無傷の状態のイメージで塗りつぶしながら、呪文の残りを唱え、頭の中のイメージを包み込んだ複雑な構造の魔力の籠を手から送り出す。

「……我が魔導の導きに従いて、正しきあり方を取り戻せ！」

詠唱の完了を待たずに、グランスの傷の上にかざした手のひらから踊るような白い光が放たれ、傷口に吸い込まれていく。

そして、光が消えた後、そこには傷は残っていなかった。

「「おお……」」

感心したように息をつく仲間達。

「ほんとに魔法だね」

「ああ、久しぶりに見たぜ」

なにやら興奮を抑えきれない様子だが、ジ・アナザーで（まともな）魔法を使えるプレイヤーはほとんどいないことを考えれば、当然の反応と言えた。

仲間達の視線はすぐにマージンにも向かい、

「マージンも出来るの？」

そう訊かれ、マージンはリリーの肘に出来ていた擦り傷を治す羽目になった。

レックがグランスの傷を治したときと同じように、マージンの手から放たれた光がリリーの傷口を癒す。

「これは、便利じゃのう」

リリーの傷があつた場所を調べながら、感心するディアナ。
「だな。ポーションよりすげえな」

こっちはグランズの傷があつた場所を突きながら、クライスト。

ジ・アナザーではポーションの類は傷を治す力が弱い。エリクサーに分類される例外を除けば、瞬時に傷を塞ぐことは出来ない。せいぜいが回復速度を早める程度の物だった。

それだけに、瞬時に怪我を治してしまう治癒魔法に、蒼い月のメソバーは興奮していた。

しかし、彼らの興奮に水をかけるかのように、

「だが、2つほど確認しておくことがあるぞ」とグランズが言った。

「なにになに？」

「まずはどの程度の傷まで治せるかだ。それと何回くらい使えるかな」

グランズの言うことはもつともだった。

治癒魔法があれば、今まで以上の無理が利くだろつが、それにも限度がある。それ以上に、こんな便利な物が無制限に使えとは考えにくかつた。

「まあ、安全な場所に帰ってから、確認しておくべきじゃろつな。

少なくとも、ここで試すのは避けた方が良さそうじゃのつ」

ふむ、と頷きながらディアナがそう言った。

すると、レック自身が、

「確かに回数制限はあるかも。多分、魔力だと思つんだけど、身体の中からすーっと抜けていった感じがあつたし、その分少しだるいかな」

そう言いながら、身体を少し動かして確認する。

「多分、何回も使つてたら、動くのが億劫になるかも知れない」

「思ったより回数が少ないのかも知れないな。あまり頼らずに済む

ようにした方が良さそうだ。まあ、ディアナの言ったように、その辺は宿に戻ってから確認しよう」

レックの言葉を受けて、グランズはその件をまとめ、次の疑問を持ちだした。

「で、次は何故、二人だけ覚えることが出来たのか、だな」

「あ、それ知りたい」

「そーいや、何で二人だけなんだ？」

そう言ったりリリーとクライストがレック、マージンを見つめる視線は露骨に「羨ましい羨ましい」と言っていた。

「そう言われてもなあ？」

「だよな？」

再び困ったように顔を見合わせるマージンとレック。

「片手を祭壇に載せたやろ？目を閉じたやろ？で、祭壇に載せた手に神経を集中させながら、何も考えんようにしたやろ？それだけで？」

マージンが指を折りながら自分のしたことを確認し、

「僕もそれしかしてないな」

レックが同意する。そんな二人に、

「ほんとにそれだけか？」

クライストが訊いてくるが、

「うん、それだけ」

二人はそう答えるしかない。実際、特別なことなど何もしていないのだ。

一方でグランズはあごに手を当て、

「俺は祭壇に神経を集中させたりはしてなかったな」

「あたしもやってなかったかも……」

手を載せて目を閉じた後、頭を空っぽにしただけの仲間もいたらしい。

「頭を空っぽにするとと言っても、実際には何かしら考えてしまうものじゃしな。祭壇に載せた手に神経を集中させるのはいいかもしれ

ん。……もう一度やってみるかの」

冷静に分析し、リトライを提案したディアナは再び祭壇に手を置き、目を閉じた。

「あ、あたしも!」

「もう一度やってみっか」

「ですね」

と、他の仲間達も次々祭壇に手を載せた。

残されたレックとマージンはそれを静かに見守るのみだった。

風見鶏とオオトカゲ

結論から言うと、蒼い月メンバー全員が治癒魔法を使える ようにはならなかった。

どうやっても何回やっても、祭壇が反応しなかったのはグランズ一人だけだったのだが（とても寂しそうにしていた）、リリーとディアナは何度練習しても治癒魔法を発動できなかった。

「何で出来ないのよ〜！」

と叫びながらリリーはナイフを振り回すし、ディアナは落ち着いているように明らかに機嫌が悪くなっていたみたいで、無言のままクライストやマージン、レックの頭をべしべしがしと杖で殴っていた。

いつもなら誰かしら止めに入るところだが、グランズは役に立たなくなっていたし、ミネアにはあまり期待できなかった。残り3人はリリーとディアナの嫉妬の対象であったため、止めようとしても火に油を注ぐだけであった。

結局、自然鎮火を待つことになったものの、リリーとディアナの機嫌が戻るまで、1時間以上を要した。

「そんなに落ち込まなくても、他の祭壇だったらいけるかも知れないよ」

エントータへ戻る蒼い月のパーティの先頭で、何かにつけてレックはグランズに声をかけていた。これ以上粘ると森が出る前に暗くなってしまうくらいにまで、グランズは粘った。それにも関わらず、一人だけ祭壇が反応しなかったことで、どう見ても凹んでいるグランズを慰めようとしているのだった。

「ああ……そうだな」

そのことが功を奏したのか、それとも時間が経って立ち直ってきて

たのか分からないものの、フランスは少しは立ち直ってきていた。

ちなみに、フランスとレックの後ろを歩いているリリーとディアナは、ある程度機嫌が直ったものの、いつまでもクライスト達をいびつてしていると暗くなる前に森から出られないから、渋々いびるのを諦めただけで、あまり機嫌がいいとは言えなかった。そんなんだから、本人達はおしゃべりなどする気はないし、周りも怖くて話しかけられていない。

それどころか、一番後ろを歩いているクライスト達は、リリーとディアナを刺激するまいと余計な会話自体を控えていたので、今、仲間達の中で何かしらしゃべっているのはレックだけだった。もっともそれも、ずっと話し続けているわけではないので、どちらかというレック達は黙々と歩き続けていたのだが。

そんな感じで祭壇を離れて、それまでつけてきた目印に沿ってかれこれ1時間も歩いた頃だった。

「……なんか聞こえねえか？」

ふと立ち止まって耳を澄まし、クライストが言った。

「気のせいじゃろう」

まだ機嫌の悪いディアナが切り捨てる。

「いや……確かに何か聞こえるんだが……」

更に耳を澄ますクライスト。

やむを得ず、仲間達も全員足を止め、耳を澄ませてみる。

しかし、ただでさえ森の中は遠くの音が木々に吸われて聞こえづらい。おまけに、雨音のせいで小さな音はまともに聞こえなかったが、

「確かに、何か聞こえるね……」

リリーも真面目な顔になって、クライストの言葉を肯定した。

「俺には聞こえないが……どんな音だ？」

「よく分かんないけど……金属音？」

リリーの返事を聞いたグランスも、仲間達も一気に表情が引き締まった。一足遅れて、リリーも自分の言葉の意味に気づいた。

「どつちからだ!？」

グランスの言葉に、もう一度耳を澄ませ、リリーは音の方角を確かめた。

「こつち!」

そう言って走り出すリリーの後を、仲間達は追いかけ始めた。

クライストが聞きつけ、リリーが金属音と判断したそれは、間違いないく戦闘の音だ。この森の中で、プレイヤー以外に金属音を出す物などいないし、プレイヤーとて戦闘でもなければ遠くまで聞こえるような金属音を立てたりはしない。

リリーの後を走りながらグランスは、

「近づいたら一度様子見だ。ただしやばそうだったら、即座に助けに入る!いいな!？」

その確認に、

「「「分かった!」「」」

「了解じゃ!」

仲間達から即座に返事が返る。

そして、藪を避けながら走り続けるレック達。水を撥ね飛ばすのも気にはしていられない。

すぐに誰の耳にも確かな金属音が聞こえるようになり、武器を振るプレイヤーの気合いの声と叫び声や悲鳴も聞こえ始めた。もう、50メートルもないだろうが、様子見している暇は無さそうだった。「グランス、どうする?」

「決まってる。到着次第即座に戦うぞ」

念のため、クライストがグランスに即座に助けに入ることを確認する。グランスは続けて、

「ミネアは怪我人を癒せ。リリーはその手伝い。他は全員で敵を潰

す」

その指示に仲間達が頷く。

戦場までもう20メートルもなかった。

そして、

「つらあああああ！！！」

木立の間に見えたオトカゲの水色の背中めがけて、マージンがツーンと手を振り下ろす。

途中、マージンに気づいたトカゲが振り返ったが、それはツーンと手を振り下ろすという結果に終わった。意外と硬いトカゲの頭だったが、それでもツーンと手を振り下ろす一撃を食らって無事なわけもなく、そのトカゲは即死した。

だが、

「なんだこりゃ！？」

クライストが驚いたのも無理はない。

駆けつけた彼らの見たものは、10匹を超える5メートル級のオトカゲに囲まれた6人のプレイヤーだった。その中の倒れた二人をかばうように4人が戦っていたようだが、全方位を囲まれ、じり貧そのものだったようだ。

トカゲ自体はマージンが今殺したトカゲを含め、既に6匹が地面に這いつくばっている所を見ると、最初は20匹以上いたということになる。

そいつら相手にどれだけ苦戦したのかは、ぼろぼろになったプレイヤー達を見ればよく分かった。

「おおおおおお！！！」

その場にいたプレイヤー達とトカゲが呆気にとられている間に、グランスが戦斧で別のトカゲの胴体を輪切りにした。

「グランス、私はミネアの方を手伝うとするぞ？」

自分の武器ではトカゲに太刀打ちできないと見たディアナが、即座に役割変更を伝える。

「分かった！クライストは支援頼む！」

「おうよ！」

グランズの指示を受けるまでもなく、手前のトカゲの頭部に次々と銃弾を撃ち込んでいくクライスト。

頭部に銃弾を受けたものの、何が起きているかも分からず暴れ始めたオトカゲにレックが接近し、左の手甲で前足の爪を防ぎながら、右手の剣をオトカゲの胸に深々と埋め込んだ。

「外した!？」

「いや、大丈夫だ！」

すぐに剣を抜き取って距離をとったものの、即座には倒れなかったトカゲに心臓を刺し損ねたかとレックは思ったが、クライストが言ったように10秒も経たずにそのトカゲの動きは鈍っていった。

「そこ、ぼさつとするな!後ろから来るぞ!!」

グランズがトカゲ共に囲まれていたプレイヤー達を怒鳴りつける。事実、彼らよりも先に立ち直ったトカゲたちが、状況の変化について行けずにはけーっとしていたプレイヤー達に襲いかかるうとしていた。

慌てて振り返り、それに応戦し始めるプレイヤー達。間一髪だった。

その間にも、マージンとクライスト・レックコンビが1匹ずつオトカゲを仕留め、既に完全に囲みは破られた形になっていた。

「大丈夫ですか!？」

もう、トカゲたちが怪我人を襲いに来る余裕はないと見て、ミネア達が倒れている二人の下に駆け寄った。

「これは、酷いのう……」

怪我の様子を確認し、ディアナが顔を顰めた。リリーはあまりのひどさに言葉も出ない。

倒れていた怪我人は男女一人ずつ。

横向きに倒れていた男の方は、背中が大きく切り裂かれ、腕も半ばまで食い千切られかけていた。まだ生きているのが不思議なくらいだが、放っておけばすぐに絶命してもおかしくない。

女の方も胸から腹にかけて、爪痕が数本深々と走っていた。男に比べればまだ軽傷ではあるが、動かせるような傷ではなかった。

「男の方から始めます……！」

キツと顔を引き締め、その背中への傷に手をかざし、ミネアは治癒魔法の詠唱を開始した。

「あんたら、何してるんだ……！」

ミネア達に気づいた男の仲間の一人が叫び、ミネアに剣を向けようとしたが、ディアナに阻まれ後ろからはトカゲが迫り、慌ててトカゲに向き直る。

それを確認したミネアは、ほっと一息つくと、目を閉じ、魔力の感覚を研ぎ澄ませ、詠唱を開始した。

「生命の息吹、神秘なる水、内に秘められし陰陽よ

汝、我が前に汝があるべき姿を示せ

我が魔導の導きに従いて、正しきあり方を取り戻せ！」

「……それは!?」「……」

男の仲間達が驚きの声を上げる。

その眼前で、ミネアの手から放たれた白い光が男の背中に吸い込まれていき、酷かった傷が少しずつ閉じていった。しかし、あまりにも酷い傷だったためか、一回では治りきらない。

「……はあっ……はあっ……」

息を荒くしながらも、目を開けてそれを確認したミネアは、もう一度詠唱しようとして、

「ミネア、きついなら一度休め。レック、クライスト、マージン、頼むぞ」

グランスに止められた。

ミネアが顔を上げると、既に動いているオオトカゲは周囲にいなかった。どうやら、全て倒すか、追い払うからしい。その推測を裏付けるように、

「ディアナ、リリー。戻ってこないとは思いが、4匹ほど逃げた。見張りを頼む」

グランスの指示で、レックとクライストが倒れている男にマージンが女に、繰り返し治癒魔法をかけ、その傷を着実に塞いでいく。その様を見ていた怪我人の仲間達が顔に驚愕を貼り付けたまま、

「あ、あんたたち、それはまさか……!?!」

「そうだ。治癒魔法だ」

グランスが短く答えると、

「じゃあ、リッコとミツクニは助かるのか!?!」

興奮したように叫ぶ彼らに、

「保証はできん。どこまで傷を治せるのか、俺たちにもまだ分かってないんだ」

「それでもいい!二人を助けてくれ!!」

「頼む!!」

次々に頭を下げる彼らに、グランスは困ったように治癒魔法をかけていた3人を見た。

それでグランスが訊きたいことを察したのだろう。

「リッコはんゆうんか?女の子の方は終わったで」

とアイテムボックスから取り出したハンカチで、倒れているリッコのお腹の血を拭き取りながら、マージンが答えた。

「うん、このくらいの傷なら問題なく治せるみたいやな」

きれいにはならなかったものの、傷が塞がっていることを確認し、満足そうに頷くマージン。

「こっちはちよつと微妙かな?」

ミツクニに治癒魔法をかけていたレックも、結果を報告する。

「微妙つて何だ!?!」

慌てる怪我人の仲間達に、

「えっと、命に別状はないと思うんだけど……」

「怪我が酷かったからな。擦り傷程度と痣が残っちゃった」

疲れ果てた様子でレックとクライスト。

やはり、酷い傷を治しきるのは大変だということらしい。しかし、傷の程度に応じて、治癒魔法を使う側に負担がかかるのは当然とも

言えた。

だが、命に別状はないと聞いて、怪我人の仲間達は一気に安堵した。力が抜けたのか、地面に座り込んでしまった。

「ホント、よかったよ〜！」

「ああ、マジで良かった！」

拳げ句、泣き出してしまっプレイヤーもいたが、蒼い月メンバーにそれを止めようとする者はいなかった。

その後、気絶していたミックニとリツコの頬を、彼らの仲間達がぺしぺし叩いて二人を起こした。

「ありがとうございます」

二人は自分たちが負っていた怪我が治っている理由を聞くと、レック達に深々と頭を下げて、礼を言った。

「人として当たり前のことをしたまでだ。気にしないでくれ」

グランズが蒼い月を代表して応じるが、それでも二人はまだ礼を言い足りないと言わんばかりだった。

死ぬところを助けられたのだから、気持ちは分からないでもない蒼い月メンバーだったが、いつまでも終わらないお礼というのもアレである。幸い、

「あんまりしつこいと、お礼もただの迷惑になるから」

二人の仲間がそう取りなして、レック達が思っていたよりあっさりミックニとリツコは引き下がった。

その上で、改めて自己紹介を行うことになった。まずは、助けて貰った側からということだ。

「俺たちは風見鶏という克蘭のメンバーだ。俺がタックス」

「ギガビーだ」

「ワタシはレイニーよ」

「アキラってんだ」

「もう知ってると思うけど、ミックニです」

「同じく、リッコです」

青髪のレイニーを除けば見事に全員赤毛（系）の彼らは、いずれもオオトカゲにやられて、防具や服は原形を留めていないとまではいかないものの、かなりぼろぼろだった。剣だの槍だのといった武器は無くしていなかったものの、敗残パーティの雰囲気満々だった。無論、レック達はそんなことは言わなかったが。

とりあえず、彼らが名乗ったので次は蒼い月の番だった。

「俺たちは蒼い月というクランだ。ここにいるので全員の小規模なクランだ。で、俺がグランス」

「クライストだ」

「ディアナじゃ」

「リリーよ」

「僕はレック」

「ミネア、です」

「で、わいがマージンや」

と、自己紹介が一通り終わると、当然のように質問タイムになった。

「何であんな事になったんだ？」

最初にクライストが訊いたのは、当然あれだけのオオトカゲに囲まれてしまった経緯^{いきわづらひ}である。

レック達も風見鶏のメンバーを襲っていた水色のオオトカゲとは何回かやり合っていたが、オオトカゲは大抵は単独行動が多くても2〜3匹が行動を共にしている程度で、あんな数に一度に襲われるというのはちょっと考えにくかった。

ただ、風見鶏がああなった理由は割と簡単だった。

「戦闘を回避して逃げまくっていたらああなっちまったんだ」

「逃げ切れたと思っていたんですが、実は後ろから追いかけていて……」

そういうことらしい。

死の危険と隣り合わせの冒険者の行動としては、あまりに迂闊な行為としか言いようがなかった。

「二度とあならないように、気をつけないとな。死んだら元も子もない」

と、タックスが締めた。おかげで、注意すべきかどうか悩んでいた蒼い月のメンバーは、風見鶏のメンバーに気づかれないようにホツとため息をついたのだった。

「次はこつちが質問してもいいか？」

ピンチに陥っていた理由をタックス達が説明した後、今度は彼らの方から蒼い月に質問をしてきた。内容は勿論、

「治癒魔法なんてどこで覚えたんだ？」
である。

「見当はついていると思うが、祭壇を発見してな。そこで覚えた」
今更隠すようなことでもないので、グランスはあっさり教えた。

「マジか。いや、マジなんだろうな」

実際、治癒魔法を目の前で使われていれば、疑う余地は無いに等しい。

「祭壇ってどこで見つけたんだ？」

再びタックスがグランスに訊く。

「一応、ここから遠くは離れてないが……詳細な場所はギルドに報告してからなら教えられるが？」

祭壇の詳しい場所には冒険者ギルドから多額の賞金がかかっているだけに、さすがにグランスは回答を拒否した。複数のパーティーが同日に発見した場合、懸賞金は山分けになってしまうから、当然の心理ではあった。

その回答に、風見鶏の面々はちよつと顔を顰めたが、懸賞金のこともあってか仕方ないと割り切ったようだ。代わりに治癒魔法についての他の情報を引き出そうと、

「誰でも覚えられるのか？」

とか、

「どのくらいの傷まで治せるんだ？」

とか、

「何回くらい使えるんだ？」

とか、タックスとアキラが交互に訊いてきた。

ただ、レック達も覚えたばかりで詳しいことを知っているわけではなかった。

「誰でも使えるようになる訳じゃないみたいだな。うちは4人しか使えるようにならなかった。まあ、コツがあるのかも知れんが。

性能と回数はさつき見たとおりだ。ただ、個人差はあるかも知れん」

隠すことでもあるまいしと、その辺のことはグランスはすらすら答えた。

「使えるプレイヤーは詠唱さえしたら使えるのか？」

タックスのこの質問には、グランスは少々困った顔になった。何しろ、蒼い月メンバーでは唯一、使えないだけではなく祭壇が反応すらしてくれなかった本人である。

「詠唱だけじゃ無理やで」

グランスの視線を受けて代わりに答えたのはマージンだった。もっとも、それだけでは説明が短すぎると思ったのが、

「ジ・アナザーでも魔力ゆうんかな？ 兎に角、その動かし方も重要みたいや」

と付け加える。

「それじゃ、この場で教えてくれと言っても？」

「無理やな」

まあ、予想はしていたのか、タックスは特に落胆した様子はない。ただ、

どう考えても、さつき祭壇で覚えてきたばかりのプレイヤーが、他のプレイヤーにスキルを教えられるほど上達してとは思えない。

魔法が動作だけ見よう見まねで覚えられるような簡単な物ならもつと使えるプレイヤーがいてもおかしくはなかったこともある。

それで大体質問が出尽くしたと思ったのか、治癒魔法でバテていた仲間達が動ける程度に回復したのを確認したグランスは、

「じゃあ、そろそろ町に戻るが、君たちはどうするつもりだ？」

と風見鶏メンバーに訊いた。

「どうするとは？」

タックスはそんなことを聞き返してきたあたり、自分たちの状態を把握し切れていないのかも知れない。

(冒険者にあまり向いてないんじゃないか?)

蒼い月の何人かはそんなことを思ってしまった。

しかし、

「うちら、装備とかメチャクチャだから、気を遣ってくれてるんだと思うよ」

少なくともリツコは自分たちの状態をちゃんと分かっていたようだ。

しっかり者がいればそうそう致命的なことには……なっていたなとか考える蒼い月の面々であった。

とりあえず、リツコの言葉で自分たちがもうまともに戦い続けられる状態ではないことを思い出したのか、風見鶏の面々も互いに顔を見合わせ、相談をする……のかと思いきや、

「……一緒に連れて行ってください」「……」

……即決だった。

エントータの宿にて

風見鶏メンバーを連れてエントータに戻ったレック達は、風見鶏のメンバーとはすぐに別れ、そのまま冒険者ギルドへ足を向けた。勿論、祭壇発見の報告のためである。風見鶏のメンバーを助けたことで予定より戻ってくるのが遅くなり、あたりは既に暗くなっていたが、賞金のことを考えると早い方がいい。

「本当ですか!？」

受付の女の子は自分の出した大声に周囲から視線が集まったのに気づくと、赤くなりながらも慌てて椅子に座り直した。

「し、失礼しました」

軽く頭を下げるとずれた伊達眼鏡（ジ・アナザー）では視力の悪いアバターなどいない）を直し、軽く咳をして、

「祭壇を見つけたということは、治癒魔法を覚えたんですね？」
今度は小声で訊いてくる。

「ああ。仲間が使えるようになった」

グランスが答えると、受付の女の子は周りの冒険者達に素早く目を走らせ、少し考えた後、

「隣の子がそうですか？」

リリーを見ながら確認してきた。

「いや、残念ながら違うな。他の仲間なんだがそれがどうかしたか？」

「出来れば証拠を見せて欲しいので、別の部屋まで来て欲しいんですけど……呼んできて貰えますか？」

「ああ、構わない。リリー、頼めるか？」

「ん。いいけど、全員連れて行っちゃった方が早くない？」

その提案に、受付の子は、

「それでも大丈夫ですよ」

と頷いた。

受付の子　ルルというらしい　に案内されたのは、冒険者ギルドの建物のさほど広くもない一室だった。会議室っぽいその部屋に入ると、ルルは真っ先にカーテンを閉めて周った。外から覗かれないようにである。

それが終わった頃に、ルルがこの部屋に来る前に連絡していたのか、冒険者ギルドの人間が何人か、部屋に入ってきた。

「あなたたちが祭壇を見つけたパーティですか？」

そのうちの一人、金髪の青年に訊かれ、

「ああ、そうだ」

と頷くグランズ。

「それは実に嬉しいニュースですね。下手するとあと何ヶ月か見つからないかも知れないと思っていましたから。」

ああ、自己紹介が遅れました。僕はここの支部長を任されていますサイマと言います。今後ともお見知りおきを」

「俺はグランズ。ここにいる克蘭蒼い月のマスターをやっている」

そう言いながら、二人は互いに握手を交わした。

「それでは、あれこれ訊いてみたいこともありますが、まずは治癒魔法を見せて頂きましょうか」

サイマの言葉にグランズは仲間達を振り返り、

「レック、実演を頼む」

「え？まあいいけど」

指名されてちょっと驚いたようだったが、レックは素直に前に出てきた。

サイマを始めとする冒険者ギルドの面々は、興味津々と言った様子でレックを見つめていたが、当のレックはちよつと戸惑った後、

「相手がいるんだけど……？」

とグランズに訴えた。

「あー、そうだったな」

すっかり忘れていたグランズがどうしたものかと頭を悩ませていると、

「怪我人が必要ということですか？」

サイマが確認してきた。

「ああ。治癒魔法だしな。治療相手が必要らしいんだ」

「なるほど、一理ありますね」

グランズにそう答えたサイマは、

「では、僕がその相手になりましょう」

そう言って顔を顰めながら、ポケットから取り出したペンで自分の指を軽く突いた。

「大した怪我ではありませんが、いいですよね？」

サイマの指先に膨れ上がる血の玉を見ながら、レックは頷く。

「では、始めます」

サイマの手を取り、呪文の詠唱を始める。それと同時に魔力を操って……レックの手から光が放たれる。

「「おお……」」

周囲のざわめきを余所に、あっという間に光は消えた。

「……確かに痛みが無くなりました」

感激したかのように自分の指を見て、サイマが言う。そして、ハンカチで指先の血を拭き取り、きゅっと押し試みて、痛みもなく血も出ないことを確認する。

「治ってますね……！」

喜色を浮かべたサイマの台詞に、冒険者ギルドの面々も喜びの声を上げる。

「いいでしょう。確かにあなたたちは治癒魔法の祭壇を見つけたのだと認定します」

サイマのその言葉に、今度はレック達が色めき立ったが、

「ただ、賞金の引き渡しは数日ほど待つて頂きたい」

サイマはそう続けた。

「何故だ？」

「場所の正確な確認を行いたいのです。我々が知りたいのは祭壇の場所です。そのための賞金ですからね」

その答えに「そうだな」とグランスが頷くと、

「調査の人員を確保するのに一日、実際に確認してくるのにもう一日。賞金の受け渡しはその翌日になるので、早くても明明後日と言うことになります。よいでしょうか？」

「ああ、構わない」

「では、ルルさん。書類を」

そう言っつてルルから書類を受けとったサイマは、ペンと共にそれをグランズに渡し、

「それでは、こちらの書類にギルド名と代表者名をご記入ください」さらさらっと記入するグランズ。

「デジタル処理じゃないというのも新鮮だな」

「端末はこういう事には使えませんかからね」

サイマは、グランズから受けとった用紙に素早く目を通すと、

「地図の方もお預かりします」

グランズから地図を受けとり、祭壇の場所をまじまじと凝視した後、両方に10桁の同じ番号を書き込む。

横から見ていたリリーが、

「その番号、何？」

と訊くと、

「書類と地図がばらばらになっても、後で一緒に戻せるように、同じ番号を振っているんです」

とのこと。

「手慣れたな」

とリリーもグランズも感心しきりである。

「いえいえ。上からの指示です。なんか、こういうのが得意な人がいるらしいんですよ」

そう言いながら、サイマはどこからか取り出した封筒に、グランズがサインした書類と地図を収めた。

「それでは賞金の受け取りですが、明明後日になります。詐欺を防ぐためにも貴方が直接受け取りに来て下さい」

そして、その翌日……の昼間はエントータの警備の仕事が入っていたため、特に休みというわけでもなく、特に変わったこともなく時間は流れ、夕食も食べ終わったその日の晩。

ここ二週間のパターンなら、翌日は雨の森の探索に出かける予定だったが、既に祭壇を見つけ、全員ではないものの治癒魔法も使えるようになった今、レック達にとって雨の森の探索は必須ではなくなっていた。

なので、今後のことについて話し合うために夕食を食べ、風呂も済ませた後に、全員が宿の男性部屋（人数が多い分広い部屋を取っていた）に集まっていた。今日はマージンも最初からちゃんとしている。ちなみに風呂上がりで寝る前なので、全員が邪魔な防具は外し、きつい服も脱いでいる。そのせいか、何となく普通の旅行のホテルで寝る前の雰囲気に近い空気が漂っていた。

お菓子やジュースはなかったが。

「しかし、今日は大変だったなあ……」

全員が集まるや否やぼやいたのはクライスト。

「有名税というやつじゃな」

微妙に石けんのいい香りを漂わせながらディアナ。ただし、微妙にツンツンしている。

「どっから情報漏れたんだろね……」

やはり石けんの香り漂うりりー。ただ、こちらは疲れ気味である。「冒険者ギルドか、それとも風見鶏の連中だろうな」

昼間のことを思い出しながら、グランス。

レック達が集まって、最初に始まった会話は昼間のことだった。

どこから情報が漏れたのか、蒼い月が治癒魔法の祭壇を見つけ、治癒魔法を使えるようになったことが既に噂になっていたのだ。

それだけなら、別に顔を知られていなければ問題なかったのだが、さすがに警備の仕事で一緒のプレイヤー達は、当然レック達のことを知っていた。

で、警備の仕事もそっちのけで、祭壇の話だの治癒魔法の話だの挙げ句使ってみせてくれたので、レック達 特に治癒魔法を使える4人は疲れ果ててしまったのである。

「まあ、祭壇の調査人員募集も出ていたし、明日には調査に行った連中の何人かは治癒魔法を覚えて帰ってくるだろう。そうになったら、少しは物珍しさも減るだろう」
「そうなるといいね」

グランスの言葉に、心の底からそうあって欲しいとレックは思った。

「はあ〜……」

一斉に漏れるため息。そして、落ちる沈黙。

しかし、この部屋に集まった最初の目的を忘れるわけにも行かず、「さて、治癒魔法も覚えて、これ以上エントータに留まる理由はなくなつたわけだ。で、次に向かうべき場所、或いはやるべき事を決めたい」

今日もグランスが話し合いの司会を買って出た。

「やるべき事というと、やっぱり治癒魔法の練習とか？」

「うんうん、練習したいね」

似たような発言をしたにも関わらず、レックとリリーの考えはちよつと違っている気がするが、グランスは気づかない振りをする。藪を突く必要もない。

「俺は銃弾の補充だな。そろそろ補給しないとまずくなってきた」

銃が使えなくなると一気に役立たずになりそうなクライスト。銃弾は消耗品なのだが、『魔王降臨』以降、入手が困難になっていた。

「わいは鍛冶とかもーちょい練習したいわ。まだ、コマンド登録できへん図面とかいくつがあるねん」

日本語教室の教師をやっていたときはすごいイヤそうだったが、鍛冶の訓練は忙しくても割と気に入っているらしいマージン。

「細工で銃弾作ったりは出来ねえのか？」

「あー、確かにやつといたほうが良さそうやな。今度誰かに訊いてみるわ」

「是非とも頼む」

マージンはどうやら細工もすることになりそうだった。イヤそうな顔はしていないので、物作りが好きなのかも知れない。

「後は戦闘訓練くらいかのう？」

「お金は賞金が貰えますからね」

他は特に思いつかないといった様子のディアナとミネア。

祭壇の場所の報告が正しいと確認された場合、明後日にも100万ピクス（ジ・アナザーの通貨単位）の賞金が貰えるはずだった。ちなみに、蒼い月の一日あたりの生活費用は、現在は7人分まとめて宿代込みで1万ピクス程度である。武器の修理やポジション類の補給などの費用は計算しづらいが、100万ピクスもあれば一月は何とかなる計算である。

加えて、『魔王降臨』前の貯金もあるし、エントータでの警備などの仕事でも多少蓄えが出来ており、今すぐお金を稼いで回る必要は特になかった。

「治癒魔法の練習とか鍛冶の練習はいいとして、銃弾の補充はこの町で出来るのか？」

出てきた意見の中から、グランスはもっともネットクになりそうなクライストの話を確認する。

「一応、在庫は残ってたから、こないだまでは購入は出来てたな。ただ、店では余所から仕入れてたとかで、今後も買えるかどうかは

分かんねえ」

「わいも鍛冶仲間^にに訊いてみるけど、あんま期待せえへん^といてな
マージンへと視線を向けるとそう答えが返ってきた。

「入手不能になるようなら、あまりこの町にはいられないな」

「だな」

クライストが頷く。

「まあ、マージンに聞いてきて貰って、その結果次第と言うことだが……別の町に移ることを前提にしておく」

「異議無^し」

「了解」

仲間達の賛意が得られたのを確認すると、

「じゃ、次に向かうべき場所だな。どこがいい？」

町を出る前提で、グランスは仲間達の意見を尋ねる。

「別の魔法の祭壇を探してみたいのう」

皆が忘れかけているものの、魔法使い志望のディアナ。

「それいいよね！あたしも賛成」

「他の祭壇って、どんな魔法だっけ？」

首をかしげるレックに、

「派手なところでは、^{ファイアアロカファイアボール}火矢、^{アイスアロー}火球、^{ボテイフースト}かまいたち（エアカッター）、^{スリープ}氷矢。地味なところでは^{ボテイフースト}身体強化、^{スリープ}睡眠、^{キョア}解毒だな」

指折り数えて教えるグランス。

「それだけじゃったか？他にもあったと思ったのじゃが」

「危険すぎて、冒険者ギルドに実力を認められたプレイヤーにしか情報が公開されてないものもいくつかあるそうだ。俺たちはまだだな」

「攻撃魔法もいいけど、ボディーブラスト。前衛としては押さえておきたいね」

「そうやなあ。もつとでっかい剣でばっさばっさ敵をなぎ倒してみたいわ」

微妙に物騒なことを言っているマージン。

ちなみに、ボディーブラストはその名の通り、肉体を強化して、筋力や素早さを高める魔法である。

「そや。レックもツーハンドソードやらなんやら、でっかい剣に乗り換えてみいひんか？」

マージンからいいアイデアだとばかりに提案され、

「うん、大きすぎて使いづらそうだけど……」
拒否しようとしたが、

「いやいや。でかいつて事はリーチがあるって事やで？相手の間合いの外から一方的に粉碎できるってのはええで〜？ってゆうかな、デカ物相手の火力として、今使うとる剣やと物足りへんやろ？その点もばつちりやで。切れ味落ちても重量でぶん殴ればそれだけでダメージ入るしな！」

「あ、うん。考えとくよ」

きっぱり断るのに失敗してしまった。後日、レックはこのことを少々後悔する羽目になるのだが、それはまた別の話。

「まあ、勝てない相手から逃げるにしろ、身を守るにしろ、使えそうだな。他の魔法より優先する価値がありそうだが？」

マージンとレックのやりとりを横目に、グランズが提案する。勿論、本人はかなり乗り気であった。

「生存率を上げる役には立ちそうじゃな」

「そうですね」

「地味だけどね？」

「銃の威力は上がりそうにないな」

一部、あまり乗り気ではなかったものの、特に反対意見は出なかった。しかし、

「あ、でも、また使えないメンバー出たりして……」

マージンから逃げ切ったレックの言葉に、全員がピキーンと固まる。

「レック、余計なことを……」

珍しくグランスに睨み付けられ、縮み上がるレック。

「でも、レックの言うことももつともだぜ？今ですら、何で使えるヤツと使えないヤツがいるのかすら分からねんだからな」

「それもそうじゃのう。そもそも、魔法がどどういう物なのか、私達はあまりにも知らなさすぎるのではないか？」

実際、ディアナの言うとおりだった。ジ・アナザーでは魔法を覚える機会自体がほとんど無いため、関心はあっても情報自体はほとんど出回っていなかった。使えるプレイヤーからしてみても、自分が使える魔法以外は何も知らないに等しかった。

「魔法について勉強しなきゃいけないってこと？」

イヤそうなのか、面白そうなのか、微妙な顔になるリリー。

「それ以前に、魔法についての情報を手に入れるアテがないのう」
ディアナの言葉通りだった。使えるプレイヤーもほとんどいないのでは、大した情報など手に入りそうにもない。

しかし、

「あー、それなら公立図書館とかどないや？」

「何それ？」

即座に全く知らない、初耳だと言わんばかりにリリーにそう言われ、絶句するマージン。

ただ、幸いなことに知っているメンバーもいたわけで。

「公立図書館はアイデア社が用意したジ・アナザー内部の図書館だ。リアルの本を始めとした膨大な書物が収められているはずだが」

「そう、それや！」

グランスの説明に助けられ、マージンがショックから復活する。

「公立図書館はエントランス・ゲートがある街に1つずつあるんや。品揃えはちゃうんやけどな。ただ、ジ・アナザーに関する書籍も大量に収められてるゆう話や。多すぎて全部読もうとしたもんがおら

んらしいけどな」

「つまり、そこに行けば魔法についても何か分かるかもしれないということかの？」

「そうや。ま、外れを引くかもしれないけど、一番まともな情報源やとわいは思うで」

マージンのその言葉をしばし考える仲間達。

そこにトドメとばかりにマージンが、

「武器や防具の図面とか、裁縫の型紙や縫い方の本とか、細工で出来るアイテムの作り方とかの本も多分あると思うんや。他にも役に立ちそうな本、あるかも知れんで」

「まあ、そう言うことなら一度行ってみる価値はありそうだな」
重々しく頷くグランス。他の仲間達もそれに追隨する。

「それじゃ別の祭壇を探す前に、キングダムってことだな？」

クライストの言葉に、全員が頷き、

「では、次はキングダムに向かうか」

グランスが決定を宣言した。

「キングダム、久しぶりだね」

「そうですね」

早速盛り上がる女性陣。

蒼い月の結成はキングダムでのことだったが、半年も経たずにキングダムを飛び出し、その後戻っていないのだから、無理もない。懐かしいのだ。

その夜は結構遅い時間まで、キングダムでの思い出話に花を咲かせていた。

蒼い月メンバーのエントータでの一日

蒼い月が治癒魔法の祭壇を発見してから二日目（正確には場所を確認してきただけの再発見なのだが）。

エントータは町中が朝から大騒ぎだった。

冒険者ギルドが主導して、蒼い月の情報を確認するべく大規模な調査隊が計画され、メンバーの公募が行われたのが昨日。

予定が開いていた、或いは予定を開けた冒険者達の応募が殺到したものの、さすがに全員で行くには多すぎるとかで、最終的に100人が選ばれた。そして今日、彼らは冒険者ギルドの職員と共に祭壇を目指すことになっていた。

ちなみに、その後ろから選から漏れた冒険者達がぞろぞろついてくるのは目に見えていたので、「ついてくるのは構わないが、治癒魔法の習得は採用された冒険者達から順番に。後は先着順に並んで貰う」とのお達しが出ていた。

で、彼らがアリの行列よろしく祭壇目指して出発した後は、エントータは目に見えて人が減っていた。2000人に満たない町から500人以上という、普段、雨の森の探索に行っている以上の人数が祭壇に行ってしまったのであるから、当たり前ではあった。

まあ、数日遅れで行けば祭壇周辺も空いているだろうと考えたプレイヤーも沢山いたので、警備担当のプレイヤーも合わせれば結構な人数が残っていたのだが。

そんな中でレック達はというと。

今日は警備の仕事もなく、雨の森での探索も必要なくなり、かといってエントータにはまだ留まる予定だったので、朝から各自自由行動となっていた。

マージンの場合。

「ういゝす」

「おう、今日も来たのか！」

「今日は時間空いたからな。折角やし来てみたんや」

「そうか。じゃあ、今日もよろしく頼むぞ！」

マージンは共同鍛冶場に着くと、職人仲間達と挨拶を交わし、ロツカールームで作業着に着替え、作業場に戻った。

マージンが不定期ながらもここで仕事を始めて一ヶ月近くになる。見ることができないスキル熟練度も着実に上がっているようで、今ではエントータに集まってきた職人プレイヤー達が作れる武器は、ほとんど全部、個人端末のスキルコマンドに登録され、ノーマル品なら問題なく作れるようになっていた。武器に比べて構造の複雑な物が多い防具は、盾を除けばほとんど無理だったが。

「今日はいつまで出来る？」

「とりあえず、昼までや。午後からは仲間の武器の修理をしたいところやな」

「ふむ、そうか」

マージンは鍛冶台に向かう前に、鍛冶場の奥のカウンターに寄って、マネージャと呼ばれるこの鍛冶場の管理人（ジ・アナザー）では珍しいむさいおっさんアバター）に今日の予定を告げる。

ちなみに、エントータには元々大きな鍛冶場はなかった。ところが治癒魔法の祭壇で冒険者が流れ込むことが確実視され、大陸会議が慌てて公共の共同鍛冶場やその他の生産設備、宿泊施設と、それらの管理人を用意したという経緯がある。

他にもいくつかの町で同じような騒動があったらしいが……

とりあえず、マージンが通っているこの鍛冶場はそういう経緯で用意され、マネージャーも大陸会議から派遣されたプレイヤーであった。

「ちゅーか、マネージャー。弾薬の類作れるヤツ知らんか？」

ついでに、今日の生産予定を確認していたマネージャーにちよつと訊いてみた。

「ん？弾薬か。作れるヤツなんていたっけか？」
首をかしげられてしまった。

「まあ、いるかどうか訊いておいてみよう」

「そうして貰えると助かるわ。で、今日のわいの仕事は？」

「ああ、とりあえずブロードソードを5本だな」

そう言いながら、マネージャーはカウンターの後ろの棚から数本のインゴットを取り出した。材料である。

「了解や」

「おう、頑張ってくれ。それと、間に合わなくても急ぐなよ？」

「分かるとるわい」

マージンは受けとった材料をアイテムボックスに放り込み、空いている鍛冶台へと向かった。

マージンが来ている鍛冶場は中央に一直線の長い炉があつて、その周りに幾つもの鍛冶台が並んでいる形になっている。

「今日は何頼まれたんだ？」

「ブロードソードだな」

隣の職人プレイヤーと話をしながら、アイテムボックスにしまっていたインゴットと、ハンマーややつとこなどの道具を取り出す。

「よつと」

やつとこで掴んだインゴットを炉の熱に晒し、十分に熱くなったところで鍛冶台に乗せ、ハンマーでガンガンぶつたたく。熱が冷めてきたら、もう一度炉で熱して、ハンマーでぶつたたく。

ひたすらそれを繰り返して、インゴットを剣の形に整えていく。

もうすっかり慣れたこの作業を、マージンはコマンドを使わずにやっていたりする。

「だいぶ上達したみたいだな」

「おかげさんでな」

それらしい形に仕上げたら、次は研ぎだ。鍛冶台の横に用意されている砥石でひたすら研ぐ。

最後に鍔や柄をつけるのだが……これは、この鍛冶場では細工専門の職人プレイヤーに任せることになっているので、マージンがやる必要はなかった。

と、こんな調子でブロードソードを1つ作るのに、大体50分程度はかかる。

(あー、4本しか作れへんな)

3本目を仕上げたところで時間を確認し、5本目は諦めた。

昼食時になり、できあがったブロードソード4本と使わなかったインゴットを持って、マネージャーの所に行くと、

「やっぱ、エントータには弾薬作れるヤツいないな」

とのこと。ギルドチャットを使ったりして、調べておいてくれたらしいが、残念な結果ではあった。

「まあ、おらんもんはしゃーないわ。調べてくれて、ありがとな」

「持ちつ持たれつってヤツだ。気にすんな。それより、剣の方はどうだ？」

「すまへんな。4本しか出来へんかったわ」

そう言いながら、マージンはブロードソードとインゴットを渡した。

「ん。出来を見るからちよつと待ってる」

一応、マネージャー本人も鍛冶スキルを持っていて、できたものの善し悪しくらいは分かるんだと、マージンは聞いていた。

「そーいや、お前さん、いつまでここに来る気だ？」

一本一本、マージンが打ったブロードソードの出来を確認しながら

ら、マネージャーがそんな話を振ってきた。

「ん〜、そやな。あと一週間来るかどうかも怪しいなあ」

蒼い月の目標は、仮にも魔王討伐だ。既に次の目的地も決まっているし、いつまでものんびりエントータにいるのはないだろう。長く一週間。

そう考えて、マージンは答えた。

「何でそないなこと、訊くんや？」

「いや、お前さん達、祭壇見つけちゃっただろ？って事は、この町にはもう用がないんじゃないかと思ってな」

次のブロードソードを確認しながら、そう答えるマネージャー。

「ああ、そやな。その通りや」

「まあ、ここを離れても、他の町にも共同鍛冶場はあるからな。仲間のために武器を作ったり修理したりするなら、腕はしっかり磨いておけよ」

そこで全部のブロードソードのチェックが終わり、

「ベストとは言い難いが、ま、こんなもんだろ。ほら、給料だ」

「おおきに」

金を受けとって礼を述べると、マージンは昼食のために共同鍛冶場を出た。他の職人達は、まだ作業中だったので今日の昼食は久しぶりに一人で食べることにしうさうさだった。

ちなみに、午後、鍛冶場に戻ってきたマージンは、マネージャーから餞別代わりに幾つかの防具の作り方を教えて貰い、コマンドに登録することが出来た。

クライストの場合。

「すまない。これで在庫は終わりだ」

「あー、気にしなくていいさ。予想はしてたことだしな」

とある雑貨屋のカウンターで、弾薬を受けとりながら、そんな会話を交わす店主とクライスト。

「しっかし、銃は格好いいと思ったんだけどな。まさか、弾の入手に苦労するとはね」

「まあ、剣とか弓とか、火薬を使わないほうが雰囲気出るからな」

「そういうもんかねえ」

「そういうもんさ」

他の客もいないので、のんびりとした会話が続く。

「おまけに、銃器はメンテナンスが大変だろう？ジャムったりもするから、使い手が少ないんだよな」

「確かに、たまーにジャムるな」

「だろう？俺も手を出してみたことあるけどな、ジャムりまくって死にまくったから、止めたのさ」

「あるある。まあ、仲間の援護もあってそこまで死んじやいないけどな。迷惑もかけられねえから、結局予備の銃まで持つ羽目になったな」

しみじみと話を続ける二人。

「予備か。俺もそうすれば良かったか？」

「かもなあー」

「にしても、弾が切れた後はどうするつもりなんだ？作れるヤツがいなけりゃ、近いうちに役立たずになっちまうぞ？」

心配そうな店主。

「そうだな。でも、今更他の武器って訳にもいかねえしな」

困った様子のクライスト。

「なんでだ？」

「やっぱ、イメージだな」

「いや、そんなんで死んだら洒落になんねーぞ？」

さすがに呆れたような店主に、

「ま、半分は冗談だけどな」

「半分は本気かよ……」

「でも、銃の他に何か持つてると、それだけで動きづらくなるしな。下手すりゃ、腰で他の武器とぶつかって銃が壊れちまいそうだ」

「ふむ……?」

クライストの言葉に、ちよつとあごに手を当てて考える店主。

「それなら、ナツクルの類はどうだ?」

「ナツクル? 直接敵を殴るあれか? つか、それってつまり、敵をゼロ距離から殴れってことか?」

さすがに少々焦るクライスト。

「そうなるな。ただ、銃器との干渉はかなり減ると思うが?」

「あー、そりゃな? でも、拳法とか空手とかを習ってないとダメじゃないか?」

「弾切れで死ぬよりはマシだろう?」

「……むう」

店主の言葉に、マージンは反論できなかった。今のジ・アナザーでは死はリアルと同等の物であったから。

「それに、ソロじゃないんだろう? 弾が切れたから役に立たない足手まといに成り下がるつもりか?」

「……くう」

「まあ、ナツクルじゃなくてもいい。弾が切れても戦える、仲間を守る手段を考えておいた方がいいんじゃないかと思うだけだ」

さすがにそれ以上クライストをいじめるのは可哀相だと思ったのか、店主はそうフォローした。

雑貨屋を出たあと、クライストはエントータの商店街（と言っても、食堂以外の店はほとんど無いのだが）を彷徨っていた。頭の中では、さつき店主に言われたことがずっと繰り返し返されている。

（弾切れを起こしたら、足手まとい、か）

分かつてはいたが、人に言われるとやっぱり結構堪えた。

そう、分かっただけだ。ただ、『魔王降臨』以前であればそれは笑い話で済むことだったので、本気で何とかする気はなかった。『魔王降臨』後も、なんだかんだで弾を確保できていたので、(問題を先送りしていたってのは否定できねえな)

そう思うと、ため息が出た。

結局、弾薬が安定確保できれば問題は無い。無いのだが、出来ないものは出来ない。マジンが作れるようになったとしても、町から離れて戦闘を続けていけば、いつかは確実に切れる。現地調達が出来る物ではないのだ。

(となると、結局は別の武器も持つことを考えるべき、か)

どうい武器がいいかクライストは思案し始めた。

(飛び道具……弓はすぐにどうこうなるもんじゃねえな)

命中率が期待できそうにもない。おまけに矢を使い切れれば銃と同じである。アイテムボックスを矢で一杯にするのは御免被るし。

(ブーメランは……威力がない上に戻ってこなかったらアウトか)

おまけにとても扱いづらいと聞く。威力を得るために重くしたら、もう素人にはどうにもならないとか。

(槍やハルバードは、邪魔だしな)

敵との距離を詰め切らなくていいのは嬉しいが、自分の身長よりも長いかも知れない武器では、使わないときの邪魔っぷりは半端あるまい。アイテムボックスに入るサイズでないのは致命的だ。

(メイス、斧は……重すぎるか?)

銃使いであるクライストだと、力が足りなくて武器の重量に振り回される恐れがあった。はっきり言って、ダサい上に危ない。

(鞭も威力が足りないか)

というか、鞭はディアナに持たせるべきだった。身の危険を感じるが。

(となると剣かナックルしか残らないのか?)

意外に選択肢が少ない。まあ、大抵の武器は簡単に扱える物でもなく、即戦力になる武器という線で考えると、片っ端から消えてい

くのは仕方ないのだが。

(剣は、まあ、普通、だよな?)

サイズさえ間違えなければ、可もなく不可もない。無難と言えば無難な武器の代名詞だ。

(ナツクルは……超近接戦闘だよなあ)

銃での遠隔攻撃主体のクライストには、ちょっとハードルが高い。ただし、

(銃との相性は一番良さそうだな)

手につけっぱなしなら銃とは別に引っかけしておく場所も必要ないし、銃を仕舞えばそのままナツクル戦が出来る。

それに、雑貨屋の店主には拳法や空手の類が必要じゃないかと言ってみたが、どの武器でも使い方を覚えなくてはいけないなら、殴り受けるの2つさえ覚えればそこそこ使えるナツクルは、他の武器よりも使いやすそうではあった。

(……………よし)

物は試しである。

武器としても、蒼い月の仲間と被る物でもないし(これ重要)、クライストは早速近くの武器屋に突撃していった。

レックの場合。

(なんでこーなった?)

確か今日は自由行動で、レックもエントータを回って今の剣より良さそうな剣を探してみたり、盾を探してみたりしようと思っていたはずだった。

なのに、

(なんでこーなった!?!)

朝食を済ませた後、宿一階の食堂から外に出ようとして、目の前に立ちふさがったのはリリーだった。可愛い笑顔をとっぴりと浮かべた彼女に、何故か背筋が凍り、後ろを向いて逃げようとしたら……

「どこに行く気かのう？」

やはり背筋が凍るような笑顔を浮かべてくれていたディアナが逃げ道を塞いでいた。

後ろからひしつと肩を掴まれ、

「ちょっとつきあって貰いたいんだけど、いい、かな？」

可愛い女の子からそう誘われるのは、若い男子としては本来はとても嬉しいはずなのだが、今はイヤな予感しかしなかった。

こめかみを流れ落ちていく冷や汗を感じつつ、

「な、なになかな？」

振り返ろうとしたレックは、ディアナにがしつと左手首を押さえられ、リリーにがしつと右手首を捕獲され、

「それは部屋に戻ってからの楽しみじゃ」

そのまま宿の部屋に連れ込まれ、椅子に身体を縛り付けられ、両手は後ろ手にやっぱり椅子に縛り付けられ、両足首も同じく椅子に縛り付けられ……要するに完全に身動きを封じられた状態で今に至る。

目の前では、治癒魔法の詠唱を何度も繰り返すリリーとディアナ。つまりはそう言うことだ。

治癒魔法の練習に付き合わされているのだった。というか、拉致られたというか……

真っ先に食事を終え、あつという間にいなくなったクライストは、その気配を察していたのかもしれない。

そんなことを考えていると、

「レック、あたしたちの詠唱、間違っただけよ？」

いつの間にか至近距離に来ていたリリーが、じーっと顔を覗き込

んできていて、そんなことを聞いてきた。

「あ、ああ。うん、あってる、よ?」

「そ?ならいーんだけど……?」

テーブルに戻っていった、再び詠唱を始めるリリー。

その様子を見ながら、

(あー、ビックリした!)

曲がりなりにもリリーは美少女なのである。ちょっとちっちゃい気もするけど、それでも美少女なのである。

仲間としてずっと一緒に行動しているので、もう慣れてはいる。

それでも、あんな近い距離で真剣に見つめられて、ドキドキするなと言う方が無理なんだ!

とか思っていると、

「ふむ、顔が赤いの?病気か?」

と、ディアナがにやにやと笑っていた。

「!?!」

慌てるレックだったが、

「アバターが病気にかかるわけないじゃん」

と、リリーは気にする様子もない。

(……………)

レック、撃沈。

まあ、恋愛感情抜きでも、異性に異性と認識されてないのはショックだった。

「……………リリー、存外酷いのう?」

「え?何が?」

何も気づいてないようなリリーの様子に、ディアナはため息をついた。

ディアナの場合。

(これはこれで面白いのう)

最初は治癒魔法の練習のため、リリーと一緒にあってレックを攫ってきたディアナだったが、途中からは別のことに関心が向いていた。

(レックめ、リリーに気があるのかのう?)

先ほどのレックの様子だと、そうかもしれない。

まあ、単純に異性に免疫がない男子が可愛い子に近づかれて真っ赤になっただけかもしれないが、それでもいじり甲斐はありそうだ。

ジ・アナザーに閉じ込められて既に二ヶ月半が過ぎた今では、今いるこの世界こそがリアルなんじゃないかと思うことがある。なら、今まではジ・アナザーのアバターだからと意識していなかった相手を意識し始めてもおかしくない。

まして、若い男女なら余計に。

(まあ、恋愛感情ではなくとも、どうなるかは分からんしのう?)

そう考えると、蒼い月の中だけでもこれからいろいろ楽しいことが起きそうだ。しかし、

(揉め事にはならんように気をつけておかねばならんかの?)

恋愛沙汰から揉め事に発展して、蒼い月が壊れるのはさすがにディアナもイヤだった。

そうなると、楽しんでばかりもいられない。

浮かれた気分を引き締め、グランスにでも相談しておくべきだろうと思うのだった。

というか、ディアナ本人もまだ若い部類に入る女性のはずなのだから、本人にその自覚はないようだ。

リリーの場合。

「むう……全然わかんない!!」
そろそろ昏になるというのに、ずっと頑張ってるのに、治癒魔法は発動する気配すらない。

治癒する対象が必要だとは言っけれど、レック達曰く、「途中までは対象がいなくてもやれる」らしい。でも、そもそもそこまで行かない。

リリーの正面では既に諦めてしまったのか、飽きてしまったのか、ディアナがにやにやしながら、リリーを見ていた。

「何考えてるのよ?」

リリーがちょっと八つ当たり気味に訊いてみても、

「思い出し笑いじゃ。気にするな」

こう躲されては追求のしようもない。リリーとしては絶対にそうじゃない気がしていたが。

「あー、もう今日はここまで!!」

全く進展が見えない治癒魔法に疲れ果てていたところに、正面のディアナが全くやる気を無くしているのを見て、リリーもテーブルに突っ伏した。

「あー、何で出来ないんだろ??」

リリーが出来た4人にコツを聞いても、祭壇での感覚を再現すればいいとしか教えてくれない。それ以上は、言葉に出来ないんだとか。というか、一発で出来たらしいから、どこで躓いているのか分からないのかも知れない。

(……あたしもどこがダメなのかわかんないんだけどね?)

まあ、ダメな場所が分かるなら誰も苦労はしないのだ。

ディアナに続いてリリーも諦めたのを見たレックが、「終わりにするなら縄を解いてくれ!」とか叫びだしたのを無視して、リリーは睡魔に身を任せた。

ミネアの場合。

(二人きり……デートみたいですわね)

隣を歩いている仲間をちらちら見ながら、ミネアは今、エントータの冒険者ギルドに向かっていた。ただし、一人ではない。

『魔王降臨』以降、セキュリティ設定が消失したことにより、プレイヤー同士の望まぬ戦闘やハラスメント……さらにはその延長にあるPKやレイプまでもがあちこちで起きていた。幸い、蒼い月はそういうことに巻き込まれたことはなかったものの、油断はするべきではないということで、町中であっても女性一人での行動は控えることになっていた。

で、ミネアが誰と歩いているのかというと、グランズであった。

(男性と二人で歩くのはデート、ですよ？)

そのことを意識しなければいいのだが、どうにも意識してしまうミネアはちよつとした混乱に陥っていた。

人見知りをする上に、奥手なミネアは、勿論今まで異性と付き合い合ったことなど無い。というか、男性と二人っきりで行動したこと自体数えるほどしかない。

(どうしましょう???)

無論、答えは特に意識する必要もなくいつも通りに振る舞うべし。であるのだが、混乱しているミネアにそれは無理というものだった。

(……………!!!)

「……………どうかしたのか？」

グランズが不意にミネアの方を見たため、さつきからちらちら格蘭ズを見ていたミネアはぱっちり視線が合ってしまった。慌てて視線を下に落とす。

そのミネアの様子を見た格蘭ズに不思議そうに訊かれ、

「な、なんでもない、です……」
そう答えるのがやっとだった。

「???何でもないならいいが……?」

グランスは首を捻りながら、それでも再び正面を見た。

その気配を感じ、ホツとするミネア。

(悪い人ではないんですね……)

むしろ、それなりに気は使ってくれるし、面倒見はいいし、いい人だと思う。いや、蒼い月の他の男性陣もいい人ばかりなのだけ。ただ、一緒にいて一番安心できるのは誰かと訊かれると、ミネアは迷わずグランスだと答える。山賊の親分みたいな外見は最初とても怖かったものの、慣れてしまえばどうということにはなかったし。

そもそも、ミネアがジ・アナザーを始めた理由は、本人のその性格にあった。

下手すると臆病の域に達してるんじゃないかという人見知りの激しさは、リアルでの人間関係に致命的な影響を与えていた。それを心配した友人(何人かは親友もいた)の「VRMMOなら少しはマシになるんじゃない?」という薦めで、ジ・アナザーを始めてみたのである。

しかし、リアルとは違う外見なら恥も外聞も多少は捨てられるんじゃないかという友人の期待は見事に外れ、むしろアバターの外見が災いしてナンパされまくった結果、逆に対人恐怖症の域に突入しかけた。

そんなミネアを救ったのが、蒼い月の仲間達(主に女性陣)との出会いである。

リリーやディアナと仲良くなり、彼女たちに紹介される形で蒼い月の男性陣とも徐々に打ち解けた。そして、蒼い月に加入する頃は、人見知りもだいぶ改善されていたのである。

無論、それを知ったリアルの友人達は大いに喜んでくれたわけだが、ミネアは友人達にも1つだけ話さなかったことがあった。それ

がグランズのことである。正確には、グランズに対する自身の気持ちなのだが。

当初、それがどういう気持ちなのか、ミネア自身よく分かっていなかったが、『魔王降臨』以降、ずっと一緒にいるうちに何となくそれがなんなのか分かってきた。

(多分、これって、恋……なんでしょうか?)

そうだといい。そうであってくれると嬉しい。

『魔王降臨』でジ・アナザーに閉じ込められた直後は、ミネアも混乱し絶望しかけた。その中で、みんなを引っ張っていつてくれるグランズはミネアにとって何よりも頼もしく見えたのは事実である。

(だから……でしょうか?)

気がつけば、前よりももっと意識するようになっていた。

『魔王降臨』以前なら、相手のリアルのことを考えて自分の気持ちにブレーキをかけていたのだが……

(今は……?)

もう何ヶ月もリアルに戻れていないせいか、今いるジ・アナザーこそが全てだと錯覚することが何度もあった。そして、それならリアルを気にする必要は?……と迷ってしまうのだった。

そんなことを考えながら、グランズの後についていくミネアは、目下、蒼い月で一番春が近いのかも知れない。

グランズの場合。

はつきり言って落ち着かない。

まさか、こんな居心地が悪くなるとは予想もしていなかった。町中を冒険者ギルド目指して歩いているだけなのに。ふと、居心地が悪くなっている原因の方へと視線をやる。

……………ばっちり目があった。

「……………どうかしたのか？」

誤魔化すかのようにそう訊ねる。

「な、なんでもない、です……………」

「???何でもないならいいが……………」

何とかそれだけを返したものの、

(そこで何故俯く赤くなる!?)

グランスは頭の中で叫んでいた。

要するに。居心地の悪さを感じている理由は隣……………というよりちよつと斜め後ろを歩いているミネアがさっきからちらちら送ってくる視線だった。

(うゝむ?)

グランスも男である。こつも美少女(つか美人?)から視線を送られてしまうと、期待するべきではないと頭で分かっている、どこか期待してしまう。二人で歩いている、というこの状況もよろしくない。非常によろしくない。

(いかん、いかな)

心の中で頭を振って、よろしくない妄想としか呼べないその期待を追い払う。

大体、自分には蒼い月の仲間達を守っていく責任があるような気がするのだ。恋愛沙汰に現を抜かしているわけにはいかない。いやいや、もう今いるここは到底十分、現とは呼べない気もするが。

軽く混乱しながらそんなことを考えていると、再びミネアからの視線を感じる。しかも、どこか熱を帯びているのはきつと気のせいだ。そう思うしかない。

(……………無心だ。無心あるのみだ)

大変気になるものの、そうそう振り向くわけにも行かず、必死に

スルーしようと試みるグランス。

（こうなったら、出来る限り早く用事を済ませて宿に戻るしかないな）

などとんちんかんなことを考えながら、ひたすら冒険者ギルドへの道を急いだ。

実は春がすぐそこまで迫っていることに、当分気づくことは無さそうだった。

第四回大陸会議

キングダム大陸南西部最大の街、ラスベガス。

無論、アメリカ西海岸のカジノで有名なラスベガスとは無関係である。単に、このプレイヤータウンを作った公認ギルドがそう命名したというだけである。もっとも、その後カジノっぽい建物が次々と建てられたりはしたが。

現在、このラスベガスに大陸会議の本拠地は置かれていた。

そして、その大陸会議の所有する建物の会議室に、大陸会議のメンバー15人が集まっていた。

名前通りに会議を開くためである。

有力クランおよび大陸会議によって設置されたギルドのマスター達15人が大陸会議メンバーとして、会議室の中央に置かれた円形のテーブルを囲むようにして座っていた。

「さて、会議を始めたいと思います」

全員が席に着いているのを確認し、個人端末で時間を確認したフオレスト・ツリーのマスターにして大陸会議議長のエルトラータが会議の始まりを宣言した。金色の目にかかりかけた黒髪をさつと右手で撫でつける。

「あの『魔王降臨』から早3ヶ月が経とうとしています。そして、この大陸会議が結成されてからも既に2ヶ月。しかし、未だキングダム大陸の治安すら確保できたとは言い難い状況です。従って、本日もまた、現状報告および今後の行動計画について話し合いたいと思います」

と無難な挨拶をこなすと、右に座っていたメンバーに目をやった。「では、報告します」

と、エルトラータから話を継いだのは、商業系クラン最大手のふたごぶらくだのマスター、ピーコだった。肩まで届いているウェーブがかかった焦げ茶色の髪と黒い瞳が、どことなく落ち着いた感じを相手に与える女性である。ほとんどの町にクランメンバーがいるため、大陸会議では情報の収集と整理を担当していた。

「まず、キングダム大陸全体のプレイヤー数がやっとな絞れてきました。25万〜35万ほどです」

「思っていた以上に多いな……」

誰かのそんな声に、

「そうですね。我々大陸会議に所属しているクランの総人数は5万程度ですから、その数倍のプレイヤーがキングダム大陸にいるということになります」

「他の大陸はどうなんだ？」

これはパンカス。戦闘系クラン、アヴァロンのマスターである。

「メトロポリスに関しては、目下治安の悪さもあつて情報が少なくほとんど分かっていません。ただ、やはり数十万程度のプレイヤーがいるものと推測されます。カントリーに至っては、全く連絡が来ないため、どうなっているのか全く分かりません」

淡々と答えるピーコ。

その答えに、参加者達の間からうなり声が聞こえた。無論、ピーコは気にしない。気にしていたら報告がまともに進まない。

「次に、治安状況ですが、私達大陸会議が管理できている町では、治安の不安はなくなりました。ただし、私達の手が届いているのは主に大陸南西部に限られています。大陸北部や中央部に点在するプレイヤータウンの治安は着実に悪化しているとのことですよ」

「具体的にはどの程度悪化しているんだ？」

これはレイン。銀竜騎団のマスターで、ピーコと同じく大陸会議の副議長を務めている。一見、金髪青眼の優男で戦闘能力は低そうだが、万に届こうかというメンバーをしっかりとめ上げている強者である。

「逃げてきたプレイヤーの証言では、PKや女性プレイヤーに対するレイプが多発しているそうです。また、かなりの町で、悪党クランが町を牛耳っているようです」

再び議場を満たすうなり声。

PKと言えば少しは軽く聞こえるが……今のジ・アナザーではリアルの人と同じくらい重みを持つ。加えてレイプとなると、治安もクソもなくなっているのがよく分かる。

しかし、ピーコは自身が女性であるにも関わらず、冷静に報告を続ける。

「この問題は正直、今すぐどうにか出来るものではありません。理由については後ほど、レインから説明があると思いますので、私はその他の報告を先に済ませます。」

次は魔物の襲撃ですが、私達が把握している限りでは、週に3回程度のペースというのは変わりません。また、どこの町が襲撃されるのかも、相変わらず予想できません。町の規模が関係あるという話もありましたが、実際には無関係のようです。

被害の方ですが、ゼロにはなりそうにありません。最近では犠牲がだいぶ減りましたが、その町のプレイヤー数に合わせた規模の襲撃が行われているのか、大抵数名が犠牲になります」

ピーコの説明に、皆の顔が暗くなる。

犠牲を出さないように努力しているのに、必ず少数の犠牲が避けられないのでは、暗くもなるというものだ。

「これに関しては、襲撃にあった町の規模、迎え撃った戦力、その町にあった戦力、襲撃してきた魔物の集団の規模を調べ、関連の有無を調べているところです。次の会議までには結果が出ると思いますので、その報告を待ってから、対応を検討した方がいいと思いますが……」

そこでピーコは視線をエルトラータにやって、

「ああ、それでいいと思います。レインが後で説明する問題もありますからね」

その言葉で、その説明を聞いてからでも意見するのは遅くないと思った参加者達は、とりあえず話の続きを促した。

「次は食糧問題です。元々、ジ・アナザーでは畑などで食料の生産を行っていたのはご存じの通りです。しかし、その面積と畑を耕作するプレイヤーが足りません。幸か不幸か、『魔王降臨』の際に相当数のプレイヤーが切断されたため、それほど大きな不足にはなっていないんですが、いずれ表面化する問題の1つです」

「最近野菜が減ってきているのはそれが原因か？」

「厳つい外見に反して菜食主義者のパンカス。」

「ええ、そうですね。これも後から話し合う予定です」

「……他にも問題があったりしないだろうな？」

「少なくとも1つはありますね。でも、それは最後に。」

では次の報告ですが、冒険者ギルドに登録したプレイヤーの人数が8万人を越えました。軍の志願者の方は確か……」

「そこでピーコが視線をやると、
「4万を既に越えている」
とレイン。」

「ただ、冒険者ギルドに登録しても、実際には冒険者としてほとんど活動していないプレイヤーも大勢いるようですので、こちらの8万という数字はあまり当てになりません」

そこで一度言葉を切ったピーコに、

「大陸会議所属が5万で、冒険者と軍で12万かい。残りの8万人はなにをしてるんだい？」

そう訊いたのは、きれいな黒髪を結い上げたティーパーティーの女性マスター、ケイだった。着ている服も洋服ではなく、質素ながらも和風の着物とかなり凝っている。

「キングダム大陸に25万人いるとしてですが、残りは8万人ではなく、少なくとも10万人程度はいると思われませう」

「淡々とケイの発言を修正するピーコ。その理由をケイが訊こうとする前に、」

「大陸会議、冒険者ギルド、軍のそれぞれに重複登録しているプレイヤーも相当数いますから。確認は取れていませんが、それでものべ2万人以上の重複はあると見積もっています」

「ああ、なるほどねえ」

「ちなみに、いずれにも所属していないプレイヤーの動向を把握する必要もあると、私個人は考えていますので、後で議題に上げさせて頂ければと」

「それは構わないよ。……話の腰を折って悪かったね。続けとくれ」「いえ。私からの報告は以上です。次は軍からお願いします」

ピーコに話を振られ、大陸会議直轄の軍を担当しているレインが口を開いた。

「さっき言ったとおり、軍の規模は4万を超えた。ただ、うちのクランを核にした指揮系統を組み上げて何とか動かしてるが、限界が近いな。ちゃんとした体制に作り直しておきたい。」

あと、最近軍がやってることとしては、小規模な戦闘訓練を行っていることと、治安の悪化したプレイヤータウンへの侵攻、主要な街道の巡回くらいだ。

ただ、軍の規模の拡大のせいで、そつちもちょっと滞りがちだ。おかげで軍が常駐している町でも、魔物の襲撃に万全に備えることが出来ていない。議長やピーコがさっき言っていたのはこのことだ」
軍の活動内容はスルーされたが、指揮命令系統が貧弱で軍が実力を発揮できないという部分は、事実上の議題提起であった。

「管理しきれないのか？」

「確かにうちのクランは巨大だが、絶対的な統制を敷いていたわけじゃない。むしろ数十人規模の仲良し集団が無数に集まっていただけの寄り合い所帯みたいなものだったからな。数万の人間をピシッと管理するノウハウも体制もないんだ」

パンカスに訊かれ、素直に答えるレイン。

「あー、うちも似たようなものだしな。言われてみればそんなもんか」

パンカスが納得して頷くと、

「では、本日の議題をまとめたいと思いますが、他の報告はありませんか？」

「特に危急のものはないな」

「ないね」

「ありませんね」

ピーコの確認に、そう答える会議のメンバー達の中で、

「冒険者ギルドからは1つある」

冒険者ギルドの代表となったギンジロウが手を挙げた。

「なんででしょう？」

「つい先日、雨の森で治癒魔法の祭壇の位置が特定されたとの報告があった。祭壇に行ったからといって全員が使えるようになるとは限らないが、それでも次々と使えるようになったプレイヤーが出てきている」

この報告には、会議参加者達から喜ぶ声が上がった。

「これで、防衛戦であれ何であれ、死人が出にくくなりますね」

「そうですね。大変喜ばしいことです」

エルトラータとピーコも素直に喜ぶ。

「何しろ、祭壇の大まかな場所は分かっても、細かい場所が分からないケースが大半ですからね。マッピングはちゃんとしておいて欲しいものです」

ついでに毒を吐くピーコ。

「いや、マッピングしていたプレイヤーが残ってなかったただけなんだから……」

というギンジロウの台詞をあっさり無視し、ピーコは言葉を続ける。

「軍の方も、治癒魔法の祭壇に順次メンバーを派遣し、治癒魔法を覚えさせた方がいいでしょう。最低限の町の確保は出来ていますし、今後のことを考えるなら必須でしょう」

「ああ。今のところ死人は出てないが、今後もそうとは限らないか

らな。手の空いた連中から少しずつ派遣するでしょう。命令系統の組み直しが終わってからな」

そんなレインを一瞥し、ピーコは、

「他にはありませんね？では、議長」

そう背中を押され、エルトラータが口を開く。

「そうですね、レイン、そちらはお任せします。では、本日の議題ですが、食糧生産、軍の体制、統治外の町の治安は今手が出せないとのことなので、情報収集体制です。加えて、キングダムの支配権の奪取も入れたいと思います」

「キングダムの支配権？」

誰かの言葉に、「ええ」とピーコは頷くと、

「私からの今日最後の報告になります。治安の悪化はキングダムでも見られます。あそこは誰にとっても重要な拠点ですので、治安が悪化するのはいけません」

「聞いてはいたが……そんなに酷いのか？」

呆然とした様子のパンカスに、

「悪いな。一応、一部地域をうちのクランで制圧してあるんだが、はつきり言って無法地帯だったらしい」

レインがそう答える。

「ハラスメント防止機能は停止中、運営も姿を消し、悪さをしても取り締まられることはない。悪党共に大人しくしていると云う方が無理だろう」

「それでも初心者プレイヤーは迂闊にキングダムから離れることが出来ない、というのも状況を悪化させていますね。PKも頻繁に起きていますよですし、放置は出来ません」

ピーコの言ったPKという言葉に、会議参加者達の表情は再び暗くなった。しかも、ピーコの発言からは被害に遭っているのは実力の足りない初心者プレイヤーばかりのようにも聞こえた。

「では、議題の優先順位を提案したいのだけど、いいでしょうか？」
重くなった空気を押し流すかのように、エルトラータがそう発言

し、やっと全員がほつつと息をついた。

「治安の問題は重要ですが、我々の体制がしつかりしていなければ、迂闊に手を出して手ひどいしっぺ返しを喰らいかねません。そこで、食料と軍の問題を最優先とし、その次にキングダムを含む治安問題。情報収集に関しては、ここにいる方々がマスターを務めているクランやギルドを利用する従来の形のまま、しばらくは我慢したいと思うのですが、どうでしょうか？」

情報収集を後回しにされたことに、ピーコの眉が一瞬つり上がるが、隣に座っているエルトラータに見えるはずもなく。

「確かに、足下が崩れては、人様を助けることは出来ませんね」

「そうだな」

「優先順位としては妥当だね」

皆の賛意を得て、食料と軍をどうにかすることから話し合いは始まった。

「結局、農地と農業人口が足りないってことだよな？」

「募集かけるしかないんじゃないか？」

「専業農家ってか？なり手いるのか？」

「命の危険性が低ければいるんじゃないか？」

「でも、開墾はどうするよ？」

「開墾に手間取ると、収穫も遅れるものねえ？」

「いつその事、クエストで出してしまえ」

「ってか、軍の方で肉体鍛錬と称して開墾させる！」

「屯田兵かよ！？」

すったもんだの末、野菜に関しては、結局畑を増やすしかないという事で落ち着いた。畑の開墾に関してはクエストという形で冒険者に依頼し、できあがった農地で働くプレイヤーを募集する形となった。屯田兵はレイン達戦闘系クランのマスター達がこぞって反

対したため、採用されなかった。

肉の類はその辺で凶獣でも普通の獣でも狩ってくれば済む話なのだが、狩りすぎて獲物がいなくなりました……ということが『魔王降臨』以前には時々あったので、肉の買い取り価格を操作することで、狩りすぎを防ぐことになった。これは、冒険者にしる狩人にする、自分で消費者に売ることが出来ず、小売業者を介さざるを得ないために出来た方策である。

「で、レインとしてはどうなのがお望みなんだ？」

「お望みというか、その辺が分からないから議題に上げて貰ったんだが……」

パンカスに問われ、困ったように答えるレイン。

今の議題は、軍の新体制について、である。

「結局、今は銀竜騎団の連絡網を使って、動いてるだけって事よねえ？」

脳筋二人に任せていると話が進みそうにないと、ケイが口を挟んでくる。

「ん？ああそうだな」

「で、小隊規模には分けてあるけれど、連絡は全部トップから直接行ってる」と

「うちはそんな感じだったからな」

「で、銀竜騎団のマスターとか上の方に全部負担が行っちゃってる」と

「うむ」

「バカ」

「なんだと!？」

ケイに一言で切り捨てられ、思わず立ち上がったレインを、「まあまあ」と宥めながらエルトラータはケイに質問した。

「どづいことですか？」

「話は簡単よ。今まで銀竜騎団は頭が直接手足を管理してたわけ。クランとしてなら手足をきっちり管理する必要はなかったから、そんなんでも頭に負担がかかることはなかったわけね。でも、軍になっちゃったら、手足を全部きっちり管理しないといけないのよ。それも4万人という手足をね。それを銀竜騎団の幹部だけで全部管理できるわけじゃない」

「ああ、なるほど」

「確かにこれは、軍が本格的に動き出す前にどうにかしないと行けないわ。治安維持の面でも、魔王討伐の面でもね。じゃないと、レインを始めとした幹部連中が知恵熱か胃潰瘍で全員潰れるわよ」

「う……………」

何か心当たりがあるのか、腹に手を当てるレイン。それを見て、
「……………手遅れだったみたいですね」

ピーコがぼそりと呟く。

「ま、今ならまだ犠牲は胃袋一個で済むわ。」

とりあえず、小隊を直接首脳部が管理するのは止めた方がいいわね。軍を幾つかに分割して、それぞれにちっちゃい頭をつけてやる。レイン達はそのちっちゃい頭だけ管理するようにすれば、いいと思うのだけど？」

「師団、大隊、中隊、小隊に階層化するわけですね」

これはピーコ。

「まあ、そんな感じ？人数は分かんないけど、10人で小隊、それを10個集めて中隊。中隊を10個集めて大隊。大隊を10個集めて師団って感じでいいんじゃない？」

「師団1つで1万人だと、少し扱いづらい気がします……………」

「なら、大隊5つで師団でもいいんじゃない？大隊の規模ももっと小さくてもいいかもしれないわね」

他の参加者が口を挟む間もなく、てきぱきと話を進めてしまうケイとピーコ。当のレインや戦闘系クランのマスターであるパンカスでさえも口を挟む隙がない。

そして、エルトラータはそれをにこやかに眺めるだけ。

ちなみにこれは大陸会議ではよくある光景であった。こうなると他の参加者は時折意見を出すものの、大筋はケイとピーコが決めてしまう。リアルでベンチャーの社長をやっていたケイと、コンサルタント会社に勤めていたピーコの二人が本気になれば、大抵のことは他の参加者が口を出すまでもなくさくさく決まってしまうのであった。

大陸会議が、身内ではケイとピーコの追認機関などと言われる所
以でもある。

「で、銀竜騎団はどうすんの？」

「え？」

既に話しについて行くことを放棄しかけていたレインは、ケイからいきなり話を振られ、軽く混乱してしまった。

「だから、銀竜騎団を軍の中枢に置くのか、それともいっその事、別のクランを立ち上げて、そっちを軍の中枢として再編するのか、
よ

「でも、指揮系統にギルドチャット（こっちの呼称は変わらなかった）を利用するなら、指揮官クラスは全員別のクランに移って貰わないといけなくなりますね」

レインが答える前に、別の問題点を提示するピーコ。

「そこまではしなくていいと思うけど、要所要所に連絡員として同じクラン所属のプレイヤーを配置しないといけないのは確かね」

「確かにそれでもいけますね。むしろ、その方が敷居は低くなりませんか」

「ということだけど、問題ある？」

「いや、話しについて行けなかった……」

ケイに確認され、レインはぐったりしながらそう答えるしかなかった。

結局、軍の体制はケイトとピーコが提示した案がそのまま採用された。10人で小隊、10小隊で中隊、10中隊で大隊、5大隊で師団となる。中隊以上の隊の司令部には隊長、副隊長に、銀竜騎団から出向する形の連絡係を加えた3人が必ず配属され、大隊以上の司令部には二人目の副隊長と必要に応じて参謀がつけられることになった。これにより、大陸会議直轄軍には8つの師団が結成されることになる。

階級制については、一部の軍隊マニアがリアルそのままの階級の採用を強く推したが、採用は見送られた。ただし、全軍を統括する立場にあたるレインにだけは、「元帥」の称号がからかい半分で贈られた。

「次はキングダムの扱いですが……レインさん、大丈夫ですか？」
「残念ながら、HPは既に残っちゃいない……」

軍の体制についての話が終わって、エルトラータに声をかけられたレインは、テーブルに突っ伏したまま、そう答えた。

「軍を統括する立場の人間としては、情けありませんね」

「いや、お前が言うな」

レインを沈めた本人であるピーコの発言に、パンカスが突っ込む。
「まあまあ、皆さん、その位にしてください」

エルトラータが仲裁に入り、ピーコがパンカスに送っていた冷凍光線のような視線を引っ込める。

「それでは改めて……キングダムですが、軍の方はしばらく動けないものと見ていいですか？」

「ああ。キングダムの状況は戦い慣れてない軍の下っ端にはつらい。ゲリラ戦みたいになりそうだしな。指揮系統が今のままじゃ、無駄な被害が出るだろうな」

「銀竜騎団の方は？」

「俺とか幹部連中が軍の世話にかかりつきりになると、さすがにっらいな。確保した地区の警備もあるしな」

「なるほど……やはり、何もかも力尽くでというのがネックですか」「そうなるな」

レインの返答を受けて、考え込むエルトラータ。

「他の町なら、悪さした連中を立ち入り禁止にしまえば済む話なんだけどねえ？」

ケイの言ったように、大陸会議が治安を回復したプレイヤータウンでは、犯罪を犯したプレイヤーへの罰として、公認ギルドによる町の施設への出入り禁止が行われる。これによって、治安維持が容易に行われていると言ってもいい。ちなみに、「町の施設には道路も含まれる」ため、事実上、町への出入りを禁止することも可能である。

「キングダムだけは運営の直轄ですからね。運営が機能しなくなってしまうば、後は武力による実行使しかありません」

「それでも、無闇にプレイヤーを殺してしまうのは避けたいところです」

ピーコが暗に仄めかした悪党共をPKしてしまえという過激意見を、エルトラータは首を振りながら却下した。

「では、いつその事牢獄でも作って放り込みますか」「過激意見再び。

「結局、それが一番無難ですかねえ。もっとも、脱走犯が後を絶たない気がしますが……」

ある程度鍛えられたアバターなら、素手で建築物を破壊することも不可能ではない。牢獄を作りづらい理由である。

エルトラータ達が悩んでいると、

「ちょっと、いいかな？」

と一人の参加者が手を挙げた。グラニッド。公認ギルドである町作り協議会の生き残り（？）である。

「……どうぞ？」

何故かピーコに発言を許可され、「どうも」と頭を下げつつ、グラニッドは、

「脱走不能の牢獄は作れるよ」

この発言には、他の参加者達が一斉に驚いた。

「どうやって!？」

「プレイヤータウンなら、施設ごとに立ち入り禁止を設定できるよね。つまり……」

「立ち入り禁止にした施設で周囲を囲ってしまえばいい、ということですか」

途中でグラニッドの考えを理解したピーコが、グラニッドの言葉を遮って言うてしまう。

苦笑いしながら、それでもあまり気にした様子のないグラニッドはある意味大物かも知れないなど、見ていたパンカスは少し思った（っていうか、ピーコのドSっぷりが半端ない気もするけどな!）

無論、いじめられる趣味はないので、パンカスは声には出さない。その周囲では、

「なるほど、それならいけるな」

「いや、考えつかなかったな」

感心した参加者達が、ざわめいていた。

「プレイヤーを殺すことなく、キングダムから隔離する……それならできそうですね」

エルトラータも満足そうに頷いている。

「牢獄案、私としては採用したいと思います。いいでしょうか？」

無論、反対などあるはずもなく、設置場所などは軍や各町の管理担当と話し合って詰めるということ、キングダム近辺の町を1つ

選んで、牢獄が作られることが決定した。

それと共に、軍と牢獄の準備ができ次第、キングダムの制圧に動くことも決定された。

一方で、他の治安の悪化している町に関しては、管理役になる公認ギルド所属プレイヤーと軍の準備が出来ていけば、エルトラータ、ピーコ、レインの3人の判断で制圧することになった。重要な町は既に管理下に置いているため、特に事態が悪化しない限り、大陸会議で扱っても特に決められることがなかったためである。

ちなみに、魔物の襲撃への対策は、有効な対策自体が取れるかどうか不明であるため、もう少し情報が集まるまで様子見ということになってしまった。

そして、会議終了後。

人気が無くなった会議室に、エルトラータ、レイン、ピーコの3人だけが残っていた。

243

「あーあ、いつまで経っても厄介ごとが尽きませんねえ」

「仕方ないだろう。法律もクソもない世界に放り出されたんだ」

「私達はそれを見て見ぬ振りを出来ないお人好しばかりですしねえ」

「お人好しだからこそ、公認ギルドとして認められたんだろう？」

「まあ、そうとも言えます」

それを否定することは、ここにいる3人には出来なかった。大陸会議の参加者の中には、自らの利益のために参加した者もいるが、自分たちはお人好しだという自覚が、3人にはあった。

しばしの沈黙。

「しかし、いつになったらここから出られるんだろうな？」

「魔王を倒してみるしかありませんねえ。それも、私達が全滅する前に、です」

死んだプレイヤーは生き返ることはない。PKであれエネミーとの戦闘であれ、着実にプレイヤーが死んでいつているならば、いつかは全滅してしまう可能性は高かった。

「そのためにも、私達は強くならなくてはなりません」

「そうだな」

しみりと話し続けるエルトラータとレイン。

その二人の会話を聞いていたピーコは、ふと違和感を覚えた。

(……?)

リアルでは毎月あるそれは、しかしVRMMOであるジ・アナザ―ではあり得ないはずの現象だった。

(でも、トイレのこともありますし……)

全否定は出来ず、もしかしたらとも思う。

「そろそろ私は失礼します」

もうしばらく会議室に残るつもりらしい二人に挨拶をして、会議室を出たピーコは近くの女性用トイレへと向かった。

そしてそこで、月のものが来てしまった証拠を見たのだった。

どことも知れぬ暗き部屋で

その部屋には一本のロウソクしか明かりがなかった。

部屋の窓には全て分厚いカーテンが掛けられ、外の光を完全に遮っている。

そこで、ロープに身を包んだ男とも女とも分からぬ複数の人影が、ぼそぼそと話をしていた。

「……とりあえず、安定はしたのか？」

「安定はしたようだな」

「術式の進行はどうだ？」

「ほぼ予定通りだ。この分なら、予言されたときまでには十分間に合うだろう」

「魔王討伐の動きはあるのか？」

「まだ、それほど余裕はないようだ。ただ、一部にそういう動きはある」

「では、解放の見込みが消えたわけではないのだな？」

「そうだな」

「だが、何年かかるか分からぬぞ」

「それも想定のうちだ」

「そうだ、想定のうちだ」

「問題は、予言されたその時までには力をつけられているかどうかという点」

「そうだ、それこそが問題だ」

「如何にも。それこそが唯一の問題だ」

「しかし、最早賽は投げられた。我らには待つしかできない」

「いや、導くことは出来よう」

「それは可能かもしれぬ」

「しかし、誰を導く？ どうやって導く？」

「それは分からぬ。だが、それを話す時間はたっぷりある」

「そう、まだ今から決めることも出来る」

「では、待つだけではなく、導けるか否か、話し合ってみるとしよう」

「そうしよう……」

そうして、暗い部屋の中で、彼らの話は続く。

いつ、その話し合いが終わるのかは、彼ら自身すら知ることはできない。

その時が来るまでは。

どことも知れぬ暗き部屋で（後書き）

第二章？終了です。

近いうちに、章の最初の前書きと最後の後書きを残して、前書き・後書きを全部消します。PDFで見るときに邪魔？なのと、章の最初と最後が分かりづらいので。

旅路の夜に（前書き）

第三章

ジ・アナザー再開です。主人公達は寄り道はしないものの、作者の筆が寄り道しています。さてはて。

旅路の夜に

治癒魔法の祭壇を見つけた事による賞金を受けとったレック達は、しかし、すぐにエントータを発つことは出来なかった。旅の準備はすぐには終わらない、というのもあるが、受けていた警備の仕事がまだ残っていたからである。さすがに途中で仕事を放り出したりすると、今後の評判が悪くなる。

そんなこんなで、賞金を受けとってから5日後。

レック達はやっとエントータを発つことが出来たのだった。

「マージン、これ何……」

呆然としたレックの手には、マージンが使っているのと同じような巨大な剣が握られていた。

「見れば分かるやん。グレートソードや」

持っているレックの身長に匹敵しそうなそのサイズとその外見に違わぬ重量。間違いなく30kgは軽く超えている。

「前に言っただやろ？ちっちゃい剣やとデカ物相手にするのはきついやんか。だから、一本打ったったんやで。いやー、苦労したわ」

そう言っつて、レックに剣を押しつけた張本人はケラケラと笑った。正直に言っつて、レックにとって邪魔である。使えないだけならいいが、一辺50cmの立方体であるアイテムボックスには、こんな巨大なものは入らない。つまり、常に持って歩く羽目になる。

「まあ、いいんじゃないか？俺はマージンの意見に賛成だな。レックの武器だと、でかい相手に役に立たんからな」

「でも……」

「使えるようになるまでは、俺が持っていてやるさ。それでいいだろっ？」

グランズにそう言われると、逃げ場はない。

渋々ながら、レックはグレートソードを練習する羽目になったのだった。

そんな数日前の、エントータでの出来事を思い出しつつ、レックは野宿のために街道から少し離れたところに張ったテントの裏で、グレートソードを何度も何度も振っていた。

正直、使いこなす自信はない。素振りしているだけでも、まだまだ剣に振り回されている感じがする。しかし、ロングソード程度だと、まともに相手に出来るのが人間と同じくらいの大さのエネルギーまでに限定されてしまうのは事実だった。それに、この重さの武器を振り回すのは、筋力パラメータを上げる役に立つだろう。数値は全く見えないが。

「おー、やつとるなー」

そう言いながら、見回りからテントに帰ってきたのはマージン。既に日が落ちてからずいぶん経ち、月もやせ細っていてかなり暗いというのに見回りというのは、余程夜目が利くのだろう。

レックはグレートソードを押しつけた張本人を険呑な目で睨み付けたが、マージンはそれに全く気づいていない様子で、

「どや？ものになりそうか？」

などと、呑気に訊いてきた。

「はぁ……」

睨み付けても効果がないと知ったレックは、ため息をつきながら、グレートソードを鞘に収め、地面に転がす。ついでに自分も地面に腰を下ろす。

「全く。エントータで一月も訓練してないはずなのに、なんでもうこんな物を作るのかな？」

「ま、スキルコマンドから実行すれば、とりあえずノーマル品ならすぐ出来るからなー」

背中から抜いたツーハンドソードを軽く振りながら、マージンが

答える。

「武器は大抵難易度低いんや。鎖鎌とか凝った武器は別やけどな」
ヒュンヒュンと振り回した剣で風を切り、次の瞬間、自らの正面でピタリと剣を止める。

その様に、レックはマージンの筋力はいったいどれだけあるのか気になった。しかし、訊いたところで数値じゃあるまいし、分かりそうにもないとレックは別のことを訊いてみた。

「そう言えば、クライストもナツクルだかなんだか買ってきてたよね」

警備の仕事がない日にクライストは一人で武器屋に出かけ、ナツクルを買ってきていた。曰く、「弾薬切れると困るからな」とのこと。

「まー、弾薬だけの問題とちゃうんけどな」

ツーハンドソードを背中から下ろした鞘に収め、レックと同じように地面に腰を下ろしたマージンはそう言う。

「どういうこと？」

首をかしげるレックに、

「銃本体の修理やメンテナンス、出来るプレイヤーが残つたらんかったら、アウトやで？クライストも自分で掃除くらいはしとるみたいやけど、壊れたパーツはどうにもならん」

「言われてみれば……」

「そやる？銃は強力な武器やし、実際役に立つ。そやけど、維持し続けるんが大変なんや。そやから、使つとるプレイヤーが少ないんや。正直、クライストのあの銃、よーもつとる方や思うで。よつぽど大事にしとるんやな」

「マージンはパーツとか作れないの？」

「まだ無理やな。細工を極めていけば、何とかなるとは思うんやけどな。設計図もあらへんし、コマンドからの制作・修理も無理や」
「じゃ、壊れたら……？」

「修理できるプレイヤーが見つかるまでは、別の武器で戦ってもら

わなあかな」

「そのためのナツクル、かな？」

「そうやな。理由はどうあれ、保守が簡単な武器も持つとくのはアリやな」

「これは保守が簡単とは思えないけど……」

「マージンの台詞に、自分に押しつけられたグレートソードを見ながらばやくレック。」

「銃に比べたら、大抵の武器は保守は簡単やで」

「……それもそうだね」

「つてゆくか、二人とも、まだ寝ないの？」

「後ろから声をかけてきたのは、テントから顔を出したリリーだった。」

「僕は当直だから、クライストに交代するまでは寝ないよ」

「寝ることは出来ない」と答えるレック。

基本的には何かに襲われることはないとはいえ、町の外で野宿する時には見張りは欠かせない。見張りを立てずに寝込みをエネミーやらPKやらに襲われました、では、間抜けにも程がある。

「そっか。ごくろーさま」

レックにねぎらいの言葉をかけたリリーは、

「で、マージンは？」

「久しぶりの夜のフィールドやからな。もうしばらく起きとるつもりや。夜って結構好きやから」

実際、そう答えたマージンはどこか楽しそうだった。

「そうなんだ？ちよつと意外」

「そう言いながらも、リリーもテントから完全に出てきて、レック達の側までやって来た。」

「星も見えるしな」

「でも、作り物でしょ？」

「それゆーたら、わいらの今の身体も作りもんやで？」

「それはそうだけど……」

「気にしたら負けっばいね」

レックの言うとおりだった。実際、普段は今の自分たちの身体がアバターという作り物であるということ、忘れて生活しているのだ。

「ま、プラネタリウムやと思えばええんや」

「それはうまい例えだね」

「そうね」

そして、偽りの夜空に瞬く偽りの星を、地面に寝転がって3人で眺める。

「他の連中は爆睡中かいな？」

「ま、そうね」

「テント1つでよー眠れるな……狭ないんか？」

「狭いわよ」

「……今日は外で寝るわ」

「風邪引くよ？」

「レック……アバターが風邪を引くつちゅーのは、結構ナイスなボケやと思うで？」

マジンに突っ込まれ、思わず赤面したレックだったが、暗かったおかげで誰にも気づかれることはなかった。

「あたしも外で寝ようかな？……中狭いもん」

「見張りの隣で寝られると、ちょっと辛いものがありそうなんだけど……？」

眠気に耐えて見張りをしている横で、寝息を立てられるのは、レックにはちよつと辛そうだった。多分、眠気に耐えきれなくなっつついつい一緒に寝てしまえそうさ。

「わい、しばらく眠気来そうにあらへんし、何なら、当直代わったろうか？」

「それは助かるけど、いいの？」

「いいんじゃないの？見張りが眠気に負けて眠っちゃうよりはマシだと思うけど？」

マージンの代わりに答えるリリー。

「じゃ、先に眠くなったらお願いするよ」

「ああ、任せとき」

「あたし、寝袋とってくる」

リリーはそう言って起き上がり、言葉通りにテントの中から自分の寝袋を持って出てきた。

「でも、大きいテントにするか、もう一つテント買わないと、きついなあ」

上半身を起こしたマージンが、テントを見ながら言うと、

「狭いなら外で寝ればいいだけだし、問題ないんじゃない？」

と、リリー。

マージンはそれに首を振って、

「季節があるかどうかは別としてな、雪があるような寒いところに行く可能性はあるやろ？逆に、蚊がぶんぶん飛んできるところにも行くかも知れん。そないなところで、寝袋だけって拷問やと思うぞ？」

「それは……勘弁だね」

「そうね……」

寝袋から出ている顔に蚊が群がってくる状況を想像してしまったのか、ブルブルツと全身を振るわずレックとリリー。

「そんなところに、行く必要あると思う？」

「分からん。ただ、魔法の祭壇がとんでもないところにあつたら、行く羽目になるやろな。サークル・ゲートも探してみたいしな」
レックに訊かれ、そう答えるマージン。

それを聞いたリリーが、

「サークル・ゲートって何だっけ？」

「ワープ装置や。二点間を移動するだけの装置やけどな。でも、物によっては大陸間を繋ぐのんもあるやろうし、使えたら行動範囲広

がるで」

「じゃあ、中央大陸にも？」

「いけるかもしれん。というか、船が頼りにならん以上、サークル・ゲートで行けないなら無理ゲーやな」

一人うんうんと頷くマージン。

「そのサークル・ゲートの場所は公開されてないの？」

「されとらんな。場所も悪けりや使い勝手も悪いとか聞くからな。下手に公開すると死人が出るかもしれんし、当分は公開せんのちゃうか？」

ずいぶん物騒な答えが返ってきて、レックは呆然とした。

「死人が出るって……」

「あー。なんや、連続稼働時間がずいぶん短いみたいでな。行ったらしばらく帰って来れんようになるんやで。で、行った先が危険地帯やったら……」

「ゲートがもう一度開くまで凌げる実力がないと、アウトってわけだね」

「じゃ、あたし達も……」

「しばらくは手え出さん方がええやろうな」

などと話しているうちに、夜も更けてきていた。

あくびをし始めたリリーとレックは寝袋に入って素直に寝息を立て始め、一人起きていたマージンはジ・アナザーの星空を見ながら、物思いに耽っていた。

ラスベガスの夜

エントータを発ってから二週間ちよつと。

街道上で他のパーティとすれ違ったり、時々エネミーの襲撃を退けたりしながら、レック達はラスベガスに着いていた。

ラスベガスという名前ながらも、最初はギャンブルとは縁もゆかりもない街だったが、街の発展とともに、リアルのアメリカの同じ名前の街同様、ラスベガスを設置したギルドの手により、次々とカジノとホテルが建設された。その結果、『魔王降臨』の時までは、リアルなラスベガスをも上回るカジノの聖地とまで呼ばれるまでになっていた。

無論、『魔王降臨』時のプレイヤーの大量排除により、街の規模に見合うだけの人口を確保できていない。おまけに、ほとんどのプレイヤーがジ・アナザーで生きること集中し、カジノで遊ぶ余裕は失っていた。そのため、見かけは派手なもの、その中身だけなら今ではすっかり普通の街である。

あえて、他のプレイヤータウンと違う点を挙げるならば、ラスベガスは現在大陸会議の本拠地であり、大陸会議直属の群の主要部隊の駐屯地でもあることだろうか。そのために、街の治安は非常に良く、今ではキングダムを差し置いて、大陸の流通と経済の中心地となっていた。無論、プレイヤーによる自治の中心地でもある。

「疲れた……」

そう言いながら、レックは、軽装とはいえ防具を身につけたまま、ホテルのベッドに倒れ込んだ。

既に時刻は夜の9時。外は真っ暗である。

ちなみに、レック達は一時間ほど前にラスベガスに到着し、つい

先ほどのこのホテル、シルバーチップにチェックインしたばかりであった。

「あゝ、食事よりもう寝ちゃいたいな……」

夕方、街道の脇で野宿するかどうかを話し合った時に、ラスベガスまであとちよつとだし、野宿せずに一気にラスベガスまで向かおうってことになって、実際そうしてみたのだが……思ったより疲れた。

で、このまま眠ってしまいたいレックだったが、この後、軽く夕食を摂ることになっていたので、さすがに寝るわけにもいかなかった。

が、しばらくぼーっとしていると、

コンコン

「そろそろレストランに行くぞ」

「あ、ちよつと待つて欲しい」

ドアをノックする音に続いて聞こえてきたクライストの声に、レックは慌てて起き上がった。急いで身につけていた小手やプレートを外して床の上に置くと、テーブルの上に置いていた部屋の鍵をかつ攫い、部屋を飛び出す。

「他のみんなは？」

「もう先に行つちまつたぜ」

親指で下への階段を指して、クライストが答える。

「にしても、久しぶりの個室つてどうだ？」

「やっぱり、それなりに落ち着くね」

宿屋と言うよりホテルと呼ぶに相応しい外見と設備を誇つていても、キングダム大陸に似合わないエレベータの類はさすがにないの
で、ゆつくりと階段を下りながら、そんなことを話す。

ジ・アナザーに閉じ込められて以降、レック達は寝る時は全員同じ部屋、良くて男女別に二部屋に分かれて寝ていた。なので、ラス

ベガスの宿泊施設事情を知った女性陣から、たまには個室に泊まりたいという要望が出た時、男性陣も特に反対はしなかった。

無論、個室だと大部屋で雑魚寝するよりかなり金がかかるが、幸い、治癒魔法の祭壇の発見報酬がほとんど手つかずで残っていた。長々と滞在する予定もなかったので、問題ないだろうと全員の意見が一致したのだった。

「みんなで寝るってのも、最初は悪くなかったんだけどね」

「もう、この世界にもすっかり慣れたしな」

「そうだね。もう……どのくらい経ったっけ？」

個人端末のカレンダーが機能しなくなっていたため、レックは詳しい日数が分からなくなっていた。が、

「そうだな。3ヶ月……ってこたないな。4ヶ月って言われてもおかしくないな」

クライストも、大雑把にしか数えていなかった。まあ、大体あっていたのだが。

「そっか。4ヶ月か……」

「多分な。おかげで、随分ジ・アナザーにも馴染んじまったな」

「トイレとかお風呂とかね」

「いつの間にやら、汗までかくようになってるしな」

そこで、何か思い出したようにクライストは足を止め、軽く周りを見回して誰もいないことを確認すると、

「あと、女のな、生理も来るようになってたらしい」

と、小声で言う。

「……本当に？」

信じられないと思いつつも、今のジ・アナザーでは何が起こっても不思議じゃないとも、レックは思った。

「ミネアは来たらしいな。……俺は何もしてないけどな」

レックにじと目で見られ、慌てて無実を言い張るクライスト。

階段を下りきり、レストランへと歩きながら、会話は続く。

「いろいろ問題の種になりそうだったからな。マージンとグランスにも一応話はしてある。おまえは女性陣と完全に離れる機会が少なかったから、今になっちまったな」

「問題って？」

「んー、俺にもよく分かんねえよ。ただ、リアルでもナプキンだの何だのあったってことは、やっぱ、どうにかしといた方がいいことなんだろうな」

とクライストが話したところで、二人はレストランについて、その話はそこまでとなった。

「メニュー、そんだけ……？」

「こんな時間に作ってもらえるだけでもマシじゃろうな」

レストランのウェイターから、今作れるメニューを伝えられ、シヨックを受けるリリーに、ディアナはそう言った。

「まあ、閉めようとしていたところを無理言っただ。何か作ってもらえるだけでもありがたいさ」

とは、グランス。

そもそも、ジ・アナザーでは、近代都市メトロポリスを除けば、電気などない。夜の光源は殆どがランプという貧弱な灯りであるため、特に『魔王降臨』以降は日が落ちた後は、さっさと食事をして寝てしまうものになっていた。

夜の9時とかまでレストランが営業していたというのが、そもそも非常識とも言える。ラスベガスならではののだが。

「ま、選択の余地なんてあらへんのやし、それ、7人分まとめて頼みますわ」

注文を待っていたウェイターに、マージンが勝手に注文を出してしまった。まあ、メニューが1つだけでは、仕方ない。

「あ、二人も来ましたよ」

ウェイターと入れ替わるようにいてテーブルに近づいてくるレックとクライストを、ミネアが見つけた。

「待たせたな」

「遅れてごめん」

そう言っただけで空いている椅子に二人は座った。

「メニューは手っ取り早くできる1つしか頼めなかったけど、構わないな？」

「グランスの確認に、二人とも頷く。

「では、明日からの予定を少し話しておくか。部屋に戻ったら、さつさと寝たいだろうし、何よりこの部屋は全員で集まれるほど広くない」

実際にはツインなら何とかなるのだろうが、今回は全員シングルつまりは個室に入っていた。そこに7人はちよつと狭い。

「まあ、予定と言っても、冒険者ギルドから仕事を受ける予定はない。ここで各自が必要なものを補給するだけか。つまり全員、必要なものを言っておいて欲しいだけだな」

今のところ、お金は十分にあるので、相当余計な出費がない限り、余計なクエストや仕事は受けずにキングダムを目指す方針なのは、今までに何度か確認していることだった。なので、グランスの言葉には誰も異論を挟まない。

そして、最初に口を開いたのはマージンだった。

「わいは細工関係の図面とか設計図とかコマンド登録できるのがいくつが欲しいな。特に……」

そこでクライストに視線をやって、

「銃関係のな」

「あー、手間かけさせて悪いな」

「ま、あんま気にせんでええって。半分趣味やしな」

「ってわけで、俺は銃の修理用の部品と弾薬だな」

ついでに必要なものを述べるクライスト。

「あたしはパチンコ用の玉かな。役に立ちそうなのが見つければいいんだけどね」

「わたしは矢ですね。ただ、かなり嵩張るのですけど……」

「あー、材料あれば作れるで。金属の鏝以外は街の外でも手に入るから、鏝だけ確保しといてくれたら、わいが作るわ」

「それは助かります。お願いできますか？」

作ってあげると言っている仲間に対して、妙に腰が低いミネア。

「任しときー！」

そう言って、自分の胸を叩くマージン。

「僕は武器や防具の修理かな」

「ああ、それは俺もだな。武器に関しては、マージンとリリーは大丈夫か？」

「んー、あんまし使ってないけど、あたしのも一応見してもらった方がいいかな？」

「見るだけなら、今見よつか？」

「ホントに？じゃ、お願い〜」

そう言って、リリーはアイテムボックスから取り出した短剣をマージンに渡した。

その短剣を「ん〜」とか言いながら確認し始めたマージンを横目に、

「ディアナはないのか？」

「私のはのう……杖で殴るだけじゃが、それも最近出番がのう……」
グラスに確認され、どよんと沈み込むディアナ。

実際、マージンとクライストが常にいる今のパーティでは、殴るだけという相当火力に欠けるディアナの出番は皆無だった。良くて後衛のミネアやクライストの護衛であるが、実際に杖で敵を殴ったことは、最近は殆ど無かった。

「あー、まー、気にすんな。魔法覚えたら何とかなるって」

「……治癒魔法、使えないんじゃないか？」

クライストの台詞はもちろんフオローになっていなかった。むしろ、ディアナをより沈ませてしまう。

しかし、そんな状況を一人だけ知らないように見えていたが、

「ん。問題なしやな」

リリーの短剣をチェックしていたマージンは、そう言って短剣をリリーに返すと、

「魔法の祭壇は他にもあるわけやし、別の魔法なら使えるようになるんちゃうか？」

「……それまで役立たずでいると言う訳じゃな」

「しばらくの間、別の武器に変えてみたらどうだ？」

「……それしか無いかのう」

グランズの提案に、やっと少しだけディアナは浮き上がってきた。

そこに、

「お待たせしました」

と、ウェイターが料理を運んできた。

「何で、親子丼……」

メニューを知らなかったレックはそれを見て、驚いた。

「残っていた材料で手っ取り早く作れるのはこれくらいだったんですよ」

とウェイター。

「まあ、わいらとしてもちやっちゃんと食べれるから嬉しいんじゃないかな」

マージンのその言葉には、仲間達も「確かに」と心の中で同意した。疲れているし、簡単に食べられる丼ものは歓迎できた。

いつの間にかディアナも復活し、そのまま仲間達は親子丼をかき込む作業に没頭する。

「あー、食った食った」

「結構おいしかったね」

満足そうなクライストとリリー。

「あの、お風呂はまだ入れますか？」

食器を下げに来たウェイターにミネアがそう訊くと、

「湯が冷めていてもよろしければ」

とのこと。

勿論、女性陣のみならず、いくらかの汗をかいていた男性陣も文句は言わない。やはり、どうせならすっきりしてから眠りたいものなのだ。

ウェイターが食器を下げ終わり、仲間達が精算のために立ち上がる中、

「マージン、後でちょっと良いか？」

「ん？構へんけど？」

ディアナに声をかけられたマージンは、疑問符を浮かべていた。

コンコン

「ちょい待ってや〜」

男女別々の浴場から個室に戻ってきた後、ドアをノックされたマージンはディアナが来たのだろうと扉を開けに行った。

何の用なのかは……ある程度は予想はしていた。多分、食事の際に出ていた話に絡んで、ディアナの新しい武器でも相談されるのだろうということだ。間違えても、男女の話ではあるまい。

しかし、

「何で、ミネアとリリーもおるねん？」

蒼い月の女性陣が全員そろっていたことに、首をかしげる。

「それは説明するから、先に入れてもらえんかのう？」

「ああ、構へんで」

マージンがそう言うと、ディアナ達はそろそろマージンの部屋に入ってきた。

「で、何の用や？」

一応レディには優しく……というわけでもないが、女性陣をベッドに座らせ、マージン自身はテーブルに腰掛け、ディアナにそう尋ねる。

「あー、それじゃがな……」

ディアナにしては珍しく、歯切れが悪い。それどころか、驚くべき事に顔を赤くして、ミネアやリリーと顔を見合わず。それも、何度も。

マージンがディアナの左右に目をやると、ミネアとリリーも微妙に赤くなっている。

(……何しにきたんや?)

と、マージンは心の中で首を捻った。

まず、3人が赤くなって言い出しづらいことというところ、恥ずかしいことなのだろうとは見当がつく。その筆頭となると……まあ、ベツドの中で男女の営みというやつだろう。確かにジ・アナザーでは男女の営みとやらも出来ないことはない。ただ……

(恋愛感情抜きにしちゃ時期がおかしいわな。いや、個室つちゅーんは便利な環境やけどな)

しかしそれなら3人で来るといのがおかしいと決めつけ、可能性から排除する。

(まさか、3人揃って変態つちゅーわけでもないやろしな)

そうだったら、この3人との距離感を見直さなくてはならない。

(そやけど、そーなら、何の用件なんやろなあ?)

あれこれ考えてみるものの、さっぱりディアナ達の用事が分からず、マージンが首を捻っていると、やっとディアナが覚悟を決めたらしい。

「他の3人には秘密にしておいて欲しいんじゃが……」

そう切り出したディアナ達にマージンが頼まれたのは……ナプキンかその代用品を作れるようになっておいて欲しいということだった。

(あゝ、なるほどな)

クライストから、どうも女性の生理も再現されているらしいと話は聞いていた。とは言え、男性相手に気軽に話せるようなものでもないのも何となく分かる。

「私だけではなくて、ミネアも生理が始まっておるからのう……。今後、ずっとこうなるのであれば、我慢すればいいというわけにもいかんからのう……」

一度話し出してしまうって開き直ったかのようなディアナに対し、ますます赤くなるミネアとリリー。

その様子を見ながらマージンは、

「まあ、ナプキンは作れるようになってもええけどな。ただな……」
そこで言葉を一度切って、

「作り方覚える時には、誰かについて来て欲しいんやけど。ってゆーか、作り方知ってる人は、君らで探して欲しいんだけど。ってゆーか、再利用できるやつならいくつか買っておいたら、わいが作る必要はないと思うんやけど……」

さすがに男であるマージンにとって、ナプキンの作り方を教えて欲しいなどと聞いて回るのはあまりにも恥ずかしかった。こっそり作れるようになって、こっそり作るまでならいいが……出した条件は絶対譲れない一線である。まあ、そもそも必要な分だけどこかで入手してきてくれるのが一番ではある。

そのマージンの言葉に、ベッドの上で女性陣がひそひそと相談を始めたが、なかなか結論は出ない。

その3人には、こうなつたついでに、もう1つ言っておかないといけないことがあるのだが、相談が終わるまでは待つた方が良さそうだとマージンは考えた。

やがて、3人の相談はまとまったらしく、

「探すのは私たちでやるし、必要な分だけ買う努力はしよう。じゃが、念のためにやはり作れるようにはなっておいて欲しいのじゃ。作り方を知っているプレイヤーを見つけたら、私たちも同行するか、作り方は覚えておいて欲しいのじゃが……」

結局、避けることは出来ないのかと、マージンはため息をつきながら、

「まあ、それならしゃーないけどな。ほんま、誰かついて来てや？一人は絶対嫌やからな！？」

「うむ。それは約束する」

ディアナの言葉に、ミネアとリリーも赤い顔のまままで何とか頷いた。

それを見たマージンは、言うべきことを言うために口を開いた。

「じゃ、こつちからも1つ言っておくことがあるわ」

それを聞いて、身構える女性陣。

「生理が始まったことは、他の連中にも言っとくべきや。フォローが必要になる場面があるかどうかは分からんけどな。そうやってからは遅いからな」

既に全員が知っているはずだとは、一言も言わない。

ミネアが何か言いかけたものの、ディアナに止められ、再び3人でひそひそと話し合いが始まった。そして、すぐに結論が出たのか、分かった。それは私の方から伝えておこう。……他にはないのかうっ？」

マージンが頷くと、

「では、もう1つの相談じゃ。さっきのレストランでの話じゃがな……」

今度は普通に、ディアナが今後乗り換えるべき武器の相談だった。

この話し合いにはミネアとリリーも普通に参加し、マージンが修理できるという条件の中で、とりあえず槍を試してみることになったのだった。

寄り道ラスベガス初日

ラスベガス到着の翌日。

レック達はバイキング形式の朝食を摂った後、個々人で武器の修理や消耗品の補給を行う。はずだったのだが、何故か全員で冒険者ギルドに向かっていた。

グランスは元々ギルドで情報を仕入れるつもりだったし、マジソンも新しいアイテムを生産スキルに登録するために、他のプレイヤーの情報を仕入れるつもりでギルドに行く予定だった。クライストも、店を一軒一軒回るよりはギルドで聞いた方が早いと同行した。レックは修理をマジソンに任せただけ、手持ちぶさたになってしまい、それなら修理や補修くらいは自分で出来るようになるうということ、その手のスキルを教えてくれそうなプレイヤーの情報を仕入れるためにやはりギルドに同行した。女性陣3人は、生理用品の状況を知るために、やはりギルドへと同行した。平たく言えば、全員が情報を仕入れにギルドに向かったわけだった。

「すっごい人だね」

「マジ、すげえな」

ラスベガスの冒険者ギルドに着いたレック達は、建物を出入りするプレイヤーの数に圧倒され、次に、建物の中でもそこに来ているプレイヤーの数に圧倒された。

ちなみに、ラスベガスの冒険者ギルドの建物 通称ギルド会館

には、大陸会議によって設置された他のギルド 生産者ギルド、農家ギルド、商人ギルドの3つも同居していた。また、ギルドメッセージを使った連絡網を受け持つメッセージギルドの支所も入

っていた。

そのことを受付で聞いたレック達は、人が多いことに何となく納得はしたものの、それでも『魔王降臨』以降は見ることもなかったほどの人、人、人という光景に圧されていたのだった。

「生産者ギルドは二階やそうやから、わいはここで別行動やな」

「僕もそっちに用事あるから、一緒に行くよ」

「あー、俺もだ」

こうして、まずマージン、レック、クライストがわいわい言いながら二階の階段へと消えていった。

「では、私たちもあれの情報を探しに行こうかのう。商人ギルドじやろつから、西館じゃな」

「さっさと済ませよ」

「ですね」

そうして、女性陣は西館への通路へと消えていき、残されたのは、「俺が別行動か……」

とぼやいたグランズ一人だけだった。

それでも、元々一人で来るつもりだったのだと開き直り、情報掲示板へと向かう。

情報掲示板は壁一面に、各地の情勢や大陸会議や各ギルドが決めたルールなどが所狭しと貼り付けられていた。ホールの反対側の壁には種々のクエストが張りまくられていて、そっちに比べるとこちらは人が少ないものの、それでも、グランズの巨体が動き回ると周りに迷惑がかかるくらいは人がいた。

それでも何とか、お目当ての情報を探し出し、掲示板の下に積まれているメモ用紙を何枚かもらい、書き込んでいった。

その頃、二階に上がったマージン、レック、クライストは、生産者ギルドの受付で、それぞれが知りたい情報を貰っていた。

ちなみに、各ギルドでの情報料は原則無料である。やる気があるプレイヤーに役立つ情報を惜しみなく与えることは、プレイヤーの強さの底上げにつながり、結果として魔王討伐がそれだけ近くなる。そんな大陸会議の見解の現れであった。

「んー、いくつかは無理かも知れんけど、一応行ってみるか」

「マージンはどこに行くの？」

「あちこちの工房やな。アイテムのコマンド登録して回りたいからな」

レックに訊かれ、受付で貰ったメモと紹介状の束をひらひらさせるマージン。

「多分、一部はレックやクライストと被つとると思うけどな。数が数だけに、一人で回らせて貰うわ。距離があるから、順番に回らなあかんからな」

「そう言うレックはどこなんだ？」

「僕は共用鍛冶場かな。その担当の人に鍛冶スキルを教えて貰って、しばらく練習していこうと思ってるけど」

そう、レックはクライストに答えた。

ある程度大きな街では、旅をしていて定まった拠点を持たない生産系プレイヤーのために、生産者ギルドによって共用の生産施設が整備されている。共用鍛冶場もその1つであった。

「んで、クライストはどこ行くんや？」

「銃と火薬の専門店だな。互いに離れたところじゃないから、多分移動は楽だな」

やはり受付で貰った紹介状と地図を見ながら、クライストは答えた。

「じゃ、全員ここからは別行動だね」

「だな」

「そうやな。場合によつたら、レックとは鍛冶場で会うかもしれんけど、次の集合は夕食時やな」

こうして、生産者ギルドで情報を貰った3人組がばらばらに行動し始めた頃、蒼い月女性陣はギルド会館西館で、誰が受付に話をするかでジャンケンをしていた。

何しろ、話の内容が内容なので、あまり他人、特に異性には聞かれたくない。にもかかわらず、商人ギルドの受付ホールには、各地の物価や需要、供給の情報を求める商人プレイヤー達が次々とやってきていて、人の波が絶えない。さすがのディアナも恥ずかしさには勝てなかったのか、ミネアかりりに押し付けようとしたものの、二人も当然イヤなわけで……

「う、負けた……」

そう言つて、右手のチヨキを恨めしげに睨み付けるリリー。

その隣ではディアナと特にミネアがホツとしていた。

「まあ、リリーよ。頼んだぞ？」

「……そんな顔じゃ頼まれたくない」

受付での羞恥プレイをリリーに押し付けられて、安心したのかにやけ顔が止まらないディアナを、リリーは睨み付けたが全く効果はなかった。

「……すみません」

「……そう思うなら、代わつて……」

ミネアに頭を下げられても、勿論今のリリーには効果はなかった。

そんな感じで、女の子（一部そこまで若くないかも知れないが）3人が商人ギルドの受付ホールの隅の方で赤くなりながら、こそこそ話しているのは、商人ギルドの職員から見ると、結構目立っていたらしい。

「あのー、ちょっとよろしいですか？」

覚悟を決めたリリーが受付に出来ている短い列（殆どの商人が求

める情報は壁に掲示されている)に向かおうとした時、一人の眼鏡をかけた女性プレイヤーがリリーたちに声をかけてきた。

「ん？なんじゃ？」

そう答えたディアナに、その女性は声を潜めて、

「生理用品のお尋ねですか？」

「……!!」「……」

その三人の反応だけで、彼女には十分だったらしい。にっこりと笑顔になると、

「急にあんな事になっちゃって、同じような用件の方が増えてるんです。皆さん、大抵あなた達と同じような挙動なので、すぐ分かりました」

「そういうことが言えるそちらは？」

「あ、申し遅れました。こちらの受付担当のミーフィと申します」

ディアナの誰何に、胸に止められているネームプレートを示すミーフィ。そこには確かに、商人ギルドのロゴとミーフィの名前が彫り込まれていた。

「了解した。にしても、私達と同じ用件のプレイヤーが増えたと
いうことは……やはりそういうことなのかなのう？」

「ええ。まあ、こんな話をここでするのもなんですから、どうぞこちらへ」

そう言っ、ディアナ達を別室へ案内するミーフィ。その最後尾で、羞恥プレイを免れたリリーがホッと息をついていたのは余談である。

そんなこんなで、その夜。

ホテルのレストランの混雑が収まった時間に、蒼い月の面々は集まって、食事を摂りながら、今日の報告やら明日の予定やらを話し合っていた。

その途中で、基本的な生産スキルを一通り習得しているマージン

にいろいろと負担が集中していることをレック達は改めて認識し、マージン以外の仲間達も生産スキルを少し身につけることになった。その割り当ては、裁縫はミネア、ポーション調合はディアナ、銃の維持に必要な細工がクライストで、鍛冶がレックである。もっとも、いずれもマージンのスキル習熟度が既にそこそこ高くなっているために、スキルを覚えてもすぐには出番など無く、当面はマージンにおんぶに抱っこなのだ。

ちなみに、グランスとリリーは当面はノルマ無しである。そして、今はグランスからの報告の時間だった。

「まず、キングダム自体の状況だが、キングダムとその周辺の治安は思っていたより良くないな。目的としている公立図書館も周辺の状況が随分面倒なことになっている。治安悪化の原因は、言わなくても分かるだろう」

とグランスは説明を始め、仲間達も頷いた。

公認ギルドの管理下にあるプレイヤータウンなら、一般的に犯罪と見なされる行為を行ったプレイヤーは、街の施設の利用や時には街への立ち入りを公認ギルドによって制限される。そのため、犯罪行為を犯すようなプレイヤーは極めて少なく、治安もいい。

しかし、エントランス・ゲートが存在するメトロポリス、キングダム、カントリーの3つの街は運営直轄であり、公認ギルドによる管理がなされていない。そして、その運営は『魔王降臨』以降は全く機能していなかった。このような大がかりな事件を起こしただけに、プレイヤー達とまともに向き合う気がないのは当たり前であったが。また、『魔王降臨』以前のプレイヤー同士の問題行為を制限するセキュリティシステムも機能しなくなっていた。

「具体的には、犯罪者集団がいくつか出来ていて、そいつらがキングダムの街中で縄張り争いをやってるらしい」

「犯罪者集団って、暴力団とかマフィアみたいな？」

「それならまだ良かったんだろうけどな。今のところ、粗野なチンピラの集まり程度でしかないそうだし」

レックの質問に答えると、グランスは説明を続けた。

「所詮チンピラの集まりだから、自分たちさえ良ければってことで、後先考えずに暴れてるらしい。一般プレイヤー相手の暴力・暴行沙汰も日常茶飯事で、殺されているプレイヤーもかなりいるという話だ」

その言葉に、仲間達は顔を顰めた。

デスゲームと化した（と認識されている）現在のジ・アナザーではPKは事実上の殺人なのだ。それを「はいそうですか」と流せるような神経の持ち主は、蒼い月にはいなかった。

「最近はずりに乗って、キングダムの外にまではみ出していらしい。軍が巡回を始めてからは、キングダムの周辺地域はだいぶ安全になったそうだが、まだ安心できるほどじゃないそうだし」

「軍はキングダムの治安維持には乗り出さないのか？」

クライストが訊くと、

「一部の街区は管理下に置いているな。ただ、軍の練度が低く、規模もあの広さをカバーするには足りないとかで、今のところほとんど一部にとどまっているらしい。」

もっとも、軍の管理下にある街区の治安はかなり改善されていて、キングダムから出るだけの実力がないプレイヤーが集まってきているという話だし」

「なんか、大変そうですね……」

「全くじゃ」

「まあ、人数が少ない俺たちにはどうすることも出来ないがな」

少し無念そうにいうグランス。

もっとも、犯罪を見て見ぬ振りをせざるを得ないのは、誰にとっても気持ちいいものではなかった。

「で、俺たちの目的の公立図書館だが……軍が確保した街区にはな

い

頭を振って、気分を切り替えたグランスの言葉に、

「ってことは……チンピラ共の縄張りの中ってことか？」

クライストの言葉に、仲間達が実にイヤそうな顔になる。

「残念ながら」

勿論、グランスもだった。

「ということで、本当にこのままキングダムに向かうべきかどうか、一度話し合っておきたいんだが」

グランスのその言葉に、レック達は難しい顔になった。

「キングダムの公立図書館なら、いろんな情報が手に入るはずやけど、PKも平気な連中がうろろしとるから、命の危険があるっちゆうのはな」

「リスクを冒してまで得る価値のある情報かどうかということじゃな」

マージンとディアナの言葉こそが、要点であったが、

「図書館で得られる情報がどんなものなのか、分かんねんだよね？」

クライストの言葉通りでもある。

「軍が公立図書館一体を制圧した後でもいいんじゃないでしょうか？」

ミネアがおそろおそろ提案すると、

「だが、いつになるか分からん」

「早めに手に入れた方がいい情報あるかも知れんし、そもそも図書館を荒らされたら身も蓋も無いわな」

グランスとマージンに反論された。

「でも、厄介ことはゴメンだよ？」

「いや、『魔王降臨』そのものが最大の厄介ごとだったから」
思わず、リリーの台詞にレックが突っ込む。

そしてしばし、発言が途切れ、場が静まってしまふ。

「とりあえず、キングダムの軍が管理してるところまで行ってみる

つてのは？」

「まあ、選択肢の1つではあるな」

レックの提案に、グランスはそう頷いた。

「ちなみに、キングダムに行かないとしたら、次の目標はどーするんか訊いてもえーか？」

「確かにそれは気になるのう」

「やっぱ、他の魔法の祭壇に行くとかじゃねえか？」

「でも、使えるようにならなかつたら、無駄足だよな」

「確かに、レックの言うとおりだな。治癒魔法だつてここにいる全員が使えるようになった訳じゃない。つて事は、全員使えるようにならなかつた可能性つてのもあるわけか」

グランスの言葉に、仲間全員が唸る。

「他の祭壇つてどこにあるの？」

「そう尋ねるリリーに、

「どれも結構遠いな。正直、あまり無駄足は踏みたくないと思うくらいだ」

「つてことは、試しに行つてみるつてのは……」

「他の用事のついでじゃなければ、相当な時間のロスになる」

「グランスの答えを聞いて、あちゃーといった感じの顔になるクライスト。」

「ジ・アナザー（ユル）から出られないだけなら、そう簡単に死ぬことはないな
みたいですけど……」

「いつまでも、閉じ込められてたくはないよね」

「ミネアとレックが互いに頷きあっている。」

「じゃ、祭壇案は却下でよろしく」

案を出したクライスト本人がそう言つて、祭壇案は取り下げられた。

それからしばし。代替案も出ない中で、

「お宝探し……は無謀かのう？」

さりげなくを装つてディアナが案を出したが、

「ありえへんありえへん」

「ドラゴン討伐ですら、精霊石くらいしか出なかったっていうし、無理だろ」

「うん、ないね。それは」

「……ごめんなさい」

一瞬にして仲間達に否定されてしまった。

実際、ジ・アナザーではレアアイテムの類がほとんど無い。

ちよつと変わった植物だとか動物とかはいるし、ちよつと珍しい鉱石なんかの素材もある。だが、マジックアイテムだの宝具や神具だのといった類のアイテムは、無いに等しかった。

一応、精霊の力が宿った精霊石のようなアイテムは存在するのだが、一般的なRPGと異なり、それを武器や防具に取り付けるだけで使えるようになるわけでもない。むしろ、火の精霊石を取り付けた武器防具は熱くなりすぎて触れなくなるとか、氷の精霊石を付けると凍傷になったとか、殆ど呪いのアイテム同然である。

もっとも、光の精霊石などは非常に長持ちするランタンとして使えるし、火の精霊石も熱源としてなら、いくつかの用途が確立されているので、それなりの価値はある。だが、戦闘の役に立つことだけは殆ど無かった。

「となると、とりあえずキングダムに行ってみる、でいいのか？」
グラスが確認してみたものの、他に案も出ず、やはりキングダムを目指すことになった。

寄り道ラスベガス二日目

そして翌日。

再び蒼い月のメンバーは個人行動になっていた。

実際には、ミネアは冒険者ギルドが一般向けに開放している訓練場に行くグランスの金魚のフンになっていたし、当面は生産スキル担当のマージンも一人ではなかった。なので、結局個人行動になったのは共用鍛冶場で武器や防具の修理の訓練をする予定のレックと、昨日見つけた銃器店で銃の手入れや簡単な部品の製作を教えて貰う予定のクライストだけだったりする。

「じゃ、その用事を先に片付けたら、武器探しやな」

「うむ。それで頼めるかの？」

「問題あらへん。リリーもそれでええな？」

「うん。いいよ」

ホテルを出て、歩きながら予定を確認するマージンとディアナ、それにリリー。

マージン達の予定は、まず昨日、ディアナ達が見つけてきたあるお店に行つて、マージンが生理用品の作り方を教えて貰うことから始まる。無論、これは出来る限り早く、使用する本人達が作れるようになる予定だった。「そうしないと女の尊厳に関わる」とは誰が言ったのだったか。

その後、クライストが行っているはずの銃器店に立ち寄つて、やはりマージンが銃やその部品、弾薬の作り方を教えて貰う。リアルなら一日どころか、数日ばかりで覚えることでも、スキルの生産可能アイテムに追加するだけならほんの数分で事足りるのは、やはりVRMMOならではの。目に見えないスキルの熟練度が足りてなければ、覚えられないが。

最後は、ディアナの槍の調達である。ちなみに、リリーもパチンコと短剣だけでは、あまり戦闘の役に立たないと思っていたのか、いい武器があるかどうか見てみたいとついでにきた。

そして、最初の店に向かう道すがら。

両手に花でテンションが上がってもおかしくなかったマージンは、逆に非常に気まずい思いをしていた。無論、残る二名も同じく、であるのだが……まあ、最初の目的が全ての元凶である。

店の場所を聞くまではいいのだが、そこで会話が途切れた。

どういうものを作ることになるのかとか、昨日はちゃんと手に入れたのかとか……後者は兎に角、前者はマージンとしては割と気になるのだが、異性に訊けるようなものではない。でも、この後行く店が店だけに、どうしてもその手のことがすぐに頭に浮かんでくる。

ディアナとリリーも似たようなもので、店に着く頃には、一日でも早く自分たちで作れるようになるうと固く決意していた。

「まあ、確かに男性でも作り方を教わりに来る人、いるけどね。やっぱり、珍しいわよ?」

マージンの予想に反して、件の店は一見、ごく普通の衣装店だった。

その店のカウンター越しに、マージンを見ながらクスクスと笑ったのは、ラスティ。ウェーブがかかった金髪に茶色の瞳の彼女こそが、この服飾店の主人であり、商品の大半を自前で作っている裁縫職人でもある。ちなみに、かけているかわいい系のエプロンも自作だそうである。

そんな彼女がナプキンに手を出した理由は、自分で必要だったからだった。

「で、どっちが本命なの?」

顔を近づけて小声でそう訊いてくるラスティに、

「いやいや。同じクランの仲間うちゅーだけやから」

とマージンは首を振った。からかわれているだけと分かっている、目的が目的だけにどうにも分が悪い。

ちなみに、ディアナとリリーはラスティにマージンを紹介すると、昨日の経験からさつさとカウンターから逃げ、少し離れたところで、気に入った服を漁っている……振りをしていた。

「ふ〜ん。あんな美人と可愛い娘を両手に花でね〜？ひよっとして、あなた、不感症とか？」

「いやいや。そんなことはあらへんって」

カウンターでなされているそんな会話を耳に挟みながら、ディアナとリリーも、

「私が美人、の方がのう？」

「じゃ、あたしが可愛い方？」

と、小声でこそ話している。ちなみに、二人とも耳はカウンターでの会話を聞き逃すまいと、最高感度で稼働中だった。恋バナやそれに類する話に興味津津なのはさすがに女の子(?)というにとらしい。

そのことは百も承知で、ラスティはマージンをいじっている。無論、マージンも聞こえていることくらいは承知していて、下手な答えを返すつもりは全くない。地雷原に誘導される恐れはあったが。

「じゃ、リアルで彼女がいるとか？」

「いや、おらへんけどな？VRMMOに彼女探しに来とるわけちゃうし」

「でも、こつも長引いたら、こつちで彼女作っちゃおうとか思わないわけ？私の友達とか、こつち限定の彼氏作っちゃった子もいるよ？」

この台詞に食いつきはしなかったものの、ディアナとリリーはその台詞をしっかりと脳内に記録した。

「まー、あれこれできるみたいやしなあ……。つか、もつ、ここが

VRMMOの中なんか、リアルなんか、分からんようになってきとるしな」

「それはあるね。だからかな。友達も最初は相手のリアルの容姿気にしてみただけど、いつの間にかアバターの容姿でいいやとか言い出しちゃってね。で、アバターの容姿って大抵いいじゃない？そしたら、後は性格と相性さえ良ければで、一気に行くところまで行っちゃったわね」

だんだん店内の一角に、不穏な空気が漂い出す。

「で、あなたはそーゆーことになったりはしないの？」

「忙しくてそれどころちゃうしな」

そろそろ地雷原突入か！？と、冷や汗が出そうなるマージン。

「でも、昨日来てたミネアさんといい、あなたのクランっていい子が揃ってると思うんだけど？」

「あー、ミネアはうちのマスターに惚れてるっぽいから、ないわ」

「ほほー。そうなんだ？で、どんな感じなの？」

地雷原脱出成功。店内で稼働していた恋愛センサーの稼働率が急激に落ちていくのを感じ、マージンもホッと一安心である。というか、そろそろ用事を済ませて逃げ出したい。しかし、なかなか言い出せず、

「そやなー。片思いつばいな。マスター、そういうの鈍そうやしな。

おまけに忙しすぎて、色恋沙汰に気づく余裕あらへんのちゃうかな」

「む、それは勿体ないことしてるわね」

「そうなんかな？」

話が盛り上がらないように、ぼけてみるマージンだが、

「絶対そうよ。確かにミネアさんは人見知り激しそうだったけど、でも、その分惚れた相手には尽くすタイプよ。絶対お買い得物件だわ」

いまいち効果がない。それどころか、

「お買い得物件と言えば、美人のお姉様タイプのディアナさんと、可愛い小動物系のリリーちゃんもお買い得よね。どっちが好みなの

」？

「いや、好みとか言われても、そういう風に見たことあらへんし……ちゅーか、作り方教えて貰いたいんやけど……？」

このままではいつまでも話が終わらないどころか、いろいろ余計なことを暴露する羽目になりそうだと、マージンは無理矢理話を切り替える。

「あー、そういう用事で来たんだっけ」

すっかり忘れてた、と手をぼんつと打つラスティに、心の中でホツと息をつくマージンだった。

「疲れた……。一軒目でもうばてばてや……」

こちらが旅人と分かっているのか、また来てね〜という挨拶は無かったのが、マージンにはせめてもの救いだった。

「まあ、次に行こ、次に」

何故助けてくれなかったと恨めしげに見るマージンの視線を誤魔化そうと、明るく先を行くりりー。

「そうじゃな。昼までには武器を決めてしまいたいからのう」

それに便乗するディアナ。

正直、一言もの申したかったが、リリーは兎に角、ディアナにどう言いくるめられるか分かったものでもなく、マージンは泣く泣く追求を諦めた。

「おー、よく来たな。って、マージン！？何でそんなにばててるんだ！？」

次の目的地、裏通りの目立たないところにあつたマーシャル銃器店でマージン達を出迎えたクライストは、マージンの様子に驚いたようだった。

「まあ、いろいろあつたんや……」

そう答えるマージンと、素知らぬ顔をするディアナ、リリーの様子に何となく察したのか、冷や汗を垂らしながら、「そ、そうかとクライストは言うのが精一杯だった。

「クライストさん、そちらが例の？」

そこに出てきたのは、銀髪黒瞳の、口の上に少しばかりの髭を蓄えた小柄な男だった。

「ああ、マーシャルさん。そうです。うちの生産担当のマージンです。こちら、マーシャルさん。この店の主人だ」

「うちのが世話になつとります」

そう挨拶するマージンと握手をしながら、ちらちらとディアナとリリーにも視線が行くマーシャル。

その視線に気づいたわけでもないだろうが、

「で、そっちの二人が克蘭メンバーのディアナとリリーです」

と、クライストが女性二人も紹介する。

ちなみに、二人は軽く頭を下げはしたものの、ディアナしか握手には応じず、マーシャルがどことなく残念そうだった。

「で、銃のメンテは終わったん？」

店の外で待つてるからとそそくさと退場していったディアナとリリーの後ろ姿を見送ったマージンに訊かれ、クライストはアイテムボックスから銃を取り出した。

「ご覧の通り。全部完璧だぜ」

「……いや、いくつ持つとつたんや」

手近なテーブルの上に並べられた8丁の銃を、呆れたように見やるマージンに、

「結構故障したりするからな。2丁だけだと、いざという時に困るんだよ」

「銃は精密機械ですからね」

クライストの説明に補足を入れるマーシャル。

「あー、なるほどなー」

マージンは何となく納得した。

剣や斧、弓といった武器と違って、銃は小さい部品を多数組み合わせさせて作られている。それだけに、クライストの言葉通り、すぐ故障する。だからこそ、いくつかの予備を持っておく必要があるのだった。

「しかし、最近銃を使っている人が減ってしまって、寂しかったのですよ」

それだけに、クライストが来てくれて嬉しいと、マーシャルは言う。

銃は対人には向いているが、対エネミーでは相手の体が大きいとそれだけで威力が不足し、さらに相手の攻撃を受けることも出来ない。加えて、銃を修理したり、弾薬を補充できる場所が少ないこともあって、ただでさえ殆どいなかった銃を使っている冒険者プレイヤーは全滅寸前なのだった。

「にしても、随分と種類があるんやなー……」

店内の壁一面に飾られている（と言うのが相応しい）銃の数々。種類も豊富で片手で持てるようなハンドガンや拳銃の類から、散弾銃にライフル、何故か火縄銃まである。

「ガトリングガンも現在開発中です」

「いや、そんなん作ってどうするねん」

「ロマンですよ、ロマン」

実に嬉しそうに言うマーシャルを見て、こいつは銃オタクだとマーシャルは確信した。

そして、ふと別のことが気になる。

「そっぴゃ、銃を扱う店って、どのくらい残ってるんや？」

「ん、片手の指で数えるくらいしかないはずですが。ラスベガスですらうちだけです」

「なるほどな」。ちなみに、お宅は銃を欲しがる人には誰にでも売

「つちやつてるって事は……？」

「見るからに危ない人以外には売ってますが何か？」

「ついでにもう1つ。『魔王降臨』以降、何人に何丁売ったか分かるか？」

「お恥ずかしい話ですが、あれ以降、10人くらいしか客が来てくれてないんですよ。売れたのも20丁に満たず、正直食費が……」

それを聞いて、ホツとしたマージンだったが、

「マージン、何でそんなことを訊くんだ？」

微妙に機嫌を損ねたクライストに詰め寄られた。その様子を、よく理解してない様子でマーシャルが見ている。

「簡単なことや。銃は確かに強いエネミー相手には役に立たんかも知れん。けどな、対人での威力が変わったわけちゃうねん」

銃作成の腕前は知らないが、マーシャルには気をつけて貰わなくてはならないと、マージンは説明を始める。

「それは分かつてる。俺が訊きたいのは……」

「だから、その説明をしとるんや」

さらに詰め寄ろうとしてきたクライストを抑え、マージンは説明を続けた。

「今、大陸会議が管理できとらん町の治安が悪化しとるんは知つとるな？」

その確認に、素直に頷くマーシャルと渋々頷くクライスト。その様子を見ながら、マーシャルとよっぽど気があつたんだらうなと考えつつ、マージンは説明を続ける。

「で、治安を乱しとる悪党共に銃が行き渡つたらどうなるか。想像出来るか？」

その言葉で、クライストは瞬時に真っ青に、マーシャルもワントンポ遅れて青くなった。

「そう言うことや。銃弾は速すぎて、余程のプレイヤーでもない限り避けられん。つまり、悪党共には実に相性のいい武器ってことや」

「じゃあ、もう銃は売らない方が……？」

おそろおそろ訊いてくるマーシャルに、しかしマージンは首を振った。

「逆に、治安を維持する側に持たせれば、治安維持が簡単になるやろうな。要するに、売る相手を選べばええと思うわ」

「ってことは……？」

「軍に売るのはありかもしれないな」

本当は恐怖政治が始まったりすると面倒だと思いつつ、大陸会議がそうするつもりなら銃の有無は関係ないだろうと、マージンもそこまで口に出さなかった。

「ちゅーわけで、クライスト。フランス捕まえて、一緒に大陸会議にこの件を伝えてきてくれへんか？マーシャルはんの様子から見て銃の流通管理とかされとらんみたいやし、早めにやってもらった方が安心や」

「ああ、分かった。他に伝えることは無いのか？」

「微妙な問題やけど、軍に銃を配備することは提案してもええかもしれん。その辺はフランスの意見も聞いて判断してくれへんかな」

「そうだな。そうするぜ。じゃ、マーシャルさん、また後で！」

そう言つて、店を飛び出していくクライスト。

店の外にいた二人が何事かと訊いていたが、夜に説明するとか何とか言つて、クライストはそのまま走つていった。

「と言うわけで、出来ればあまり強力すぎる銃は、仲のいい相手以外には見せるのも遠慮してもらえんかな？」

クライストを送り出したマージンは、半ば呆然としていたマーシヤルにそう話しかけた。

「ん、ああ。そうしますよ。でも、銃の販売まで止めると食べていけなくなるんですが……」

「軍の専属になれば多分食べていけると思つて。まー、窮屈になるかも知れへんけどな」

「そうですね。考えてみますよ。それでは、マージンさんの本来の用事を済ませましようか」

「そやな。頼めるかいな？」

「ええ、それでは端末を出してください……人を撃つたりはしませんよな？」

「クライストは、正当防衛以外では撃たんやろ」

「ですね。では」

そう言うとマーシャルも自分の個人端末を取り出し、マージンのそれと接触させた。そのままコマンドを操作し、生産可能アイテムの複写を行った。

「やっと、武器屋巡りじゃのう」

「いい武器見つかるかな」

銃器店での話が長引いた理由をマージンに問いただした後、ディアナとリリーは足取りも軽く、武器屋目指して歩いていた。

ちなみに、その後ろをついて行くマージンは、

(ひょっとして、買うだけならわいがついて行く意味あらへんのだや……)

などと思っていたりもする。

ちなみに、銃器店のような需要の少ない店と違い、普通の武器屋は結構な数がラスベガスにはあった。小さい町や村　村と呼べるような集落は、基本的に全てプレイヤーが撤収し残っていないが　なら兎に角、大きな町には同じような店が複数あるのが普通なのだが、やはりラスベガスは別格である。武器屋と言っても、鍛冶武器専門店、木製武器専門店、あるいは剣専門店、メイス専門店、弓専門店、のように人気のジャンルごとの専門店まで存在している。防具屋も同様で、各種専門店が何軒もある。

実際には、『魔王降臨』以降、職人が不足してあらゆる種類の装備を用意しておくことが出来なくなつたための苦肉の策だつたのだが、その分、専門店で扱われる装備は質のいいものが多くなり、そ

れなりの成功を収めていた。

なお、3人の今日の目的は鍛冶武器限定である。やはり、威力は金属製の武器が一番高い。もっとも、鍛冶武器限定の理由は、ディアナの新しい武器の候補が槍であるからなのだが。

「リリーはどんな武器を見てみたいのじゃ？」

「やっぱ、みんなと違う武器目指してみたいかな？」

てくてくと通りを歩きながら、ディアナとリリーが楽しげに話している。マージンはその後ろを一步遅れてついて歩いていた。

「と言うことは、剣や斧、弓、槍以外じゃな」

「うん、そうなるね。あ、でも、メイスみたいなのも勘弁してね」

「短剣は今使っておるしのう。銃もクライストがおるな」

「ブーメランは？」

「あれはかなりの腕力があると聞く。腕がむきむきになってしまってもよいのかの？」

「ごめんなさい。諦めます」

ディアナの脅しにリリーは即刻ブーメランを諦めた。

「後は何があつたかのう？」

と、そこでディアナは後ろを向いて、

「マージン、他に何かあるか分かるかの？」

「棍とかロッド、鞭かな。ハンマーはメイスみたいなもんやし、却下やる？」

「そうね、ハンマーはちよつとね」

ハンマーを持っている自分を想像したのか、リリーは悩むことなくそう言った。

「あとロッドも、単なる金属の杖やから、止めといた方がええやろな」

「じゃのう……」

自分が槍に切り替えることにした理由を思い出し、しみじみ頷くディアナ。

「徒手空拳用の手甲の類とかも、腕力いるし、使いづらいやるな。いつそのこと、素直に剣にするのもありやし。レイピアとかは誰も使うとらんしな」

「レイピア？」

「そや。刺突重視型の細い剣や。重量も軽いから女性でも扱いやすいで。……威力もないけど」

首をかしげたりりにマージンがそう説明すると、

「威力がないのでは……せめて、防御性能が高いとか無いのかの？」

「今挙げた中で防御性能なら棍の類やな。両手でこっ持ってな、敵の攻撃を受けたりも出来るで」

と、自分のツーハンドソードで実演してみせるマージン。それを見たリリーは、

「なんか、拳法っぽいイメージがあるね」

「……スカートの中が見えそうじゃな」

「……」

「……」

ディアナの指摘に、マージンはさっと視線を逸らし、リリーはそんなマージンを睨み付けた。

「まあ、スパッツとかはけば良からうよ。いつそのことショートパツンなんかにするのも良からうな」

「……考えてみる」

ディアナのフォローに、とりあえず選択肢として棍は残ることになった。

「まあ、わざとやないし、堪忍してや」

「……」

「……リリー、ホテルでじっくり問い詰めれば良からう」

ディアナのフォローは、マージンにとっては全くありがたくなかった。そもそも、武器の種類を挙げていくだけでこっという目に遭おうとは、である。

「で、鞭はどうなの？」

「女王様じゃな」

「……………」

再び黙り込むリリー。その冷たい視線はマージンを捉えて放さない。

「いや、わざとやないし！！訊かれたから、思いついたのを言うただけやし！！」

必死に無実を訴えるマージン。

それでも変わらないリリーの視線に、

「そもそも、鞭は武器として使うのは大変なんや。勧めるつもりは全くあらへんかったんやで！」

「まあ、鞭の方はわざとじゃあるまいよ。私も言ってみただけじゃ。今度はフォローをちゃんと入れるディアナだった。が、

「棍の方の言い訳は楽しみじゃがのう」

そう言って、クツクツクツと実に悪く笑った。

そんなディアナの様子を見ていたリリーは、

「……………どっちにしても、スパッツとかも探してみる。激しく動いたら見えちゃいそうだし」

そこでマージンをじろりと睨んで、

「そっちの代金は出してよね」

「いや、そんな理不尽な……………分かりました」

抵抗むなしく、リリーの服の代金を出すことを了承させられたマージンだった。

その後、2軒目に回った鍛冶専門店で、ディアナは槍を、リリーは木に鉄芯を仕込み、両端に鉄板を巻き付けた棍を買った（全部鉄製だと重すぎた）。さらに近くにあった衣装店でリリーは、ショートパンツを7つほど、マージンの財布で買い漁った。

ディアナもどさくさに紛れて何か買おうとしていたが、それはマ

ージンに拒否されたのは余談である。

そして、その数日後、
ラスベガスでの用事を済ませたレック達は、キングダムへと向け
て出発した。

キングダム

目的を果たし、レック達がラスベガスを発ったのは、割とすぐだった。ラスベガスでは結局、4泊しかしなかったのだから、早かったと言つて過言ではない。

それから街道沿いにくつかの町を経由しながら、エネミーとの遭遇を除けば平和極まりない旅路を経て、ジ・アナザーの最初の街、キングダムを北西に望むことが出来る丘に着いたのは、ラスベガスを出て9日目のことだった。

「懐かしいね」

「そうだな。マジで久しぶりだ」

キングダムをぐるりと取り囲む城壁とその周囲に広がる些か荒れ気味の農地を彼方に見据え、蒼い月の仲間達は感慨深げだった。

「二年前に出たから、キングダムに帰ってなかったですしね」

「それ、『魔王降臨』までだよな？」

「うむ。『魔王降臨』からは既に130日以上が経つておるからな。もう二年半くらいキングダムに踏み入れてないことになるのう」

「あれ？ディアナは何で130日って分かるの？」

「不思議そうにリリーに訊かれ、

「ちゃんと数えておるからのう」

「意外とまめなディアナだった。」

「曜日とかないと、日付とか日数とかさっぱり分からんなー」

「アイデア歴とか誰も使ってないからのう……」

ディアナが言ったアイデア歴とは、ジ・アナザー用の暦のことである。仮想世界をそれっぽくするために作られた暦なので、実用性はいまいちで、殆ど使われていなかった。

代わりに使われていたのが、リアルな暦と曜日である。ジ・アナザの二日がリアルの日であるため、たとえば火曜日の上、火曜日の下のように、リアルの上に上下を付けて表すことが多かった。それが使われなくなった理由は、『魔王降臨』の際の混乱が原因である。『魔王降臨』以降の日数をちゃんと数えていなかったプレイヤーが大多数だったため、互いに齟齬が生じ、気がついたら使わなくなっていたのであった。

もっとも、それでは人との約束や契約の際に不便極まりない。なので、大陸会議のメンバーでもあるクラン「ふたごぶらくだ」などでは日付を統一して、それまで同様の暦を使っていた。最近では、大陸会議として使っているという話になっているので、半年が過ぎる頃には暦は元通りになるのだが、それはまた別の話である。

「ちなみに、今日何日目？」

試しにレックが訊いてみると、

「133日目じゃ。10月13日水曜日の上じゃな」

「すげえな」

「ああ。懐かしいものを聞いた気がする」

すらすら出てきたディアナの答えに、仲間達は驚きを隠せなかった。

「夏休み、完全に終わってるね……」

「そう、ですね」

「中間テストも終わってるね……」

「そう、ですね」

どこかずれたやりとりをしているリリーとミネア。

「リアルで2ヶ月以上か。ほんと、リアルからの救出とか期待できそうにもねえな」

今更ながらのクライストの台詞であったが、『魔王降臨』直後ほど、仲間達の心を暗くすることはなかった。それだけ、皆、今の生活に慣れてしまっていたのだった。それどころか、

「まあ、遅くても1〜2年で出られるようじゃないと、ここから出たら全員ジジババだな」

とフランスが言えるくらいになってしまっていた。

もっともこの言葉は余計な一言で、

「うあ、それはイヤ……。まだ、彼氏も作ってないのに、いきなりオバサンとか耐えらんない……」

「僕もそれはちょっと……」

真面目に仲間達が悩み始めてしまった。特にクライストは、

「俺は、彼女が心配だな……」

と、リアルに残された恋人のことが気になっただらしく、完全に鬱モードに突入してしまった。

これには仲間達もかける言葉も見つけられず（他は家族はいても彼氏彼女がいない独り身軍団だった）、それからしばらくは、黙々と沈んだ空気のまま歩き続けることになってしまった。

フランスも、仲間達から向けられる冷たい視線で、すっかり縮こまってしまっていた。

「相変わらずでけえ城門だな」

「そうじゃのう」

キングダムを取り囲む城壁には何力所か、その城壁の規模に見合うだけの城門が設置されていた。

夕方も近くなった頃、そのうちの1つ、大陸会議の管理している街区への城門へと辿り着いたレック達は、久しぶりの城門のサイズに圧倒されながら、あることに気づいていた。

「あれって検問……？」

レックの言葉通り、門のところでは、軍の制服を着た何人もの武装プレイヤーが出て行くプレイヤーと、入ってくるプレイヤーを一人一人止めていた。

止められたプレイヤー達は腰に下げた革袋風のアイテムボックス

から何か取り出して軍の兵士にそれを見せる。それを見た兵士は後ろに控えている兵士に何事か告げると、後ろの兵士が手元の用紙に何事か書き付ける。そして、後ろの兵士が頷くと、止められたプレイヤーが歩き出して門を通過する。それがひたすら繰り返されていた。

「どーして、あんな事してるんだろ？」

レックが首をかしげていると、

「治安維持じやろうな。怪しいプレイヤーが入り込まないようにしておるのではないか？」

とディアナ。

「ああ、その通りだ。身分証がないプレイヤーは入れてもらえないぞうだぞ」

「グランズ、それ、初耳なんだけど？あたしたち、大丈夫よね？」

じと目で睨むリリーに、

「冒険者カードでいけるからな。説明するのを忘れていたが、そのことはラスベガスでも確認してきたし、間違いはない」

平然と答えるグランズ。

実際、兵士達に冒険者カードを見せると、2、3の質問をされただけで、レック達はすんなり街に入ることが出来た。

「すっごい人だね」

「そう、ですね……」

門をくぐって中に入ると、久しぶりにやってきたキングダムは、レック達が思っていた以上に人が多かった。

リリーがはしゃいでいる傍らでは、ミネアがびくびくしながら、グランズの後ろに隠れようとしている。

「思ってたより人が多いよな」

「大陸会議の管理街区だからだろうな」

淡々とクライストに答えるグランズ。

レックもまた、道行く人々の多さに驚きを隠せなかったが、何か

違和感も感じていた。今までの街と何かが違う、そんな気がした。

「まー、先に宿を決めへんか？しばらくいるつもりなら、変な宿はゴメン被るしな」

「そうじゃな。マージンの言うことももっともじゃ」

「ああ、そうするか」

とりあえず、キングダムにも出来ていた冒険者ギルド支部で宿の情報を手に入れたレック達は、その中から宿を決め、男女別に2つの部屋を取っていた。

そして、その男部屋。

「で、明日からどうするんじゃ？」

全員が集まって、明日からの予定を話し合っていた。

「やっぱ、公立図書館に行けるかどうか、だよなあ」

頭の後ろで両手を組みながら、クライストはベッドの上で体を揺らしていた。

「そこはまだ、大陸会議の管理下に入っていないのが問題だな」

テーブルの上に広げたキングダムの地図を睨みながら、グランスが言う。その地図には、ひょうたん型の湖とそれを取り囲む楕円形の街が描かれていた。

キングダムは、東西に7kmに渡って延びるひょうたん型のレフス湖を囲む形で設置された街である。

湖の西半分には北北東から、湖の東半分には東北東からそれぞれ1本ずつの大きな川が流れ込んでいる。反対に、湖の西側からは南西方向へとやはり1本の大きな川が海へと流れ出していた。

その湖を囲むように東西8km、南北4km、太さ1kmの楕円形のリング状に街区が配置され、そのさらに外側を城壁が取り囲む。キングダムはそんな形をしていた。

その街区は、3本の川といくつかの大きな通りによって12の街

区に分けられており、北から時計回りに1〜12の番号が割り当てられている。

その中でも大陸会議が管理できているのは南東部にある4〜6番街区のみ。しかし、蒼い月の目的である公立図書館があるのは、流れ込む2本の川に挟まれた北〜北東部の2番街区であった。

「2番街区に普通に入れるなら、楽やねんけどなー」

「城門での検問を見る限り、望み薄じゃろうな」

「大陸会議の管理下にある街区と2番街区はそんなに遠くはないが、途中のクックキー川の橋を渡るのがな。3番街区を占領してる連中に見つからないようにというのは少し難しいな」

地図で東北東から湖の東側に流れ込むその川を指しながら、グランスが言った。

川に架かる橋の長さが100m以上あることを考えれば、見張りがいれば見つからずに渡りきるのは不可能と言って良かった。

「プレイヤーが大勢通ってたら、普通に渡れるんじゃないのか？」

「治安が悪いところにわざわざ出向く酔狂なのがそんなに沢山おるのかのう」

そのディアナの言葉で、人通りが絶えないような賑わいを見せているのは治安のいいこの南西街区だけなのだと、レックは思い出していた。

「まあ、その辺は明日にでも実際に橋をこの目で見てみたら分かる事じゃがな」

「そうだな。まあ、でも、ディアナの言うとおりかもしれないな」

「舟はダメなの？」

「リリーはそう言ったが、」

「レフス湖にいる水竜に沈められかねん。危険すぎるな」

そう、グランスに指摘された。

キングダムに囲まれたレフス湖。そこに水竜が住み着いているの

は有名な話であった。

この水竜は自らの縄張りに侵入してくる全ての船を沈めてしまう。そのため、レフス湖の東側に浮かんでいる島があるのだが、未だそこはプレイヤー未踏の地となっているほどである。

そして、この水竜の縄張りの広さはよく分かっている。湖の中央に出ようとすると船は全て沈められるのは確かだが、湖の岸沿いや湖に繋がる川であれば、沈められない事もある。

だが、沈められない「かも知れない」では、デスゲームと化した今のジ・アナザーでは試す事は出来なかった。

「一応、2番街区も城門があるから、そこから入るという手もあるんだが……」

「そっちの状況も分からぬのじゃろう？」

「そもそも、キングダム以外のクックキー川を渡る橋は、一日以上行かないと無いはずやしな」

「……出来れば、最終手段にして欲しいな」

「おまけに、2番街区を占領してる連中が、城門で検問の真似事しとる可能性もあるしな」

「……してたら、完全に無駄足だな、おい」

「まあ、選択肢の1つではあるがな」

そう言うグランス自身、面倒そうな様子を隠していなかった。

「どちらにせよ、まだ情報不足だ。よって、明日からは情報収集をしばらくやっていきたい。それでいいか？」

「いや、ちよつと待って」

グランスの確認に、待ったをかけたのはレックだった。

「全員ばらばらに行動するつもり？」

「ん？それでもいいと思っていたがどうかしたか？」

グランスだけでなく、他の仲間達も概ね、レックの質問の意図がつかめず、首をかしげていた。

「ん。ちよつと、警戒心が足りないんじゃないかって思って。だっ

て、ここ、プレイヤータウンじゃないんだよ？おまけにやばい地域と隣接してるっていうんだったら、やばい連中が忍び込んできてる可能性もあると思うんだけど……」

「言われてみれば確かに……」

レックの説明に唸る仲間達。

もつとも、盲点を指摘されただけで、解決策は簡単だった。

キングダムでの行動は最低でも二人以上で、出来れば女性だけでの行動は慎むという事であっさり決着がついたのだから。

その翌日。

それほど治安は悪くなさそうだったが、昨夜のレックの指摘もあり、警戒しておくに超した事はないと、グランスは仲間達を2つのチームに分けた。

レック、マージン、ディアナ、リリーの4人のチームと、グランス、クライスト、ミネアの3人のチームである。

「では、あまり目立つような行動は避けて動く事を忘れるな。あまり目立つと、2番街区に行ける可能性がそれだけで下がるからな」
そんなグランスの注意を受け、レック達4人は宿の前でグランス達と分かれた。

この後グランス達は、冒険者ギルドや商人ギルドを回って、キングダムの状況を訊いて回る事になっている。一方、レック達は3番街区と4番街区を結ぶ橋の様子と、6番街区と7番街区の境界線付近を見て回る事になっていた。

「ひよつとしなくても、こっちの方が歩かなきゃいけない距離、長かった?？」

ディアナが持っている地図を横から覗き込みながら、イヤそうな

顔になるリリー。しかし、

「そうじゃな。地図を見る限り、20kmくらいは歩く事になるじやろつな」

「うう、やっぱり距離あるね」

ディアナの返事を聞いて、リリーはがっくりと肩を落とした。

旅をしていると一日の移動距離は20kmなど遙かに超える。エネミーとの戦闘などもあるとは言え、一日で40km近く歩く事もざらである。

それでも、やはり5時間以上歩き詰めというのは、大変な事ではあった。

「で、先にどっちに行く？」

「ま、橋やろな」

「じゃな」

マージンとディアナがさも当然と頷きあい、要らない事を訊いてしまったとレックは少し赤くなった。

その後、リング状になったキングダムの市街地の中心を走る一周36kmもある中央通りに沿って、レック達は移動を開始した。中央通り沿いの商店や露天の表に出された商品を眺めたりしながら、レック達は3番街区を通り抜け、5番街区の宿を出てから一時間ほどでクツクキー川に到着した。

クツクキー川は川幅80m、河川敷や土手も含めると実に幅が200メートルにもなる大きな川である。『魔王降臨』以前は川岸で釣り糸を垂れているプレイヤーや、網を投じているプレイヤーもいたのだが、今はそんな事をしているプレイヤーは一人もいなかった。その川に跨るクツクキー中央大橋（川の名前と橋に繋がっている

通りの名前をつなげたただけの名前である）は、幅10m、長さ200mの緩やかなアーチ型の巨大な石造りの橋であった。クックキー川の川面に突き刺さっている何本もの橋脚が重厚な橋をしっかりと支えていた。

「やはり、検問が張られておる……のかのう？」

クックキー中央大橋に着いたレック達の目に映ったのは、4番街区側の橋の袂に積み上げられたガラクタの山と、その手前に屯している、軍の装備に身を固めた10人ほどの兵士達だった。

「検問……なのかどうなのか、判断しづらいね」

少し離れたところから様子を覗いながら、レックが答える。

城門にいた兵士達は確かに検問をしていたものの、こちらの橋の袂にいる兵士達は到底検問をしているようには見えなかった。ガラクタの山はよく見ると人が2〜3人通り抜けられそうな隙間はあるものの、兵士達自身は呑気に雑談に興じている。もともと、通行人がいないのではたとえ検問が仕事だったとしても、仕事できないのだろうか。

「まー、話聞いてみたらえーやん。別にわいら、やましいところがあるわけちゃうし」

「それもそうじゃの。むしろ、今のこの様の方が怪しく見えるのう」
そう言いながら、堂々と姿を晒して、マージンとディアナは歩き始めた。

「ちよっ、待つて待つて」

慌てて追いかけるレックとリリー。

橋の袂に屯していた兵士達も、すぐにレック達に気づいたようで、雑談を止め、何人かは武器を構えていた。しかし、

「お勤めご苦労さん。ちよっと話聞かせてもろてもえーかな？」

マージンがフレンドリーに話しかけると、兵士達の緊張は僅かに

緩んだ。

「それは構わないが、こちらからも質問をさせて貰う。いいか？」
隊長格と覚しき、一人だけ鎧の上から羽織っているチュニツクが立派な兵士が、マージンに対応してきた。

だが、後ろの兵士の何人かは、まだ武器を構えたままだった。そのせいか、レックとリリーも僅かに緊張している。

「ああ、構へんで」

しかし、敢えてそのあたりの事を無視するマージン。

「では、君たちの身分証と、何故ここに来たのかを教えて貰いたい」

「ん、やつぱ、ここ、検問みたいなもんなん？」

「まあ、似たようなものだ」

マージンの言葉を肯定する隊長。

レック達が渡した冒険者カードを順番に確認した彼が、他の兵士達に武器を降ろすように指示を出すと、やっとその場を支配していた緊張が緩んだ。

「済まないな。状況は多分知ってると思うが、キングダムは平和と言い難いんでな」

少しばかり申し訳なさそうに言いながら、隊長はレック達のカードを返してきた。

「警戒しとるってことは、あっちからちよっかい出された事があるんか？」

「中からもだな。まあ、ホントにちよっかい程度だったけどな」

怪我人すら出なかつたと、隊長は笑った。

「じゃあ、このガラクタの山は……」

「バリケードの代わりだな。うまい事作れなくてな。やはり、街の管理者の許可がない構造物は、すぐに勝手に壊れてしまう。で、これで代用しているというわけだ」

「ははあゝ……なるほどなあ。よう考えとるわ」

「苦肉の策だな。で、用事の方を聞いていないんだが、聞かせて貰ってもいいか？」

「ああ。ちよつと、2番街区にある図書館に行つてみたいんや」

「図書館に？」

「せや。ちよつと最近、リアルで読んでた小説が懐かしくなつてな。で、図書館やつたらあるんちゃうか思つたんや」

何やら、自分たちの目的と全然違ふ事を言い出すマージンに、リリーが何か言おうとしたが、さりげなくディアナに止められた。それを見たレックも、後から理由を聞けばよいと、今は静観する事にした。

「あゝ、確かにあそこならあるかもな。ちなみに、どんなのを読んでいたんだ？」

「SFとかホラーとかやなあ。推理小説も割とよく読んでたわ」

「なるほどな。なんか、俺も久しぶりに本を読みたくなつてきた」

「で、図書館つて今行けるんか？」

「2番街区はチンピラ共の巢窟だからな。図書館自体は無事だろうが、そこまで何事もなく辿り着けるかどうかは分からん」

「ちなみに、わいらがここを通りたい言うたら、通して貰えるんかな？」

「通すだけなら問題はないが、そこから先は自己責任になる。それでいいのなら、だな」

そう言うと、隊長は小難しい顔になり、

「まあ、出来ればあちらに行くのは勧められないな」

「そうなんか。まあ、仕事、頑張つてな」

そう挨拶を終えたマージンの後について、レック達は元来た道を引き返し始めた。

「で、さっきは何であんな嘘ついたの？」

もうこちらの話し声が橋のところまで届かないくらいに離れると、ディアナに止められていて訊けなかったことを、早速リリーがマージンに訊いた。

「馬鹿正直に理由を話す必要もあらへんかったしな」

「あの兵士達の中にもチンピラ達の仲間があるかもしれんしろう。こっちの目的はどうでもよさそうな物に見せかけた方が、周りの興味を引かなくて済もう」

「それって、小説の読み過ぎ……？」

「しかし、警戒しておくに超した事はあるまい？」

「……そだね」

ディアナの説明に、リリーは納得して頷いた。

レック達がクックキー中央大橋を離れようとしていた、その頃。グランス達は、キングダム公立第二銀行に立ち寄っていた。当座の資金を下ろすためである。

キングダムには2番、5番、8番、11番街区にそれぞれ1つずつとも立派な銀行が設置されていて、時計回りに番号が振られていた。つまり、第二銀行は5番街区にある銀行である。

「ゴーレムは動いてんだな」

銀行の窓口の向こうを見やったクライストがそう言った。

ジ・アナザーの特徴の1つは、NPCの不在である。他のゲームなら街のあちこちに配置されていて、店を営んでいたり、クエストや情報をくれるNPCだが、ジ・アナザーには一人もいなかった。

その理由を運営が明かす事は終ぞ無かったわけだが、銀行などのサービスの提供にはプレイヤーに対応するキャラが必要だった。プレイヤータウンではその役を街を運営している公認ギルドのメンバーが担っている。だが、管理・運営にプレイヤーの手が入っていないキングダムではそうもいかなかった。

で、代行として人型のゴーレムが配置されていた。

このゴーレムには2つのタイプがあった。

1つ目はプレイヤーに直接対応する軽量型ライトタイプ。ライトタイプは自動オート

トマタ

人形とも呼ばれる女性形であり、何故か全てメイド服を着用していた。顔にはマスクを被っていて、人間の目に当たる部分は隠されていたが、鼻から下は精巧に作られた顔が覗いていた。

もう一つが、重量型^{ヘビータイプ}。こちらの方が一般的なゴーレムのイメージに近い^{ヘビータイプ}ため、単純にノーマルゴーレム、あるいは単にゴーレムとだけ呼ばれていた。

いずれも中級冒険者ですら圧倒する性能を持つが、基本的にキングダム^{ヘビータイプ}の公共サービスの提供やそれらの警備目的でしか配置されていない^{ヘビータイプ}かった。

「運営があんな事をしでかして、ゴーレムも止まったと思っていたが……いや、考えてみれば分かる事だったか」

止まっていれば噂になっただと、グランスは頭を掻いた。

「でも、ゴーレムが無事なら、図書館も……」

「ああ、無事だろうな」

グランスはミネアの言葉に頷いた。

ゴーレムは自らが配置されている施設やその備品への攻撃、破壊行為などを一切見逃さない。本に落書きをしたプレイヤーが図書館から叩き出されたという話すらあった。

とにもかくにも、クランの口座からいくらかの金を引き出した後、グランス達は商人ギルドへと向かった。冒険者ギルドより先にしたのは、単に銀行から近かったからで、他意はない。

キングダムの商人ギルドは、ごんまりとした建物に入っていた。銀行と違って、プレイヤー達が作った組織なので、こればかりはどうにもならなかった。

ただ、殆どのプレイヤータウンの人口が1万人に遠く及ばない中、

キングダムは5万人を超えるとされる（実際には8万人近い）突出した人口規模のためか、治安に不安を抱えながらも商業はかなり盛んだった。それを反映してか、商人ギルドも人の出入りが激しかった。

そんな中、かろうじて手が空いていた商人ギルドのメンバーを何とか捕まえたグランスは、4〜6番街区以外の街区の状況を教えて貰っていた。

「あー？大陸会議が制圧できてない街区の状況だと？」

「ああ、それを知りたいんだが、分かるか？」

「まあ、ある程度はな。だが、そんな事を知ってどうするつもりなんだ？」

「ちよつとあつちに用事があつてな」

「ほおー……？」

何とかグランスが捕まえたプレイヤーは、茶色い瞳を細め、グランスをじーっと見つめた。

「まあ、どういう用事なのかは訊かないでおくか。どっちにしても、あんた達冒険者には、被害を被らない限りは最大限の便宜を図るよ」に言われてるしな」

そう言つと、彼はキングダムの状況についての説明を始めた。

それによると、キングダムは現在5つの主要な勢力が各街区を支配している。大陸会議は管理だとか言っているが、支配も管理も大差ないとは彼の言であつた。

言わずもがなの大陸会議が支配しているのが4〜6番街区。治安は比較的良好で、他の街区から逃げてきたプレイヤーが流れ込んだ事もあり、人口は5万人とキングダムにいるプレイヤーの半分以上が住み着いている。

ついでに言うと、キングダム周囲の農地のうち、東北東のクックキー川と南西のウィルソ川を境にした南側全域が大陸会議の支配下

にある。

ダイナマイツサンダーが支配する2番3番街区と、夜露死苦連合が支配する7番8番街区。支配している連中はプレイヤーへの暴力、強盗、レイプ、PKなどなど、はつきり言ってるやりたい放題の最低の連中で、当然、治安は未だに最悪。がれきに阻まれて、大陸会議の軍も入りづらく、手をこまねいている状況だとか。

ただ、当然のように流通が停滞。最近では食糧不足に陥り、プレイヤーに他の街区から食料泥棒をさせている。

対照的なのがエドバドが支配する9〜11番街区。エドバドの支配は恐怖政治に近いが、それなりの秩序を保っているとか。

キングダム周辺の農地のうち、北北東のエルマ川と南西のウィルソ川に挟まれた地帯を支配しており、潤沢な食糧を確保しているらしい。

クラツカーズが支配する1番12番街区は、それらを足して割ったような状況。クラツカーズがやりたい放題やった結果、支配街区の人口が激減。しかし、自分たちの首を絞めていた事に気づき、最近ではエドバドのやり方を見習って、何とか支配街区に落ち着きを取り戻そうとしているらしい。

エルマ川とクツクキー川の間を農地を支配しているが、今のところ軌道には乗っていない。

「ま、そんなとこだな。正直、早く軍を増員して、何とかして欲しいんだがな」

そう言いながら、説明を終えた男は次の用事があるからと、商人ギルドの奥へと消えていった。

それを見送った後、

「みんなと相談しないといけませんね……」

「マジで厄介そうだな」

「同感だがな。もう少し話を聞いて回るとしよう」

と、グランズ達は次は冒険者ギルドへと向かった。

昼前。

クックキー中央大橋を離れたレック達は、6番街区と7番街区の境界へとやってきていた。

「この辺、なんか寂れてるね」

「店もでておらんしおう」

6番街区に入っすぐは、道の人通りもそれなりにあっだし、建物に人が住んでいる気配もあつた。しかし、境界が近づくにつれ、道から人の姿が消え、周囲の建物からも人の気配が無くなつてきていた。

「7番街区はチンピラの勢力圏じゃしおう。それが原因やもしれんおう」

「ってゆーか、あれ、何？」

そう言つてリリーが指さした200mほど先にあつたのは、

「……ゴミの山？」

「にしか見えないけど、バリケードのつもりじゃないかな」

マージンの言葉に、クックキー中央大橋で見たバリケードを思い出しつつ、レックが答える。

「にしては、随分と大きいおう」

「臭つたりしないよね……？」

感心したようなディアナと、イヤそうな顔になるリリー。

「腐るような物は放置されるとすぐ消えるはずじゃが……」

自信なさげに、ディアナはそこで言葉を切つた。

周囲を見回すと、いろいろなゴミが転がっている。それ自体、以前はあり得なかつた事なのだ。『魔王降臨』以前は地面などに放置されたアイテムは、長くてもゲーム時間の半日ほどで消滅していたのだから。

もつとも、マージンとレックはその心配はしていなかつた。

「そのうち臭うようになるかも知れへんけど、あれは大丈夫やる」

「生ゴミのバリケードって、すぐ崩れて役に立たないだろうしね」という事らしい。

その言葉に安心したりリーとディアナと一緒に、それからすぐにレック達はがれきのバリケードの側に辿り着いていた。

「7番街区の建物の間、全部こうなってるのかな」

「みたいやな」

6番街区と7番街区の間の道、通称南大通りに立ち、レック達は左右（つまり南北）を見渡した。

南大通りはリング状になったキングダムの街の幅と同じ長さしかない。つまり、長さは1kmしかなく、中央大通りを歩いてきたレック達からは、南にも北にも500m先の通りの端に巨大な城門が見えていた。そして、そこまでの全ての建物の中に、がれきが積み上げられたバリケードが詰め込まれていたのであった。

「よく、こんな量のがれきを集められたものじゃのう……」

「だね……」

しみじみと感心するディアナとリー。

「街の建物を壊して造ったみたいやな」

バリケードに近づいて、がれきを調べていたマージンが答えを出していた。

そんなレック達に、いつの間にか軍の装備を身にまとった兵士が二人、近寄ってきていた。検問……というより、ここを警備していたのだろう。

「あんたら、何しにここに来た？」

「昨日キングダムに久しぶりに帰ってきてのう。ひどい事になっておると聞いて、見に来たのじゃよ」

南大通りに来た時点で、20人ほどの人影を見つけていたレック達は特に驚く事もなく、対応した。むしろ、話しかけてきた中肉中背の兵士の方が、外見に合わないディアナの話し方に驚いたようだった。

「一応、噂程度は他の街にも伝わっていると思っただけだがね」

「噂に聞くのと、実際に見るのは違うじゃろう?」

話しかけてきた兵士の方は、そう答えたディアナの口調をもう気にしない事にしたらしい。

一方、もう一人の小柄な若い兵士の方は、レック達をじろじろと見ていた。まるつきり不審者扱いだったが、それにしても視線がきつすぎる印象を、レックは受けていた。

「とりあえず、身分証明が出来る物は何か持つてるかな? 一応、仕事だからね」

そう言われ、レック達は次々と冒険者カードを取り出し、兵士に見せた。

「なるほど。エラクリットとは、また随分遠くから戻ってきたんだね」

兵士はカードの発行場所を見ると、感心したように言った。

「フロンティアに近い方が、面白かったからのう」

「ってことは、フロンティア組かい?」

驚いたような兵士に、ディアナは首を振って、

「いや、近い場所にいただけじゃ。フロンティア組ではなかったのう」

「そうか」

「ちよい、質問ええかな?」

きりのいいところを見計らって、マージンが声をかける。

「何だ?」

「このバリケード、作ったんはやっぱり向こうの連中なんか?」

「さあな。でも、軍がキングダムに入った時にはもうあったみたいだし、俺たちじゃない事は確かだよ」

「ついでにも一つ。これ、超えられるんか?」

「見ての通り、ただのがれきの山だからね。超えようと思えば簡単さ。おかげで、こつちに忍び込もうとする連中が後を絶たないのさ」

「それで、この辺は人が住んどらんのかな」

「ま、そういうことさ」

納得したようにマージンが下がろうとすると、

「そんな事を訊いてどうするつもりだ？」

それまで黙っていた少年兵士が口を開いた。

「別にどうもせんで？」

「なら、何でそんな事を訊いた!？」

少年兵士の様子に驚いたような兵士が「おい……」と手をかけて、止めようとするも、少年兵士はそれを振り払って、マージンに詰め寄った。

とは言え、

「この辺に人が住んどらんみたいやったからな。その理由を知りたかっただけや」

マージンは気にした様子もなくひょうひょうと答える。

「嘘だ!おまえら、連中の仲間だろう!」

「連中??」

「とぼけるな!!夜露死苦連合の連中の事だ!」

「夜露死苦連合で……えらい愉快な名前やな……」

呆れたようなマージンの言葉に、少年兵士の剣幕に驚いていた仲間達も思わず頷きそうになった。

「っ!!ふざけるな!!」

そう言っつて腰の剣を抜こうとした少年兵士だったが、思いっきり連れの兵士に頭を殴られ、地面とキスをする羽目になった。

「すまないね。彼、友達を連中に……ね」

地面の上でもがき続ける少年を押さえ込みながら、兵士は軽く頭を下げた。

「ああ、いや。別に気にせんからええで」

「そう言っつてもらえると助かるよ」

そう言いながら、兵士は目線でマージンに早く立ち去るように促した。

それを見たマージンは、

「じゃ、いろいろ聞かせてくれて助かったわ」

そう、仲間達とその場を立ち去った。

「さっきのあれ、驚いたね」

宿への帰り道。どこか、おびえた様子の残るリリーに、

「そうじゃな。あれは、友人を殺された、ということなのじゃろうな」

そう言いながらディアナは、確認するようにマージンを見た。

「そうなんやろうな」

「こんな事になってもPKとか、やっぱりいるんだ……」

そう言ったのは沈んだ感じのレック。PKそのものではなくとも、それを肌で感じ取れる出来事に、ショックを受けていた。

「リアルでも殺人犯とかおるんや。ゲームの中もその延長に過ぎんしな」

そこで一度言葉を切ると、マージンは立ち止まってレックとリリーの目をじっと見つめた。

「PKやのうても、魔王が倒されるまで魔物の襲撃でもプレイヤーは死んでいくんや。人が死ぬ事に慣れる、とは言わん。でもな、それを見届ける覚悟は必要や。その全てを避ける事は絶対に出来んや」

そう言ったマージンの目は、真剣そのもので、レックもリリーもその真剣さに、頷く事しかできなかった。

「で、私に言ってくれないのは、どういう見かのう？」

すねたように言うディアナだったが、

「こついうことするんは、未成年限定や」

「それはつまり、私が年を取っておると？」

「そうは言わんけどな。でも、子供っちゅーわけでもないやろ？」

さすがにそれには、ディアナも反論できなかった。

レックとリリーも、マージンに言われた覚悟が出来てるかどうかと訊かれれば、出来てない、分からないとしか答えられないので、子供と扱われても文句は言えなかった。

その晩。

例によって、夕食の後に宿の男部屋に集まったレック達は情報交換を終え、明日からどうするかを話し合っていた。

「まず、図書館は十中八九無事だ。そして2番街区に入れるかどうかだが、クックキー中央大橋を渡って3番街区に入る事は出来そう
だ。だが、入った後にどうなるかが分からないわけだな」
「情報不足だな」

クライストの言葉に、ディアナとレックが頷く。

「見つからないか、見つかっても気にされないならいいんだが、様子すら分らないのではな」

ちなみに、見つかっても構わず相手をなぎ倒す……というのは、自分たちの力を過大評価しないようにしているレック達にとって、選択肢とはならなかった。それで死んだら身も蓋も無いのである。
「そろそろ行くと見つかりやすくなるしね」

レックがそう言うと、

「やったら、少人数での潜入やな。こう、ジェームズ・ボンドみたいに。格好ええやん」

「いや、それは映画の見過ぎ」

銃をぱんぱん撃つ振りをするマージンに、レックはツッコんだ。

「大人数での潜入よりは見つかり難かるうが、見つかった時に逆に危ないのう」

「まあ、バリケードの上から覗くくらいはしてみたいわ」

「それもそうだな」

「ないしは、地下から潜り込む！とかな。文字通りの潜入や」

「いや、そんな都合のいいものは無かるうに」

しかし、ディアナがそう否定しようとした時、

「あるかも」

マージンの言葉を聞いて、ちよつと真剣な表情になったリリーが

ぼつりと呟いた。

「「え？」」

思わず聞き返す仲間達。

「地道みたいなもの、あるかも」

「どういうことだ？」

そう尋ねるグランスに、

「前にどこかの裏道の奥の方に、格子がはめられた穴が開いていたの。格子は外れなかったけど、覗き込んでみたら地下に続く階段っぽいのが見えたから、地下があるかも」

リリーはそう答えた。

「そついや、キングダムの地下にはなんかあるって噂、あつたよな」
思い出したようにクライストがそう言い出す。

「私は聞いた事はないのう……」

「俺もない」

ディアナとグランスは揃って首を横に振る。

「わたしは、地下があつてもおかしくないというくらいなら……」

「僕は地下があると面白いな、くらいかな」

噂にもなつてなかったのがミネアとレック。

「地下はあるんやけどな」

あつさり断定したのがマージン。

「「……はい？」」

そのあまりに平然とした口ぶりに、仲間達は一瞬、マージンが何を言つたか理解出来なかった。

「まー、もう守秘義務もクソもあらへんしなー」

仲間達の視線を集める中で、そう前置きをしたマージンは、

「わい、リアルでアイデア社の仕事受けとつたやん？」

そこで仲間達がうんうんと頷く。

「で、キングダムの街データの構築も少しな。やらされたことあるんや。その時に見たんや」

「なるほど。じゃあ、ここには地道がある、と？」

「じゃあ、マージンさんのリアル年齢が40歳とか50歳という」とは……」

「あらへんあらへん」

ホツとしたように、否定するマージンだった。

「で、その地下道を使えば、見つからずに厄介ことを避けて図書館まで行けるのか？」

仲間達が落ち着きを取り戻すのを待って、グランスは口を開いた。「それは分からん。さっきも言った通り、出入り口も知らんし、そもそも川の下を潜つとるかどうかも、見た事あらへんし」

「でも、クックキー川の下も貫通していて、図書館の近くに入入り口があれば、図書館行けるね」

「まあ、探してみる価値はありそうじゃな」

「地下道……ネズミとかゴキブリとかいないでしょうか……」

「いたら、やだね……」

ホントにイヤそうにおびえる(？)ミネアと顔を顰めるリリー。

「まあ、まずは見つけるのが先だけだな」

「では、入口をまずは探すという事でいいな？」

グランスの言葉に仲間達が頷き、レック達は翌日から地下道の入口を捜す事になったのだった。

キングダム地下道

地下道を探してみる事になってから、僅か三日で入り口らしき物は見つかった。聞いて回ると地下道の噂はあったものの、誰もその存在を信じておらず、実際に自分たちの目で探す事になってしまったのは余談だろう。

そして入り口を見つけた翌日早朝。

キングダムの表通りを大きく離れ、迷路のように枝分かれし、入り組んだ裏道の1つにレック達は立っていた。

「これ、か」

石造りの建物の壁に、隠れるようにあったその穴を前に、グランスはそう言った。

「思ったより小さいのう……」

「マジ、格子がはまってんのな……ビクともしねえな」

しゃがみ込んで、穴を塞ぐように縦にはめ込まれた数本の鉄棒からなる格子を手で握り、クライストは動かないかと試していた。

「あたしが見たのとはちよつと違うけど……奥はどうなってるの？」

「ん？ああ……確かに階段みたいな物が見えるな」

リリーに聞かれたクライストは、奥を覗き込んでそう答えた。

「ちゅーか、格子が外れてもグランスが通れるんかいな、これ」

「ぎりぎりに見えますね……」

「何ともならなかったら鎧を脱ぐしかないんじゃない？」

そう心配しているのは、レック達だった。実際、穴の幅は兎に角、高さが50cmちよつとと、グランスの巨体が通れるかどうかは些か微妙だった。だからこそ、入ってみようと思うプレイヤーが今までいなかったのかも知れないが。

「とりあえず、こん中で一番力があるのは、グランスとマージンか？壊せるか？」

自分の力では格子はどうにもならないと諦めたクライストは、立ち上がるとそう言った。

「やってみるか」

二人がかりでやった方がいいのだろうが、如何せん、グランスの巨体だけで穴の前が塞がってしまう。そのため、まずはグランスから試してみる事になった。

「む……ぐ、ううう……！！」

背中の斧とグレートソードを仲間に残し、一本の格子を両手でがっしり握ると、グランスは力任せに引き始めた。が、

「くはあっ……ビクともしないな」

手を離し、地面に座り込むグランス。

「ちよつと待った。力任せじゃなくて、普通は格子の根本を掘ったりにして外すんじゃない？」

と、グランスを呆れたように見ていたレックが言う。

「あ？あー……」

それもそうかと仲間達が納得していると、

「ちよつと退いてみて」

グランスを退けて、レックは穴の前にしゃがみ込んだ。

「上も下も建物の石にしっかりとりはめ込んであるな」

と、横から覗き込んだクライスト。

「石は外れそうにないけど……」

そう言いながら、レックは剣で石を削ってみる。

「削るのは削れそうだね」

「剣で削るんか？」

後で修理する事を考えたのか、マージンがイヤそうな顔になっている。

「使い捨てのナイフか何かの方がいいかもね」

「いやいや、そこは普通、ノミとトンカチやる」

「マージンの言うとおりでな。とは言え、さすがに誰も持ってないな？」

仲間達が頷くのを確認したグランスは、
「買ってくるか。みんなはここで待っていてくれ」

そう言っつて、早速表通りへ戻るべく歩き出した。それを見ていたミネアは、ディアナに何か耳打ちされたかと思うと、

「あ、わたしも一緒に行きます……!!」

慌ててグランスの後を追いかけていった。

「青春じゃのう」

「青春だね〜」

と、仲間達は温かく見送るのだった。

それを見ながら、

「……おまえら、自分の青春はどうした」

そう、ぼそりと呟いたクライストの言葉は、幸い誰にも聞き咎められなかった。

待つ事二時間。

考えてみれば、店があるエリアまで往復するだけで一時間以上かかり、さらに目的の物を売っている店を探すとすると、余計な時間がかかるのは当然だった。

幸い、ここ久しく使っていなかったギルドチャット改めクランチヤットの存在を思い出し、グランスと連絡を取りながらだったので、待機組も大人しく待つ事が出来ていた。

「別にここで待っていてくれなくても良かったんだが……すまん」
ミネアと帰ってきた早々、グランスはそう頭を下げた。

とは言え、

「ここで待たずとも、他に行く当ても無いしのう。問題はあるまい

」

というディアナの言葉通りでもあったのだが。

「とりあえず、これがハンマーとノミだ。これで、石を割るなり削るなりして、格子を外せばいいんだな？」

「そうやな。じゃ、わいがやるから貸してくれんか」

マージンはそう言うと、フランスからハンマーとノミを受け取った。仲間達は、マージンの力は強い方だと思っていたので、特に反対も出ない。

「格子を外しても……落ちてきたりはなさそうやな……」

道具を受け取って、穴の前にしゃがみ込んだマージンは、穴の上側の石をつつきながら、何やら確認を始めた。

「落ちてくるって、何が？」

「いや、この穴、建物の壁にあいとるやろ？格子に建物の重さがかかっとしたら、外した途端に建物が崩れたりするかも知れんからな」

レックにそう答えると、マージンはそんな事はなさそうだと判断したのか、いよいよノミを格子の根本に当てた。

コンコンコン……

ノミをハンマーで叩きながら、少しずつ格子がはめ込まれた石を削っていく。

「割った方が早いかも知れんなあ……あー、でも、割っても石が外せんかったら、意味あらへんか……」

等と、ぶつぶつ言いながら、まもなく、一本の格子の根本がぐらぐらし始めた。

「どうだ？外れそうか？」

フランスに訊かれ、

「思った通り、建物の重さはかかっとらんかったわ。あとちょっと削れば、これは外れるやろ」

そう答える間もマージンの手は休むことなく、石を削り続け、

「ん」

と言ったかと思うと、ハンマーを地面に置いて、右手で格子を揺さぶり始めた。そして仲間達が見守る中、最初の格子が外れたのだ

った。

それからは、ガラスとマージンが交代でハンマーでノミを叩き、次々と格子を外していった。そして、5本全ての格子が外れたのは一本目の格子が外れてから、30分以上経ってからの事だった。

「やっぱ、階段だな、これ」

アイテムボックスからランタンを取り出したランタンを片手に、最初に穴に入り込んだクライストは穴の先を確認した。そうして見た穴の先には、闇へと続いていく階段がひたすら下へと伸びている。「中はどうなってる?」

外からの声に、

「階段が下へと続いてるだけだぜ。それと、階段の途中からは立って歩けそうだ」

そう答えると、四つん這いのまま階段の側まで進んだ。ここまで来ると、穴の天井も少し高くなっていて、しゃがんだままでも何とか進めそうだった。ガラスの巨体では無理だろうが。

「行けそうだけ。入り口は狭いが、奥は割と広いぜ!」

階段の天井が高くなってきている付近まで降りてみたクライストは穴の入り口に向かって、そう伝えた。

すぐに、リリーが潜ってこようとしていたが、ミネアとディアナに止められる。

その後、何故かパーンという頬を張るような音が3回ほど続いたかと思うと、顔に赤い紅葉を貼り付けたレックとマージンが四つん這いで入ってきた。続けて、やはり紅葉付きでガラスも腹ばいで潜ってくる。

「何があつたんだ?」

「まあ、いろいろと……」

どこか、諦めの境地でマージンがぼやいた。

「これは、ランタン1つじゃ足りないな」

階段に降り立ったグランスがそう言いながら、アイテムボックスからランタンを取り出し、明かりを灯す。

そうしてる間にも、リリー、ミネア、ディアナの順で女性陣も穴に入ってきた。狭い階段なので、自然と圧される形で階段を少し進む羽目になるクライスト。

「思ったより深そうじゃのう」

ディアナは首を伸ばして階段の奥を見透かそうとして、闇に阻まれる。

「何があるかわくわくするね」

実際、かなり楽しそうなりりー。

「でも、何でこんなところがあるんでしょうか……」

ミネアの言葉で、仲間達の視線は一斉にマージンに集まった。

「いや、わいに訊かれても困るわ……」

「まあ、この辺はゲームだということに納得しておこう。むしろ、この先の構造とか、何があるのかとか、そっちの方が大事だと思うんだが、分かるか？」

「仕事で見たことあるゆーても、一部だけやけどな。なんか、迷路か迷宮みたいな印象やったわ」

マージンのその答えに、

「迷路の類か……一日じゃ向こうに着くかどうか怪しいな」

グランスは唸ったがすぐに、

「マッピングしながら進むしかないが、準備不足だな。今日はこの周辺のマッピングにするか。明日からは準備を整えて、2番街区方面を重点的にマッピングしていこうか」

そう、行動を決めた。

そして動き出そうとする前に、

「ここ、エネミー出るのかな？」

と、レック。

「マップデータからやと何とも言えんわ」

「キングダムの下下といえど、警戒はしておいた方がよいじゃろう

な

「そうだな。だが、こうも狭いと俺やマージンの武器は振り回しづらい。クライストとレックで前衛を頼めるか？俺とマージンは殿に回って後ろからの攻撃に備える。盾くらいにはなれるだろう。ディアナはマッピングを担当。ミネアは前衛の援護。リリーはディアナとミネアの護衛でいけるか？」

グランスの指示に頷いた仲間達は、早速陣形を整えると、ゆっくりと階段を下り始めた。

「思ったより、長かったな」

結局、地下10mくらいには降りてきただろうか。リアルでの地下街の深さくらいを想像していたレック達は、思っていた以上の深さに少し驚いていた。

「階段もまっすぐじゃなかったですね」

ミネアの言葉通り、途中で何度かくねくねと曲がっていて、方位磁針が無ければ、方角を見失っていたかも知れなかった。

「しかし、完全に人の手が入ってるデザインだけ、これ。何のつもりなんだか」

壁にランタンを近づけながらクライスト。

レック達が降りてきたそこもまた、自然の洞窟などではなく、立派に人の手が入り、壁も地面も天井も石でしっかりと組まれていた。通路と呼んで差し支えないそこは意外と広く、幅も天井までの高さも3mほどあった。

空気は、地下という事でヒンヤリしていて微妙に肌寒いかどうかといったところだった。ただ、湿度は低いし、空気に澱んだ感じもなく、不快感は感じなかった。

そして、

「で、どっちに行けばいいんだ？」

階段を下りきつたところで通路は二手に分かれていた。

「一応、こっちが北向きですね」

方位磁針を見たミネアが、通路の一方を指した。

「じゃ、そっちに向かって進めばいいのかな？」

「迷路みたいになっておらねば、そういう事になるのう」

レックに些か意地の悪い答えを返すディアナ。

「まあ、今日はマッピングのみの予定だ。間違えていても問題ないだろう」

グランスはそう言うと、改めて通路を見直し、

「しかし、ランタンの明かりだけだと暗すぎてよく分からないな。

ミネア、マッピングはちゃんと出来てるか？」

「え、はい。何とか出来てます。……距離はちょっとあやふやですけど……」

「気にするな。迷子にならなければそれでいい」

おどおどと答えを返したミネアにそう言うと、

「では、まずは北から行ってみようか」

そのグランスの言葉で、レック達はゆっくりと歩き始めた。

時々立ち止まり、ミネアが紙に歩いてきた通路を書き込むのを待つ。

石造りの通路には行けども行けども明かりはない。ただ、時々広くなったり狭くなったりしてはいる。時々通路の左右に部屋らしきモノはあるが、何故か木製の机や椅子が置いてあるだけで、めぼしい物は見つからなかった。

エネミーの類も全く見かけない。時々ネズミっぽい何か走り回り、レック達に緊張を強いていたが、襲ってくる気配もなかったため、すぐに緊張しなくなってしまった。ただ、ランタンの明かりだけでは、走り回っているモノが何なのかはさっぱり分からなかった。マージンも正体は知らないらしい。

「これで6つめの分かれ道だね」

右へと伸びている分かれ道を確認して、前衛のレックが言うと、
「後からこいつらも調べて回るのは手間かかりそうだな」

と、クライストがぼやく。

「どのくらい来たか分かるか？」

「2kmくらい、ですね」

殿を守るグランスに、手書きの地図を見ながらミネアが答える。

ここへの入り口となった穴があったのが5番街区の北の方だった
事を考えれば、そろそろ6番街区を抜けてもいい頃だ。

「これ、どのくらい続くんだろね」

「キングダムの地下全域に広がっておるかも知れん」

ディアナがそう答えると、

「全部調べるの、大変そ……」

想像したのか、リリーはげんなりとしてしまった。が、

「でも、キングダム中に広がるとなるなら、島にも繋がったりし
てな」

というマージンの言葉に、

「それ、ホント!？」

と元気よく振り返った。

「いやいや……かも知れんってだけやで？」

「それでも、何も無いよりずっと面白そう!図書館の後は、島への
通路探してみるのもアリかもね!」

そんなリリーに、

「ふむ。初上陸……というのは良いかも知れん」

「だね。何もなくても、誰も行った事のない場所に初めて入る、そ
れだけでもいいよね」

と、仲間達もテンションが上がる。

「まあ、そのためにも地道なマップピングだ。……ホントに島に繋が
ってるなら、多分、もっと下の階層があるだろうしな」

「あー、確かに湖の深さ考えると、そうなるな」

「逆に言えば、下へ降りる階段が無ければ島には行けないってことかな？」

「いや、サークル・ゲートがあれば別じゃろう」

「つまり、可能性はゼロじゃないって事よね」

などと賑やかに話していたレック達だったが、さらに数分も進まない間に、初めての行き止まりにぶつかってしまい、引き返す事になった。

その後は、途中で枝分かれしていた道を1つ1つ調べていったが、そのうちの1つでは、さらに下へと続く階段が発見された。もつとも、フランスの「この下は明日にしよう」という一言で、この日の探索は第一層（最初に降りてきた層はそう呼ぶ事になった）だけになった。

地下道二日目。

予定通り、初日に見つけていた階段から下りた先の二層目を探索。おそらく4番街区の北端にあたる辺りで、前日同様に行き詰まった。他には特に変わった事もなかったため、一部で早くも倦怠感が漂い始めた。三層目に続くであろう階段を見つけ、翌日以降の探索をそこに設定して二日目は終了した。

地下道三日目。

三層目の探索を行うものの、やはり4番街区を抜ける事が出来ず、一度そこで休憩という事になっていた。

「これはあれやな。クックキー川なんやろな」

とマージンが言ったのは、あらかじめ買ってきていたサンドイッチを、昼食には少し早いながらも、ランタンの明かりだけで食べながらの事だった。

「なるほど。そういうわけなんじゃない」

と、ディアナをはじめとした何人かはすぐにマージンの言葉を理解した。

「どういうこと、ですか？」

理解しきれなかった一人、ミネアが首をかしげると、

「地下通路は川を横断する事は出来ないのは分かるか？そして、4番街区の北端と言えば……ということじゃ」

「なるほど……そーゆーわけなんだ」

もう一人理解できてなかったリリーが頷く。

「つまりは、クックキー川より深くまで降りないと、3番街区の地下への道は見つかりっこないわけだな」

「あらかじめ予想しておくべきだったか」

ミネアから預かったミネアお手製マップを見ながら、グランスが呻いた。

マップには一層目と二層目の4番街区部分、それに三層目の4番街区北部分にあたる地下通路が書き込まれていた。ただ、同じ場所で通路が行き詰まっているのが必然なのかどうか、区別を付けられるほどには通路の数が多くなかったが。

「となると、川底より深くなるまでは水平方向の探索は意味があまりないか？」

「かも知れんのう。今、どのくらいの深さなのか分からんがの」

「確か、クックキー川の水深が深いところで10mだったか？」

「それくらいじゃな。それに川底が抜けない程度の地盤の厚みを確保するなら、20mは潜らんといかんのかのう……？」

「いや、そこまでは分からんが……」

数字が分からないと悩むグランスとディアナ。

もっとも、他の仲間達もどのくらい深く潜ればいいのかなど、さっぱり分からなかった。

「で、この三層目で深さどんくらいや？」

「あ、はい。えと、25m、くらいです」

「マージンに訊かれ、フランスからマップを返して貰って、ミネアは確認した。」

「川の水面から街の地面までの高さが3〜4mはあったはずやな。となると、三層目の天井で川底から10m弱。素人考えやと足りそうな気もするんやけどな」

その数字に、地下の暗がりの中、再び「うん」と唸る仲間達。

しかし、そもそも考えても答えの出ない問題だったりする。知識がないのだからどうしようもない。おまけに、レック達は気づいていないが、イデア社の地下道をデザインした担当者が、そこまで考えていたかどうかも怪しいようでは、考えるだけ無駄なのだった。

そのことに気づいたわけでもないだろうが、
「考えても答え出ない気がするし、北に進める通路だけ確認して、他は無視するでいいんじゃないかな」
そう言ったのはレックだった。

「幸い、ひねくれた構造にはなっていないみたいだしさ」

「確かにな。3番街区への通路を探したければ、北に向かっている通路を確認するだけでいいはずだな」

これまでにマッピングしてきた通路を思い出しながら、フランス達も賛意を示す。

「それなら、だいぶ手間も減らせそうだな」

「そうですね」

そんな感じで何となく仲間達のテンションが回復してきたところで、レックはもう一つ、言うべきことがあるのを思い出した。

「あと、何層目まで確認するか、決めておいた方がいいと思うんだけど」

「む。それももっともじゃな」

確かに、地下100mも潜る必要があるとは思えない。というか、

見つからないままどこまでも潜っていくのも 底がないとしてだが おかしな話であった。

「今は三層目か。で、深さ25mほど。3番街区への道があるなら、どちらにしてもそろそろだな」

「だな。次かその次くらいに見つかってもおかしくないと思うぜ」

「となると、今日か明日くらいかのう」

「なら、明日まで探索してみて、見つからなかったら、地下から3番街区に行くのは諦めるか」

「四日もかけて諦めるのは、ちょっと勿体ねえ気もするけどな」

「いつそのこと、底まで……あう、ごめん。なんでもない」

「じゃ、明日まで探索してみて、見つからなかったら他の方法を考えよう」と

途中、リリーが変な事を言いかけたが、こうしてあと一日半だけ探索を続ける事になった。

そして、翌日。

午前中の四層目の探索で、レック達はいいに3番街区地下への通路を発見した。その日は地上までの通路の探索に費やされ、2番街区と思われる場所への出口の確認までを行い

そして、さらに翌日。

昼前に目的地近くの出口に到着したレック達は、困った事態に陥っていた。

「マージン、結局合流できなかったな……」

「うむ。ここに来て合流できないようでは……」

「ごめんなさい……」

「いや、俺たちに謝られてもな……」

つまり、マージンとはぐれていた。

てつきり地下通路にはエネミーの類はいないだろうと呑気にしていた蒼い月の面々だったが、途中、怪しげなうなり声はどこからか聞こえてきた。それを聞いたミネアがパニックを起こし、そんなミネアを仲間達が必死に追いかけている間に、気がついたら一人いなくなっていた。という訳である。

幸い、ミネア達は現在地を見失う事にはならなかったが……

「マージンのやつ、地図は持ってないよな。道順は覚えてるのか？」

「……いや、覚えてないと言ってるな」

マージンとクランチャットで連絡を取っていたグランスが、そう答えた。

実際、はぐれた事が分かった直後からクランチャットで連絡を取り合流を試みていたのだが、めばしい目印もない上にランタンの明かりしかない暗闇の中では、到底合流できそうにもなかった。そこで、地上への出入り口での合流を目指したのだが……結果は言うまでもあるまい。

「とりあえず、地上を目指しているらしい。まあ、地下のどこかで飢死などという心配は要らないだろう」

「で、先に合流するのか？」

クライストに訊かれ、グランスは首を振った。

「いや、俺たちはこのまま図書館を目指す。マージンも、図書館の近くに出られたら、図書館を目指すと言っていた。まあ、無理そうなら先に宿に戻っているそうだ。どちらにするかは、地上に出てから連絡してくるそうだ」

「大丈夫、でしょうか……？」

「一人なら目立たずに動き回れるから心配するなと言っていたな。

まあ、何かあればクランチャットで連絡もつくし、合流したいなら

さっさと図書館に行って用事を済ませるのがいいだろうな」

心配そうなミネアに、グランスはそう言った。

「じゃ、何とか出口の格子を外して、さっさと外に出ようぜ」

「じゃな。もつとも、外の様子が分からぬ以上、あまり大きな音も立てられんがの」

そう言っつて、さっさと出口へと向かうクライストとディアナ。

残りの仲間達もその後を追い、すぐに出口に着いた。

「近くにはプレイヤーの気配はないよ」

出口も、レック達が地下通路に入り込んだ入り口と似たり寄つた
りで、高さが殆ど無いくせに格子だけはしっかりはまってた。そんな
な出口に張り付いて、外の様子を窺っていたリリーが周囲の安全を
報告すると、

「よし、では静かに格子を外していくか」

ランタンを仕舞ったグランスが、代わりにハンマーとノミを持って、
て、出口に張り付いた。

そのまま、大きな音を立てないように、少しずつ格子の根本がは
め込まれている石を削り始める。予定通りの街区であれば、外はP
Kをもやらかしている連中の縄張りど真ん中である。

油断は出来ない。時々手を止めて、周囲の様子を窺い、何もなけ
れば再び音を立てないように石を削る。

やがて、

「よし、1本とれたぞ」

そう言っつて、外れた鉄棒を仲間にも渡そうとグランスが振り向くと、
「ああ、ご苦労さん」

そこにいたのは深緑の髪を肩まで伸ばした見知らぬ男だった。

その後ろでは、仲間達が喉元にナイフを突きつけられ、武器を取
り上げられ、次々とロープで両手を縛り上げられているところだっ
た。

ダイナマイツサンダー

「おら、さっさと歩けや！」

そう言いながら、如何にもな格好をしたプレイヤーが、グランスを蹴りつける。

その傍らでは、

「へへっ。久しぶりの活きのいい女だな！」

と、ディアナ達の胸に手を伸ばしては、深緑の髪の男に睨まれ、慌てて手を引つ込める輩が後を絶たない。

地下道で深緑の髪の男達に捕まったレック達は、両手を後ろ手に縄で縛られたまま、3番街区の通りを歩かされていた。逃げだそうにも、手を縛られている上に、ナイフだの剣だので武装した男達十数人に囲まれていては、言いなりになるしかない。

「しかし、まさか銃とはな。まだ、使えるのが残ってたのか」

深緑の男　レック達が見たところ、こいつがリーダー格だった

は、クライストから奪った銃の1つは腰のベルトに挟み込み、もう1つをいじりながら、時々その辺の建物に向かってぶっ放していた。

ちなみに、レック達が持っていた武器は全部男達に回収され、一緒に持ってこられている。さすがに重さが30kgを超えているグランスの戦斧とレックの　　と言っても持っていたのはグランスだが　　グレートソードは二人がかりで運んでいたが。

「弾もこれだけってこたあないな。アジトに着いたら持つてる分は全部出して貰うとしようか」

と、クライストのあごに銃を突きつけ、ニヤニヤと笑い、

「おい、そこ。勝手に手え出すんじゃないよ！」

と、リリーの腰に手を伸ばしていた男　　まず、手下だろうに銃を突きつけ、止めさせる。

びびったように、慌てて手を引つ込める手下の様子に、「やっぱ、銃はいいな。ナイフよりこいつらの反応がきびきびするわ」

満足そうに笑った。

その様子を、歯ぎしりしながらクライストが睨むが、その視線に気づいたまた別の男に、思いつき顔を殴られる。武器は取り上げられたものの、防具は剥がされてない事もあって、身体は蹴られる事はあっても、殆ど殴られてはいなかった。

自分の手を痛めるのが嫌なのだろうと、グランスやクライストは気づいていたが、敢えて口に出す事はしない。いや、さつきからそもそも一言も口をきいていなかった。相手を無駄に刺激して、余計に殴られる必要もないからだ。もともと、レックは何度か暴れたため、かなり酷い顔になっていたが。

ディアナ達女性陣は、捕まえられた直後に胸や腰、お尻を触りまくられたが、その後は深緑の男が睨みを効かせているため、丁重とは言い難いものの、余計な手出しをされる事もなく、歩かされているだけで済んでいる。

もともと、「俺たちが使った後はおまえらに回してやる！」というリーダー格の男の言葉で、手下達がワツと盛り上がったあたり、この後、碌でもない事をされるのは目に見えていた。

そのせいで、ミネアもリリーも震えが止まらないほどに怯えている。リリーはリアルでもまだ少女と言っているいい年齢のはずだが、それでもそういう知識だけはあつたらしい。ディアナだけは、怯えているようで、どこか冷静さを保っていたが。

深緑の髪の男に率いられたチンピラ達に捕まったレック達は、武器を取り上げられ、縄で拘束された後、3番街区の出口から地上へと連れ出された。3番街区の地下通路への出入り口は、建物の地下室にあつた。勿論、建物自体は裏通りの目立たないところにあつたが。

その後、チンピラ達　おそらくはダイナマイツサンダーの構成員　は、時々グランス、クライスト、レックに暴行を加えながら、3番街区の彼らのアジトへと向かっていたのだった。

レック達が連行されている通りは、他に人影もなく、大陸会議が支配している4〜6番街区の賑わいとは天と地ほど違う。時々、建物と建物間に人影が見えるものの、チンピラ達が脅すところこそどこかに消えてしまっていた。

通りの左右の建物はキングダムでも見られるような石造りのしつかりした建物ばかりだったが、その窓はどれもこれもしっかりと閉じられていた。ただ、板で補修されているものもあるものの、窓ガラス自体が割れてしまっている窓も少なくない。

そんな窓から通りを覗いている人影も時々あったが、チンピラ共に見つかりたくないのか、レック達を連行している彼らが近づくと人影はいずれも室内へと消えていった。

そんな3番街区の様子は、平たく言えば荒れ果てているの一言に尽きる。

荒れている割に路上にゴミが殆ど無いところには逆に違和感を感じるが、VRMMOに限らない一般的なMMO同様に、地面に落とされたアイテムは一定時間経過後に消滅する仕様である以上、別に驚く事でもなかった。

もつとも、そんな街の様子をどこか冷静に観察できていたのは、ディアナとグランスだけだった。セクハラ攻撃に晒されたミネアとリリーは言うに及ばず、さんざんに殴る蹴るの暴行を受けたクライストとレックも、どこか諦めともとれるような表情を浮かべ始めていた。

「ってか、シャイツさん。女はとにかく、男まで連れて帰る意味あるんですか？」

地上に出ても20分近く歩いた頃、レック達を取り囲んでい

た男の一人がそう言いだした。

周りの連中も、同じ考えのが少なくないのか、そんな質問をした男と深緑の髪の男　シャイツに注目している。

「ん？あー、そういやそうだな……」

そう答え、グランス、クライスト、レックの順に移動したシャイツの視線に、レック達は一瞬身体を強ばらせた。

「いや、やっぱ、連れて帰るか。こいつらのアイテムボックスの中身とか、出させないといけねえからな」

と、クライストに視線を戻し、シャイツは笑った。

「特に銃弾な。服に入れてなかったってことは、アイテムボックスの中って事だろうからな？」

そのシャイツの言葉に、手下の男達は納得したらしい。

レック達も今すぐ殺される事はないと分かって、身体力が抜けはしたが、それでもシャイツ達のアジトに着いた後はどうなるか分からない。とても、安心も樂觀も出来る状況ではなかった。

そんなレック達の心情など露知らず、ダイナマイツサンダーの面々は久しぶりの欲望の充実を期待し、テンションは上がる一方だった。

だからかも知れない。

いや、警戒していても、彼らにはそもそもどうにもならなかったのかも知れなかった。

建物の影から不意に飛び出してきたその人影は、自分の身長ほどもある長大な剣を振り回し、列の前の方にいた男達を3人、まとめて吹っ飛ばした。

「っっ！！！！？！？」

「っっマージン！？」

その人影が誰なのか認めたレック達がすぐさま声を上げたのとは対照的に、カエルが潰れたような声を残して数メートルも吹き飛ばされた彼らが地面に落ちる頃になって、やっとダイナマイツサンダー

ーの男達は動きを見せた。いきなり飛び出してきた人影へと警戒を向け、各々の武器を構え始める。

もっとも、それが間に合ったとは到底言えない。

マージンはダイナマイツサンダーの男達が体制を整える前に、既に先頭にいたシャイツをリーダーと見なしていたのか、一気に距離を詰める。

「貴様!？」

シャイツは他の連中よりも一足早く、右手に持っていた銃をマージンの方へと向け、引き金を引こうとして、

マージンは下からすくい上げるように振り上げたツーハンドソードでその銃を弾き飛ばした。

その勢いで引き金が引かれた弾丸は、当然のように明後日の方向へと飛び出していった。

「ぐっ!」

構えていた銃を無理矢理弾き飛ばされたシャイツは、顔を痛みに歪めると、命の危険を感じたのか、すぐさまマージンが出てきたのとは別の小道へと逃げ込んでしまった。

しかし、マージンの動きは止まらない。

シャイツの手から銃を弾き飛ばした勢いのまま、大きく振り上げていたツーハンドソードを今度は思いっきり石畳へと叩き付けた。

易々と敷かれていた石は碎け散り、周囲に破片をまき散らす。その破片をレック達まで喰らってしまったのは、マージンの予測のうちか否か。

しかし、そんな事を気にする様子もなく、マージンは声を大きく張り上げた。

「逃げ去れ!!」

石畳が碎かれた様と音とに動きが完全に止まっていたダイナマイツサンダーのメンバーは、それで一気に腰が引けてしまった。

取るものも取り敢えず、三々五々に逃げ出したダイナマイツサンダーを見送ると、マージンはツーハンドソードを背中に戻した。

「よ。無事やった……訳でもなさそうやな」

ぼろぼろになった男性陣の顔を見て、顔を顰めた。

「マージン！」

「どうしてここに？」

喜色満面でマージンを迎える仲間達。地獄に仏である。

「まあ、そないなことは後回しにして、とりあえず縄切るで」

そう言いながら、手際よく仲間達を拘束していた縄を切っていくマージン。

「助かった……の？」

「やれやれ。貞操の危機は取り敢えず免れたのかのう」

怪我こそ少なかったものの、下手すると男性陣よりも酷い目に遭いかねなかつた女性陣、中でもミネアとリリーは安心のあまり腰が砕けてしまったのか、へたへたと地面に座り込んでしまった。

「説明は後や。とりあえず、さつさと逃げるで。連中が仲間連れてきたら洒落にならんしな」

「ああ、そうだな」

その場を離れる前に、レック達は男達が運んできていた自分たちの武器をしっかりと回収する。

その横では、

「大丈夫かいな？」

と、マージンがリリーとミネアに手を貸して立たせていた。

「げ。これ、いろんな意味で使えねえ……」

そう言ったのは、マージンに弾き飛ばされた銃を拾ったクライストだった。指先で摘むように自分の銃を持ち、思いつき顔を顰めている。

それも無理もない。マージンの一撃で銃身はひん曲がり、その他の部品いくつか吹き飛んで無くなっていった。おまけに引き金のあるには人の指が一本、絡まっていた。

「すまんけど、堪忍や」

片手で謝罪の形を作るマージンを見るも、クライストも仕方ない

事とは分かっていたので、責める事も出来ない。

「まー、予備はまだあるからいいけどな……ってか、1つ持ってかれちゃった」

「あたしの短剣も無いんだけど……持って行かれちゃった？」

何とか、自分の足で歩けるようになったりリーも、どうやらお気に入りの武器を持って行かれてしまったらしい。とは言え、ラスベガスで買って来た棍は無事だったらしく、しっかりと拾っていた。

唯一武器を持ってないのがミネアだったが、

「わたしの弓はアイテムボックスの中にしまっていましたから」との事。

「とりあえず、さっさとここを離れるぞ。マージン、いい場所はあるか？」

「地下通路はダメやな。連中、何チームも地下通路に人を送り込んでるみたいやから、途中でこんにちわなんて事になりかねへんわ」

そのマージンの答えを聞いて、仲間達は地下通路に逃げ込むのはとりあえず諦めざるを得なかった。

「まあ、ついてきてや。ここは離れるに越したことはあらへん」

それには誰も異論はなく、武器も拾ってこの場に留まる理由もなくなった蒼い月の仲間達は、隠れる場所を探すため、その場を急いで立ち去った。

しばらくして蒼い月の面々が潜り込んだのは、2番街区と3番街区の境界付近の空き家だった。先ほどの場所にあまり近いのもあれだが、遠すぎると移動に時間がかかりすぎるというのもあり、まーまーなな場所で落ち着いた。

「で、マージンはどうしてあそこに？」

治癒魔法で全員の怪我を治した後、窓ガラスが残っていた空き家の二階で車座になっていた。そして、まずはマージンから説明を聞こうと、グラスが口を開いた。

「そやなー。どっから話したもんか」

「はぐれた後からでよいのではないか？」

「そやな。そうしよっか」

マージンは軽く頷くと、説明を始める。

それによるとマージンは、はぐれて仲間達とクランチャットで何度か連絡を取った時には、既に地下通路の一層目まで上がってきていた。そこでダイナマイツサンダーのメンバーと覚しき集団を見かけたので、息を潜めて彷徨きながら、周囲の様子を窺っていた。すると、わいわいがやがやと賑やかな集団を見かけたので、よくよく観察していると仲間達が捕まっていた。

放置しておけばろくな事にはならないだろうと、救出を決意。機会を窺いながら後をつけていると、3番街区の出入り口から地上に出してしまった。このままアジトまで連れて行かれると厄介な事になると考え、しばらく後を付けて行き先をある程度見定めた上で、先回りをして襲撃をかけた。

と、マージンから一通り説明を受けた仲間達は、

「それにしても、良く一人で襲撃をかける気になったのう」

「おかげで助かったけどな」

「いやいや。さすがに仲間を見捨てるわけにもいかんやろ。まあ、

勝算も無かったわけちゃうしな」

「勝算？」

その言葉に、首を捻る仲間達。

「まあ、想像やったんやけどな」

と前置きして、再びマージンの説明タイムが始まった。

「言うてしまえば、わいらは中級冒険者で、あいつらは所詮キングダムっ子っちゆうことや。」

キングダムに居座ってるようなプレイヤーは、大抵アバターのステックが低いままや。考えてもみ？今のわいらで、キングダム周辺

のエネルギーに苦戦とかする思うか？」

「ありえんな」

「無いね」

仲間達がどう考えても、そんな事はありません。みんな、動きもパワーも、キングダムにいた頃より確実に上だという自信がある。

「なら、普通に戦えばまず負ける事はあらへんってのが1つ」

「まだあるのか？」

クライストの言葉にマージンは頷くと、

「心構えの問題だな。死にたくないのは誰も一緒やけど、連中、死ぬかも知れへん状況に慣れてへんと思うたんや。やったら、命の危険を感じたら、それだけで逃げ腰になるやる？」

「確かに僕たちも、『魔王降臨』以降、デスゲームに慣れるまで時間がかかったよね」

「そや。まー、連中が腰抜けの可能性は半々やってんけどな」

マージンがそう苦笑すると、

「まあ、大筋は理解した。次はこれからどうするかだな」

フランスが話題を変えた。

「正直、俺は無理はせずに図書館は諦めて、さっさと大陸会議の管理街区にまで戻るべきだと思う」

その言葉に、

「まあ、仕方ないじやろうな」

「こんなとこ、さっさとおさらばしたいよね」

「あいつらにまた絡まれるのも面倒だしな」

次々と賛意を示す仲間達。

「で、どうやって帰るんだ？」

そんなクライストの質問に、

「一番早いのは、4番街区へクックキー中央大橋を渡ってしまう事だろうな。後は、地下通路をもう一度通るか、あるいは一度城門から外に出て、そこから4番街区の城門までもう一度歩くか、だ」

指折り数えながら、グランスは3つの方法を提示した。

「城門も橋も、連中が見張っておりそうじゃな」

ディアナの言葉に、グランスの隣で思わず震えたミネアが、

「地下通路がいいです……」

「地下通路の出入り口も見張りがいるかもな」

クライストの言葉に泣きそうになりながらも、ミネアはクライストを睨み付けた。

「どこを通っても連中に遭うというなら、一番早く戻れそうなコースがよいのう」

「となると、橋だな。がれきのバリケードを越えるのは大変そうだが、地下通路をちまちま歩くよりは早く着くだろうぜ」

「連中の仲間がいたとしても、マージンの言葉通りなら、ごり押しでいけそうだしな」

そうして、クックキー中央大橋を通過して4番街区に戻る事で仲間達の意見がまとまろうとしていた。その時、

「それでいいのかな？」

仲間達を見ると、レックが難しい顔をしていた。

「急いで帰る事に問題があるのか？」

「問題があるかどうかは分からないけど……気になる事はあるんだ」
クライストに、レックはそう答えた。

「気になる事か。言ってみてくれ」

レックはグランスの言葉に頷くと、

「地下通路の事なんだけどね。キングダムプレイヤー、殆ど知らなかったよね？でも、ここの連中は地下通路の事を知ってた」

「私たちがみたいに、自力で見つけたのじゃろう？」

「かも知れないんだけど……気になるのは、本当に僕達に来る前から地下通路の事を知ってたのかどうかってこと。ミネア、さっきの連中にマップを取り上げられてたよね？」

「え？ええ、はい……」

急に話を振られ、その内容でさっきまでの事を思い出し、ミネア

は再び震えだした。隣に座っていたディアナが、さりげなくその身体を押し、グランズに寄りかからせる。

「む……」

そんなディアナの行為にグランズは何か言いたそうだったが、ミアナが震えている事に気づいて、何も言わなかった。

「ごめん。余計な事思いつかせたみたいで」

その様子を見ていたレックはそう謝ると、

「でも、その時、あいつが言っていたよね。「いいもん持ってるな。そうか、5番街区まで行けるのか」って」

それで仲間達も思いつく。

「ああ、そう言えばそんな事を言ってたな」

「だね」

「じゃな……ということはない？」

ディアナは途中で気づいたらしい。

「つまり、今まであいつらは地下通路を通過して大陸会議の支配街区に行った事はないんだよ。でも、僕達の地図を奪った今なら、それが出る」

そこまで説明されて、仲間達も事の重大さに気づいたらしい。

「放っておくと、地下を通過して、4〜6番街区で略奪とかしかねないってことか」

「それ、絶対ダメだって！やばすぎるよ……」

騒ぎ始める仲間達。

「……放っておける問題ではないな」

グランズも難しい顔になっていた。

「そうになると、単純にここから逃げるだけってのは保留だな。さすがにわいらの地図が原因で、普通のプレイヤーに迷惑がかかったら、夢見も悪くなりそうや」

「じゃ、連中を叩き潰すのか？」

「いやー。それは連中を殺すくらいやないと、意味があらへんかもな」

マージンが何気なく言った「殺す」という言葉に一気の場の空気が凍り付く。それに気づいたのか、

「まー、軍に地下通路の事を教えて、出入り口を固めて貰うつてもアリやけどな」

そう続いたマージンの言葉で、仲間達はほつつと息を吐いた。

「兎に角、どうするかだが……状況をまとめ直すか」

そう言つと、グランスは仲間達が頷くのも待たずに、状況を整理し始める。

「まず、ダイナマイツサンダー……だと思われる連中は、今まで地下通路を使つて大陸会議の街区に出没する事は無かつたはずだ。しかし、俺達の不手際で、それを可能にしてしまった。何らかの対応が必要だ。」

次に、俺達は連中より強い。これは中級プレイヤーと初級プレイヤーの差だと見ていいんだな？」

グランスの視線を受けたマージンが頷く。

「それから……ミネア、マップの控えはあるか？」

「え！？えと、あ、はい。あります……す！」

名前を呼ばれ、慌ててグランスから離れたミネアも頷いた。

「となると、奪われたマップは1つということか」

「あいつらがせっせと写したりしない限り、そうなるのう」

グランスはディアナの言葉に顔を顰めた。

「あまり写されたくはないな……まあ、他に何かあるか？」

「俺の銃、1つ持ってかれてるな」

「あたしの短剣も」

武器を奪われたクライストとリリーが手を挙げた。

「……短剣は兎に角、銃は脅威になりそうだな」

グランスは唸つたが、先に状況確認を優先する事にしたらしく、

「他には？」

と訊いたものの、それ以上は特に何も出てこなかった。

「さて、ではどうするかだが……一番手っ取り早いのは、このまま

4番街区に戻って、軍に地下通路の事を伝え、警戒を促す事だな」

「軍が警戒しかなかったら、地下がチンピラの巣窟になりそうやな……」

「それ、すっごくイヤ……」

マージンの言葉に、リリーが顔を顰める。もつとも、自分たちが安穩としている足下に、悪党共が屯しているというのを歓迎できる者は、この場には一人もいなかったが。

「まあ、そのあたりは軍に任せるしかないのう……」

そう言ってから、「あまり期待は出来そうにないがのう」とデイアナは付け加えた。

「俺達にとつては兎に角、必ずしもベストな選択肢じゃなさそうだな」

枕を高くして眠れないかもなとクライスト。

「俺達自身の危険を無視するなら、ダイナマイツサンダーを叩き潰してマップも銃も奪い返すのがベストだが……」

「それ、うまくいっても途中で結構な数を殺す羽目になるで？」

「……考えたくねえな」

「避けたいね」

クライストとレックがそう言っただけだったが、他の仲間達も顔を見れば二人と同意見なのは一目瞭然だった。

しかし、マージンはついだとばかりに言葉を続けた。

「まあ、悪党に堕ちたプレイヤーが少なくない以上、いつかは殺す事になるかもしれん。今殺す必要はなかったとしても、明日は分かん。覚悟だけは必要やと思うで」

「……正論だとは思うが、避けたい事態ではあるな」

グランズはそう言いながらも、咎めるような視線でマージンを睨んだ。しかし、マージンは気にもとめない。

「ま、な。そこは否定はせんで。でもな、相手がこつちを殺す気でおつてな。そいつを止めるには殺すしかないなんてこともあるんや。そのことだけは覚えといてな」

そう、あまりにも真剣に話すマージンに、マージンの態度に反発を覚えかけていた仲間達も思わず圧されてしまった。

そんな中、レックがふと気づいた。

「マージン、ひよっとしてそういう経験がある、とか？」

その問いかけに、

「そればかりは言えへんわ。秘密つて事で堪忍や」

そう答えながらも、どこか寂しげだったマージンの目を見て、レックはそれ以上訊くのを止めた。と言うより、訊けなかった。

仲間達はすっかり忘れていたが、マージンだけは日本人ではなかった。マージンの母国のアメリカは、未だに日本ほど治安が良くない。銃器の個人所有が認められており、それによる銃犯罪も多発しているのだ。

そのことを思い出した仲間達は、ひよっとしたらマージンも巻き込まれた事があるのではないかと思ひ当たり、マージンの態度への反発は引っ込んでしまった。そして、無言ながらもマージンの言った事をしっかりと考えようとしていた。

「マージンの言う覚悟とやらもいつかは必要になるだろうな」

しばし落ちた静寂の後、グランスがぼつりと言った。

「ここはもう、警察に手が隅々まで行き届いているリアルな日本じゃない。自分たちの命を守るためにつてのはあり得る話だ。

なら、考えたくないからと言って逃げる事は出来ない。逃げ続けている、いざという時に自分も仲間も守れなかったら、俺は絶対後悔するだろうな」

それだけ言うと、顔を上げ、自らの頬を張り、

「よし。じゃあ、これからどうするか。改めて考えよう」

重くなつた場の空気を吹き飛ばそうと、グランスは努めて明るい声で仲間達に呼びかけた。

さて、時間はそれから少し前に遡る。

「ク……ソツ……！」

路地裏に、一人、左手を抱え込むようにして、激痛に耐えながら歩を進める男の姿があった。

深緑の髪、ぼろぼろのスーツ。

ダイナマイツサンダーのシャイツである。

レック達をアジトに連れ帰ろうとしていた途中にマージンの襲撃を受け、構えていた銃を弾き飛ばされた直後には、勝つか負けるかではなく生存本能に従って、その場から逃走していた。

「何なんだ！あいつは！！！」

憎悪を込めて口走るシャイツの左手は、酷い状態だった。構えていた銃を弾き飛ばされた際に、もろとも左手の人差し指と中指が千切れ飛んでいたのだ。他の指も残ってはいるが、親指などは異様な形に折れていて、使い物にならなかった。

「クソ……ッ……タレツ！」

シャイツにとって、負傷が左手だけで済んだ事は幸いだったとも言える。他は全くの無傷だったので、アジトまで帰るのは問題無いだろう。

しかし、それと、左手のダメージや激痛は別だった。

『魔王降臨』以前は、ダメージを受けたり、怪我をしたりしても、大した痛みはなかったし、余程の大ダメージ・大怪我でもなければ、一日二日も休めばまず完治した。指が千切れるくらいの大怪我でも、翌日には動かないまでも指が復元されていた。

しかし、今では身体の欠損が自然に治る事はない。

ダイナマイツサンダーの一員として、2番3番街区を支配するようになった前後で、シャイツ自身、多くのプレイヤーに暴行を加え

てきた。その際に見ているのだ。失った耳や指はいつまで経っても失ったままだということ。

おまけに、左手を支配するこの激痛。

今までではあり得ないほどの、まさしく現実そのものと言える痛み。それが治まることなくシャイツを苛み続ける。

「あいつら……絶対、許さ……ねえ！」

額に脂汗を浮かべながら、何とかアジトまで辿り着いたシャイツは、自らの様子にビビった手下達を押しつけながら、3階の幹部室に入った。

「あ？シャイツ、どうしたよ？」

部屋に入ってきたシャイツにそう声をかけたのは、茶髪の男だった。大柄とは言えないが筋肉質の身体をソファに埋めたまま、糸目なりに目を大きく見開いている。

「侵入者……だ！」

「侵入者？その怪我はそいつらにやられたって事か？」

そう声をかけてきたのは部屋にいたもう一人。

銀髪のオールバックがトレードマークだと言って憚らない大柄な男だった。

「そう……だ。クソッ……痛みが……引かねえ……！」

シャイツは空いていたソファに倒れ込むように身体を埋め、そのまま左手を抱え込むように身体を丸めた。

その様子を見ていた銀髪の男が、

「……とりあえず、そいつらの特徴教えるや。見つけ出して潰してやるよ」

怒気をはらんだ声で、シャイツに命じる。

「グレン、その前に治療だろう？」

茶髪の男は銀髪の男にそう言うと、部屋の外に声をかけ、包帯を取ってこさせた。消毒薬は、VRMMOであるジ・アナザーには存在しない。

「ちつ。薬草もポーションもないのは面倒だな」

シャイツの左手に、包帯を持ってきた手下　当然男　が包帯を巻き付けているのを見て、茶髪の男がぼやく。

『魔王降臨』の後の混乱や、彼らダイナマイツサンダーが2番3番街区の支配権を確立するまでの争乱で、かなりの消耗品が使い果たされて無くなってしまっていた。怪我やダメージの治癒速度を上げる薬草や、飲むだけでそれ以上の効果が得られるポーションなどは、真つ先に無くなっていった。

時々、大陸会議が支配している4〜6番街区へ強奪に行くものの、戦力面では圧倒的優位に立たれている軍との衝突を避けながらでは、大した収獲は望めない。

商人プレイヤーから仕入れようにも、ダイナマイツサンダーのこれまでの行いが災いして、商人プレイヤー達はダイナマイツサンダーの支配街区に全く近寄ろうともしなかった。

「クソつたれな侵入者をどうにかする前に、ポーションを奪ってくるか」

両手をパンと打ち鳴らしながら、グレンがそう言って立ち上がる、と、

「グレン、行くなら……いい抜け道がある……ぞ」

左手を包帯の固まりに変えたシャイツが、血まみれの右手を懐に入れ、一枚の紙を取り出した。

「なんだ、こりゃ？」

受け取った茶髪の男が首を捻ると、

「地下通路の地図……だ。侵入……者が持っていた」

「グスタフ、よこせ」

シャイツの言葉を聞いたグレンに命じられ、グスタフは渋々地図を渡した。

「なるほど……地下からなら、軍の連中に見つからずにあっちに出

入りできるな。グスタフ、すぐに人数を集める。あつちに侵入するぞ。薬だけじゃねえ。食いもんも女も、がつつり奪ってくるぞ！」

そう言ったグレンの顔も、「おう」と返事を返したグスタフの顔も、欲望の充実への期待に歪みきっていた。シャイツだけは、痛みあまり失神したのか、いつの間にか目を閉じていた。

地下通路防衛戦？

「待った待った！俺達はダイナマイツサンダーじゃねえ！！」

クックキー中央大橋の4番街区側の警備に当たっていた兵士達に剣を突きつけられ、そう叫んでいるのはクライスト。その両手は何も持たないまま上に上げられ、抵抗するつもりがないことを表していた。

蒼い月の他の仲間達も似たようなもので、後ろの方にいた女性陣太刀こそ剣を突きつけられたりしていないものの、両手を上げてみんなで降参のポーズである。

3番街区の裏道を駆け抜け、クックキー中央大橋の3番街区側に屯していたダイナマイツサンダーの下っ端達をクライストの銃で脅しつけて沈黙させ（まだ、プレイヤー相手の暴力には抵抗があつた）、がれきのバリケードを乗り越えて、レック達が橋を渡りきった頃には、既に時間は夕方。一帯は夕焼けの赤い光に包まれていた。

「そうは言われても、はいそうですかと信じるわけにはいかないな。連中の手下がちよくちよく忍び込んでるからな」

隊長と覚しき兵士が、顎を擦りながらそう言った。その視線は、レック達の顔の上を順番に通過していく。

「とりあえず、身分を証明できる物は何かあるか？」

そう問われて、クライストがゆっくりと冒険者カードを取り出した。

隊長はそれを受け取り、まじまじと書かれている内容を確認する。

「ふむ？エラクリット？」

どうやらエラクリットの町を知らないらしく、首をかしげる。

「そんな町、あつたか？」

部下の兵士達に訊いても、誰も知らなかったのか、全員が首を振

った。

「となると、偽物……というより、俺達が知らないだけか。確認する必要があるな」

隊長はそう言うと、手が空いていた部下を一人呼びつけ、冒険者ギルドまで確認に向かわせた。

「あまりノンビリしておる時間は無いんだがな」

剣を突きつけられたままフランスがそう言うと、

「すまないな。一応、3番街区から来たプレイヤーはしっかり調べる事になってるんだ。……ああ、もう手は下ろしてくれて構わないぞ」

隊長に言われ、やっとレック達は両手を下ろした。やれやれ、である。

隊長はその様子を見て苦笑しながら、

「まあ、ダイナマイツサンダーの仲間だとは思ってないさ。連中にそんなでっかい武器を振り回せるようなヤツはほとんどいないし。なにより、女の子が仲間ってのがあり得ない」

そう言うと、部下達に剣を引かせた。

警戒していた部下の兵士達も、隊長の言葉に言われてみればと納得したのか、すんなりと剣を引く。

「出来れば、今すぐ軍のキングダム支部に行きたいんだが……」

「さすがにそれは待ってくれ。ここで少し話を聞かせて貰ってからじゃないと、許可は出せないな」

フランスにそう答えた隊長は、何人かを残して部下達に見張りに戻るように指示を出す。

「さて、どうして冒険者があっちから来たのか、説明して貰おうか」
左手の親指で3番街区を指し示し、隊長はそう言った。

「それは構わないが……出来れば、軍の支部に移動しながらにして貰えないか？多分、あまり時間がないんだ」

「時間がない？妙な事を言うな。……まあ、その理由に納得できたら、そうしても構わないぞ」

隊長のその言葉に、グランスは隣に来ていたディアナと視線を交わして、

「分かった。それでいい」

そう言つて、地下通路の事、地下通路の地図をダイナマイツサンダーのメンバーに奪われた事、ひよつとしたらすぐにでも地下通路を通つて連中が略奪に来るかも知れない事をかいつまんで説明した。最初はその説明を興味深そうに聞いていた隊長だったが、説明が終わる頃にはその顔には厳しい表情が浮かんでいた。

「おまえ達はここで見張りを続けてくれ」

そう、部下の兵士達に告げると、隊長はレック達をつれて、橋の袂を離れた。

途中、名前を知らないままなのは不便だったので、軽く自己紹介などしながら、早足で軍のキングダム支部へと向かう。

「つまり、他にも出入り口がある可能性もあるという事か」

主に隊長　フレッドと名乗った。何故かリアルネームを名乗るプレイヤーは相変わらずいない　からの質問に答える形で、説明の補足を入れていると、ますますフレッドの顔は険しくなっていた。「全部を探索した訳じゃないからな。各街区に最低1つずつは出入り口があると思つてもいいはずだ」

そう言つた後、実際にはもっとあるかも知れないなど、グランスは付け加えた。

「となると、既知の出入り口以外も探し出さないと行けないか。出来れば、地下通路自体を制圧しておきたいところだが……」

その辺の感覚は、フレッドもレック達もそんなに違わないらしいが、心配事もあるようだ。

「ただ、上がどれだけすんなり動いてくれるかだな。時間帯もよろしくない」

そう、レック達に聞かせるためではなく、呟く。

実際、既に日も落ちたこの時間帯では、当直を除いた支部の幹部

達はそろそろ各自の寮やら自宅やらに帰り支度を始めている頃だ。最近、他の街区からの侵入も低調かつマンネリで、幹部達の気がかなり緩んでいる事を、フレッドは知っていた。

「で、案の定か」

完全に日が落ちてから5番街区の片隅にある軍の支部に着いたフレッドは、詰めていた兵士の一人に誰か幹部、将官クラスでなくとも佐官クラスが残っていないかと尋ね、答えを聞いてそう言わざるを得なかった。

「少佐以上の人は全員帰っちゃいましたよ」

では、話にならない。

そもそも、キングダムには軍の将官クラスの間人は二人しかない。彼らは戦闘系ギルドの幹部として、割と真面目にやっているものの、訓練やら再編やら戦略やらで忙しく、その分、休息をしつかり取るために昼勤が基本になっている。

佐官クラスは、4桁に上る兵士がいることもあって、少しは数がいるが、とりあえずのまとめ役として任じられたプレイヤーが大半で、真面目さにはいまいち欠けている。将官以上の上級幹部達の頭痛の種であった。

兎にも角にも、フレッドの後ろでは蒼い月の面々が、渋い顔をしてやりとりを眺めている。

それをちらりと確認し、フレッドは自分の青髪をかきむしると、「なら、そいつらはもうどうでもいい！今すぐ動ける兵をかき集めてくれ。ちよつとやばい事態が起きそうなんだ！」

明らかに苛立っているフレッドの様子に、応対していた兵士もこれは変だと思っただのか、

「何か起きるんですか？」

「地下通路の噂くらいは知ってるだろう？ 本当にあつたんだよ！ それが！」

「『マジで！？』」「『』」

それを聞いて、何事かと集まってきた兵士達が驚きの声を上げる。

「いや、でも、何でそれだけで兵がいるんです？」

「ダイナマイツサンダーの連中が、そこを通つて5番街区まで来かねないんだ」

さすがにこのフレッドの言葉には、何人かの兵士が反応した。

「つてことは、地下通路の出口も監視して、出てきた連中を捕まえないと行けないって事か？」

「まあ、いきなり5番街区に出入りされるのは困るな」

などと、口々に話しながらも、とりあえずフレッドの話が終わるまでは動くつもりはないらしい。

ちなみに、フレッドの相手をしている兵士は、お世辞にも頭の回転が早いとは言えないようで、後ろの雑談でやっと危機感を少しだけ 持ったかと思われたが、

「そんな情報をどこから？ というか、別に急がなくてもいいんじゃないですか？」

と、危機感皆無の質問をしてきた。

これにはさすがにフレッドもキレそうになったのか、後ろから見ているレック達は、彼が握り拳をブルブルと震わせ、何かに耐えているのがよく見えた。

「情報源は今はどうでもいい。だが、連中が早ければ今すぐにも地下通路からやってきてもおかしくないんだ！ さつさと、動ける連中を集める！！！」

とりあえず、拳骨に物を言わせる前に、怒鳴り始めただけマシだったのかも知れない。

さすがにこれに驚いたのか、フレッドの相手をしていた兵士も周りの兵士も、慌てて自分の武器を取りに行ったり、支部で休んでい

た兵士達を呼びにいたり、やっと動き始めた。夕食の時間が近かった事もあり、時々不満の声も聞こえてきたが、なんだかんだで兵士達が集まってくる。

その兵士達の一人が、ふと思い出したように、

「一応、牢獄の方にも連絡を入れておきますか？」

「ああ。そうだな。場合によると相当数引き取って貰う事になるかもしれないし、連絡しておいてくれ」

フレッドはそう答えると、集まってきた40人ほどの兵士を見回した。

「ちよつと少ないか？」

そつ首を捻る。

「これだけいたら十分じゃないのか？」

「いや。ダイナマイツサンダーの構成人数は500人は下らないはずだ。おまえ達を頭数に入れても、こつちの人数が1/10ではちよつときついが……」

クライストに答えながら、フレッドは頭の中で戦力計算を行う。

(実際に全員で来る事はないだろうから、そこまで差が開く事はないだろうが、こちらの兵はさほど鍛えられていないし、被害を出さないためにも数を揃えておきたいところだが……さてよ?)

そこまで考えたところで、ある事に気づいて、クライストに尋ねる。

「そう言えば、5番街区にあるという出入り口は広いのか？」

「いや、すつごい狭いぜ。立ったまま通る事はできねえな」

「なるほど……それなら、先に出口を抑える事さえ出来れば、出てこれないようにする事は簡単そうだな」

死人が出るような事態にならずに、脅威を押さえ込めそうだと安心したフレッドは、

「よし、問題もなさそうだし、このまま行くぞ！」

と、兵士達を引き連れて、支部を出発した。無論、案内としてレック達も同行した。

その頃、ダイナマイツサンダーのアジト。

「マジか？クソツ！」

何とか目が覚めたところに、クックキー中央大橋に貼り付けていた手下達から、7名のプレイヤーがバリケードを強行突破したと報告を受けたシャイツがテーブルに右の拳を叩き付けていた。

報告をした手下やその場に立ち会っていた他の手下達は、自分たちにとばつちりが来ないかと戦々恐々としている。

無論、シャイツが手下に八つ当たりをして鬱憤を晴らす事を考えなかったわけではない。しかし、自分が今手負いであり、グレンもグスタフもここにはいない事を考えると、手下共を怯えさせることは得策とは言えなかった。

(……いや、待てよ？)

名案を一つ思いつき、シャイツは手下達が思わず引いてしまうような笑みを浮かべた。

「おい、そいつを拘束しろ」

その場にいた手下共に命じ、橋の見張りをしていた手下の動きを封じさせる。

自分たちが八つ当たりの被害を被らなくて済むのならば、その場に立ち会っていただけの手下共は、実に素早く橋の見張りをしていた手下を拘束してしまった。

「なっ！？ちよ！待ってくれ！待ってくれ！！」

見張り役だった手下が必死に叫ぶが、その叫びはシャイツに嗜虐心を刺激する物でしかない。

拘束している側の手下達は、拘束されている見張りの叫び声を何とか無視しようとし、シャイツの顔に浮かんでいるおぞましいと言えない笑みからも目を逸らしていた。……それでも、とばつちりを恐れ、拘束する力は一切緩めない。

「あいつらはなあ？この俺に怪我させた連中なんだよあ？それを取

り逃がしたただあ？そんなことが許されると思つてんのか！？」
そう言いながら、右手に持ったナイフで、ひたひたと見張りの頬を張る。

この後どうなるのか、実によく知っている見張りの顔からは一切の血の気が失せ、既に自力で立つ事も出来ていないようだ。ただ、拘束されているから床にへたり込んでいない、それだけだった。

「だって、あいつら銃を……銃を持ってたんだよ！俺は悪くない……悪くないんだ！！」

ナイフの刃に当たつて頬が裂けるのにも構わず、必死に首を振つて自分の責任を否定する見張りだったが、元々そんな言い分を聞くつもりはシャイツには全くない。これっぽっちもない。

ただ、シャイツがやりたいのは、ストレス解消だった。

「銃、銃ねえ……？俺よりも、そんな物の方が偉いつてのか？あ？どうなんだよ？」

もはや、ナイフの腹ではなく、刃の部分で頬を突かれていたが、見張りはそんな事に気づく余裕も失いつつあった。

「いやっ……！そんな訳じゃない！あんたより偉いもんなんて、なにに決まつてるじゃないかっつ！！」

必死にシャイツの機嫌を取ろうとする見張りの頬からは、既に止めどなく血が流れ始めており、拘束している手下達の手を、腕を赤く染め始めていた。

「じゃあ、何でそいつらをすんなり通しちまつたんだ？あ！？」

シャイツはそう叫ぶと、見張りの膝にナイフを突き立てた。

「っつっ！！！！」

一瞬声にならない悲鳴を上げ、しかし、拘束されてるが故に怪我をかばう事も出来ない。

シャイツはそんな見張りの様ににやけながらも、うっかり他の手下を傷つけないように注意する事は忘れない。犠牲はこいつ一人だと確信させる事で、他の手下が恐怖のあまり反逆しないようにしなくてはならないのだ。

その分、この見張りにはしつかり楽しませて貰わねばならないが。

30分にも及ぶ拷問の末に絶命した見張りの死体の処理を、見張りを拘束していた手下共に任せると、シャイツは比較的すつきりした頭で、状況の把握を始めた。

（まず、あの連中があつちの街区に逃げやがったことは確実だな。となると、俺達が地下通路に出入りしていた事、地図を手に入れた事も軍の連中にばれるのも時間の問題か。

軍の幹部連中は概ね愚鈍なクス共だ。すぐに軍が動く事はねえと思うが、5番街区の出口が封鎖されてる可能性はある、か。

そうでなくても、警備が厳しくなる可能性は……ねえな。上が動かねえと、軍はそこまで大きく動けねえ。なら、気をつけねえといけねえ状況は、出入り口付近での戦闘、か。

グレンとグスタフに連絡しておきたいところだが、地図を持ってかれたから無理か。……グレンとグスタフは問題ねえが、手下共がかなりやられることは覚悟しておかねえといけねえな。

逆に軍の連中がこつちにまで攻めてくる可能性は……ねえな。その気なら、とつくに橋から攻め込んできてる。が、地下通路はもう使えねえ、か。

……クソツ。連中さえ逃がしてなければ、当分5番街区でやりたい放題出来たのによ！見張りに立っていた他のカス共も、後で全部始末するしかねえな。

つか、あの連中なんだったんだ？いや、考えるまでもねえな。あの装備、冒険者か。この怪我のお礼をしねえといけねえが、さっさと捕まえねえと、この街から出て行っちゃうか？

いや、その前にあいつら、何しにここに来たんだ？そりゃ、当然何かの目的があつたはずだな。それは南東街区じゃ達成できなかつたからあんなところを？なら、その目的次第ではもう一度ここに来るか？)

そこまで考えると、シャイツは邪な笑みを浮かべた。

（もう一度来たら、今度こそ逃がさねえ。男共は拷問の末、川に放り込んで水竜の餌だ。女共は気が狂うまでしつかり愉しませてもらうか）

そう考えると、笑みが止まらない。そうできたときのことを考えると、左手の痛みも気にならない。

早速、シャイツはあの連中　レック達、蒼い月が来た時に備えた計画を練り始めたのだった。

「……どうした？」

「いえ、何か悪寒が……大丈夫、です」

一瞬ブルブルつと身体を震わせたミネアは、それに気づいたグランスにそう答えた。

「そうか？ならいいが」

そう答えると、グランスは再び視線を地下通路への出入り口がある路地へと向けた。

しばらく前にここに着いた後、周辺の様子を確認して間に合った事を確信したフレッドは、さらに周辺の路地の構造を確認し、兵士達と顔をつきあわせて作戦を練っていた。その結果、出入り口すぐのところまで待ち伏せるより、少し引いたところで待ち伏せる事になった。

出入り口すぐで待ち伏せると、それを知った相手がさっさと撤退しかねない。しかし、出入り口から離れたところで待ち伏せれば、何人か、何十人か出てきたところを襲う事が出来、かつ、相手は撤退しようとしても地下通路への入り口が狭くて逃げられない、という状況を作り上げる事が出来る。

相手にしないといけないダイナマイツサンダーの人数が多くなりそうな問題はあったが、何せ狭い路地だ。囲まれる心配がない。お

まけに、中級冒険者である蒼い月のメンバーの力も借りられるとあって、この機会に相手の勢力を削ぐためにも、思い切った作戦と相成った。

この作戦唯一の欠点があるとすれば……

「いつ来るんだろね？」

というリリーの言葉に集約される。

どちらかというとな念のためにこうしているだけで、実はダイナマイツサンダーが絶対来るといふ保証はない。来たとしても、明日とか明後日かも知れない。

それでも、無視できる危険ではなかったし、「あいつら、堪え性がないから来るだろうな」というフレッドをはじめとする兵士達の意見もあって、フレッド達もレック達も、今、こうしてここにいる。

「とりあえず、今夜は徹夜で見張るとして、明日からどうするかも考えないといけないな」

「当番制にして見張れば済む話じゃないんですか？」

「いや、他にも出入り口があるらしい。連中よりも先にそれを押さえないといけないからな」

さすがに大声では話せないで、ひそひそと話し合っているフレッドと兵士達。

時々、兵士の一人が路地の曲がり角から顔だけ出して、地下通路への出入り口の様子を窺っている。だが、何も起きる気配がないので、軍の兵士達もレック達も些か気分がたるんできている。

「そう言えば、あっちからこっちに抜けるまで、どのくらい時間がかかると思う？」

グランズが気がつくのと、隣にやってきていたフレッドがそんな事を訊いてきた。先ほどから、部下（？）の兵士達と話し合っていたようだったが、いつの間にかそっちの話は終わっていたらしい。

「俺達がこっちからあっちに抜けるのにかかった時間が6時間弱だった。連中は順番に探索したわけでもないだろうから、もう少し時

間がかかるだろうな」

「君たちが地図を奪われてから、そろそろ6時間か……。もう少し時間がかかるかも知れないが、本格的に警戒しておいた方が良さそうだな」

グランズの返事を聞いたフレッドは、そう呟くと、兵士達に発破をかけ始めた。

それから30分ほど経っただろうか。

「何か来たみたいだぞ」

出入り口の様子を見に顔を覗かせた兵士が手を振って合図するのを見て、グランズが仲間達にそう囁いた。

レック達が声も出さずにそちらを見ると、確かに戻ってきた兵士がフレッドに何かを伝えているところだった。

すぐにフレッドが身振り手振りで周囲に指示を出し、動きがあつた事を察知していた周りの兵士達もすぐに指示に従って、武器を構え、配置につく。

無駄にこちらに被害を出す必要もないという事で、前衛の兵士達の武器は槍と剣が半々だった。間合いを詰められる前に槍で相手にダメージを与え無力化を狙い、槍を抜けてきた相手は剣を持った兵士が対応する形である。後衛には弓も控え、こちらとぶつかる前の相手に射かける事になっていた。

その彼らには、蒼い月のメンバーと違って、明らかに殺す事に躊躇はない。

ここに来るまでにフレッドとグランズが話し合っていた事の1つだが、蒼い月の仲間達はプレイヤーを 人を殺した事がない。

一方の軍では、相手を殺す事を躊躇っていると仲間や自分が死んでしまう。あるいは、助けるべき一般プレイヤーを助けられない事もある。実際、キングダム4〜6番街区制圧時にはかなりの敵を殺してもいた。

この違いは無視できる物ではなく、兵士達と蒼い月が肩を並べて戦う事は難しいだろうと、フレッドとグランスの意見は一致していた。いくら中級冒険者であるレック達が強くても、人が死んでいく現場を見る事で心が乱れれば、却って足手まといにしかならない。かといって、何もしないのは流石に肩身も狭く、蒼い月は後ろで待機し、怪我の治療に当たる事になった。

蒼い月が戦闘に参加しない（出来ない）と聞いて、冷やかな視線を向けていた兵士達も、多少の怪我なら治癒魔法で治してもらえると聞くと、一気に好意的になったのは余談である。

しばらくすると、曲がり角の向こうからざわめきが聞こえてくるようになった。「女だ女」とか、「旨いもん食いたいぜ」とか、欲望丸出しである。

予定では、最大限相手が出てくるまで待つために、相手が角までやってきてこちらを視認するまで待つ。その後、混乱を突いて入り口周辺まで一気に押し戻し、攻撃開始。殲滅あるいは無力化するという作戦である。

やがて、ダイナマイツサンダーの一人が角までやってきた。躊躇無くその肩と膝を貫く槍。

「あ？」

一瞬何が起きたのか理解し損ねたそのプレイヤーは、自分の肩と膝から生えている槍を見て、それからやっと痛みを感じ、

「ぎゃあああああ！！！」

その叫び声が合図となった。

兵士達が一気に前進を始め、何が起きたのかと顔を出してきたダイナマイツサンダーのメンバー達を次々と槍で突き倒していく。この時点ではまだ余裕があるので腕や足を狙っていたが、時折狙いが逸れて運悪く身体に槍を突き立てられるメンバーもいる。

「何だ！？何が起きてる！？」

「敵だ！！軍がいやがった！！！」

「逃げる！！」

「おまえ、そこをどけ！！邪魔だ！！」

「てめえら逃げんな！」

左への曲がり角の向こうからは、そんな混乱の声が聞こえてくる。兵士達は速やかに前進を進める。その足下に転がっていたダイナマイツサンダーのメンバー達は生死に関わらず何人かの兵士達が回収し、邪魔にならないところまで運んで縄で片っ端から縛り上げていった。レック達も顔を顰めながら、その作業を手伝った。

やがて、弓を持った兵士達が、行き止まりの奥にある地下通路の出入口周辺をその射程に収め、次々を矢を放ち始める。

「弓だ！！」

「痛え！痛えよ！！」

「ごぶっ……！！」

「くそつたれ！！てめえら、逃げんな！！」

路地裏の混乱は一層酷くなり、痛みに呻く声と怨嗟の声でその場が満たされた。

結局、戦闘とも言えない どちらかというと言虫駆除だったとはフレッドの言 戦闘が終わるまでに、それほどの時間はかからなかった。

奇襲を受けたダイナマイツサンダーは混乱から立ち直る事もなく、狭い地下通路への出入り口のために逃げる事も出来ないままに、組織だった軍の攻撃の前になすすべ無く無力化された。そして、地上に出てきていた37人は、12名の死者を出して全員が拘束された。その中に、ダイナマイツサンダーのリーダー格の一人であるグスタフが混じっていたのは大きな戦果だとフレッドはご機嫌だった。

ちなみに、地下通路にはまだ多くのダイナマイツサンダーのメンバーがいたようだったが、地上で起きた戦闘を警戒した……というよりビビって逃げ出してしまっていた。

「クソツ！何で軍がもう待ち伏せてやがったんだ！」

5番街の出入り口で軍の待ち伏せにあい、急遽撤退する羽目になったグレンは、手下共と一緒に地下通路にある部屋の1つに潜り込んでいた。

今は、あまりの失態に大荒れに荒れていて、迂闊に近寄った手下が何人か、思いっきりぶん殴られて、壁の近くで気絶していた。無論、その様子を見ていた手下達はすっかり距離を取って引いている。

いつもなら、グスタフがシャイツが宥めるのだが、グスタフは軍に捕まってしまってここにはいなかったし、シャイツはそもそも怪我のせいでアジトから出てきていない。

そういうわけで、荒れているグレンを宥める者も、グレンの質問に答えようとする者もないのであった。

「こうなったら、全面戦争だ！今すぐとって返して、橋から攻め込んでやる！！」

流石に、あの狭い出入り口から呑気に出入りしていると、順番に捕まるだけだというのは頭に血が上っていたグレンでも想像がつく。実際、出入り口が狭かったせいで先に地上に出ていたメンバーはあっさり捕まってしまったのだった。

怒鳴って立ち上がったグレンは、床の上で気絶していた手下の頭を思いっきり蹴り飛ばし、

「グスタフを取り戻すぞ！！」

怯える手下共は、誰もそれを止める事は出来なかった。

再潜入と黒い影

5番街区でちよつとした掃討戦があつた翌日。

朝早くにキングダムからほど近い牢獄の町ジェイル（そのまんまの名称である）からやってきた兵士達に、昨夜の戦闘で拘束したダイナマイツサンダーのメンバーを引き渡したフレッドは、キングダム支部をまとめるホエル中将に呼び出されていた。

「昨夜は大変だつたみたいだね」

中将の執務室に置かれた机に肘を突いたホエールの黒い瞳に見つめられ、

「はっ！久しぶりの大捕物でありました！」

フレッドは背筋をびしつと伸ばす。

「グスタフも仕留めたとか。これでダイナマイツサンダーの勢力がまた少し弱くなるね」

報告書をひらりひらりと捲りながら、ホエルが言う。

報告書が既にホエールの手元に渡っている時点で、フレッドがここに来る理由など無く、正直、何故自分が呼ばれたのか、フレッドには心当たりがなかった。

「しかし、地下通路も問題だが、佐官以上の人間が誰もいなかったというのも問題だね」

中肉中背黒髪黒目。どこから見ても平均的な日本人そのもののホエル中将は、こう見えても銀竜騎団所属の切れ者だった。それだけに、部下達の怠慢にはそれが問題を引き起こした時には特に厳しく当たる。

今も、夜になって佐官が誰もいなかったという状況に、明らかに腹を立てているのが、フレッドには容易に見て取れた。もつとも、自分には関係ない事だと分かっていたので、特に慌てる事も怯える事もない。

「まあ、そちらの方は後でしっかりと対処しようか。君への用件は別にあるんだよ」

そう言うと、報告書をぱたりと閉じて、ホエールはフレッドの目を見つめた。

「はっ！」

改めて姿勢を直す……と言っても、これ以上正しようがないのだが。

「さて、君への用件は、しばらく別の任務を頼みたいという事なんだ。例の地下通路とやら、出入り口は5番街区だけじゃないと思ってるんだろっ？」

「はっ！他にもあつて然るべきと」

「その考えには僕も賛成だ。君の新しい任務というのもそれに関係している。というか、それそのものだ」

この時点で、ホエールが何を言おうとしているか、フレッドには大体分かったが、口を挟む必要もない。

「地下通路の出入り口の探索を君にやって欲しい。やり方は任せる。必要な資金、部下はある程度までは融通しよう。質問は？」

やり方を任せると言われ、効率のいい出入り口の探し方を考えたフレッドの脳裏に、蒼い月のメンバーの顔が思い浮かんだ。

「外部の人間を使う事は可能でしょうか？」

「ん？ああ、なるほどね。いいよ、許可しよう」

フレッドの質問の意図を正確に理解し、ホエールはそう答えた。

「はっ！では、速やかに準備に取りかかります」

「ああ、よろしく頼むよ」

ホエールがそう言うと、フレッドはびしっと敬礼をして部屋を出て行った。

「さて、それとは別にダイナマイツサンダーへの対処も必要だよね」
フレッドを見送った後、ホエールは次に起きそうな問題へと思考を切り替えた。

昨夜の戦果は報告書を読んで知っている。そこには、フレッドにも言ったように、グスタフの殺害という思いがけない成果が書かれていた。これによって、ダイナマイツサンダーの勢力は確実に弱体化するはずだった。しかし、ホエールは別の事も考えていた。

ダイナマイツサンダー首領のグレンは、気に入った人間をかなり大事にする。そして、グスタフとシャイツという、ダイナマイツサンダーのリーダー格の残り二人は、グレンのお気に入りのはずだった。

ということは、グスタフが殺害された　とは知らないのです、捕縛されたと思っっているかも知れないグレンが、ダイナマイツサンダーを率いて攻めてくる可能性があった。

「問題は地下から来るかどうかだけど……」

正直、その可能性は低いと踏んでいた。あちらにはそれなりに頭が回るシャイツがいる。昨日と同じ失敗を繰り返すとは考えにくかった。だからこそ、さっきのフレッドの提案を飲んだのだが……

「畏くらはいは仕掛けられているかも知れないよね」

だが、それならそれで、地下と地上で敵戦力の分散が期待できる。注意を促す事はあっても、止める理由はどこにもなかった。もっとも、冒険者を雇うのなら注意を促す必要もないだろうが。

「となると、やはり地上……橋から攻めてくるかな」

それも、グレンの気の短さから考えて、今日と見た。

「佐官達の処分は後回しにして、兵力を集めて移動させないとね」
そう決断すると、部屋の外に待機していた兵士を呼んで、命令を伝える。

軍が3番街区を攻めないのは、攻めるのはリスクが大きいかからだ。相手の街区に畏が仕掛けられていたり、待ち伏せをされれば、それだけ簡単に兵に被害が及ぶ。しかし、守るだけならその心配はない。むしろ、装備や兵士の練度を考えれば、攻めてきたチンピラ達相手

なら圧倒的に有利だとすら言える。だから、大した被害もなくダイナマイツサンダーを追い返すなり、壊滅させるなり出来るはず。

このとき、ホエールはそう考えていた。

「と言うわけで、4〜6番街区の地下通路を探索し、地上への出入り口を全て見つけ出す作業の手伝いをお願いしたい。勿論、報酬も出す」

宿の食堂で朝食も済ませ、ノンビリしながら次の予定を話し合おうとしていたレック達のところによつてきたフレッドは、事情を簡単に説明してから、そう要請してきた。

レック達が断りづらいことを分かって言ったのかは分からないが、地下通路の件では少々後ろめたいレック達としては、勿論断るという選択肢などあるはずもない。フレッドが提示してきた報酬はそれなりの額だったのが、せめてもの救いだらうか。

「で、どういう手順で進めるんだ？」

5番街区の地下通路出入り口 既に軍の見張りも立てられ、ついでに出入りしやすいように地面を掘つたりして少しだけ拡張されていた の前に集まっていたフレッドとその部下数名に、クライストがそう訊いた。

「ダンジョンのマップピングと同じ要領だな。まずは君たちに貰ったマップの空きを埋める形で、最上層から徹底的に調べていきたい。一応、ダイナマイツサンダーの襲撃も警戒しなくてはならないし、全員で行動する予定だ」

「なるほど。で、戦闘はどうするのか聞かせて貰えないか？」

と、グランス。

「ああ、そうだな。一応、主戦力としては君たちに頼ろうと思ってる。狭い空間で大人数で動くのは無謀だと思って、こちらはこれだけしか連れてきていないしな」

そう、フレッドは後ろに視線をやりながら、

「なので、こちらは何かあった時の保険程度に考えていてくれていい。……他に質問は？」

「優先的に探索したいエリアはないんか？」

「そうだな、やはりダイナマイツサンダーの支配街区に近い4番街区からやっていって貰いたい」

マージンの質問に答え、再び他に質問はないかとフレッドが蒼い月の面々を見回したが、今度は特に質問も出てこなかった。

「では、入ろうか」

そのフレッドの合図で、蒼い月と軍の合同調査隊は地下通路へと潜っていったのだった。

昼前。

2番街区のダイナマイツサンダーのアジトでは、グレンの号令の元、所属するプレイヤー達がかり集められていた。その数、300人超。

「いいか、てめえら！いい加減大陸会議だの軍だのといった連中になめられるんじゃないやねえ！食い物も女も全部あいつらに持ってかれ、仲間まで次々と捕まえてくれてやがる連中を叩きのめし、俺達の物を奪い返すぞ！！」

思い思いの得物を手に集まった構成員達を前に、アジトの3階から檄を飛ばすグレン。

とは言え、集まった構成員の中には、4番街区に攻め込む事あまり乗り気でない者も多かった。

何しろ、軍は容赦がない。元々、ダイナマイツサンダーの方がPKに手を染めていたので、軍としても手加減する余裕がなく、つまりは自業自得なのだが、要するに軍と戦闘になれば、自分たちが死んでしまいかも知れないという恐怖は、無視できるものではな

かった。

無論、そんな事を周りに悟られたら、軍に殺される前に仲間には殺されかねないので、形だけでも周りにあわせて氣勢を上げる。だが、そんな事をしてるうちに、雰囲気は飲まれ、何となくこの数なら大丈夫、勝てると思ひ込み始める構成員も多かった。

「これだけいけば、グスタフも取り戻せるな」

アジトのテラスから、目の前に集まって氣勢を上げる手下共を見下ろし、自信満々に頷くグレン。

早朝に地下通路からアジトまで戻ってきた後、ダイナマイツサンダー全員にアジトまで集まるように命令し、仮眠を取っていた。そして先ほど、シャイツに手下共が集まったと起こされたのだった。

そのシャイツはと言うと、集まった手下から2〜30人ほど見繕い、地下通路を封鎖するとの事。後ろから攻められては面白くないというシャイツの説得にグレンも納得し、そちらはシャイツに任せ、いつもの事なので気にする事もない。

「じゃ、俺もそろそろ行くぜ。ただ、引き時は間違うなよ？」

そう言っただけで部屋を出て行くこととしているシャイツを、

「ハッ！軍のクソ共に負けるかよ！」

そんな言葉で見送ったグレンは、部屋の隅に立てかけてあった長い鉄パイプではなく、鉄の棍を手にとった。長さ2m、重量20kgにもなるこれは、大抵の相手なら武器や防具もろとも吹っ飛ばせるだけの威力がある。いろいろ殴りすぎて多少歪んでいるのは、ご愛敬といったところだ。

部屋の中なので棍を振り回すのは少しに留め、手応えを確かめると、グレンもアジトを出た。アジトの前に集まっていた手下共に改めて活を入れると、先頭に立ち、クックキー中央大橋を目指す。

既に軍が待ち構えている可能性もシャイツに指摘されていたが、軍を叩きのめし、グスタフを奪い返すことしか考えていないグレンには、むしろ好都合というものだった。

だからだろうか。空を横切った黒い影には結局気づく事はなかった。気づいていたとしても、その辺中にいるカラスだと思っただけかも知れないが。

ダイナマイツサンダーがクックキー中央大橋へと向かっている頃、既にその橋の4番街区側の袂には軍の部隊が展開を終えようとしていた。その規模、実に1000人。キングダムに配備されている兵力の半分以上が投入されている。

これだけの兵力が待ち構えていると知っていれば、ダイナマイツサンダーの下っ端達は最初から戦意を喪失し逃げ出していたかも知れない。しかし、そんな事は露ほども知らないのでは、逃げ出しようもない。

「予定通り、全軍配置につきました」

部下からの報告が聞こえた証拠に、ホエールは軽く頷いた。そして、周囲に集まってきていた各隊長達に向かって、最後の作戦の確認を行う。ここに着く前に作戦の打ち合わせは全て済ませているので、本当にホエールによる確認だけだった。

「最初、相手に姿を見せるのは10部隊200人程度だよ。少なすぎては罨を疑われるし、多すぎでは敵が逃げちゃうからね。」

それで敵を十分弓の射程内にまで引きつけたら、弓隊が出て相手の頭の上から矢の雨を降らせる。それで相手が退いてくれたら良し。退いてくれなかったら、全部隊でもって迎え撃つ。いいね」

ホエールの言葉に全員が頷く。その様子に、どの部隊がどの役割を果たすかは改めて確認するまでもないと思ったホエールは、

「それじゃ、後はよろしく。……ああ、グレンが出てきたら教えて欲しい。あいつばかりは、僕じゃないと相手できないと思うから」

その言葉に隊長達は頷くと、各々敬礼をして自分の指揮する隊へと戻っていった。

その彼らを見送ったホエールは、自らの武器であるアバターには似合わない大きさの太刀を肩に担ぎ、兵士達の向こうに見えるクックキー中央大橋を眺めていた。

そんなホエール中将の下、軍はダイナマイツサンダーが来るのを今か今かと待ち構えていた。

同時刻。4番街区地下通路第一層。

一カ所目の出入り口を見つけ、ついでに食事休憩を済ませた蒼い月と軍の合同調査隊は、探索を再開していた。

行けども行けども、通路はある。左右に時々部屋もある。その部屋には机や椅子、あるいは樽や木箱が転がってる事もある。でも、めぼしい物は何にもないし、エネミーすら出てこない。

レック達からあらかじめ聞かされてはいたが、あまりにも何にもない事に、ついついフレッドは、

「本当に何にもないんだな」
そう呟いていた。

『魔王降臨』という事件のせいで軍人みたいなことをやってはいるが、軍に所属しているプレイヤーも大半は元々冒険者としてプレイしていたのである。だからこそ、久しぶりに冒険っぽいことが出来る、フレッドも兵士達もどこかでわくわくしていたのだが……その期待は見事に裏切られていた。せめて、命の危険が殆ど無い事を慰めとすべきかどうかといったところである。

「5番と6番の地下もあるから、第一層だけでもあと数日かかるかもな。……まあ、飽きるのも分かるんだけどな」

やれやれといった案配で、クライスト。

そこにマツピング担当のミネアが、

「わたしの見立てでは……4番街区の分だけでもまだ半分も終わっていません」

作成途中の地図をランタンで照らしながら、そう告げる。

「まあ、通路が網の目状に走ってないだけマシか。部屋がやたらと多いけどな」

「その部屋をいちいち確認する手間も考えてくれ……」

兵士達も雑談に参加してきたが、全員もれなく小声である。

ダイナマイツサングアの待ち伏せの可能性も否定できないため、あまり大きな声は出せないのだった。明かりに関しては、無いと何も見えないため、ある程度諦めざるを得なかったが。

そんなこんなで、探索を進めているときのことだった。

「……あれ？」

そう呟いたのは、最前列のすぐ後ろを歩いていたりリリーだった。

どうかしたのかと仲間達が彼女を見ると、リリーより前を歩いていたランスとクライストしか見る事が出来なかったその視線は、通路の前方……ランタンの明かりも届かない闇の中を直視していた。その視線を追うように、自然とランスとクライストも正面の闇を見据えるが、当然何も見えない。

「どうかした？」

「え？どうかしたって……あれ、見えないの？」

レックに訊かれ、リリーが指さしたのはやはり正面の闇の中。

「……何も見えないけど、みんなは？」

「私も何も見えんのか」

「俺も見えねえな」

「わたしも見えません……」

そう答えたのは蒼い月のメンバーだけだったが、少し後ろを歩いていたフレッドや兵士達にも何も見えていなかった。

「リリーにしか見えていないとしてや。何が見えとるんや？」

仲間達が首を捻る中、リリーにそう訊いたのは、やはり目をこすって正面の闇の向こうを見ようとしていたマージンだった。

「えっと……女の子……かな？遠くて良く分かんない」

そう答えたリリーは、幽霊でも見えてるんじゃないかと不安げな表情になっていた。

もつとも、そうは考えなかった仲間もいたわけで、

「何かのクエストかろう？」

ディアナがぼそりと呟いた。

「一部のプレイヤーにしか見えないキャラなんて、いたっけ？」

「いや、そもそもジ・アナザー（ここ）にはNPCがいないはずだが？」

ああでもないこうでもない、ぼそぼそ議論が続く。

しかし、今問題なのは、

「とりあえず、近づいて確認してみるか？」

ということだった。

「いいのか？」

グランスが確認すると、提案した本人であるフレッドは頷いて、

「出入り口の調査もだが、訳の分からないものがあるなら、ついでに調べておくべきだからな」

そう言うのにやりと笑い、

「という建前はさておき、面白そうじゃないか」

「……なるほど。言ってるな」

グランスもにやりと笑い返すと、

「それじゃ、リリー。案内を頼めるか？」

あと、陣形を少し変えるぞ。マージンと俺が先頭に立つ。レックはリリーを護衛。クライストはディアナ、ミネアと一緒に後衛を頼む。フレッド達は殿で、後ろの警戒を頼む」

その指示に従って、素早く陣形を組み替えると、一行はリリーにしか見えていない女の子の元へと向かった。

しかし、歩き始めてすぐに、

「あ……」

リリーが小さな声を上げた。

「どうした？」

「女の子、歩き出した」

「見失いそうか？」

「角曲がったりしたら分かんないけど……」

「まあ、見失うまで追いかけてみるか」

しかし、実際にはリリーにしか見えない女の子らしき人影を見失う事はなかった。あたかも一行はその女の子に誘われるように進んでいた。途中、いくつか階段を下りて、結局第四層にまで降りてきた時には、

「最下層まで行ったりしてな」

などと、クライストが軽口を叩いたりもした。

「ここ、3番街区への通路じゃ……?」

そう気づいたのはレックだった。

地図を見ながら進んできていたミネアも、それを肯定する。

「まさか、ダイナマイツサンダーの罠、とか？」

それを否定したのは、フレッドだった。

「あり得ないな。そもそも連中のところには、女の子と呼べるようなアバターのプレイヤーはいないはずだ。女性プレイヤー自体少ないしな」

「何で？」

「……女の子がいる前では言えないな。察してくれ」

その言葉の意味をしばし考えていたレックだったが、すぐに思い当たったらしく、気まずそうな表情になった。

その時だった。

「ぎゃあああああああ!!」

突然聞こえてきた悲鳴に、緊張が走り、全員が武器を構える。

「今の悲鳴はどこからだ？」

それでも誰も冷静さを失わなかったのは、悲鳴が遠かった事からだろう。だが、そうしている間も悲鳴は続いていた。

「正面……2番街区側からだな」

クライストの言葉に、まだ方向を特定できていなかった何名かも耳を澄まし、その通りだと確認する。

「何があつたんでしようか……」

「碌でもない事と言うのは確かじゃな」

怯えているミネアに、ディアナがそう答え、

「え？あれ？」

「リリー、どうかした？」

「女の子も、2番街区の方を見て、それから消えちゃった……」

リリーのその言葉に、しかし残念だと思つた者はこの場にはいなかった。

「とりあえず、リリーにしか見えてなかったその人影の事は後回しだ。まずは、悲鳴の正体を突き止めるべきだろう」

「ああ。ただ、こっちの兵は何人が支部への連絡に回したい。戦いになった場合、そっちに頼り切る事になるが、構わないか？」

「逃げる選択肢が残ってるならな」

蒼い月と兵士達のリーダー格のランスとフレッドはそう話し合つて、手早く次の行動を決めた。

「よし、おまえ達は戻つて、支部にさっきの出入り口とこの悲鳴についての報告をしてこい。俺はこっちに同行する」

そんなフレッドの指示に従い、速やかに元来た道に戻っていく兵士達。

そしてレック達は、

「ここからは慎重に行く。マッピングは中止。ランタンも、ディアナとリリーの分だけで行くぞ」

というランスの言葉で、緊張をはらんだまま、前進を再開した。それから一分と経たないうちに、

「悲鳴、聞こえなくなつたな……」

ぼそりと呟いたのはクライストだった。

「どうということかは、あまり考えたくないのう……」

そう言ったディアナの横では、暗くて顔色は見えないものの、ミネアが真つ青になつてゐるに違いなかつた。

何しろ、悲鳴が聞こえなくなつたという事は、悲鳴を上げていたプレイヤーが全滅した可能性が高いからだ。そして、さっきまで聞こえてきたあの悲鳴は驚いたとかそういうモノではないと、みんな確信していた。

「とりあえず、警戒だけは怠るな。悲鳴を上げたプレイヤーを襲つていた何かが、こつちに来る可能性もある」

皆、無言でグランスの言葉に頷き、前進を続けようとした。が、「どこに行けばいいか、分かる？」

レックのその言葉で、足が止まつた。

悲鳴のする方に進もうとしていたわけだから、悲鳴が途絶えてしまつた今では、どう進むべきなのか分からなくなつていた。もっとも、曲がり角にでも着けば、全員が気づいただろう。

「確かにな。……こう言つては何だが、悲鳴を上げていたプレイヤーを助けるといふ目的なら、おそらく手遅れだ。何があつたのかを調べるなら行く意味はあるが……」

という雇い主のフレッドの言葉に、

「だが、見つける事が出来る保証はない、か」

グランスも唸る。そこにマージンが、
「多分やけど、3番街区の出口目指したら、途中で見つけれられるかも知れへんで」

「どういう事だ？」

「推測やけどな。地下通路に一般人が入り込んだる可能性は相当低いやろ。なら、他に入り込んだるのはダイナマイツサンダーの連中やと思うんや。それで、連中が入り込む理由ゆつたら……」

「4番街区を目指していた可能性は高いな。あるいは、こちらから

の侵入に備えていたか」

そう、グランスは頷いた。

一方、フレッドは別の疑問をマージンにぶつけた。

「逆の街区を目指していた可能性はないのか？」

「あらへんやる。それやったら、第一層から直接行けばええ。悲鳴が聞こえたゆうことは、わいらにそれなりに近かったはずや。第一層ってのは考えられへん」

それでフレッドも納得し、引き下がる。

「なら、3番街区の出口を目指そう。ただし、場合によっては引き返して撤退する事もあり得る。最大限警戒しながら進むぞ」

そのグランスの言葉で、やっと一行は前進を再開した。

そして、そろそろ進む事30分。

3番街区第三層に入ってまもなくだった。

「この臭いって……」

リリーの言葉に、ディアナとレックが頷いた。

「血の臭い、じゃな」

まだ微かに臭うだけだったが、間違いようもない。殺したエネミーのそれを嗅ぎ慣れているのだ。そして、大半のエネミーのそれとプレイヤーのそれが同じである事を、フレッドを除く全員が知っていた。……フレッドも別の理由でプレイヤーの血の臭いくらいは知っているのだが。

とりあえず、リリーたちの言葉で一行は足を止めた。

「この先に何かがあるのか、大体分かった気がするけどな。覚悟だけはしといた方が良さそうだよな」

クライストがそう言うと、

「そうだね」

「……うむ」

多少間が開いたものの、仲間達は次々に賛成した。

何があったのかを調べておいた方がいいが、ここで集団を2つに

悪のもイヤな予感がする。なら、苦手であろうともスプラッタな場面をあらかじめ覚悟しておくしかなかった。

もつとも、その覚悟はどれだけ意味があったのか。

「暗すぎてよく分からないが、かなりの人数のようだな」

「そやな」

現場に着いてまず、前衛を務めるグランズとマージンが、そんな感想を漏らす。

「明かりは増やさない方がいいか？」

「まじまじ見る羽目になりたくないよね」

これはクライストとレック。

ミネアとリリーはあまりの血の臭いに、言葉もない。

とは言え、状況を調べるためにももう少し明かりが必要だった。

マージンがランタンを取り出し、その明かりが後ろに漏れないようにしながら、グランズとマージンの二人は足下に転がる死体の検分を始めた。

「……この服装、やっぱ、ダイナマイツサンダーみたいやな」

「そうだな……しかし、この傷は……凶獣なんかの爪でやられた感じに似ているな」

「やな。……防具は一応効果あったみたいやで」

「何？……ああ、確かにな」

「しかし、意外にきれいなままやな」

「……もつと酷かったら、俺は吐いてるぞ」

だんだん会話が生々しくなってきた、すぐ後ろで警戒に当たっていたクライストとレックも死体の様子を想像してしまい、徐々に気分が悪くなってきていた。せめて、何であの二人は死体の検分を冷静に出来るのかとかなど、関係ない事を考えて気を逸らすので必死であったが、効果は殆ど無かった。

「二人とも、その辺にしておかぬと、後ろが吐く事になりそうじゃぞ」

とディアナが止めなければ、ミネアとリリーあたりは本当に吐く寸前だった。

ちなみに、フレッドはまだまだ余裕がありそうだった。

とりあえず死体の検分はほどほどにして、さっさと現場を通り抜けた一行は、第二層に上がってやっと一息つく事が出来た。途中、うっかり死体を踏んだレックがパニックを起こして転びかけたり、死体の指が足首に触れたミネアが失神したり、死体を蹴ってしまったリリーが悲鳴を上げそうになったりはしていたが。

今一行がいるのは、地下通路の各所にある部屋の1つ。無論、部屋の入り口は全員が警戒している。……リリーとミネアはまだ顔色が悪かったが。

「改めて結論を言うと、死んでいたのはダイナマイツサンダーの連中で、殺したのはプレイヤーではない」

その部屋の中でグランスはそう言った。

「つまり、エネミーがいるって事？」

レックの言葉にグランスは頷くと、

「おそらくは凶獣。魔法でやられたような死体は無かったからな」

「私たちが倒せるような相手かの？」

「それは何とも言えへん。ダイナマイツサンダーの連中、わいらに比べて結構弱いしな」

ディアナにマージンがそう答えると、

「ただ、エネミーの死体や身体の一部のような物はなかったと思う。油断はしない方がいいだろうな」

と、グランスが補足した。

「どんなやつかも分からない、か。とりあえず、ここを出たら地下通路の出入り口はしっかり封鎖しなくてはいけないな」

真剣な表情でフレッドがそう言うと、

「そうだな。だがその前に俺達が無事に帰らないとな。リリーとミ

ネアの調子が少しでも戻り次第、さっさと地上に出るぞ」

それを聞いて、

「あ、あたしはもう、動けるよ」

「わたしも……歩くだけなら何とか……」

「……そうだな。外に出た方が調子も早く戻るか。ダイナマイツサ
ンダーには警戒しないと行けないが、連中相手の方が気楽だな」

そう言ったグランスに続いて、一行は部屋を出た。そして、地上
を目指し歩き出す。

警戒しながらだったので遅いはずの足取りは、見えない脅威に追
い立てられていたためか、何事もないままに、意外に早く、30分
と経たないうちに出口に着いた。

何故か誰も見張っていなかった出入り口を通り抜け、出入り口が
隠されていた建物の窓から外を窺う。

そして、

「何だ、あれは……」

レック達が目にしたものは、空を飛び交ういくつもの黒い魔物の
影だった。

魔物来襲

暗闇の中、シャイツは逃げていた。

明かりとなるランタンは既に無く、何も見えない闇の中で頻繁に壁にぶつかり、何かに蹴躓き、そのせいであちこちに怪我をしていたがその痛みなど感じる事もなく、ひたすら逃げていた。

最初は恐怖から、あれに見つかりたくないという一心で抑えていた愚痴も、今はただ単に疲労故に出なくなっていた。

代わりに頭の中は、何でこんな事になったのかという疑問で一杯だった。どうやって生き残るかなどという考えても仕方ないことはチリほども残ってはいない。

（いちいち地下通路で待ち伏せなんてしようとしていなければ……こんな事にはなっただんだっ！あいつらだ！あいつらのせいだ！）

時間は少し遡る。

「ほんとに来るんツスカ？」

誰かがそう言った。

ランタンの明かりも消した闇の中、シャイツに率いられたダイナマイツサンダーのメンバー約30人は、地下通路第三層にて息を殺してじっとしていた。正確には、レック達が再び地下通路を通ってやってくるのを待っていた。

左手をぼろぼろにされたシャイツは、勿論、復讐を考えていた。そのためには、連中を捕まえなくてはいけない。

何らかの目的があつて侵入してきたあの連中は、まだ目的を果たせていないだろうから、もう一度来るだろうと考えていた。しかし、グレンが橋から4番街区に殴り込もうとしている以上、地上からは

来れないだろう。なら、地下通路で罾を張って待ち構えよう。そう考えたのである。

「来ないなら来るまで待つだけだ」

シャイツは疑問をぶつけてきた手下の頭を軽く叩き、黙らせる。

とは言え、

(……もう少し冷静に考えるべきだった)

頭の中ではそう考えていた。

実際、連中にとっても危険な目に遭ったのだ。そんな昨日の今日で、のこのこやってくるほどおめでたい連中かどうか。

冷静に考えれば、見張りだけ付けておいて、何かあってから動いても良かったのだ。

かといって、今更手ぶらで引き返すのも癪である。例え手ぶらであつても、数時間程度は待ち伏せたかつた。あるいは、4番街区地下通路への侵入と探索を行うなりして、何らかの成果を持って帰るのもいいだろう。

まあ、どちらにしても、しばらくはここで待ち伏せる。3番街区にしる2番街区にしる、彼らの持っていた地図に従って地上をを目指すなら、ここは通らざるを得ない。

警戒はしているだろうが、最初に銃弾の一発も撃ち込んで混乱させれば、後はこっちの思うがままだ、そうシャイツは考えていた。

最初、それが来た時、気づいた者はいなかった。

殺された本人ですら、自らの首が地面のぶつかった衝撃でやっと気づいたのである。

「おい、今のは何の音だ？」

ゴトンという音に振り返った仲間達だったが、当然何も見えないし、返事も無い。

「さあ？おい、サブロー。分かるか？」

「いや……」

そう言っている間にもまた、ゴトンと音がする。

「？」

音に遅れて自分にかかってきた生暖かい液体の臭いを嗅ぎ、

「……血の臭い？」

誰かがそう言った。

その時には既に三度何かが落ちる音がして、一帯には濃厚な血の臭いが漂い始めていた。

何か、やばい事が起こっている。それをその場にいた全員が悟るのに時間は要らなかった。

もつとも、

「明かりだ！明かりを付けろ！！」

待ち伏せどころではない事に気づいたシャイツがそう叫んだ時には既に遅かった。

一行の後ろにいたはずのメンバーは既にことごとく地面に倒れ、今また、新たな犠牲者の前に大きな爪を振りかざしたそれが立っていた。

だが、微かな明かりでは、その全貌は到底分からなかった。あまりに黒いそれは、ランタンの明かりの下でも周囲の闇と同化していたのだ。ただ、赤く縦に裂けた瞳とランタンの光を反射して光る爪だけが、よく見えた。

明かりに晒された事を気にする風もなく、それは爪を振り下ろし、自分の目の前で起きている事を理解できていなかったメンバーの喉をいとも容易く掻き切る。

喉から嘔き出した血を、口を大きく開けて一口飲むと、新たな犠牲者の前に移動し、再び首を斬る。それにとって、その行為は単なる作業でしか無く、それ故に見る者に残虐性を感じさせなかったからだろうか。

事態を把握したシャイツが、

「まずいつ！逃げる！今すぐ逃げる！！」

そう叫ぶに至ってようやく、生き残っていた全員が動き出した。恐怖を認識し、真つ先に出たのは悲鳴。

何人かが逃げ出そうとするも、それは動く獲物から順に襲いかかっていったため、仲間を盾にして逃げ出したシャイツ以外は誰一人としてその爪から逃れる事は出来なかった。

なけなしの明かりは持っていたメンバーがあっさり落としてしまい、現場はすぐに闇に包まれる。

そして、暗闇の中で今度こそ逃げる事すら出来なくなったメンバーの悲鳴をBGMに、それは彼らを一人ずつ斬り殺していったのだ。つた。

「はあっ……はあっ……」

どのくらい走っただろうか。

息も切れ切れになり、これ以上走り続けることが出来なくなったシャイツは、ついに足を止め、壁に背を付けてもたれかかった。

(ここまで来たら、流石に逃げ切れただろう)

そう考えると、まださっきの恐怖は完全には抜けきってはいないが、多少は心のゆとりも出てくるというものだ。

もつとも、今に関してはそれは逆効果だったかも知れないが。

(いや、ちょっと待て……ここはどこだ？出口はどっちだ!?)

息が整っていたら叫んでいたかも知れない。

だが、今の状況はある意味当然のものであった。

何も見えない暗闇の中を、ひたすら走っていたのだ。どの道を走ってきたのかなど分からない。どれだけ走ったかも分からない。おまけに明かりも無い。

あれの恐怖から逃げ切れたと思ったが、今シャイツは、別の恐怖に捕らわれようとしていた。だから、物音がしたとき、警戒するべきだったのに、安堵が先に立ってしまったのも仕方ない事だったのだろう。

「あ……？が……？？」

それが、シャイツが残した最後の言葉だった。心臓を貫いた爪がすつと抜かれると、次の瞬間、シャイツの首は宙に舞っていた。

そして、やがて暗闇の中、聞く者もないままに咀嚼音だけが響き始めていた。

さて、ここで再び時間は遡る。

レック達を待ち伏せていたシャイツ達を襲ったモノが、地下通路に侵入する前にまで。

「まさかキングダムにまで現れるなんて予想外だよな」

空を見上げながら、ホエールは困った顔をするしかなかった。

その視線の先には、空を舞う黒い影。

視線を下ろせば、先ほどから悲鳴と怒号が渦巻いているクックキー中央大橋。先ほどそこに一体の魔物だか魔獣だかが降り立ち、軍の兵士達が必死にその足止めをしているところだった。

少し前まで軍と交戦していたダイナマイツサンダーは、隊列の中央に魔獣　グリフォンっぽいしホエールはそう判断した　による魔法攻撃とそれに続く突撃を受け、多数の死傷者を出した挙句に大混乱に陥り、今では軍によって保護される立場へと成り下がっていた。

流石にダイナマイツサンダーを率いていたグレンはパニックを起こすことなく、立ち向かっていった。しかし、パニックを起こした手下共にもみくちゃにされているところにグリフオンの一撃を食らい、吹っ飛ばされてきたところを兵士達に拘束されたというか、保護されたというか……

「いやいや、呑気に観戦してる場合じゃないね」

そう言って、グリフオンのところへ向かおうとしたホエールの元に、一人の兵士が走り寄ってきた。

「ホエール中将！他の街区でも魔物の襲撃が確認されています。出来れば、応援をよこして欲しいということですよ」

その報告に、ホエールも思わずしかめっ面になる。

「ここだけじゃないんだ？……城門の外はどうなってるのかな？」

「はい。城門の外から攻めてくる気配はないとのことですが……」

個人端末を操作し、クランチャットを確認して、兵士はそう答えた。

「他のところも多分、空から降りてきたんだよね？」

「そのように連絡を受けています」

「……あれみたいで、上空にまだ留まってるのがあるのかな？」

そう言ったホエールの指さす先の空を舞う魔物を見た兵士は、クランチャットで他の場所の状況を問い合わせ、

「そのようです。上空に現れた魔物のうち、実際に降りてきたのはまだ一部に留まっているようです」

「ふむ……」

どうしたものかと考え込む。

これまでの魔物による町への襲撃については、それなりにまとめられたレポートが作成されており、各街の防衛担当者はその最新版に常に目を通すように言われていた。当然、ホエールもしっかり読んでいる。

その中でも重要なのが、襲撃してきたエネミー全てが戦闘に参加するわけではない事だった。どちらかが全滅するまで戦い続けるのではなく、必ずあつちが撤退を始めるのである。

（問題は上空のあれが降りてくるかどうかだけ……）

撤退基準が分からない以上、最悪のケースを想定して動くしかない

かった。

正確には、襲撃を主導している魔物を倒せばエネミー達が撤退するのは分かっているのだが、キングダムは広すぎてどこに頭となる魔物がいるのか、探すのにも時間がかかりすぎる。

「この場にいる兵力のうち8割を他の街区への応援に回す！非戦闘系プレイヤーの保護を最優先に！」

とりあえず、非戦闘プレイヤーの保護を優先しても、自分さえいればこの場は崩れる事はないと考え、ホエールはそう命令を下した。その命令を受け、速やかにこの場に残る小隊と街の防衛に回る小隊が決定される。

「じゃ、僕はグリフォンの相手をするよ」

防衛に回る小隊が新しい動きを見せ始める前に、部下達にそう告げて、ホエールは橋の上で暴れているグリフォンの元へと向かった。弓での足止めは既に失敗に終わり、兵士達は槍や剣で必死に応戦している。いくら鎧を装備しているとはいえ、このまま放っておけば死人が無駄に増えかねない。そうなる前に、この場で一番強い自分がグリフォンの相手をするべきだった。

そして、似たような魔獣の襲撃はクックキー中央大橋だけではなかった。大陸会議が支配している4〜6番街区でも空からの襲撃を受けていたし、そのほかの勢力が支配している街区でも同様だった。ただ、各街区を支配している勢力が、このような襲撃が起きうる事を予想していたかどうかで、状況は大きく違っていた。

「急いで近くの建物に逃げ込め！！」

5番街区の商店が密集しているエリアに魔獣が舞い降りてきた時、当然のようにその場は大混乱に陥った。だが、巡回に当たっていた兵士のその叫びによって、混乱しながらも戦闘能力を持たないプレイヤー達は我先にと手近の建物に避難した。

無論、そのままでは魔獣グリフォンが建物に入り込みかねない。巡回に当たっていた兵士達のグループは、すぐにクランチャットで応援を呼ぶと、建物の隙間からグリフォンの注意を引きつけていた。軍が警備していた他の街区でも何力所かで魔獣が舞い降りたものの、同様に巡回の兵士達が場の混乱を収め、魔獣の注意を引きつける事で、魔獣が舞い降りた際に食い殺された数人を除けば、被害はほとんど出ていなかった。

同様に、被害が少なかったのが、エドバドが支配していた10番11番街区である。

エドバドは暴力による支配を試みる一方で、支配対象となるプレイヤーの流出を抑えるために、無駄な略奪や暴力を禁じていた。同時に治安の維持にも熱心であり、各所に見張りを置いていたことが、今回は功を奏したと言える。

「あれ、なんだ？」

ふと上空を見上げた見張りの一人が、そう声を上げ、数秒後にはそれが鳥などではない事を察した。

彼からクランチャットで報告を受けたエドバド首領グロツサリアは、出入りしている商人達から仕入れていた情報を元に、魔獣の襲撃だと判断。すぐに全住人に避難命令を発し、エドバドの構成員の中でも非常事態に備えて特に鍛えていたメンバー達に迎撃を指示していた。

一方で、1番12番街区を支配していたクラツカーズはそこまで用意周到ではなかった。

そもそも、『魔王降臨』直後からあまり後先考えずに暴れ、エドバドや大陸会議の支配街区に相当数のプレイヤーが流出。最近になってやっと、暴れるだけではダメだと気づき始めた矢先だったため、まともに対応できていなかった。その結果、

「助けてくれ!!」

「頼む!入れてくれ!!!」

「ひいいい!!!」

外に出ていたクラツカーズメンバーを含むプレイヤー達は、魔獣の襲撃により大混乱に陥っていた。そして、

「クソツ!来るな!あれがこっちに来るだろうが!!」

「邪魔だ!死ね!!」

「おまえが餌になればいいんだよ!!」

魔獣による直接の被害よりも、混乱の中で生じたプレイヤー同士の暴力による被害が拡大しつつあった。

そしてある意味被害が少なかったのが、ダイナマイツサンダーと夜露死苦連合の支配する3番4番街区と7番8番街区である。

元々、両者のあまりの非道さに相当数のプレイヤーが逃げ出した後だった上、残っているプレイヤーも彼らを恐れ、ほとんど外を歩いたりはしていなかった。

一方で、ダイナマイツサンダーと夜露死苦連合の構成員達の中でも呑気に外を出歩いていた者たちは、当然のように魔獣に襲われ、為す術無く殺されていったのだが、この犠牲に一般プレイヤー達は喜びこそすれ、一切同情はしなかった。

地下通路から出てきたレック達もまた、地上に降りてきていた魔獣の一体との戦闘に突入していた。

建物の中に隠れていても良かったが、放っておくと建物の中にまで魔獣が入り込んで、プレイヤーを食い殺しそうだったので見過ごすわけにも行かず、やむを得ず、である。

既にグリフォンの翼には何本もの矢と十数発もの銃弾が撃ち込まれ、飛ぶのもままならない。せめて距離を取ろうとグリフォンが試

みると、ミネアとクライストがそれぞれの弓と銃で魔獣を攻撃し、足止めする。

その間にグランス、マージン、レックが距離を詰め、次々に武器を振るうが、グランスとマージンの武器はその重量故に攻撃の大半が易々と躲されてしまう。レックの方は逆に爪と嘴での牽制を喰らって、なかなか攻撃を当てる事が出来ない。

それでも、3人の波状攻撃のせいでグリフォンは誰か一人を集中して攻撃する事も出来ず、逆に時々当たるレック達の武器で、ちまちまとダメージが蓄積していた。

「すごいな……」

その様子を見ていたフレッドは感嘆しきりである。

フレッド自身も冒険者として活動していた経験もあるが、中級冒険者になる前に『魔王降臨』が起き、軍に入ったため、グリフォンのような魔獣と戦った経験はなかった。

ちなみに、ディアナとリリーは槍やら棍やらにまだ慣れてないという事もあって、ミネアとクライストの護衛である。もっとも、上空を飛び交っている魔獣達に動きがあれば、前衛の3人に即座に知らせる役目も負っていた。

「痛っ!!」

左の二の腕をグリフォンの嘴がかすめたレックの前に、

「大丈夫か!？」

そう言いながら、グランスが出てきてグリフォンの爪を戦斧で弾き返す。

「ちょっと深い。少し下がってもいいかな？」

かすめただけとは言え、グリフォンの破壊力は大きかったらしく、レックは骨に届きそうな傷を負っていた。

グランスは頷くと、

「ミネア、レックに治癒魔法を頼む!マージン、レックが戻ってく

るまで持ちこたえるぞ！」

そう叫んで、レックを追撃しようとしていたグリフォンめがけて戦斧を振り下ろすが、あっさり避けられてしまった。

しかし、そのタイミングで銃声が鳴り響き、グリフォンの毛が周囲に飛び散る。

「はあっ！！」

クライストの援護で一瞬動きを止めたグリフォンの脇腹を狙ってマージンが振るったツーハンドソードは、その翼に大きく食い込んだ。

「ギイイイ！！」

流石に堪らず大きな鳴き声を上げるグリフォン。しかし、たださえ銃弾と矢で傷ついていた翼は、完全に飛翔能力を失い、逃げる事もままならない。

ただ、もう一撃を入れようとしたマージンは、怒り狂ったグリフォンが嘴で反撃してきたため、とっさに避けていた。

その瞬間、グラランスの正面に無防備に伸びたグリフォンの首が晒される。

「おおおおおおお！！」

今度は下から振り上げる形で、戦斧をグリフォンの首へと叩き付けるグラランス。

寸前、マージンに攻撃を避けられたグリフォンの首がグラランスの方へと向き直るが、タイミングを見計らっていたかのようにクライストがその顔を狙撃する。

その銃弾は嘴に当たり逸れてしまったが、その衝撃で一瞬グリフォンがふらついた隙を逃さず、グラランスの戦斧がその首へと食い込んだ。

「ギイイイイ……………！！」

首筋の傷から大量の血を流しながら、それでもまだグラランスに爪を突き立てようとしたグリフォン。しかし、今度はマージンに反対側から首を切りつけられてしまった。

流石に耐えきれず、どうと倒れ伏すグリフォンの巨体を眺めながら、

「やったか」

流石に疲れた様子のグランズに、

「そうやな。流石に魔獣クラスはまだ結構つらいわ」

とツーハンドソードを杖代わりにしているマージン。

途中、戦線離脱する羽目になってしまったレックは、

「やっぱり、武器が小さいと戦いづらいな」

その怪我は既にミネアによって完治させられていた。

「とりあえず、他の魔獣が降りてくるような事はないようじゃな…」

…他の地区にはまだおるかも知れんが」

戦闘には参加していなかったが、ディアナも上空の魔獣への警戒からやはり疲れた様子を見せていた。

そんなレック達の様子を見ていたフレッドだったが、思い出したように個人端末を操作し、クランチャットで他の街区との連絡を試みる。

その様子を見ていたグランズは、

「他はどうなってるんだ？」

「似たようなものだ。一部では何とか撃破できたようだが、まだそうできてない場所も多い」

フレッドは厳しい表情でそう答える。

それを聞いたグランズは、空を見上げ、

「飛んでるあいつらが降りてこないなら、随分気が楽になるんだが」

……」

そう呟いた。するとクライストが、

「俺達は魔物の襲撃とか初めてだからよく分からねえんだけどさ。

イベントみたいなもんなんだろ？終了条件みたいなのは分かっただけなのか？」

「上からは特に聞かされていないな。ただ、どちらかが全滅するどころか、大抵の場合はある程度の被害が出た時点で、エネミーは去

っていくらしい」

「つまり、あれが全部降りてくる心配はしなくていいってことか？」
空を見上げたクライストに、フレッドは「多分な」と頷くと、

「とりあえず、俺は軍に合流する。君たちはどうするつもりだ？」

そうグランス達に訊いてきた。

「そうだな。少しくらいは手伝っておきたいところだが……」

そう、グランスが視線をやると、

「ぎりぎり何とか出来そうだし、僕は賛成するよ」

「まあ、反対する理由はないのう」

「やっぱり、助け合いは大事……です」

「あたしは出番無かったから、ノーコメントでお願い」

賛成が5で棄権が1だった。

それを確認したグランスは、フレッドに向き直ると、

「そういうことだ。俺達も同行させて貰おう。多少は力になれるはずだ」

「……ああ。よろしく頼む！」

フレッドがそう差しだした手を、グランスはしっかりと握った。

「これは、少しまずいね……」

左腿に負った大きな裂傷など素知らぬ風に、ホエールは頭を掻いた。

予定通り、橋に降りてきていたグリフォンは倒せたものの、戦っている途中にもう一頭グリフォンが舞い降りてきたのが良くなかった。それも何とか倒したものの、そのせいで決して小さくない被害が味方に出してしまった。

死亡した兵士の人数はまだ少ないものの、ポーションを与えたところで長くは持たないだろう兵士が少なくない。無事な兵士の方が圧倒的に多いとは言え、素直に敵の撃破を喜べる状況ではなかった。ホエール自身、足を服の袖で縛ってはいるものの、今のままでは

そのまま失血死してもおかしくない。

「ホエール中将、座って下さい。立ったままでは出血が余計酷くなります！」

そう言ってきた部下の言葉に従い、ホエールは自分の血で赤く染まっていた地面に腰を下ろした。途中、足の傷が疼いて少々顰めっ面になってしまった。

「ポーションの在庫はもう無いのかな？」

「っ……申し訳ありません。まさかこのような事態になるとは予想もせず、持ってきていた分は使い果たしてしまいました。今、取りに行かせてはいますが……」

無念そうに報告してくる部下を止め、ホエールは目を閉じる。

出血の影響か、少々頭がぼんやりしてきている。どうも、足を縛って出血を抑えるには、服の袖では役不足だったらしい。

（ああ、それに、こんなに沢山の部下を死なせてしまうのか）
ホエールにとっては、沢山の部下が死んでしまう事も十分つらかった。

顔を見知ってる相手が死んでいく。二度と会えなくなる。リアルでは身近に感じる事が出来なかった死というものは、ここではあまりにも身近でつらいものだった。

それでも、仲間達を守りたいと思って、戦う事を選び、頑張ってきたはずだったのだが……

などと考えていると、急に辺りが騒がしくなった。

重たくなってきた瞳をこじ開けると、橋の方でなにやら騒ぎが起きているようだ。

何事かと訊く前に、様子を見に行っていたらしい部下が一人、神官っぽい金髪の優男を引きずるように連れてきた。

その神官がホエール というよりもその周りの地面に広がっている血だまりを見て顔を顰める様を見て、

（ああ、お経を上げに来たんだな……）

などと、思いつきり宗教を取り違えたような事を考えていると、

「お願いします！この人は大事な人なんです！是非とも助けて下さい！！」

と猛烈な勢いで部下が神官に頭を下げている。

「分かったから、ちよつと静かにしていてくれ」

神官はそう言つて部下を黙らせると、血だまりに膝を付け、ホエールの方へと手を伸ばしてきた。

彼の真つ白なローブが自分の流した血で汚れてしまふ事に罪悪感を覚えながらも、何となく目を閉じるホエール。すぐに耳に聞き慣れない歌のような言葉が聞こえてきた。

その静かだが落ち着く歌はホエールの心にゆっくりと染み込んできた。が、すぐに終わってしまった。

だが、残念だと思つ間はなかった。

「！？」

そこにある事さえ忘れていた左足の怪我の痛みが、急激に退いていく。そのことに驚愕して目を開けると、神官の男がホエールの傷口から手を離し、立ち上がるところだった。

「これで死にはしないだろ。じゃ、俺は他の連中の怪我を見てくる。後は任せるぜ」

そう言い残して、さつさと他の兵士のところへと立ち去ってしまった。

その様子を見送つたホエールの頭は、まだぼーっとしていたが、左足の怪我がほとんど治つているのは何となく分かつていた。だから、部下に訊いた。

「今のは……何なの？」

「フレッドが地下通路探索に雇つた冒険者だそうです。治癒魔法が使えるというので、中将の怪我を治してくれと頼み込んだのです」

安心のあまり、泣きそうな顔になっていた部下の説明を聞き、ホエールは、

「そうか……フレッドの、ね」

確かに、最近、治癒魔法の祭壇が再発見され、使い手が続々と

と言つても、冒険者の一部に限られていたが 生まれている事は聞いていた。だから、部下の説明はすんなりと納得できた。

「今、彼と彼の仲間達が重傷者に治癒魔法をかけて回ってくれています。人数が多いので、怪我を完治させるのは諦めないといけないのですが……」

「死にかけていた部下が一人でも多く助かるなら、それでいい」

部下の説明を遮り、ホエールはそう答えた。

どうやら失われた血液が完全に戻るとまではいかなかったらしいが、立ち上がる事は出来そうだと立ち上がる。周囲の様子を見回すと、確かに兵士と違う装備をした冒険者らしきプレイヤーが何人が歩き回っているのが見て取れた。

それから間もなく……と言つても、30分くらいは過ぎただろうか。

「疲……れた……」

地面の上に潰れているのはマージン。

だが、蒼い月の他のメンバーも、グランズとディアナとリリーを除けば、皆疲れ切つて、地面に座り込んだり、突っ伏したりしていた。

周囲を軍の兵士達に包囲されてはいるが、これは魔獣達に対する護衛であつて、蒼い月を拘束しようとしているわけではなかった。

グリフォン2頭との戦闘で軍が大量の重傷者を出し、あまつさえキングダムにおける最高指揮官まで死にかけていた。そこに、フレッドに連れられてやってきたのが蒼い月だった。

何人ものプレイヤーが死んでいて、さらに数十人ものプレイヤーが死にかけている。そんな惨状を見たレック達は、フレッドを通じて無事な兵士達に魔獣への警戒と対処を頼むと、レック、クライスト、マージン、ミネアの4人で重傷者に片っ端から治癒魔法をかけ

て回ったのである。

流石に人数が人数だったため、全員を完治させようとするとレック達の魔力だか体力だかが足りない恐れがあった。そのため、一人一人にかけた治癒魔法は半端なものとなってしまい、痣やら擦り傷やら切り傷やらが残ったままだったが、かなりの人数が死なずに済んだ。

というわけで、仲間達を助けて貰った兵士達が、疲れて動けなくなったレック達の護衛を買って出たのである。

「まあ、戦うより直接人を助けられたんだから、よしとするのじゃな」

地面に仰向けに転がっているクライストをつつきながら、ディアナが言う。

そのクライストはというと、いつもは真っ白なローブが兵士達の血を吸って真っ赤に染まってしまっていた。これは、治癒魔法をかけて回っていた他の3人も似たり寄ったりで、すごい血の臭いを漂わせていたりする。

だが、人を助けて回った証だからだろう。気が弱いミネアですら、その血の臭いで気分が悪くなっている様子は見られなかった。疲れ果ててはいたが。

「どうやら、襲撃も終わりのようだ……」

軍の兵士達と一緒に、疲れ果てたレック達を守るべく立っていたグランズの言葉に仲間達が空を見上げると、先ほどまで空を飛び交っていた魔獣達の影はいつしかまばらになっていた。

周囲の兵士達もそれに気づいたのか、雰囲気随分軽くなってきている。もつとも、まだ警戒を解かないあたりに、しっかり訓練されている気配が伺えた。

「夜まで続かなくて良かったよ……これで、今夜は落ち着いて眠れそう」

「そう……ですね……」

何とか地面に倒れ込むのを踏みとどまっているレックとミネアも、安心したように息を吐く。

それに対して些か複雑そうな顔になっているのがリリーだった。

何しろ、3番街区でのグリフォン戦でも、ここでの治療行為でも、実質あまり役に立っていない。戦闘が終わったのは嬉しいものの、微妙に素直に喜べなかった。

そんなリリーが少し俯き加減になっていると、

「あー、気にせんでええで？ 今日役に立たなかったなら、明日役に立てばええんや」

リリーの側で潰れているマージンから、そんな声が聞こえてきた。「えっと、気にしてる訳じゃないんだけど……」

そう言ってみたものの、リリーとしては役に立たなかった事を気にしているのは事実だった。だから、マージンの慰めっぽい言葉で少し気が楽になった気はしたものの、まだ気が重かった。

のだが、

「そうか？ なら、ええんやけどな。まー、今日は索敵の出番なかったもんなー……」

マージンのその言葉で、確かにいつも役に立ってないわけじゃない事を少し思い出した。それでやっと少し気分が軽くなる。

「……ありがとう」

小さく呟いたその言葉がマージンに届いたかどうか。

気になったリリーが地面を見ると、そこでは疲れ果てたマージンがいつの間にか寝息を立てていた。

そのことに、リリーがちょっとだけ腹を立てていると、周りの兵士達の壁が急に割れた。

「む？」

マージンと同じように、意識を失ってしまったらしいクライストをつついていたディアナが、立ち上がる。

見ると、兵士達の間を通過して、一人のプレイヤー 正確には他

の兵士の肩を借りていたので二人　　がやってくるころだった。

ふらふらしながらやってきた黒髪黒目、ついでに中肉中背の典型的な日本人の外見を備えたそのプレイヤーの装備を見たグランスが驚いたように、

「中将か。まさか軍の幹部がいたとは驚きだ」

と言うと、軍の中将　　ホエールは笑みを浮かべ、

「部下だけに全部を任せて、自分は安全地帯から出る事はないというのは、銀竜騎団のやり方じゃないんだよ」

そう言っつて、肩を借りていた部下から離れる。

すぐにふらついて、それでも何とかバランスを取ったその顔色は、お世辞にも良くなかった。

「一応、僕も死にかけていたからね。そこの彼に助けて貰ったからお礼を言いたかったんだけど……」

ホエールはそう言いながら、地面で眠りこけているクライストに視線をやった。

「まあ、個人的な事は、彼が起きているときに改めてお礼に伺うよ。今は兵士達の命を預かる上司として、お礼を言いに来たんだ」

そう言っつと、姿勢を正し、

「キングダム支部を預かっているホエールだよ。階級は中将。先ほどは君たちのおかげで、多くの部下の命が助かった。礼を言っつよ。ありがとう」

ホエールがそう言い終わるとすぐに、周りの兵士達からパチパチと拍手が始まった。その拍手はすぐにその場にいた兵士達全員に伝播し、皆が蒼い月への感謝を込めた拍手をし始めたのだった。

いつの間にか、空からは黒い影が全て消えていた。

キングダム公立図書館

ダイナマイツサンダーとの戦闘とその途中で始まった魔物というより魔獣達の襲撃から三日が経った。

4〜6番街区では、襲撃が始まった直後に非戦闘プレイヤーを屋内に退避させ、軍が対処に当たったために被害は相当抑えられた。……はずだったが、それでも、空からいきなり襲撃されるといふ半ば予想外の事態に、数十名にも上る死者とその数倍にもなる負傷者が出てしまった。

治癒魔法を扱えるレック達は、幾ばくかの報酬と引き替えに、連日重傷者の治療にこき使われた。そのおかげで命を取り留めたプレイヤーも多く、蒼い月はキングダムでちょっとした有名人となってしまっていた。

そんなこんなで、二日間で重傷者の治療も大体終わり、今日、レック達は宿の部屋でぐったりしていた。治癒魔法が使えないグランス達3人も、せめて手伝える事があるならと動き回っていたので、同様である。

ちなみに、この日の朝食は部屋まで届けて貰った。

「まあ、今日は一日休んでもいいよね」

「というか、休む。絶対休む」

そんな感じでベッドから降りる気がさらさら無い、引きこもりのようなレックとクライストを眺めながら、グランスは、

「一日くらいは構わないが……明日は図書館に行くぞ」

その台詞に、男部屋に集まっていた仲間達は皆、軽く驚いた。

「あんな危険なところに!？」

とは驚いたリリー。

「いや、一昨昨日ひまふとこのあれで、事実上ダイナマイツサンダーが崩壊したらしい。で、今は軍が入って事態の把握に努めているが、大した抵抗もなく街区の接收が進んでいると昨日聞かされた」

「グランスは蒼い月の代表ということもあり、軍の兵士達ともしばしば治療のために次はどこに向かえばいいかなどいろいろ話していた。そのついでに話を聞いていたのだろうと仲間達は思ったものの、図書館周辺の治安への懸念は消えない。」

「そんな仲間達を代表して、ディアナが疑問をグランスにぶつける。」「ダイナマイツサンダーの残党はどうなっておるのじゃ？」

「大半はクツクキー中央大橋の戦闘で捕まるなりなんなりしたそうだ。残った残党も次々と投降しているとかで、今日明日には2番3番街区は全て軍の管理下に入る見込みだと、フレッドは言っていたな」

「ふむ。それならば問題はないかも知れぬが……もう2、3日様子を見ても良いのではないかのう？」

そのディアナの言葉に、仲間達はうんうんと頷く。

そんな仲間達の様子を見たグランスは、

「ああ、それもそうだな。……少し気が急いでいたか
そう苦笑しながら、頭を搔いていた。」

「それじゃ、今日は引きこもってゆっくり休むか」

「そう言っただけでベッドに勢いよく横になるクライスト。それにレックも続く。相当、治癒魔法で疲労をため込んでいたらしく、すぐに二人の寝息が聞こえてくる。」

「マージンとミネアは大丈夫なのか？」

同じように治癒魔法を連発して疲れを溜めているのではと、グランスが視線をやると、

「わいは街の様子見てきたいとこやな。まあ、初心者が多いこの街やと、掘り出し物は少なそうやけどな」

と、欠伸をしながらマージンは答えた。

何故かわたわたしているミネアも、

「あの、寝るとかえって疲れてしまいそうですから……」

との事で、寝るつもりはないらしい。まあ、寝るなら寝るで女性部屋に戻らないといけないのだが。

ディアナとリリーはというと、

「部屋にいても暇じゃしのうち。マージンと一緒に街にでも出る事にするかのう」

「だよね。あたしも一緒に行くよ」
とのこと。

そんなわけで両手に花で街に出る事になったマージンだったが、何故かイヤそうな顔をしていた。

ちなみに、グランスも同行しようとしたところ、ディアナとリリーに猛反発され、ミネアと二人で街を回る羽目になっていた。

仲間達によるミネアへの援護射撃であるが、グランスはまだ気づいていない。

流石にその翌日は、クライストとレックも流石に寝るのに飽きたらしい(ただ、レックを見て何故かディアナがにやにやしていた)。全員が街に出て、冒険者ギルドの訓練施設で身体を動かしたり、軍のキングダム支部に2番3番街区の接收状況を聞きに行ったりしていた。

そして、さらにまたその翌日。

2番3番街区の治安状況に問題がなさそうだと判断したレック達は、ついにキングダムに来た目的を果たすべく、公立図書館へと向かっていた。

「どれくらい本があるんだろうね」

どちらかという本が好きなレックは、少しばかり楽しみだった。

「1億冊以上あるゆう話やけどなあ」

「1億つて……多すぎるだろ……」

マージンの言葉に、クライストがげんなりする。

「そんなんで、目的の本、探し出せるのか？」

「自力やと無理やな」

あっさりそう答えるマージンにクライストが何か言う前に、様子を見ていたグランスが、

「確か、司書がいたはずだ。それに訊けば、本の場所くらいは教えてくれるんじゃないか？」

「司書？」

と、首をかしげたレックに、

「ライトタイプ軽量型ゴーレムらしいがな」

グランスはそう答える。

その言葉に、違和感を覚えたクライストが、

「らしいらしいって、ひよっとしてグランスも図書館行った事ねえのか？」

「ああ。必要な本ならメトロポリスで読んだ方が早い。あちらの電子図書館の蔵書もこちらと同じだしな」

そう、グランスは素直に頷いた。

「しかし、それならば、ここの図書館で目新しい情報など手に入らぬ様な気もするがのう……？」

と疑問を呈したディアナに、

「ちっちうち。ディアナ、それは思い込みっちゅうもんやで」

どや顔でマージンが指を振る。

「メトロポリスの本は今のわいらにはどうせ利用できん。なら、ここで調べるのが妥当やろ」

「……いや、私が言いたいのは、ここで調べられるような情報なら、既に出回っておるのではないかということなのじゃが」

ディアナのその言葉で、マージンのどや顔は見事に凍り付いた。

「……………」

そんな、仲間達の間生まれれた寒い空気を吹き払ったのは、

「でも、ジ・アナザーの情報とか、メトロポリスで調べた事ありま

す？」

というミネアの言葉だった。

「ん。確かに無いのう……」

「ないね」

言われてみると、調べようと思った事すら無い気がする。

そもそも、ジ・アナザーは日常生活の延長のようなもので、分からない事があれば個人端末からヘルプで調べれば済む話だったのだから、当然と言えば当然なのだが。ちなみに、個人端末のヘルプ機能は、『魔王降臨』以降、ログアウトコマンドと一緒にどこかに旅立ってしまった。

「まあ、そう考えると改めて調べてみるのも悪くはなさそうじゃな」
ディアナのその言葉で、やっとマージンがほっと息を吐いた。

そして、間もなく公立図書館にレック達は着いた。

「おつきいねー……」

とは、公立図書館に初めて来たリリーの台詞。

何度か来た事があるらしいマージンを除けば、他の仲間達の反応も似たようなものだった。

無骨な石造建築のキングダム公立図書館は、キングダム大陸では珍しい六階建てで高さはなんと30メートル。しかも地下まであるという噂もある。面積の方も半端無く、建物だけで奥行き300m幅600mという広さを誇るキングダム最大の施設である。2番街区はこのためだけにあると言うプレイヤーすらいたほどだ。

その蔵書数はというと、やはりこれも半端無く、マージンがさっき言ったとおり、優に一億冊を超えするという。勿論、そんなものを数えきれないプレイヤーがいるわけもなく（試みたクランはあるらしい）、これはアイデア社の発表である。

何故、そんなに蔵書が増えたのかというと、最大の理由は現実世

界の本をアイデア社の手が届く限り、ことごとく網羅したためである。対象となるジャンルも手当たり次第で、小説や漫画は勿論、あらゆる雑誌や論文、古文書や果ては石碑の類まで、片っ端から集められている。おまけに電子媒体しか存在しない書籍も、ここでは本という形で収められているため、余計に数が膨れ上がったのである。

図書館の入り口には、警備の重武装重量型ヘビータイフゴーレムと一緒に何故か軍の兵士達が並んでいた。

レック達が警戒していると案の定、兵士が一人、レック達に気づいて寄ってくる。逃げ出すのも間違えている気がするので、やむを得ずレック達も兵士に向かって歩いて行く。

「図書館に用事か？」

素性を探ろうとでもいうのか、不躰に観察してくる兵士の視線にレック達はいくらかの不快感を覚えたが、数日前までのキングダム
の状況を考えれば無理もないと我慢する。

「ダイナマイツサンダーが壊滅して、ここまで来れるようになったというから、どういう本があるのか見に来たんだ」

「ふむ……。まあ、いいだろう。俺達も別に利用者を追い返せと命令されてるわけじゃないからな」

フランスの言葉に、ちよっと不機嫌そうに兵士は答えた。

「一応、公立施設だから、軍としても警備を置かざるを得なかったのは分かるんだが……いや、おまえらに愚痴っても仕方ない。入るならさっさと入れ」

そう言われると、レック達にも何となく兵士の気持ちも分かった。警備と言っても、実際にはゴーレムがいれば図書館に害をなそうとする輩への対策は万全なわけで。兵士達がここにいる理由など無さそうだった。

とは言え、いつまでも入り口にいても仕方ないので、レック達はさっさと図書館へと足を踏み入れた。途端に、ヒンヤリした空気にレック達は包まれる。カビ臭くはない。

「薄暗いんだね」

とは、やはり図書館初体験のリリー。

「強い光は紙に良くないからのう」

「仮想現実でそれはないだろ……」

知ったかぶりのディアナに突っ込むクライストだったが、

「いや、あるかも知れへんで？最近、無駄にリアリティに凝つとるみたいやしな」

とマージンに言われ、「それもそうか」と納得する。

そんなやりとりで足が止まっていた一行は、

「ほら、さつさと行くぞ」

とフランスに促され、歩みを再開した。

利用経験のあるマージンの案内で、一行はまずは司書カウンターへと向かった。兎にも角にも、司書に本の場所を教えて貰わなくては始まらない。

司書カウンターに着くと、カウンターの裏に未整理の本が山と積みまれている……なんて事は無く、すっきりと片付いているカウンターには数体の司書が座っていた。

ちなみに、司書も勿論（メイド服装備の）ゴーレムである。NPCなどいない。

「本日はどのような本をお探しでしょうか？」

フランスが最初にカウンターの前に立つと、司書は正面に立ったブレイヤーに合わせた言葉で、流暢にそう訊いてきた。

露出の少なさと精巧なマスクにこの流暢な話し方が合わさると、とてもではないがゴーレムとは思えない。司書さんファンクラブが実在するというのも、あながちデマではないだろう。

フランスはそう思いつつも、

「魔法、魔王、イデア社に関連する本を探して欲しい」

仲間達とあらかじめ相談していた優先順位で、検索を依頼するが、「お探しのジャンルのうち、イデア社関連の書籍は機密書類となっています。許可のない一般の方は閲覧頂く事が出来ません」

司書はそう返してきた。

予想通りの返事にグランスは、

「では、魔法と魔王に関連する本だけでいい」
改めて探して欲しいジャンルを伝えた。

「かしこまりました」

司書はそう答えると、手元に視線を落とし、カウンターの外からは見えないところで何かやっている。

覗き込もうとすると、何故かカウンターに常備されているハリセ
ンで吹っ飛ばされるため、ファンクラブですら確認できた者はいな
い。なので、彼女(?)たちがカウンターの影で何をやっているの
かは、図書館七不思議の1つと言われていた。

「一般に公開されている魔法関連の資料は6階、西のA 257に
なります。魔王関連の資料は6階、西のA 114です」

司書はそう言いながら、同じ事をメモした紙片をグランスへと差
し出してくる。

「ああ、ありがとう」

グランスが何となくお礼を言うと、

「仕事ですから、お気になさらずに」

などと言うあたりも、ファンクラブが出来た一因なのかも知れな
い。

「じゃ、次はわいやな」

と、マジンがカウンターの前に立つ。

「武器や防具の資料が見たいんや。近代兵器や銃器やない、中世風
の剣や盾や鎧で頼むで」

そう注文を出すと、「かしこまりました」と言って、司書は再び
カウンターの途中で何かを始めた。そして、

「お探しの本は、4階、東のB 753になります。銃器などの近
代兵器の資料も同じ棚に収められていますので、興味があればご覧
になって下さい」

そう言いながら、グランスの時と同様に、検索結果をメモした紙

片をマージンに渡してきた。

それを受け取ったマージンは、

「とゆうわけで、わいは別行動させて貰うわ」

そう言い残して、そそくさと奥へと消えていった。

その後ろ姿を見送ったグランスが、

「じゃあ、俺達はあつちだな。別に全員で行動する必要もないだろうし、個人的に読みたい本や調べたい事があれば、また後で合流する事にしようと思うが……」

そう言うと、クライストが手を挙げて、

「じゃ、俺は別行動させて貰うわ。ちょい、探したい本があるからな」

と、別行動を宣言した。

ちなみに、他のメンバーはグランスと一緒に6階、西のA-114へと向かう事にした。

そして、仲間達が全員立ち去った司書カウンターで一人残されたクライストは、仲間達が十分離れたことを確認すると、

「……アダルティな写真集はどこか教えてくれ」

カウンターから身を乗り出すようにして、小声で司書にそう尋ねた。

一分後には、踊るような足取りで奥へと消えていくクライストの姿があったのは余談である。

「……………」

「……………」

「……………」

司書に教えて貰った6階、西のA-114に着いたグランス達は、その棚から何冊かの本を取り出し、近くの閲覧スペースのテーブルで内容を確認して固まっていた。

「これは予想外じゃったのう……」

「そうだね……」

「……ですね」

ぱたりと本を閉じた女性陣からの無言の圧力に、グランズの額を冷や汗が流れ落ちる。

「確かに魔王について書かれている本ではあるがのう……」

「リアルな神話とかファンタジーの魔王じゃね……」

まあ、ディアナとリリーの言ったとおりである。

要するに、ジ・アナザーに出現した魔王とは全く関係のない本ばかりであった。

レックはというと、

(ごめん、グランズ。擁護できないよ……)

と、心の中で謝るのみであった。

「この調子では、A 257の方も期待できそうじゃな」

「そうだね。あたしも期待できると思う」

ちくちくと女性陣によるグランズいびりは続く。ミネアは流石に参加していないが。

助け船は出せないものの、せめて出来る事はということと、レックは仲間達が持ってきていた本を回収し、元の棚へと戻しに行った。ちなみに、A 257の棚も、黒魔術大全だのファンタジー魔法大全だのと、ジ・アナザーの魔法と全く関係のない本ばかりで、グランズはすっかり小さくなってしまっていた。

そしてその日の午後。

午前中のグランズの失敗で、仲間達は今日は自由行動と相成った。グランズは責任を感じたのか、訊き方を変えて司書に別の棚を教えて貰っていた。それにミネアが同行していたのは、言うまでもないかも知れない。

クライストは午前中と同じエリアに人知れず潜り込み、グラビア

写真だのなんだの 図書館は中世風なのに何故があった を堪能していた。

マジンは午前中と同じように、鍛冶で作れそうな武器防具を調べべく、資料を読みふけていたし、ディアナは料理本のコーナーを見つけ出し、新しいレシピの習得に余念が無く、リリーは漫画コーナーを訪れてみていた。

レックも棚の間で久しぶりの漫画を堪能していたが、こちらは少年漫画ということで、リリーのいる少女漫画の棚とは結構離れていたりする。

(にしても、漫画まであるって……世界観ぶち壊しだよ)

ちらほらそんな事を考えながらも、久しぶりに漫画を読む手は、懐かしさも手伝って止まらない。

気がつけば、日もだいぶ傾いていた。

(あ、そろそろ集合の時間かな)

渋々と読んでいた漫画を棚に戻そうとして、水が一滴、漫画の表紙に落ちた。

「あれ……？」

雨漏りでもしているのかと、天井を見上げるが、当然そんな事はない。

目の錯覚だったかと思い、もう一度漫画の表紙を見ると確かに水滴が付いている。そして、目の前でもう一滴。

そこでレックはやっと気づいた。

それが自分の涙だという事に。

「あれ……？何で、僕、泣いてるんだ？」

その理由が分からない。

ただ、泣いている事を自覚したその時から、胸の奥に言いようのない感覚と不安とが渦巻き始めていた。

戻そうとしていた漫画を抱え込むようにして、レックは蹲る。^{#へつし}

その漫画は、レックでプレイしている張田恭平がリアルで集めていた漫画だった。

……どれくらいそうしていたかは分からない。

個人端末がクランチャットの着信を伝えてくるアラームで気がつくのと、既に外は暗くなっていた。

涙も止まっている。

ただ、胸の奥のもやもやは完全には消えていなかった。

クランチャットを確認すると、案の定、仲間達からの呼び出しだった。既に他のみんなは集まっているらしい。

レックは服の袖で軽く顔を拭き、抱えていた漫画を棚に戻すと、急いで図書館の出口へと走っていった。

その日の微妙に気まずい夕食後（仲間達はレックが泣いていたらしい事をうすうす察していた）。

「成果は一応あったんだがな……」

いつも通り、宿の男性部屋に集まった仲間達の前で、グランズが話し始める。

「ジ・アナザーの魔法について書かれた本は確かに見つかったんだが……」

ただし、やたらと歯切れが悪い。事情を知っているミネアも何やら居心地が悪そうだった。

「ジ・アナザーのマニユアルだった……」

その言葉を聞いて、仲間達はなるほどと納得するよりも、シヨックを受けていた。

何しろマニユアルである。本来、ヘルプ機能があるのが無かるうが、誰もが真っ先に読んでいないといけないはずの物である。シヨックも受ける。そもそもマニユアルの存在自体、気にかけた事すらなかったのにシヨックも倍だったりする。

それでもシヨックを受けっぱなしでいるわけにもいかない、仲間達は気を取り直してグランズの説明を聞く事にした。

で、グランズの言葉を要約すると以下のようなになった。

魔法を覚える方法は、いくつかあるが代表的なのは祭壇での習得。他にも方法はあるが、いずれも難易度が極めて高いらしい。

次に、魔法を使うには魔力が必要。ただし、個人の保有する魔力の最大量は非常に成長させづらいらしい。また、魔力が十分にあっても、使い方が下手だと無駄に疲労困憊する事もあるとか。

属性というものもあるらしいが、説明がかなり充実していたらしく、ちよつと長い。

地・水・火・風の基本四属性に氷・雷の二つと、さらに光・闇の二つを加えた八属性がジ・アナザーの魔法属性とされる。プレイヤーの持つ属性と正反対の属性を持つ魔法は覚えられないか、覚えられても使う事は出来ない。逆に、プレイヤーと同じ属性の魔法は効率よく使えるとか。正反対の属性の組み合わせは素直に、火と水、風と地、氷と雷、光と闇にあたる。

ちなみに基本四属性には強弱もあって、風は火に強く、火は水に勝る。水は地に強く、地は風に勝る。絶対ではないものの、基本的にそんな関係があるらしい。

あと、各属性を司る精霊もいるらしいが……グランズが見つけた本には詳しくは書かれていなかった。

その説明を一通り聞いたディアナが一言。

「普通じゃな」

一刀両断である。とは言え、

「じゃが、属性があるとなると、全員が同じように魔法を使えるようになるとは限らんのか」

と、ディアナは唸った。

「あたし達が治癒魔法を使えないのも関係あるのかな？」

リリーが首をかしげるが、

「関係あるかも知れねえけどな。治癒魔法の属性も俺達の属性もさっぱり分からねえから何とも言えねえんじゃないか？」

とクライストが言う。

誰にも反論できないその言葉に、ディアナが、

「とりあえず、他の資料がないかどうか、調べるしかあるまいな。明日からは私も手伝うとしようかのう」

「ああ、そうしてくれると助かるが……マージン、どうした？」

グランズがふと気がつくのと、マージンが何やら首をかしげていた。

「あ、いやな。立ち入り禁止区域はどうなったんやる思てな」

「立ち入り禁止区域？なんだそれ？」

マージンの言葉に、クライストが首をかしげる。その様子を見たマージンは説明を始めた。

「前に公立図書館に来たときには、立ち入り禁止区域ゆうのがあったんや。一般プレイヤー立ち入り禁止。ゴーレムに訊いてみたら、そのうち解放されますとか言うとったけど……今、それ思い出したんや」

その言葉を聞いてディアナとクライスト、リリーが唸った。

「そのうち、か。他のMMOならアップデートやイベントで解放されるパターンだな」

「だよな。どうなってるか見てみたいね」

「うむ。もしかしたら、何か見つかるやも知れんのか」

三人の言葉にグランズは一つ頷くと、

「マージン、その場所は覚えているのか？」

「いんや。残念ながら覚えとらん。ゴーレムに訊いた方が早いと思うで」

そんな返事であったが、とりあえず、明日はそれを探してみるという事で話は決まった。

その翌日。

再び図書館にやってきた一行は、立ち入り禁止になっていた場所へ向かった。場所の方は、司書に訊いたところあっさりと教えて貰

えたので、仲間達は揃って拍子抜けしたほどである。

ちなみにマージンは、鍛冶や細工で使う各種道具の解説本を読みふけるために今日も別行動。面白そうな発見があったら見に行くなどと、探す苦勞を人に押し付ける発言をしていたが、その代わりに武器や防具の修理や製造のノウハウの勉強をするのだから、誰も文句はなかった。

あと、レックは今日も様子がおかしかったので、落ち着くまで別行動となった。いつまでも元氣にならないようなら兎に角、しばらくはそつとしておこうというわけである。それでいいのかどうかは、誰にも分からなかったが。

グランズ達が司書に教えて貰ったのは、地下書庫だった。廊下の奥まったところにあった扉には、裏返された札がぶら下げられていて、リリーがひっくり返してみると、『立ち入り禁止』と書かれた文字が二重線で消されていた。

「随分暗いな……」

階段を下りながらクライストが呟くと、

「確かに暗いがのう。まあ、文字は読めるじやろっ」

その前を歩いていたディアナがそう答えた。

そもそも地下という事で、壁際に取り付けられたランプ以外の光源がない。真つ暗ではないだけマシというものだった。

「どうやら着いたみたいだぞ」

先頭を歩いていたグランズはいつの間にか階段を下り終えていて、その正面には扉があった。

「そっちの廊下は何だと思っ？」

クライストが顎で差した先、扉の左側にはどこかへと続く廊下が延びていた。ただし、立ち入り禁止を示すかのようにロープが張つてある上に、強行突破を防ぐためか、重量型ゴーレムがデデンと居座っていた。

「図書館なのじゃから、書庫じゃろつな。そのうち解放されるのではないかのう？」

ゴーレムの横から覗き込みながら、ディアナが答える。幸い、覗き込む程度ならゴーレムは身動き一つしなかった。

「何か、扉がいくつも見えるけど……全部書庫なの、かな？」

リリーのその言葉に仲間達が目をこらすと、確かに廊下の壁の片側に扉が並んでいるのが見て取れた。

しばらく皆で扉をじーっと見ていたが、不毛だと感じたグランスは咳払いをすると、

「まあ、無理に押し入るわけにもいかないしな。今はここに入る事にしよう」

そう言って、正面にあった扉を開けた。しかし、

「なんじゃ、ほとんど空ではないか」

グランスに遅れて部屋に入り込んだディアナの言うとおり、物置程度の広さしかないその部屋には、ほとんど本はなかった。

図書館らしく本棚はあるものの、1つだけ。しかも、ほとんどの棚は空っぽで、大人の腰の高さくらいにある棚に十数冊程度、本があるだけだった。

一応、入ってすぐのところテーブルと燭台が用意されていて、廊下よりは明るいのが救いだろつか。

とりあえず、ディアナは棚から一冊本を取り出し、ぱらぱらと捲ってみる。

「……なんじゃ、これは」

そして思わずそう口にする。

「読めないね」

横から覗き込んだリリーが、そこに書かれている文字を見て、残念そうな顔をする。

「……ルーン文字、ですね」

「ルーン文字？言われてみれば、そんな気もするな」

啞然としたミネアの言葉に、クライストは何か思い出したように

そう言った。

とりあえず、フランスは他の本も何冊か取り出して、テーブルの上に開いて並べてみた。

「……全部ルーン文字、なのか？」

呆然とフランスが呟くが、やむを得まい。

ルーン文字など誰も読めないのだから。おまけに、文字が読めたところで、何が書かれているか理解できるかどうかは別である。

「コンピュータが使えないのは痛えな」

とクライストが言ったように、リアルであれば、例えルーン文字であろうともコンピュータに読み込ませれば、あつという間に翻訳してくれていたはずである。が、今のフランス達には無理な話であった。

「一応、上には辞書などもあるはずじゃが……訳してみるかの？」

ディアナがそう呟くも、簡単に決める事は出来ない。

とても役に立つ情報が書かれているなら兎に角、そうでないなら相当な時間の無駄になるのは間違いないからだ。

しかし、仲間達が頭を悩ましていると、

「あれ？これだけ日本語で書いてあるよ？」

と、本棚から別の本を次々と取り出して開いていたリリーが、そのうちの一冊をテーブルの上に持ってきた。

とりあえず、ルーン文字で書かれている本を全部閉じて空けたスペースに、リリーが持ってきた本を置く。

「ふむ。確かに日本語じゃのう……」

「これなら読めますね」

「……違和感ありまくりだけどな」

最後のクライストのツツコミはスルーされた。

「まあ、順番に見ていこうか」

生憎と、部屋には椅子は3つしか無かったので、女性陣がそれに座り、真ん中のディアナがページを繰る事になった。フランスとクライストは立って後ろから覗き込む形で、彼らはその本を読み始め

た。

その頃、マージンは閲覧スペースに広げた何冊もの資料と格闘していた。

「むう。あと一週間くらいは通わんとあかんかも……」

……孤独な戦いはまだまだ続きそうである。

そして、レックはと言うと、今日は漫画コーナーではなく、コンピュータの技術書の棚にやってきていた。理由は特にならない。敢えて言うなら、多少興味があつたから無意識のうち、だろう。

適当に本を取り出しては、ぱらぱらと捲る。

何かをしていないと落ち着かないが、何かに集中するには気もそぞろなので、文字を目で追っていても頭にはほとんど入ってはいない。レック本人もそのことは理解していて、ややこしすぎる本はさっと目を通すだけで、すぐに片付けていた。

本当は、みんなの手伝いでもするべきだと思っけていても、こんな状態じゃ役には立ちそうにないと自嘲しながら、次々と本をとつかえひっつかえ開いていく。

その頭の中では、

(……まあ、明日には落ち着くと思っけて)

とか、

(……ああ、みんなには気を遣わせちゃったな。明日少し謝っておこう、かな)

などと考えている。

そんなこんなで、ある本を開いたときの事だった。

ふと、ある単語が目にとまる。

すなわち、「回線遅延」。

その言葉が妙に気になり、さっきまでの憂鬱とも言える気分はど

こへやら、レックはその本を手に閲覧スペースへと場所を移し、腰を据えてその本『ネットワーク入門』を読み始めた。

「なんだこれ……。いや、でも……」

読み始めてすぐに何が気になったのか理解し、そして混乱しそうになり、無理矢理落ち着こうとして失敗する。

「ジ・アナザーで使ってるBPも、ネットワークを介してイデア社のサーバーに繋がってるだけ、のはずなんだよね？」

という事は、ネットワークを通じてデータをやりとりしているわけで、その分、どうしても回線遅延が発生するはずだった。理論上、どうやっても数十ミリ〜数百ミリ秒単位で発生するはずのを、レックはジ・アナザーで感じた事はない。

ジ・アナザーがあまりにも滑らかに動くので完全に忘れ去っていたが、どころか、誰一人気づいていないようだが、BPを利用した他の最新ネットゲームですら、回線遅延によるもたつきを感じる事がある。なのに、ジ・アナザーにはそれが無い。

その事をはつきり認識した瞬間、レックはとてつもなく嫌な予感に襲われた。

自分の肩を抱きかかえ、知らず知らずのうちに震え始める。

……今すぐ、仲間と合流したかった。

一人は……あまりにも不安だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1631w/>

ジ・アナザー

2011年11月16日03時13分発行